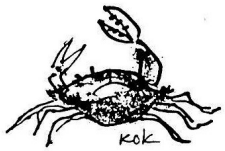
目　次

九郎兵衛韜晦　……大和禎人　1
詩「デュエット」　……青木昭成　12
「寡黙」ほか四編
【連　載】
前橋公園殺人事件（四）　……佐々木一郎　16
近藤重蔵・富蔵の生涯と
其の時代（一）　……金子正義　26
編集子のメモ　……40
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



九郎兵衛韜晦

大和禎人

元禄の赤穂浪士仇討ち事件の相手方、吉良上野介義央の支配地が三州吉良町（静岡県幡豆郡吉良町）のほかに飛び地として上州一〇〇〇石があって、本地三二〇〇石に加え四二〇〇石の知行を領していたことはあまり知られていないようだ。

上州の一〇〇〇石は藤岡白石（藤岡市）で七〇〇石、碓井郡松井田町人見の二六〇石、安中中野谷（安中市）の四〇石の合計である。寛永四年から元禄十六年にわたるおよそ七十五年間にわたりこれを領有し、くだんの上野介横死の不祥事件後に没収されている。本領吉良は関ヶ原の軍功により吉良義定のとき得たものであり、上州における領地は高家に列した際、その子義弥のとき加増をうけたものであった。

こうした事情にもとづくとき、赤穂浅野家の断絶に際し、いちはやく退散して行方を晦まし、復讐の挙に出た四十七士に比して不忠の誹謗をうけたわが大野九郎兵衛が上州磯部の地にその墓石と伝えられるものを今に残す謎はどうしたものか、謎はあくまで謎としながら、なんらかの推測が成り立ちそうに思える。

さて、私たちを乗せたタクシーは磯部の宿を出て妙義紅葉ラインへ向かうはずであったが、私からのたっての希望を仲間が入れてくれ、コースとしては脇道へ走らせることになった。

「あの大野九郎兵衛と聞いただけで、ちょっとねぇ」

わざわざ訪れることもなかろう、興味がもてないという連れの二人を、口説き落としたあげくだった。大野九郎兵衛の悪名は巷間に流布するものだから、あるいは当然であったかも知れぬ。

ともあれ、行く先として指示した寺は磯部の町はずれにあるはずであったが、寺の名前は分かっていない。フロントに尋ねて手に入れた観光案内図には「忠臣蔵大野九郎兵衛墓」とおよその位置を示すのみで寺の名までは明らかではなかった。以前に来たおりには温泉街の辻の掲示にそれを見てとり、

（大野九郎兵衛の墓がなぜこの地に？）

という疑問を抱いていたので、再訪を機になんとしても疑問を解きたいと考えていた。その掲示板をこのあたりと思われるあたりに探したが、もはや見あたらなかった。村おこし、町おこしに懸命な地方町村に至するにはこの町の観光課はおっとりしすぎているのかも知れないのだ。温泉街そのものにも活気が見られないのである。

いま、手もとの案内図は「忠臣蔵大野九郎兵衛」とあり、ことさら「忠臣蔵」などと冠した空々しく滑稽なものだ。観光客を誘致するには相応しくないものに違いない。とうてい宣伝の具にはならないものだろう。

驚いたことには運転手くんは墓所のある寺を知らないばかりか、どうやら大野九郎兵衛という名もピンとこないようすなのであった。

さしずめ、地図で示す方向に車を走らせながら、無線で営業所に尋ねる心細いなりゆきで、

（寺の名はショウガンジだと思うよ、どうぞ）

「ハイ、了解、この先の信号機を越えたあたりかな、どこかの店で聞いてみましょう」

「すまないね、そうしてくれるかな」

「ええ、うまく開いてる店があればいいんだが、ちかごろはみんな開店が遅いから、あ、ここもだめ、もう少し行ってみるか、うまくないねぇ」

とうとう町並をはずれて、折返す始末に、

「いよいよ、わからなきゃあ、あきらめるよ」

そうこうして、ようやく一軒の雑貨商の店前に車を止めた。

「待ってくださいよ、聞いてくるから」

と言いつつ小返りして、

「なんて言いましたっけ、その人」

「うん、大野九郎兵衛」

可笑しさをこらえねばならないいきさつである。大野九郎兵衛の悪名はとんと通用しないのだから、真実そのご仁がこの地の泉下に眠るとしたら、苦笑したことであろう。

「あ、ここだ、お客さんここだね、ええ、なんとか乗り入れましょう」

道路から小道へ乗り入れ、山門というには侘しい門を潜って寺の中庭に乗り入れてくれた。

庫裡の戸を開けて訪いの声をかけると、たしかに返事があったのだが、しばし、だれも出てくる気配がない。傾いた破れ寺の風情に無気味を感じさせられる数分、や

おら僧衣をまとわず、納所とも思えぬ男が出てきた。

「ああ、それはこの本堂脇の丸い自然石のものがそれですよ、仏門に入って「滋望遊謙居士」と刻まれています」

と言いつつ、どうやら案内の足を運んでくれた。

「以前は標柱もあったが、朽ちてしまって……、これですよ、遠縁にあたるとかのお人が塔婆を立てなさったこともあったが、いまはそれもありません、むしろ奥手にご覧の佐々木盛綱の五輪塔のある寺とお尋ねになったほうが、分り易かったでしょうな」

なるほど、五輪塔は県指定重要文化財というものだ。崩れ加減の築地を背に雨露をしのぐ庇をかけられて、表示は佐々木盛綱夫妻のものとしており、在銘正応六年とあって県内最古の五輪塔という説明を読める。正応六年は一二九一年、いまを去る七〇〇年の昔ということになる。盛綱は近江源氏の裔、守護地の縁から源頼朝の死後は入道して、磯部に隠居したというものだ。信憑性はこちらのほうが高いのかも知れない。

和尚の口振りはそう受け取れるものであった。サンダルを突っ掛け履きに、近ごろ流行の作務衣に似た無造作な身なり、だが、この人が住持らしいのであった。

「で、大野九郎兵衛はこの地とはどういう、在所とかいうことでしょうか？」

「いや、在所ではありませんな、漂白の身を寄せたということでありましょう、大石らの本懐を聞いて出家したようで、したがって墓石に俗名はありませぬ、近在の旧家にはかなり墨跡を残し、所持する家があります、なにせい頭の良いお人だったようですから……」

俗っぽい和尚の口から、

（頭の良いお人だった）

という言葉を聞いたことだけが、わずかに印象として残った。

「これは出家され流転の旅に出られたあと、徳を慕って在所のものが建てた供養の塔とも言われております、真為のほどはわかりませんな、過去帳ではただ神明の養学院に住んでいたと記されていますが、大野氏と同一人かどうか、しかとした根拠はありませんな、なんともはや、よろしいかなそのへんで……」

あまりかかわりあいたくない、といった素振りにこちらもコースをそれた探訪だから、ほどよいところで切り上げることにした。

妙義紅葉ラインの観光コースは妙義神社を経て中の岳神社までで折返し磯部へ戻る二時間で、九、八〇〇円という決まりであった。律儀な運転手くんはそれを守ってあとの観光を急がされるあんばいになった。

全国に、「大野九郎兵衛の墓」と呼ばれてる場所がいくつかある。福島県信夫郡庭坂峠、山

形県南置（南置賜が正しい）郡板谷峠、青森県東津軽郡今別町本覚寺、さらに三田村鳶魚説による山梨県甲府市の定林山能成寺と、安中市磯部の松岸寺と普門寺である。

この中で、確かに大野九郎兵衛の墓であると確証できるでところは残念ながら一つもない。どこも九郎兵衛の風貌と卓越した商才とから、九郎兵衛の晩年の像が各地に墓として結びついていったものである。

これは安中市在住の郷土史家清水昇氏による記述である。秘史としての興味を追求する上で格好の文章であろう。

連れがあって遠慮がちだった探訪を補うため、まず安中の役所の電話番号を一〇四番で尋ね、寺の電話を教えてもらうと同時に、なんらかの資料があればというもとめに応じ、文化財係から送ってもらったコピーによるものだ。松岸寺の電話も教えられたが、和尚に再度質問を向けることは無意味に思われ止めにした。清水氏についても何度かの市の文化財との電話やりとりの間に電話番号を教えられ通話を試みたが、現在使われていないという局のメッセージで、一〇四番でも（届出がない）とあった。いずれへか転居したものであろうか。普門寺の方は下磯部に所在するとして電話番号も教えられたが、磯部の町としてはむしろ安中寄りとあり、かりそめの温泉遊客の足では訪ね難いところと判断された。

さて、さらに前記の秘史をたどると、

福島と米沢を結ぶ国道十三号線、板谷峠の墓は九郎兵衛ら十六名の同志が、実子上杉綱憲のいる上杉家をたよって来るであろう上野介を待ち伏せ、亡君の恨みをはらそうとしたもので、大石内蔵助の仇討ち本懐を聞き、この峠で切腹して果てたと伝えられているものである。

本覚寺の墓というのは、赤穂を去った九郎兵衛が津軽海峡に面したこの地で製塩法を教えていたというものだ。

能成寺には「死する期は白黒とてわからねどかの岸にてはうたん渡り手」という九郎兵衛の辞世の石碑が残っているというが、まだ確認はしていない。

庭坂峠と板谷峠の説はともかく、翻って考察すれば、磯部の墓は墓そのものではなく、いわば九郎兵衛潜伏の記念碑と考えられる。普門寺の過去帳には「武末の浪人」とあり俗名の記載はない。このことは寛延四年に九郎兵衛の徳を慕って村人が建立したものであると解釈すればよい。上野介逃亡の道が三河にも米沢にもないとすれば、残るは吉良七人衆の名主をおく上州

の白石陣屋であったろう。

とくに吉良領の人見村は、磯部に隣接している。その上この人見村からは上野介の警護にあたり、清水一学らと共に討死した須藤与市右衛門（利鋒見忠居士）がいる。これらのことからしても、大野九郎兵衛が磯部に潜伏し、林遊謙と名乗って吉良上野介の御首級を狙っていたことはまず間違いなかろう。

清水昇氏はほぼ断定に近くこう論及し、さらに結びとする次のような文章をも読むことができる。

もともと大野家は大石家のように、永久でない一代家老であった。本来なら、父九郎兵衛知房の代で家老職はおわっていた筈である。それどころか六百五十石ながら父に嗣いで家老の職にあった。一千石の奥野将監でさえ、御城代組頭と差があったのをみると、その手腕のほどが窺えるというものである。

記録からすると、大野父子の城下退去は元禄十四年四月十二日で、大坂の赤穂塩問屋塩屋五兵衛の離れ座敷に落ち着いている。ここを足がかりに浅野家再興に尽力したが、それも遺え（潰えの誤りか）磯部への潜伏の道を辿った。仇討ち本懐後は磯部を去り、京都の仁和寺の近くに住み伴閑精と名のり生涯をとじている。逐

電家老の汚名はついに消えなかった。

長くなったが、あえて原文のまま写した。九郎兵衛の冤を雪ぐ熱意のほどを行文にうかがえるものだ。

さて、これまでは清水昇氏の所説を写したものだが、同氏による「小説大野九郎兵衛」なる一本があり、その巻末に資料として掲げるものからの写しであり、別に入手した安中市史のほうのコピーとはかなり重複する部分があることを明らかにしておかねばならない。安中市史のほうは編集に際し、拠りどころを「磯部誌」磯部誌刊行会編に置くものとあって、出典はどうやら同じであることに気づくのである。だが、清水氏の場合はかなり私見を加えたものになっていると言えようか。

清水氏の「小説大野九郎兵衛」は私家版、定価一、二〇〇円、役所へ寄贈されているものからコピーを提供されたものであった。小説を書かれる清水氏とその作品にも関心をもち、手に入れることができればと思ったが、前記のような事情上、どうやら居所不明とあって断念を余儀なくされた。

手に入れることのできた資料の二つながら、なお、磯部の地にまつわる大野九郎兵衛の挿話として、「大野九郎兵衛愛用の井戸」の存在することを紹介している。それは磯部の馬場（ばんば）部落の旧家須藤家にあるもので、地形上碓氷川の本流から水を引くことのできない高台ある同家に請われ、身を寄せていた九郎兵衛が井戸掘

りの指揮をとったというものだ。現にその井戸が残されているという。ここで「磯部誌」は赤穂あった大野九郎兵衛は城内で飲料水に不自由した経験があり、藩邸でも周世川の水を引くほどであったところから、藩論の篭城に傾く際、城内飲み水の確保が困難という見地に立ち強く反対論を唱えたという挿話をとりあげている。

「磯部誌」もまた、大野九郎兵衛の潜伏説を半ば認めたものになっているのである。馬場は人見や中野谷の吉良領にもっとも近い距離にあり、白石陣屋を窺うにもっとも屈強の場所であったとしている。

もっぱら、いずれにしても復讐二軍説の傾向が強いものだ。ただし、ここで「磯部誌」の記述で注目すべきは普門寺の墓碑におよび刻字を紹介していることである。

「寛延四年未天　慈望遊謙居士　不生位　九月二四」

とあるのがそれで、

過去帳には、

「慈望遊謙、武末の浪人、林遊謙」

と記されているが俗名の記載はない。

とあって寛延四年を没年とする場合、元禄を去る五十となり、林遊謙すなわち大野九郎兵衛とする推理は赤穂退散時の年齢から考えて無理があり、これを没後の顕彰碑とする場合も、断定には若干躊躇をする結びになっている。

だが、遊謙の身を寄せたとする須藤家が清水氏の指摘する吉良家の付人として討死した須藤与市右衛門となんらかのかかりあいをもつのではないか、と考えられる点にむしろ注目したいのである。

さらにもっともスタンダードな資料をもとめて、「新編日本史辞典」東京創元社刊ならびに「新潮日本人名辞典」新潮社刊の二冊を検索して見ると、驚いたことには一字一句までまったく同文の説明を得た。辞典編集のオリジナリティは一体どうなっているものかという疑問はさておき、史実の限界ぎりぎりのところ、次のように集約されるものと承知しなければならないようだ。

おおのくろべえ　大野九郎兵衛　生没年不詳。

江戸中期の播磨赤穂藩士。世臣ではなかったが、財政通で藩主浅野長矩に重用されて六五〇石を食んだ。元禄一四年（一七〇一）長矩切腹後、開城を前にして分配金の配分法などについて大石良雄と対立、家財を町人に預けて子の郡右衛門と共に逃亡した。京都に出たらしいが、その後のことは諸説あって不詳。赤穂での悪評を一手に引受け、そのため孫の三四郎が乞食同然に落魄するなど一族の末路は哀れである。

元禄赤穂浪士仇討ち事件陰の人物について、歴史辞典や人名辞典がこれを取りあげ、歴史上の人物として一項をもうけ、取り扱われるのもかれ大野九郎兵衛の悪名ゆえであろう。

あまたの「忠臣蔵」もの史伝、小説に登場するかれは大方悪役、怯懦の人物に描かれる。

義士研究で知られる臨風笹川種郎博士のごとき『赤穂義士研究』の中で、（此奴小ざかしき才幹ありて、城代となり、俟弁を以って内匠頭に重く用いられてゐたが、根が卑怯未練の臆病者故、……）と断じて憚らないのである。

また「元禄快挙録」という絶後の詳細をきわめる名著で知られる福本日南氏の場合も（大野父子の逃亡）として触れるほか、（大野九郎兵衛の女と梶尾某）として備中の家士に嫁した子女が父親のために不縁、別居させられた不幸をわざわざ叙している。文中（人臣として不届至極）の文字が見出される。

大佛次郎、吉川英治、海音寺潮五郎の各氏の場合は当たらず障らずの描写をしている。近来の作家では津本陽、森村誠一氏らも書かれているが、とくに森村氏の場合にはじめて（裏の忠義）として大野九郎兵衛弁護の文章を書いている。

（私がなぜ「忠臣蔵」に魅かれたのか。それは「人間蔵」であったからである。）

と、その〈あとがき〉に言う森村氏は大野九郎兵衛についてこんな解釈をしている。

なにか騒動が勃発したとき、常に積極派が威勢がよく、理性派は分が悪いと相場が決まっている。悪名を背負いながらも、目立たない所で、あるいは損な役割を主家大変時に黙々と引き受けた人物が必ずいたはずである。私はそういう人物に照明を当てるために、九郎兵衛を代表として引っ張り出した。

とし、藩金の整理にあたり、貸付金の取り立てに退散後も隠れて奔走し、大石一派の軍資金調達に貢献したとするものである。やがて伴閑精と名を改め、仁和寺に近く住み牽牛花（朝顔）の栽培に凝る自適の余生を送ったとしている。だが、博引傍証の森村氏の作品も磯部潜伏説には結びつかないで終わっている。

井上ひさし氏は「不忠臣蔵」を書いて復讐脱落者の十八人を拉しての奇想の才筆にかかわらず、大野九郎兵衛を取り上げるには至らなかった。森村氏の場合にのみ大野九郎兵衛はわずかに冤を救われている。

さて、ここからはいよいよ右のごとき資料を素材として、小説本来のナレーションに移らねばならない。

片岡源五右衛門の下僕に元助というものがあった。主人の仇討ち本懐後の死を見送り、在所の上州安中の秋間に帰っていた。今日の安中市下秋間である。安中の市街地からは北西にあたる所だ。梅の名所として知られている山里である。かれはそこで主人の後生を願う明け暮れ、

背後の岩戸山に「赤穂四十七士石像」を刻んだ。その作業場は岩戸の山裾にある粗末な小屋掛けである。

「にし、きょうも小屋行きかえ、精を出すのう、頼まれもしねぇことによ」

「兄さ、いいようにさせてくれ、わしにかまわんでくれんか」

「おおさ、にしの信心をさまたげるつもりはないが、根をつめて体を壊しゃしねぇかと思ってのことよ、ところで、なぁ元助、にし、大野とかいうお武家を見かけたという話、ほんとうかえ」

「いや、わからねぇ、こっちとらの旦那さまは江戸詰めだったから、国のほうのご家老とシゲシゲ顔を合わせることはめったなことであるわけもねぇから……、たった一度お国入りの供をしたとき、ごあいさつに旦那とお屋敷に上がったぐれぇだから、たしかとは言えねぇ」

「そのたしかとは言えない話があって、お前さんの足を止めたのさ」

「なんずらい、そりゃあ」

「うん、磯部で聞いた話だが、もとはなんでもお武家で、いまは坊さまの滋望とか言ったなぁ」

兄の源吉の持ち出した話は馬場の旧家須藤に以前は寄寓し、いまは地元に養学院という手習い塾に身を寄せている、浪人ものの得体についてであった。

「それで、そのお侍が大野さまだってぇのかい」

「それなのさ、赤穂のお侍たちの仇討ちこのかた、いまごろもっぱらの噂なんさ、にしの話、思い出してさ、ほんとうとなりゃ、須藤の縁続きで人見村には与市右衛門というたいそうやっとうの出来なさる吉良さまご家来があって、討ち死にしているのさ、早い話がお前の旦那とは敵味方だな、ほれ、知ってのとおり吉良さまはこのさきの陣屋のご領主さまだ、いまとなりゃ、だからどうってわけじゃないがね」

「ふむ、ちいっと妙な話だな、兄さ」

「それよ、妙な話ですましときゃそれまでだが、気にすりゃあ、にしとの因縁がちったぁあるからな、そういうことだよ」

（須藤与市右衛門は与一右衛門とするものが一般だが、出自の磯部資料では与市とあり、戒名まで明らかであるのに信をおき、これに従った）

赤穂のもと藩士たちの結束した集団の仇討ち事件の報はいちはやく中仙道を走り抜けていた。吉良領一〇〇〇石の散在する上州ではことを聞いて少なからぬ衝撃をうけた。元禄十六年二月四日、幕閣の決断した赤穂浪士の処分にあわせて吉良家に対する処断はきわめて厳しく、嗣子左兵衛義周は信州高島の諏訪安芸守へお預けの上、所領召し上げというものであった。吉良左兵衛は配流三年にして宝永三年、欝をつのらせ痩死を迎えた。室町い

らいの名家全くの断絶である。磯部にかかわる須藤与市右衛門は吉良左兵衛の側用人であったから、奮戦して倒れ主家に殉じたのはむしろ死所を得たものといえる。

秋間の元吉のほうは片岡家に忠実に仕え、源五右衛門の妻子の落ち着き先まで供をし、在所へ帰ったものだ。

細川家の藩士でお預かり中の浪士に親身の世話をし、「堀内覚書」を残した堀内伝右衛門は浪士切腹後の十月肥後への帰国の道すがら、遺族を見舞い、

（伏見両替町筋銀座二丁目に片岡源五右衛妻子借宅いたし居られ候を尋ね参り候）

と伝えている。時に源五右衛門の嫡子新六は十二歳、次男六之助は九歳であった。幕府は三族におよぶ刑を弛めた時代で妻と娘は咎めなし、遺児について男子のみ十五歳以上の四人を流罪にしたが、それ以下のものは十五歳になるまで猶予し、仏門に入る場合は赦免する寛大をもって臨んでいる。実質上は執行猶予と言えるものであった。

共助が目撃したものは幻影であったかも知れない、そんな曖昧さで兄に答えたが、事実はそうではなかった。

それはかれこれ一ヶ月ほど前、碓氷川に釣りを楽しんだ日のことだ。釣果より重い、それはあっと驚くようなことであった。

（やはり、あのお方こそ大野さまでは）

網代笠に顔を避けるように隠し、しかし擦れ違いざまこちらを鋭く見た、その姿に共助ははっとしたのだ。

兄のところへ寄寓の身で、釣りでもないところだが、秋間へ戻ってきて間もなく、

「なぁに、にし、当分は骨休めをするがいい、にしの食い扶持ぐらい困りゃあしない」

と言ってくれている源吉に甘えるともなく甘える日を送っていて、

（餓鬼にかえってひとつ川にでも行ってみようか）

という気持ちだった。ズムングリ（飛びこみ）に戯れたり、ごろた石を積み上げた堰の淀みへ魚を追い込んで遊んだ頃を思い出したかったのだ。

老人はやはりその日の釣り人の一人だった。相手は無腰だったが、物腰から武家らしいという直感は武家奉公をしたかれだから間違いではない。笠の下の白髪はそれとして、鬢と揉み上げのあたりの特長に覚えがあった。

（片岡の旦那さまは入り婿にて、たしか尾州侯のご家来熊井さまというお家のご次男とか、したがって尾州のお生れと聞いていた、大野さまも代々の浅野さまのご家来ではないと伺っているから、なにかご縁故がおありかも知れぬ）

主人の供をしての赤穂への国入りに際し、わざわざ大野屋敷に挨拶に伴われた折の印象が強い。凶変の前年であった。だから記憶は古びてはいない。仕置き家老とはいえ、格式の供待ちに控えて待つところへ主客姿を現わ

し、おいとまの挨拶の折、しかとこの目に焼き付けられた太い眉、なにより特長の揉み上げはよもや余人と見紛うものではない。

「もうし、大野さまでは…」

後ろ姿を追い声をかけた。身分を忘れ、思わず懐かしさに余るとっさの行動に出たものだった。下僕奉公とはいえ同藩の扶持に生きたものの親しさが込み上げ、前後をわきまえぬことになったのだ。

網代笠の縁を片手で目深く下げるようすで、老人は振りかえった。

「はばかりさまですが、大野さまでは」

共助は精一杯の余所行きことばを使った。

「……？」

「お人違いでしょうか、でしたらご無礼で……」

「いや、そなたは」

「赤穂のご縁あるものでございます」

「ほほう、それは……」

ようやく、老人が口を開いた。一瞬、感慨の気配がのぞいたようであったが、共助の問いにうなずきを返したわけではない。

「違ったら、ご免なさいまし」

「いや、他人の空似であろう、いっこうに覚えのないことじゃよ」

「へぇ、それは、あまりに殿様はそっくりなんで、ご無礼でございました」

「大野であったら、なんとする、あれは死んだよ」

「へ、まことでございますか」

「まことじゃ、嘘は申さぬよ」

恬然として、老人はそれを言った。

「い、いつでございますか」

「詮ないことを、聞くものではない」

そう言いながら、老人の顔が笑っていた。

そして、

「わしの言うことだから間違いない、すておけ」

あっけにとられている共助の肩を老人は笑いながら叩いた。親愛のこもったしぐさであった。

「赤穂とやら申したが、忘れるのだな、いつまでも亡霊を追っていては、おてんとうさまにあい済まぬ、亡霊のほうで愛想づかしをするだろうよ」

謎のような言葉を残して老人は去っていった。

（やはりあの方は大野さまだったに違いない、きょうのおてんとうさまとつきあえ、と、おっしゃった、違ぇねぇ」

共助はそう解釈した。

兄の源吉もあれきりなにも聞かなかった。

（たしか、ジボウとかいう坊さまって話だったが、それは違うな、あの人は坊さまではなかった、坊さまみたいな説教はしたがね）

そういう結論に達した。

「お客さん駅へ着けるかね」

「いや、愛妻橋を渡って宿に着けてよ、しかしおかしな名前を橋につけたものだねぇ、公園には愛妻池…」

「変ですか、そうですかねぇ、橋は最近の開通ですがね、中越化学へ通勤する人たちの車で渋滞がひどかったもんだから、便利になりましたよ、ええ、先は富岡へ抜けています」

大野九郎兵衛ではピンとこなかった運転手くんが能弁であった。かれの教えた化学工場は磯部駅の反対側、信越本線を越えたところにある大工場で、日がな一日、白煙を上げて空を汚していた。

磯部の温泉地としての歴史は天明三年の浅間噴火に際し湧出したものというから、わが話題の人大野九郎兵衛とはまったく関係がない。わが国最古、温泉マークの発祥地という碑石が碓氷川渓流に臨む公園にあり、愛妻池がある。文人、墨客に親しまれ、十指に余る文学碑が林立する、北原白秋に認められ絶賛をうけた詩才、この地「鳳來館」の息子として生まれた大手拓二のほか、その師の白秋、若山牧水、室生犀星、吉野秀雄、久保田万太郎と並ぶさまは壮観である。「雀のお宿」を売り物のホテルの外数件の旅館、それに名物の磯部煎餅という軽い炭酸煎餅を焼く店が並ぶていど、華やいだ温泉街の景観からは遠く寂れた湯の町である。

愛妻池、愛妻橋の由緒はＪＲ「磯部駅」の駅前広場にある「恐妻碑」なるもの、およびその碑文に由来する。

それはこうだ。

恐妻とは愛妻のいわれなり

阿部真之助（一八八四～一九六四年）

上州が生んだ新聞界の雄、阿部真之助また恐妻家として最たるもの、外にあっては毒舌をもって鳴らし家にあっては妻女の前に平服して鞠躬如たり、将に上州人の真骨頂を具現、自ら日本恐妻連盟総裁を称したるは自他共に認むる所なり、生前殊の外磯部温泉を愛し、おりある毎に来り浴みし外、自ら名づけし「恐妻そば」など食い自適す。

大野九郎兵衛にまつわる口碑についてはついに糺しようがない。共助のほうは不明だが、九郎兵衛は明らかに妻女があり、息子の郡兵衛がある。時代ゆえに妻の名までは明らかではないが、九郎兵衛がその人生を大切に生きた陰には一人の妻があり、恐れかつ慈しみながら、いずれの地にかその生を了えたことは少なくとも確かであろう。

（Ｈ五・一二・三〇）

「デュエット」
― それは　いにし日のはやりうた ―

青木昭成



寡黙

君の知っていることで
ぼくの知らないことがある

小石を鳴らして
ぼくの脚の節々が
知覚をうしなっている
こんなにも哀しみが
影をなくしたところに河原が
拡がっている
この自明なあかるさ
この自明な渇き

ぼくの知っていることで
君の知らないことがある

どこにも藻のにおいはない
ただ心のかたすみに
かって蛇籠が編まれ
そして　古び
綻びたむなしさがある
その流れさったものの跡に
どうしたわけか
きみのひどい寡黙がある

撞着

月のおもてに　ぼくは
物語の舟を浮かべていた
しかし　月はおもむろに流転して
ぼくの舟だけが静止していた

雲のきれまに　きみは
物語の櫂を操っていた
しかし　雲はたえまなく変転して
きみの櫂だけが留まっていた

そして　ふたりの面映ゆさが
いつのまにか口の高さまで埋めていた

どちらがさきに沈黙を破るにしろ
その後を生きることは
なんとはるかな展望であることか
なんとおろかしい寓意であることか

きみとぼくとは　ほのかな符合
ひそやかな撞着に魅せられて
窄い路のうえでそれぞれ
ひかりの頭巾をかぶっていた

ハミング

肌をとおす霧のはれま
髪にそそぐ日射のかぐわしさに
きみはひかりの花束をあみあげた

ぼくはその草露のふるえるきらめきで
朝の輪郭をじょじょに
この掌に映してみたいとおもう

ああ　とおい空が誘いつづけるあいだ
きみはぼくのこの感懐のうえに
いつまでも跼みこもうとはしてくれない
陽気なハミングをやめようとしない

幻影

それはたしかに作業
というようなものではない
とある日　破風の高みによりかかり君は
小手をかざして今日の気温を知り
空の深度をさぐろうとする
そしてぼくは　移りゆく雲の自在を
まねしてみたいと考える
君はぼくの道化にとりあわず
承知していて　おくびにもださず
陽気な風の挨拶をくりかえす

それはたしかに認識
というようなものではない
破風からひろがるお喋りな波紋
不安のおもみを忘れさせる甍の幻影
こうして　ぼくは君のうつり香と
肌のぬくもりを懐にすると
土鳩の翼のあざやかさで旋回し
セピアに煙る椎の木立のむこうがわへ
だまって翔びたとうと　ふと思いたつ

やがて如何なるナイフ
如何なるスプーンがきみの手を助けようと
一寸ばかり甘く一寸ばかり酸っぱい
もしそれが真実というものであるのなら
もう一個　さらに一個
ぼくはきみにすすめるのだ
「どうも　酸化しやすいものでしてね」と

けれどぼくはきみをむやみに
食傷させたくはない
ぼくにとっても思いがけなく悪い
思いもかけぬ企みがきみを襲うかもしれない
すると　きみにとってこの非情な果物は
いったい何であるか　ぼくはこの舌に
きっときっと聴かねばなるまい

こだわり

ぼくは果物よりも　むしろ
ぼくの言葉をきみの皿に
盛ってみたいと思う
どれにもきみの側には　きみが
ぼくの側にはぼくが映り
窓がひとつづつ映る

君はそのどれからどんなふうに
味わってくれるだろうか
が　ぼくはそれらの幾つかに
ぼくの指紋を残してしまったかも知れぬ
それが悪意からでも
過失からでもないことに
どれだけか　こだわりがのこる

だから　じゅうぶん時が熟すまで
ぼくらはそれを眺めてみよう
人間の考えはせっかちなものだ
ぼくらは眸と眸を　すこし逸らして
おたがいの胸のうちで計る
さあ　数をかぞえて

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）
春季号……二月一日　十二月三十一日
夏季号……五月一日　三月三十一日
秋季号……八月一日　六月三十日
冬季号……十一月一日　九月三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。

社告（内規）

☆　同人参加へのお誘い
「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。
同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。
雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い
本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出があり、誌友として維持会員になっていただいております。
維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。
＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。
郵便振替口座　東京二一九〇八一五
加入者名　作家群研鑽雀来部

第五十二号原稿締切
三月三十一日（木）当日発送まで

前橋公園殺人事件（四）

佐々木一郎



十

蛎沢（かきざわ）邸は、前橋市大手町南東にある。

この町内は、大部分が群馬県庁、県議会議事堂、前橋地方裁判所などの国や県の主要な機関、それに、前橋市役所、前橋市合同庁舎、市立図書館が立ち並ぶ官庁街であるが、蛎沢家は、それとちょうど背中合わせの静かな高級住宅街の中にあった。

慶応三年の再築前橋城の復元図によると、このあたりは、本丸（現在は県庁、県議会議事堂が建てられている）を取り囲む広大な「侍屋敷」群の南東に位置し、「水曲輪門」（みずくるわもん）がある「水曲輪」と呼ばれた一画だったらしいが、今はその面影はない。

四代前の祖惣左衛門が安政六年の横浜開港にあたって生糸貿易で資産を蓄えたり、現当主の黎吉が海外事業の拡張に成功して、巨大な利益を上げたことなどで、蛎沢邸は、かなりの豪邸だった。

蛎沢まさ子は、開いていたアルバムをそっと小机の上に置くと、ぼんやりと庭園の滝を眺め、ホッと吐息をついた。娘婿の浩が殺害されて以来、めっきりと気が弱くなってしまっている。

築山の向こうには冠木門が見え、その前の小さな常緑樹の林には、昨夜の雪を頭上に残しているものもある。

しかし、今日は、彼女のいる見事な書院造りの欄間にも、さわやかな陽光が差し込むよい日となった。

静かに襖が開いて、夫の黎吉が、姿を現した。

「あら、あなた。お帰りなさいませ。お出迎えもしませんで……」

「いや、いいんだ。いいんだ」

黎吉は、あわてて立ち上がるまさ子に優しくほほえんで、

「重役会議が早目に終わったので、ちょっと戻ってきただけなんだから。それより、洋子や明はどうした？」

黎吉は、着替えをまさ子に手伝わせながら、たずねた。

「……洋子は、美容院ですわ。明の方は、いま、お手伝いの加代さんが保育園へ迎えに行っているところですわ」

黎吉は、うなづきながら、机上のアルバムを取り上げて眺め、

「おや、懐かしい写真じゃないか」

と妻を振り返った。それは、今から三十年あまり前にまさ子が市商工会議所主催のミス・前橋に選ばれたときの写真で、宝石をちりばめた王冠を被ってほほ笑んでいる和服姿や水着姿のほかに、コンテスト風景や授賞式のスナップ、一年間にわたってミス・前橋の彼女が参加した各種の催し物の写真が貼られている。

黒目がちな、チャーミングな瞳、形のよい鼻、清純な表情をたたえた唇、そしてすらっと伸びた肢体は、断然他の候補者の追従を許さなかったといってよい。

縁談も数多くあった。なかでも、秀才を謳われた青年医師琴野田（ことのだ）奥次郎と「蛎沢種苗」副社長蛎沢黎吉の求婚が、最も熱烈だった。どちらも、二十代の好青年で、なかなか甲乙がつけにくかったのだが、一年間ほどの交際ののち、彼女は、黎吉を選んだ。

「このころが一番楽しかったわ。なにも考えないですんだのですもの……。そして間もなく、あなたと結婚できて……」

「ハハハハ、そうだったね」

黎吉は、次々とページを操っていたが、ふと、一葉の写真に目が釘づけになった。それは、市の「前橋まつり」の風景で花車に乗った女神姿の彼女を写したものだったが、周囲を取り巻く群衆の中に琴野田奥次郎の姿を発見したからだった。

「あら、どうなさったのですの？」

「……」

のぞき込んで、まさ子は、思わず声を上げた。

「これ、琴野田！　まだ写真が残っていたのね」

彼女は、アルバムからその写真を引き抜くと、二つに裂いてくず箱に投げ込んだ。

「おい、おい、まさ子。なにもそんなにまでしなくったって……。第一、琴野田さんは、もう亡くなっているんだよ」

黎吉は、青ざめている妻に、優しく声をかけた。庭でパシャッと水音がした。多分、池の緋鯉がとびはねたの

回のこと ―― 浩の精子を使用しないで、琴野田自身の精子を使用したらしいという噂 ―― に、どうにも我慢できなかった彼は、長い間追跡を続けた結果、ようやく今朝になって、前橋公園の平和の女神像前で琴野田と対決することができた。この散歩の日時を知らせてくれたのは、真弓である。

そして、散々、その所業を難詰し、ついにはその論文作成の秘密をマスコミに暴露するぞと脅かしたところ、それまで負けずに言い返していたこの傲慢不遜な老人がどうしたわけか、突然、心臓を掻き毟って苦しみ出し、雪の上に転倒して動かなくなってしまった。

それを見た浩は、てっきり自分の言葉でこの男が死んだのだと思い込み、急に怖くなって、あわてて逃げ出した。さいわい、途中で出会ったのは朝帰りらしい酔っ払い一人だけだったが、このことを浩がいくら説明しても誰も信用せず、蛎沢家は、上の下への大騒ぎとなった。

（実際には、蛭田部長刑事の慧眼がこれをすぐに見破り、捜査が進められた結果、浩も有力な容疑者の一人にあげられて内偵されていたのだが、蛎沢家側では、まったく気がついていなかった）

いずれにせよ、この琴野田奥次郎の路上での急死は、「心不全」と認定され、事件にはならなかった。

その年の九月、今度は、当の蛎沢浩自身が殺害されてしまった。今回は、前橋署も、「広瀬川殺人事件捜査本部」を設置して、本格的な捜査活動を開始した。

蛎沢家では、〈この犯人は、奥次郎の長男の真一郎に違いない〉と強硬に言い張ったので、当局としては、一応重要参考人として取り調べたが、彼をクロと決めつける証拠は、なかなか発見されなかった。

そして、それまで内々で奥次郎の死因を追っていた上田と蛭田はその役目を解かれ、正式に新捜査本部の捜査員に任命されたのだった。

十一

季節も十二月ともなると、世間一般は、押し詰まった雰囲気の中で、慌ただしく動き出す。特に今年は、不景気と冷夏、暖冬とにたたられて、あちらこちらに倒産や事業所閉鎖の声が聞かれる師走となった。

しかし、この社会の慌ただしさとはまるで無縁のように、前橋署の応接室では、本部長（署長）、捜査課長、吉岡主任、上田警部補、蛭田部長刑事の五人が、黙然と座っていた。

上田たちがもたらした〈人工授精についての飯島教授の説明〉があまりにも生臭かったため、しばらくは互いに顔を見合せるばかりで、折角、婦警が運んで来てくれた茶碗にも、だれも手を出さない。やがて、本部長が口

を開いた。一メートル八十センチ、九十五キロの巨体に口髭を蓄えたこの男は、話がいつも理屈っぽくなる。

「断っとくが、わしは、クリスチャンでも何でもない。しかし、いつか、こんな日がくると思っとった……。

これだけ、科学が「神の領域」に進入してくるようになっちゃあ、世の中が無事に納まるわけがない。

今の上田君の報告が、その証拠じゃよ。

元来、人間の生命なんてものは、神の司る「神聖な領域」の中にあると考えてよい……。

それを、科学の名にことよせて、人工授精だとか、排卵誘発剤とか、貸し腹、脳死判定、臓器移植、あげくの果てにはクローン人間などと、神意をないがしろにすることが多すぎるんだ。

今回の殺人事件で犯人がなかなかあがらないのは、この〈神への冒瀆〉が根幹にあることを見落としているからだと思う。この点に留意して捜査に当たってくれ」

「それはつまり、この殺人事件が、琴野田の〈AID〉（非配偶者間人工授精）手術に端を発していると考えてよろしいですな。また、犯人は、直接間接を問わず、このAID手術事件の影響を受けている人物の範囲内にいるということですな……」

捜査主任の吉岡警部がたずねた。この警部は、いつも温厚で、そつがない。

「うむ、そうだ。とにかく、琴野田の手術を受けた真弓、洋子、房江や、その夫の真一郎、政吉、芸者屋の女将、小奴、「蛎沢種苗」の社員、「琴野田医院」の看護婦、事務員たちを、もう一度、別の角度から洗い直してみる必要があるということだ」

「しかし、最新医学が、人間の寿命を延ばしていることも確かなんだけどなあ」

捜査課長が、呟いた。

「だからこそ、もう一度視点を変えて洗い直す必要があるのだ！　わしは、今までにシロと査定された人間の中に、犯人がいるような気がしてならないのだ」

「……」

上田と蛭田は、浩の殺害現場に向かった。

「現場百遍ですな」

「そういうことだ」

事件現場に行く前に市立「文学館」に立ち寄った。この職員で、事件当日に被害者を目撃した者がいるらしいとの聞き込みがあったからだ。

この「文学館」は、前橋警察署と現場とのちょうど中間ぐらいの場所にあると考えてよい。庭先には、真っ赤な実をたわわにつけたピラカンザが咲いていた。

幸い、この証人は出勤していたので、二人は、真新しい応接室を借りて、早速、事情聴取をすることができた。二十四、五才の、青いジーパンに黒いジャケットを着た

木訥そうな青年である。
「君は、広瀬橋横で蛎沢らしい人物を見たそうだね」
「ええ、でも、あのことについては、もうあらかた、警察に話してあるんだけどねえ」
「いや、それはよくわかってますよ。きょうは、君の見た影、つまり浩氏だが、どんなふうに犯人に近づいて行ったのか、それを話してもらいたいんだよ」
上田が、ゆっくりと、相手の表情を見ながらたずねた。訊問のときは、この切り出し方が難しいのである。
「どんなふうって……。第一、僕は、その人が被害に遭った人かどうかも知らなかったし……」
「あ、そうか。それじゃあ、言い方を変えよう。あの日、午後九時三十分ごろ、この広瀬川ふちの、凶行のあった場所で――そこには犯人が待ち構えていたんだけど――、蛎沢は、広瀬橋を渡ってから、その人物を見て親しそうに近寄って行ったのか、それとも、ふつうに歩いて行ったのか、どっちだね？」
「うーん。よくわかんなかったけど、ちょっと急ぎ足だったかなあ？　手を上げて……」
「えっ、何だって？　手を上げながら近寄って行ったのかい？　これは初耳だな」
蛭田も驚いて、メモを取る手を止めた。
「そうすよ。手を上げたつうか、手を振ったというか」
「そりゅ、どっちでもいいんだがね。要するに、蛎沢は、顔見知りの人を見つけて、近づいて行ったわけだね」
「そう見えました」
「それから、犯人と争ったわけだね？」
蛭田が、痰の絡んだような声で、せきこんで、聞いた。
「さあ、そこまではわかんねえなあ。なにしろ、あの晩は、残業で遅くなっちゃったんです。それで、急いで帰り支度をして、あわてて外へとび出したら、ちょうど、二人の影が目についてだけなんだから……」
「どうだい。待ってた人は、男じゃないのか？」
上田が、無い物ねだりをする子供のようにたずねた。
「分からない。何しろ、公衆トイレ前の広場は、ここから見ると死角になるんでね。その蛎沢って人が急ぎ足で行ったのは分かったけど、相手の人の顔かたちまでは、ちょうど逆光になっていて、よく見えなかったんです。それに、僕は、すぐ駐車場へ行っちゃったしね。まさか、あんな大事件が起きるなんて夢にも思わなかったもんねえ」
「ふーむ、公衆トイレ前の広場かあ」
蛭田は、わざとらしく、手のひらであごを撫でながら、何度もうなづいた。そのとき、しばらく考え込んでいた上田が顔を上げて
「念のために聞くのだけど、本当に、あのときは、その二人きりいなかったんですね？」
「ああ、あの時間帯になると、あの辺には人っ子一人いなくなっちゃうからねえ……」
「や、どうもありがと。参考になったよ」
上田は、片手を挙げて礼をいうと、蛭田を促して立ち上がった。
この新築間もない「文学館」は、前橋市出身の歌人たちの文学資料が収められ、展示されている。三階建のビルを二つ、中央エレベーターで繋いだこの建物は、前橋市の新名所の一つに挙げられている。
「朔太郎橋」の袂には、萩原朔太郎の
「広瀬川は白く流れたり
時さればみな幻想は消えゆかん
……」
という「広瀬川」の歌碑のほか、友人の室生犀星や北原白秋の歌碑を見ることができる。
「文学館」の前方は、遊歩道になっていて、水量の多い広瀬川にそって、約一キロメートルほど続く。
両側には、見事な欅、染井吉野桜、しだれ柳、銀杏、樫、白樺、辛夷、楓など、十メートルにも達する大きな街路樹の群れが立ち並び、中央分離帯の役目をしている四角に刈り上げられた山つつじの生け垣が、散策をする市民たちの目を楽しませてくれる。
上田たちが空を仰いだとき、ちょうど、密生する葉の間から木漏れ日が燦々と街路に降り注いできたので、思わず、二人は眩しくなって、あわてて、目を閉じた。青空が、抜けるように高い。
「警部補。あの調子じゃあ、どうやらホシは、男とも女とも特定できませんな」
「そうだなあ。やれやれ、これで、たった一人の目撃者からも何の収穫もなしか」
「いや、少しはありましたよ。ホシの顔を見て、手を上げて近寄ったことなんかはね。犯人は浩とはある程度親しい間柄とみてよろしいでしょうな」
「うん、おそらく、電話で呼び出されたのか、口約束をしておいて会ったんだろう。そして、口論の末、殺されたんだ。ただの行きずりの者の犯行じゃない」
「そうなると、容疑者の中から、浩とあまり面識のない漆原房江と政吉や琴野田医院の看護婦たちは除かれますね。それから、妻の洋子も親族も「蛎沢種苗」従業員は当然除いてよい。ただ、家人きりアリバイを証明できない真弓と真一郎は、もう一度調べ直す必要がありますね。あ、大切な人を忘れていた……。小奴！　警部補。あの女だって、置屋の女将きりアリバイ証人がいません」
「うん。そのとおりだね」
「警部補。あなたの小中学校を通しての同級生で、しかも、これまでずっと、仕事を犠牲にまでしてあなたの情報源になっていてくれたひとなんだけど、やっぱり、入れざるを得んでしょうな」
「チョウさん。それは当然だよ。これだけ調べてもホ

シらしい姿があぶり出せないのだから、もう一度、洗い直すのは当然さ。特に、近親者だけの証明きりない真一郎、真弓、小奴の三人は、真犯人である可能性も含まれていると考えなければならないよ」

いいながらも、今までに小奴から受けた数々の情報を思い浮かべている上田を眺めて、蛭田は、

「大丈夫ですよ。警部補。小奴は、浩を殺しても、一円のトクにもなりません。『殺人をして、最も得をするのはだれか』という捜査の鉄則に従えば、奥次郎の二号さんだといっても、仇討ちをするような間柄でもないし、第一、そんなことをすれば、折角手に入れた奥次郎の保険金の二億円を棒に振るようになる。そんな馬鹿な真似は、花柳界の連中は、絶対にしやしませんよ」

「ありがとう。

チョウさんの気持ちはよくわかるけど、いやしくも、公私混同があっちゃならないから、先入観を捨てて、捜査にあたろうよ」

「はあ、わかってますよ。警部補」

遊歩道を西に進むにつれて、まわりの街路樹で作っている風景が少しずつ変化してきた。樹木の種類が変わってきたためである。

「文学館」の周囲には、吉野桜、山桃、欅、辛夷などが数多く上られていたのに、いつの間にか、銀杏、欅、白樺、百日紅などの木々が目立つようになり、今、——殺人現場付近——は、欅、樫、楓、しだれ柳などの紅葉や緑、山茶花や万両の紅で覆われている。

「やっぱり、これじゃあ、死角だなあ」

蛭田は、公衆トイレ前の広場の横から、対岸に遠く見える「文学館」を眺めて、ため息をついた。そして、上田を振り返って、

「もし、あの青年が、あと五分遅く外に出ていたら、もう、二人の姿は見えなくなったでしょうな」

「うん、それが、いわゆる、〈天網恢々疎にして漏らさず〉ということじゃないのか？」

上田は、たばこに火を点けながら考えていた。

（この広場に犯人がたたずんでいて、駆けつけて来た浩と何やら話し合い、あげくの果てには、石を浩の頭にぶっつけて殺してしまったのか）

彼は、そのようすを、この静かな河畔で、繰り返しイメージしていた。

（そいつは、一体、だれだったんだ）

現場から約百メートルほど離れたところにある、そばや「やぶそば庵」でも、かなりの収穫があった。

事件の第一発見者である西本のり子（十二才）が、突然、「香水の匂いをかいだ」といい出したのである。

彼女は、この家の次女で、たまたま、家の手伝いをしているとき、事件の第一発見者となった。

「おいおい、ノリピー。急にそんなことをいい出すと、あとで大変なことになるぞっ！」

頭髪ははげ上がっているくせに眉毛がふさふさと濃い五十がらみの親父が怒鳴った。のり子は、「酒井法子」を真似て、「ノリピー」とあだ名されているらしい。

「だって、そんな気がしたんだもん……」

「きみ、それは確かなの？」

蛭田刑事がやさしい口調でたずねた。しかし、これは調書に載ってない大変な新事実である。

「うん。この間、お巡りさんに聞かれたときは思い出せなかったけど、あとになって気がついたの」

ヤワラちゃんのように、髪の毛を赤いリボンで巻いたノリピーは、父親に叱られたので、頬を膨らませている。

「いやいや、あとで思い出したんでもいいんだよ。しかし、その証拠になるものはあるの？」

「証拠？」

「うん。証拠だよ。あの人が殺されたのは、午後九時から十時の間、きみが見つけたのは翌朝。その間に長い時間が経っているから、匂いなんて、ふつう、消えちゃうはずだよね。それに、あそこは、風も強いしね。だから、どうして匂いが分かったのか、おじさんに教えてもらいたいんだよ」

「うん」

このとき、主人が堪り兼ねたように口を出した。

「旦那。どうもあいすみません。実は、この子は異常嗅覚とでも申しますか、匂いを嗅ぐのが人一倍強いんでございますよ。恥を申すようですが、食べ物が変質したときなど、それこそ、手前はじめ、大人がだれも気がつかねえというのに、この子はピタリいい当ててしまうんで……。だから、うちのような食べ物商いの店では、いつも重宝してるんでございます。エヘヘヘ」

主人は、愛想笑いをした。

「ほほう、なるほどね」

「何か置いてあった後の匂いを嗅がせると、ピタリ、当てちゃうんです。まるで、犬みたいな奴だって、大笑いするんですがね。えへへへ」

上田は、しゃべり続ける親父を相手にせず、

「ところで、のり子ちゃん。きみは、本当にあの場所で香水の匂いを嗅いだの？　それとも、何か落ちている物を拾っていたのなら、けして叱ってりしないから、おじさんに見せてくれないか」

のり子は、しばらく黙ってうつむいていたが、やがて決心したように立ち上がり、自室から拾得物を持って現れた。

それは、フランス製のハンカチーフだった。（未完）

（小説）

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（一）

第一章　重蔵大空に羽搏く

一、長崎出向・世界に目を開く

金子正義



（一）

目付より長崎奉行に栄身した中川勘三郎忠英は、後任目付役との引継や赴任前に飛驒守叙爵のこともあって、其の準備が重々しく出立が遅れるので、近藤重蔵は奉行に先立って関係諸役や上司への挨拶もそこそこに出発することになった。

旅立ちの数日前には、奚疑塾以来の学友狩谷棭斎・市野迷庵や佐藤一斎までもが鶏声ケ窪の近藤家の祝宴に集い、それぞれ詩文を寄せて激励した。

六月二日の慌しい旅立ちの朝には、曾ての白山義学塾の同志、門弟達が板橋宿迄見送りに来た。

重蔵は希望に胸脹ませ中仙道の宿駅を次々に経て草津より京に入り、河船で大坂に下り山陽道より馬関に到って、船で小倉に上陸し福岡を経て佐賀より砂を敷き締めた長崎道に入り嬉野から山を越すと湖のような大村湾が見えた。湾岸沿いに大村・諫早を過ぎて東の日見峠を越すと緑の半島沿いに深く湾入した港が見えた。

白帆の和船や岸に舫っている大小の漁船もあって、それだけを見れば日本各地の漁港と変らぬ長閑な港であるが、入り込んだ湾の中程に扇形の人工出島があって、ぐるりと白壁の築地塀が廻らされ、陸地とは番所のある石橋で結ばれているのが見える。有名な長崎のオランダ出島と直ぐ判った。

少し離れた南に入り込んだ湾岸にも唐人屋敷の並ぶ正方形の出島が見える、緑に被われた海岸沿いに九州大名の蔵屋敷らしい大きな建物が基盤上の布石のように点在している。入り込んだ海岸の砂の見える所には造船所らしい建物も見え、対岸の浦上川西方の山裾の杜の間にも蔵屋敷らしい大きな建物の黒瓦が光っている。

出島を突き出した陸地に長崎奉行所西役所の大きな構えが見え、近くに長崎会所・町衆奉行所を中心に蔵屋敷回船問屋・両替商等の大店を中心にした市街が海岸沿い

に英彦山・星取山の山裾近く迄帯のように拡がっている。人口三万余りの聞きしに優る大港町であった。

奉行所西役所北側に湾入した浜に波止場があるのか、埠頭近くに艀が点々と見える、余りにも小さく見えるのは、其の近くに碇泊している異国船が驚く程大きいからであった。

江戸鉄炮洲より出帆する伊豆七島廻航の官船が七百石積、大坂湾で見た北前船が千石積であるが、長崎湾内に浮ぶ二隻の異国船は何んと大きいことか、出島の一部を引き離して帆檣を立てたようである、日本の千石積船の七・八倍はあるように見える。

間隔を取って錨を下している異国船のうち大きい方がオランダ船であろうか、船首と船尾を海老のように反り返し、船体に植えつけた杉木立のように三本の帆檣が高高と空に伸び、中央の頂きには三色旗を翻し、三本の檣に三段に渡した横柱には白帆布が巻き上げられている。

唐船は鯨のような船体で、突き出した船首は鯰頭のように丸く見えた。帆檣は北前船のように太く、其の主柱より前後の副柱に何本もの太綱が張り渡され、何十枚もの竹簾を編み組んだような帆が垂れていた。主柱の頂には大きな竜蛇の吹き流しが空に泳ぐように繋がれていた。

暫く展望していた重蔵は長旅の疲れも消えたように、胸を弾ませて峠の曲りくねった坂道を駆け下りて行った。

中島川を越え諏訪神社の一の鳥居を右に見て、馬町、勝山町・桶屋町・桜町と賑やかな長崎の中央通りを一町程南へ行って、江戸町の西波止場近くの門前に蘇鉄の大木が繁る奉行所西役所に着いた。閉門刻限の暮れ六つ直前であったが、真夏の空は未だ明るかった。

（二）

翌日朝食が済むと頬鬚のある中間が重蔵の部屋の廊下に片膝を突き坐礼をすると、

「当直の岡元様がお呼びでご座ります」

と言って、表控えの間へ案内した。

奉行並役の組頭岡元文右衛門には昨夕到着時に挨拶し、数人の奉行所下役達にも引き合わされた。更に部屋割りから就寝迄も足軽や女中に手配して呉れた好人物相な中年の武士であった。

「交代奉行殿が到着しないが、当代奉行の高尾伊賀守様が立山役所に居られる。貴公参着のことご挨拶に参られるが良い、拙者が案内致そう、支度なされよ」

と言った。

重蔵は部屋に戻って道中行李から夏の衣紋を取り出して身を整えて表に立つと、足軽二人に中間を供にした岡元文右衛門が出て来てジロリと近藤重蔵の衣服を見て、

「チト粗末じゃのう、貴公江戸では評定所与力と聞いたが、此処では奉行所調役、本来騎行するのじゃが、長道中で着いたばかりじゃ、ま、略式でよかろう」

と苦笑した。

一行は重蔵が昨日来た市街中央の通りを逆に戻って諏訪神社の一の鳥居に着くと、岡元文右衛門は足軽の一人に立山役所へ近藤重蔵の到着参上を知らせに走らせ、

「此処は長崎の総鎮守で諏訪大神・産土神の森崎大神、住吉大神が祀られてある。見事な二百七拾七段を登ると、眼下に長崎全体が一望の下に見える、チト間を取って展望して参ろう」

と先に立って緩っくりと三間幅程の石段を登り、本殿拝礼後、境内の見晴し台に立って、湾岸に沿って南に建ち並ぶ主な建物を指差して説明して呉れた、重蔵の眼に昨日、日見峠より眺望した景観が遠目鏡で拡大したように拡がり見える。昨日は見えなかった普賢岳の噴煙が左手東方の山陰に白く立ち昇っていた。遠くに雲に紛れ込むように漂っているのは阿蘇・桜島の噴煙であろうか渺渺たる遠景であった。

三年前に小普請役より長崎出向となった岡元文右衛門は、同じ江戸より来た近藤重蔵に気を許してか心易すく話しかける。

「それ、辰巳に見える拙者共の西役所の直ぐ西の海岸に扇形に出張ったのがオランダ商館の出島じゃ、約四千坪ある、いずれ見分に行くことになる。其の先、南の入り込んだ浜辺の四角出島が唐人屋敷じゃ、元は十善寺の薬園じゃった敷地で九千六百坪程あって唐人も五千人程住んでいて賑かじゃ。

長崎奉行所西役所は千七百余坪で、西波戸場の出島、オランダ商館や唐人屋敷、長崎会所等の監督連絡に当る勤め場で。これから参上する立山の役所が長崎奉行と配下の吟味役、目付調役等の役宅じゃ、従って貴公のように旗本与力が吟味役などになると立山役宅住いとなる。拙者のような吟味役組頭は、西役所に常詰となって奉行並の責任を執る。調役・与力・同心の当直詰以外は立山役宅より通う訳じゃ。

立山役所は此の諏訪神社より西に昇った金比羅山の山麓にあって二千百三十坪程で一応の城構えをしている。勿も、中間小者は別として士分の百三十程では戦さにならぬ、従って非常の場合は別として常時の警備は鍋島藩佐賀藩が一年交替で担当しておる。

それ、ずうと南の港の入口右手の山を背にした出崎の森の西泊りの浜に見える建物が千人番所で、此の西泊り番所を中心にして港内外の八ヶ所の台場で警備をしている。此処からは見えないが、港外の野母崎、小瀬戸には遠見番があって異国船を見張っている旗改め所がある。

各台場には砲撃用石室（砲台）があり焔硝、大砲も備えてあるが、旧式で天和の大坂の役の頃の大筒のようなもの、オランダ船の石火矢にも勝てまい、唐船もオランダ船も、我が国の鎖国の掟に従って来航するのは商船ばかりじゃが、途方も無い遠方よりの航路じゃ、唐船すら

南京より三百四十里・北京より五百五十里。オランダ船は海上一万四千里と云う。勿も今は瓜哇（ジャワ）・澳門（マコオ）を中継にして来るそうじゃが、オランダ本国のある欧羅巴では戦いと内乱続きで、諳厄利亜（エゲリス）軍船がオランダ船を襲うとのことで、オランダ本国からジャバ・マコオに来る途中の天竺のコマンデルコスト（印度洋東南海岸）も危険であるとか、オランダ船の乗組の者が長崎から出るのを嫌がっているとか、従って商船であり乍ら洋上海賊に備えるとして、上甲板と中甲板の間の西舷側に石火矢や青銅の大砲も隠してあるそうじゃ。

貴公も今朝埠頭で見た通りの大船じゃオランダ船は船の長さ二十六間、幅は八間、三本檣の中心は二十八間、日本流に数えれば八千石積じゃ、船長以下百人程の乗り込みで、とても日本船のように一枚の白帆では喩二十五反帆千石船の帆でも動かせまい、だから三本の主檣の外に船首や船尾の張り綱まで縦帆・横帆・三角帆と展帆して走る、帆布も潮に強い黄麻の太撚糸の平織じゃ。

唐船の帆は笹や藁を簾に編んで、オランダ船のように巻き上げず引綱でたたみ上げ下げしている、唐船の方は長さ二十三間、幅五間・八十人程の乗組みで七千石程じゃろう。

いずれも入津の時はあの港入口台場で旗改めをしてオランダ船・唐船と確認してから曳船三十艘で港内へ曳き入れる段取りとなる。此等の警備担当の佐賀・鍋島両藩の経費は大変なことだ、長崎町内の治安や警備は、各町内の年寄役の代表が交替で長崎町年寄として町方役人を統轄しての自治に任せられている。

貿易と外交については長崎会所で担当し、町年寄の下に異国商売吟味役、調役等がおかれて実務担当に普請方銅方・人参方・俵方・船改め方などに手配されている。

従って長崎奉行は幕府の権威を以って全体を監督する訳じゃ。複雑のようじゃが直ぐ慣れよう。

さて、色々と話したが奉行様に参着のご挨拶をする適当な刻限の間を取っていたまでじゃ。」

と腰掛石から徐に腰を上げ神社の裏手の道に出て立山役所へ向った。

木漏れ日の林道を二町程歩いて本道に出ると、右前方に砦構えの石垣を巡らせ四隅に白壁の物見櫓を立て、北東の山麓を利用して三層の天守に見立てた望楼のある堂堂たる立山奉行屋敷である。表門を中心に左右に鉄砲窓のある長屋造りの白壁の間を通つ楼門を潜り、配置よく植えられた松並みの玉石を踏んで表面玄関より屋敷に通り、奥書院の開け放された座敷で岡元文右衛門の取次を介して、重蔵は当代奉行高尾信福惣十郎伊賀守に目通りした。重蔵が評定所吟味方より長崎奉行手付への出役を型通り言上すると、後の言葉を待って暫く黙っていたが、

「して・中川殿は何時頃参られるかな、予も長崎で丸二年・江戸が恋しくなってのう、近頃は蝦夷地へのオロ

シャ（露西亜）ばかりか、エゲレス、アメリカなどの異国船が近海に出没して居るので、中川殿のような頭の切れる若殿で無くては務まらぬ。其の方もなかなかの偉丈夫で頼もしい、其処の岡元文右衛門に万事手引を頼んで励むが良い、中川殿が来られる迄は西役宅の方で待つが良い」

と高尾信福は二月五日付で普請奉行に命ぜられているのに焦りもせず、半白温厚な顔を綻ばして和やかに言った。

重蔵は、江戸の格式ばった諸太夫や名の通った学者達の尊大な面構えばかり見ていたので、高尾信福の伸びやかな容子に緊張が緩んだが、何にか頼り無さを覚えた。

武者控えの間に下って昼食を摂って寛ぎの時、岡元文右衛門は、

「高尾奉行様は些事にこだわらぬ大様なお方じゃが、どうして鋭い洞察力のある奉行様じゃ、寛政五年二月に長崎奉行になられたが、前年の九月に蝦夷地根室のニシベツ港に露西亜船が入った急報が江戸表に入って大騒ぎの最中で、後でラックスマンを退去させる為に長崎入港の信牌を授けたと聞いて、高尾奉行様は『此れは容易ならぬこと、入港許可は通商を許すと同じこと、必ず露西亜船は長崎へ直航するであろうから準備せよ』と拙者等に秘かに命じて、梅ヶ崎にある漂着異国人保留所を整備して、露西亜との通商に備え露西亜出島の縄張り迄なされた。

処が老中松平定信侯は宣諭使の石川将監、村上大学等が江戸へ帰任する前に、突如老中を辞された。

前尾奉行様は是を開かれて『松平侯は信牌の重大性に気付いて、後日必ず露西亜船が長崎に現れるであろうと危惧し、己れの外交の限界を自覚しての辞任であろう』と申された。信牌は慶長十四年（一六〇九）七月に大権現家康公がオランダ人に通商渡海免許の朱印状を与えたが、其れに類するものじゃそうだ。

兎に角前尾奉行様は何にか先を見通すお力を内に秘めておられるようなお方だ」

と岡元文右衛門は心底から信服しているように言った。

此の時より八年後の文化元年（一八〇四）九月六日、露国軍艦ナデジュタ号が、其の頃最優秀の航海術家の艦長クルーゼンシュテルン大佐を艦長として、舷側の石火矢三十四挺を露出して長崎入港の信牌を持って露国皇帝アレクサンドル一世よりの国書を江戸将軍に呈しにニコライ・ペトローヴィチレザノフ全権大使が来航した、然かも寛政四年のラックスマンのように北方カムチャツカからでなく、アフリカ南端喜望峰を廻っての海上一万四千百里の世界一周の大航海を成し尽げてのことだった。

それは後のこととして、高尾奉行への参着挨拶後、近藤重蔵は奉行騎下与力の同僚に名を通じ調役としての役目に着いた。

江戸で先鉾騎部としての本高百俵の家を継ぎ、評定所先手与力として御譜代席定高百二十八俵二斗、役扶持十人扶持の最高給であったので、今度の長崎出向でもさして碌高は変らず、本高百俵に役高百五十俵を加えたのみであったが、役扶持が十人扶持と役金九十両があって相当潤沢であった。長崎に至る道中が半月余の長旅であったが、江戸出立時五十両の引越料が給せられたので路銀や、道中の名所史跡の見分には支障なく存分に重蔵の実証主義の方法技術や、江戸市中見廻りの経験を生かしての諸国の地理的条件や、城下町の状況、民百姓の生活振り迄見分し、道中記録を克明につけ、古書器物等や珍貴な骨董等も買い取って江戸の父守知宛に送ってきた。

日を経て長崎市街に馴れると、西役所寄りの江戸町、長崎会所寄り興善寺中央通り、唐人屋敷よりの大浦町などの商家に江戸では到底買えないような唐物、オランダ商品が幾等でも買い求められ、書籍店には重蔵が兼てから読み度いと思っていた貴重な唐本や稀観本もあった。

役職に馴れるにつれ唐人屋敷やオランダ商館の通詞を通して珍貴な書籍も入手できて重蔵の好奇心を満たすに充分だった。

（三）

近藤重蔵より早く二月五日に長崎奉行を拝命した中川勘三郎忠英は、西丸目付役及び評定所吟味方の後任への引継後、御三家及び閣老、若年寄へ長崎奉行拝命の挨拶御礼に参上後、長崎警備の佐賀鍋島、福岡黒田の両藩主の祝儀挨拶を受けたのを始め関係西国大名より交交に贈物を受け、其の他の就任祝いの使者が門前に列を成すの盛況であった。特に日本橋本石町の阿蘭陀人定宿の長崎屋より主人源右衛門の案内で、折から入貢参府中のカピタン、ゲースルト・ヘンミーが挨拶に来て大羅紗一反を呈した。

各方面よりの贈物は、高価な黄金や太刀を始めとして豪華な絹地の衣服、精緻な漆塗の器具から鮮魚、昆布、さまざまの海産物までが幾部屋にも台上高く積み置かれる有様であった。

中川忠英は此の品々を眺め乍ら、長崎奉行が遠国奉行中の最高位とは言い乍ら、老中支配下の芙蓉の間席の諸太夫として千石高の職で、役料四千四百二俵、役金三千両も加えられる厚遇である上に、長崎では、オランダ、唐（清）国、出島関係出入の交易商人等よりの贈物は勿論、其の交易総額より受用銀として関税を納める定めがあり、奉行諸役、地役人も其の配分を受ける慣習があり奉行所諸役人の厖大な蓄財となると伝えられていることをも含めて苦しく思った。

中川忠英は出立準備の手間取る間に前の長崎奉行、平賀貞愛式部少輔が知友であるので何度か屋敷に呼んで長崎の貿易や長崎奉行の様子を尋ねていたので、不純とも

言える収益も重責に相応するのかも知れぬとも思った。

長崎は鎖国以来唯一の外国への窓口であり、其の貿易の独占は幕府の重要な財政源となっている。然し迂闊に相手国を許せばキリシタンが伝播し国土の安全すら危くなる。現に天文十二年（一五四三）種子島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル人が以後平戸に交易に来るようになり、鉄砲・焔硝をほしがる戦国大名の歓迎を良いことにキリシタン布教を認めさせ、永禄十年（一五六七）には長崎にも来航し、此の地を支配していた大村純忠は南蛮貿易の利と鉄砲火薬の輸入の為に元亀二年（一五七一）長崎領をイエズス会領に寄進した、更にキリシタンに入信した有馬晴信は自領浦上村をイエズス会領とした。

天正十五年（一五八七）九州を平定した秀吉は、この現状を見てキリスト教の勢力を仰えようとして此れを禁止し、翌天正十六年ポルトガル船の寄港地であった長崎に竜造寺政家の老臣鍋島直茂を長崎支配の代官として任用し、慶長元年（一五九六）キリスト教徒二十六名を長崎で処刑した。

江戸幕府成立後徳川家康は、大名領地的性格だった長崎を幕府直轄地として小笠原為宗を長崎奉行に任じた。

キリスト教を国禁とした幕府は寛永十六年（一六三九）にはポルトガル人に国外退去を命じ、平戸で商館を建てて貿易をしていたオランダ人を寛永十八年（一六四一）には長崎の出島に移した。

斯うした歴史の上から長崎奉行の職掌は貿易と外交、鎖国の完遂、キリスト教禁止の重要な責務のあることを中川忠英は再認識し、更に平賀貞愛が長崎奉行の職掌について説明し乍ら書き留めて呉れた文書を改め読んだ。

奉行の職業は広範であった。第一に将軍、幕府の需要品の購買、次に外国貿易の管理、第三にキリシタンの禁制、四に西国大名の動静監視、次に長崎警備と西国沿岸の防備、第六に町方の支配、第七に外国使臣に対する応待と風説書等に依る海外情報の収集等であった。

長崎及び西国沿岸の防備は寛政十八年以降福岡藩主の黒田氏と佐賀藩主鍋島氏に隔年交替で長崎番として命じ、有事の際は長崎奉行が諸大名の動員と指揮を執る。町方の支配については町年寄の裁許権を認めていたが、正徳五年以降は、地下人より提起される諸願・公事・訴訟は全て奉行の所轄となった。

奉行役人の人事は寛永十五年以降奉行は老中支配に属し、五百石より千五百石の旗本が任用され、与力五騎、同心二十人が預けられる。更に目付、調役、定役等の地役人を擁して任務を遂行する。

其の職責の重大性と種々の特権を許される為に任期隔年交替の複数制である。平常は大過無く任を完うして他の奉行等へ栄進するが、大事が発生すると責めを一身に負う。初代奉行小笠原為宗の遠島の如きがある。後に文化五年（一八〇六）英艦フェートン写の長崎侵入事件で

長崎奉行松平図書頭康英の切腹があった。

中川忠英は長崎へ発向する迄に充分長崎事情を認識して悠々準備を整え、七月朔日将軍家齊に赴任の暇請いに拝謁し叙爵して飛騨守となり、時服二羽織と黄金十枚等の賜物と引越拝借料千両を頂き、十万石大名の格式の供揃を整えて中仙道より長崎へ向って出立した。

先発の近藤重蔵も中仙道であったが、此の季節は東海道の河川が梅雨の出水で川止めが多く、滞在の日数やら宿泊の費用が徒らに嵩むからであった。

然し中仙道の山道でも谷川沿い等では東海通と同じように増水して、崖崩れ等の障害があったが、京よりは大坂へ河船で下り山陽道で馬関に出て、船で小倉に着き黒田藩士の出迎えを受け、その案内で太宰府の天満宮、久留米の水天宮を参拝し、佐賀で鍋島侯の別邸に泊って長途の旅の疲れを癒して翌日大村を経て日見峠で出迎に来た奉行所役人、鍋島、黒田両藩の使者達の挨拶を受け、眼下を展望して長崎に着いた実感を深め九月三日の夕刻西波戸場の奉行所役宅に入った。

（四）

奉行中川忠英は翌日から暫くは多忙であった。先ず新奉行の到着を待ち倦んでいた前任の高尾伊賀守との奉行引継や、奉行配下の上級役人を謁して職務分担を確認したり、長崎警備の黒田・鍋島両藩の蔵屋敷預り役や長崎警備隊長の表敬を受けたり、長崎の町方役所の町年寄、組頭を始め各町自治監督役、防備担当役人を接見し、貿易、財政、運上の総勘定所の長崎会所に行き、異国貿易の仕組、国内商人への売捌きの実情を視察し、筆頭会所役人以下の諸払役、異国商売吟味役、御運上銀納め方役等の重役十二人下役十四人名を謁した。

其の間にも長崎市内の株仲間、人参座、銅座、工人座などの座頭や、近郷の村役人等が、無事の長崎入りのお祝いに伺候し、珍貴な器物、物産などを献上しに来る有様だった。

特に唐人屋敷より唐人頭や商人頭、大通詞、出島のオランダ商館からは出島役人オランダ通詞の案内で商館長キヤビタン、碇泊船の船長、医師達が交々に着任祝賀の挨拶に来て奉行所西波戸場役宅の広間で外交上の交流をなし、暫く歓談して帰った。贈物としてオランダ毛織物ギヤマン器具、唐人は書画、人参、薬草等を呈上して帰った。

斯うした儀礼は十日程続き、退任する高尾伊賀守にも同じように行われるので、伊賀守が立山役所を引き払って江戸へ帰任の旅に立ったのは九月の唐人祭二三日の媽祖勝会が終ってからであった。

唐人祭は近藤重蔵が長崎に着いて間も無い七月二三日に、岡元文右衛門に連れられて丸山町の遊郭引田屋に遊んでの帰り、中島川の思い切り橋を渡って直ぐの崇福寺

と、其の近くの興福寺に寄って媽祖祭を見た。

近藤重蔵は、古注学折衷派の儒学を学んだ者として、明、清時代の仏教には暗かったが、媽祖は唐人の海の守護神で天后と崇敬されて航行する唐船には菩薩棚が設けられて、媽祖像を祭り航海の安全を祈願していると知っていた。

案内の通詞を兼ねる役僧によれば長崎に入港する唐船は媽祖像を陸揚げして出帆まで唐寺の媽祖堂に安置する。

唐寺は、長崎在住の唐人がそれぞれ同郷の者達で資金を出し合って寺院を建立し、僧侶も故郷の寺から招いた。その頃明国が衰えて正保元年（一六四四）明の暴動農民の首領李自成が北京を攻略し、明朝最後の皇帝崇禎帝は皇后と共に自害し、満州の女真族韃靼の容親王が、李自成を討たんとする明将呉三桂の手引で山海関を越えて北京に入り李自成を追放して、韃靼の幼帝貝勒福臨が王位に即して順治帝となり清朝となったが、江南を平定する迄の兵乱が続き、日本に亡命する明の遺臣朱舜水を始め学者、名僧が多かった。

崇福寺は福州（福建省）の出身者が、寛永六年（一六二九）明僧超然を招来して建てた寺で福州寺とも言われた。

承応三年（一六五四）興福寺住持の逸然性融等の懇請に応じて来朝した隠元隆琦が始めは興福寺に入り、唐寺諸寺を経て崇福寺に黄檗宗を伝えた。

後に江戸に出た隠元は麟祥院に寓したが、大老酒井忠勝の推輓により将軍家綱に謁しその尊信を得て、宇治に地を受けて黄檗山万福時を建て新しい禅風を広め、後に松隠堂に退隠して延宝元年（一六七三）八十二歳で没した。

其の崇福寺は赤寺とも言われるように朱塗の壁の華麗な宋風の、聖寿山と山号を掲げる竜宮門（三門）を潜ると、脇に媽祖堂がある第一峰門が石段の上に建っている。三門と同じの明末の建築で、紺瑠璃の屋根瓦以外は朱塗で、斗にも肘木にも彩色し花形の文様が棟渠に見られる。屋根瓦の妻飾の懸魚は蝙蝠形で朱塗の門の桟唐戸の嵌板上部に大きく黄の菊花が画かれ、四隅に緑の蝙蝠が張りついたように画かれている。

案内の通詞役僧の保渡山宗が、

「日本人は、蝙蝠は余り好まず、忌み嫌いますが、唐人は蝙蝠は文字の如く福を招くとして好みます。吉祥文にも多く用います」

と言った。亦、柱に寛永二十一年甲申九年吉旦長崎譯士林に兵衛敬立とあるので重蔵が尋ねると

「当寺崇福寺の六堂伽藍の主な建材は、明国で工作して船で運び、長崎鍛冶屋町で組み立てたものです。釘は一本も使わない明朝様式の建立です」

と亡き母国の文化を誇らしげに語った。

入母屋造りの大雄宝殿の正面に立つと隠元の筆である

と言う『海西法窟』と白地の遍額の墨蹟が力強く浮き上って見えた。

長崎の唐寺は何処も唐人好みの赤白青緑の原色で際立って明るい。

大雄殿の内部に入ると天井の無い円穹窿で、正面須弥壇だけは欠円穹窿で佛慈廣大と黄金で書いた潤朱の横幕を張り、黄金の壁を背に釈迦、迦葉、雲門の三尊が祭られている。

須弥壇の左右は朱色の大きな六角の飾吊燈や、赤の大ローソクが何本も吊り上げられ仏前の大仏卓にも太い赤ローソクが点されていた。床は洗い磨かれたようて青い石畳で、薄暗く寂とした京・奈良の禅寺とは全く異なる内陣であった。

媽祖堂は祭日の故もあって一層明かるく天后が祭られる堂前の大きな供物台には、色とりどりの花草や、果実料理までが山盛であった。役僧は、

「今、船は入泊中なので媽祖像菩薩揚げの祭りは行ないませんが、入港出航時の媽祖像の往還行列は大変なものです。媽祖像に傘を翳し燈篭や旗を掲げてチャラメラを伴奏し、金鼓や銅鑼を鳴らして九連環を歌い、踊り乍ら賑やかに波戸場と寺院間を練り歩き、寺内では多くの僧侶の読経と参列唐人達の焼香が行なわれ、夜は山門始め寺内の全ての燈篭は明か明かと火を点し、埠頭の繋留船の帆檣や帆網まで透き間も無く釣り下げた燈篭の赤い灯火が海面に映じて美しく、其の時刻には寺院や唐人屋敷では日本の知人も招かれて卓袱料理の宴が楽しく行われます。」

と和やかに説明した。近藤重蔵岡元文右衛門は寺内一巡後客室に招かれて普茶料理を頂戴した後で、役僧の保渡山宗が、新来の奉行所役人の近藤重蔵が、多少漢文の心得ありと見てか、菩薩揚げの九連歌の歌詞を墨書して呉れた。

カンカンイ　スウヌ　テ　キウレンクワン　キウヤキウレンクワン
看看兮。賜奴的九連環。九呀九連環

サンシウナ　ライキャイプキャイ　ナ　ハ　タ　ウル　カ
隻手拿来解不開。拿把刀児割。

カプ　トウンリャウエ　エ　ユウ　エ　ユウ
割不断了。也々吻　也吻

と歌い上げて、

「見よ見よ　われに賜いし九連還を　九つ九つ連なる鎖の輪
もろ手かけても解きほどかれぬ　小刀で切っても割きかねる
えい　なんとしょう」

と微笑み乍ら訳して呉れた。

崇福寺を辞して未だ日が高いので興福寺に寄って行こうと岡元文右衛門が先に立った。

崇福寺から僅かの距離であるが寺ばかり続く寺町通り

を東に行った風頭山麓に在る興福寺も南京船で来る、江蘇省、浙江省出身の人々が元和六年（一六二〇）に建てたので南京寺と呼ばれていた。此れも明の僧真円を開基とし、後住持の逸然性融の懇請によって明の古黄檗より来た隠元が最初に入った寺である。

境内には正保四年（一六四七）建立の中島聖廟もあって江戸の湯島と、筑紫の多久の聖堂と共に日本三大聖廟として儒者に知れているが、湯島の聖堂は天明六年の湯島の出火の江戸大火で消失して、寛政四年の再建なので此の中島の聖廟が日本最古であろうと、近藤重蔵は古びた聖廟の前に立って湯島聖廟を見る思いであった。

興福寺の帰途、中島川に架る眼鏡橋を渡った。其の名の通り満水時の水面に石橋の影が眼鏡のように映じて美しい、

「興福寺の黙子如定と言う明僧が設計して寛永十一年（一六三四）に貿易商の末次一族の工事請負によって造った唐風石橋で、平戸の鏡川に架る同じ型の一眼の石橋は、オランダ橋と言われているが、それは平戸のオランダ商館を建てた石工がオランダ式に作ったもので、元禄十五年（一七〇二）であるからずっと新しい」

と平戸にも勤務したことのある岡元文右衛門が言った。

「さて、此れより乾の方にも唐寺が多いが立山役所からの往環にでも詣でられよ」

と言って其の概要を歩き乍ら説明した。

「儒学者の近藤殿は寺院は余り興味は無さそうじゃが長崎の唐寺や、今の清国の仏教は遣唐使の時代空海や最澄、道元などが学んで来た仏教とは全く違っているそうじゃ、今は清国、その前は明国であるが、日本人は何度王朝が変っても唐国（カラクニ）と言い、唐人さん、唐寺、唐船と言っているが、それ程日本には唐の文物がよく合っている。

長崎奉行の唐通詞ですら新しい清国の言葉や文書は分からないと時々漏している。勿も日本側の通詞は先祖代々家を継ぐ者が、古い言葉を守っているからじゃ。

仏教なども今の日本の坊さんが朝夕勤行でやっているお経は、古い唐時代よりの経典で長崎の唐寺の坊さんのお経は日本の坊さんには何んだかサッパリ分らないそうじゃ、寧ろ、宋時代の仏教を伝承している朝鮮の仏教の方が分り易すいと朝鮮通信使節を対応した日本通詞が言っていた」

多弁磊落であるが長崎在任が長い岡元文右衛門は仲々の博識である、と近藤重蔵はその人格に魅力を感じた。

岡元文右衛門のみで無く、長崎の民衆までもが自然に学問知識を身につけるのであろうかとも思った。

「そうした他国の変りざまを見ておかれるが良かろう、それ、聖福寺、福済寺の大屋根が見える、福済寺は漳州寺とも言われるように福建省の泉州からの渡来人によって建てられた寺で、門前の阿吽の唐獅子石塚が見事じゃ、

聖福寺は、広東地方出身者が建てた広東寺で、美しい瓦塀の石段を登ると見事な山門がある。聖福寺も福済寺にも境内裏に唐人墓地がある、故郷の地に帰らず異国の地に眠る霊を慰める為に、唐人達は寺ごとに年三回、三月二三日、七月二三日、九月二三日に同じ出身地の者達で供養に詣でる。亦、七月二六から二八日の盆供養は唐寺のみか全国の盆祭であるので特に盛大に行ない、九月二三日は媽祖勝会と重ね、正月十五日の上元の祭日、関羽を祭る関帝祭など年中行事が多いのは、日頃唐人屋敷に閉じ込められている唐人達が、祭日には垣の外へ出て寺詣りや墓参に行き、祭礼には唐人行列で、チャルメラ、金鼓、鐘、太鼓を叩き切り旗や飾り傘を立てて賑やかに街を練り歩くことが出来るのじゃ。

更に十月七日より九日の諏訪神社の祭礼には唐人達も傘鉾を先頭に立て笛太鼓で唐人踊り蛇踊りを奉納して長崎町人と共に楽しむ。

町人達も寺詣りや祖先祭祀の念の厚い唐人には親愛を示して阿茶さんと読んで親しみ、相互に祭礼には招待して交流を深めている。狭苦しい日本の中で長崎は日本人唐人、蘭人も共に天下泰平を楽しむ最も華やかな都じゃ」

と岡元文右衛門は胸を反らせて力強く言った。

（五）

古来より日本と交わり来た異国の中で、唐人との関係は最も深く、遣隋使、遣唐使の昔より長い間の国交通商があった。

舒明天皇代（五九三～六四一）以降の遣唐使船は、対島より朝鮮沿岸を経て山東に至る北方航路と、平戸より五島列島を経て東支那海を横断して蘇州、明州に達する南方航路であった。

遣唐使廃止後の八幡船や和寇も平戸を根拠地とし、室町幕府の勘合船貿易も平戸からであった。

長崎は戦国末期よりポルトガル船による貿易があり、天正十年の遣欧少年使節も長崎から旅立った。鎖国前の朱印船の三百五十六隻は殆ど長崎発着であった。キリシタン禁教、ポルトガル貿易の断絶後オランダ商館が長崎に移つり、異国貿易は長崎に限られ唐船も長崎に限定された。

だが、鎖国政策の徹底後も唐人は長崎市中に自由に住居し、唐人船乗組員や華橋も雑居して盛時には唐人は一万近くに達した。

入港唐船の乗組員の宿泊や積荷の上げ降し等の貿易業務の仕切り等も、長崎内の町分担と同じように唐人請負も出るようになり、日本と唐国との銀、銅等の価格の違いから唐貿易の益差が大きく、日本よりの銀、銅の流出が激しくなり、貞享二念（一六八五）より度々貿易額を制限したが、其の為に密貿易が頻発して鎖国の国是が侵され、キリシタン取締りの上からも唐人の市内自由住居

は禁止すべしと、十善郷の御薬園を移した九千坪の敷地に、出島のオランダ商館と同じように唐人屋敷を建て、西南は海、三方を濠と塀で囲んで厳重に出入を見張る番所を設け、準備が出来た元禄二年（一六八九）長崎市内住居の唐人五千人を移して、貿易商人船員に至るまで収容した。

それでも当初より寛延の頃までは大門を入って唐人住の第二門迄の間に、左手側に特許商人の出店が輸出品の俵物、銅器、蒔絵、伊万里物などの見本を並べ、唐人の日用品、野菜、魚や薪などを売る出店もあって、唐人屋敷内の唐人の便をはかり、外交、貿易の用件で長崎会所に行く場合は、右手側にある唐人番控えの建物に行き係役人に願い出て門鑑を受け、大門の内側と外側の番所の検札を受けて外に出た。

唐人番控えの建物には、唐人屋敷乙名を頭とする組頭唐通詞、書記役などの唐方役人が詰め、門番、杖突、辻番などの日夜交替の番役の居室もあった。

唐船より陸揚げされた貿易品は屋敷外の荷蔵に運ばれ長崎奉行の監督下で長崎会所の貿易取扱に従って取引される。

第二の門からは唐人住居で一番より二十番まで立ち並び、一棟五十部屋程あり階上の部屋は、貿易船主や会計書記係等の役人や、唐人商等が住み、階下には下級船員水夫、工人、唐商人等が入っていた。住人達はそれぞれ好みに従って出窓や露台をつけ、唐人頭や船長、高級船員等は別に平屋を建てて豪華な部屋に住んでいた。

要所要所に溜池や井戸もあった〝屋敷の中央には土神堂、関帝堂、観音堂、媽祖を祭る天后堂もあった。

処が天明四年（一七八四）の大火で全焼し、一部の石造り商館や少数の赤煉瓦の家屋と観音堂が残った。

其の後、唐や日本の貿易商、在留華僑等の出資と努力によって大方復興されたが、大門より第二門迄の特許商人の出店等は除かれ、却って唐人商館、唐人通詞、番役人の建物が多くなり、表大門、第二門、四隅の見張番所等の監視が一層厳しくなった。

唐人屋敷よりの外出は従前通りの厳しさで一々番所で鑑札を見せて許可された者のみの出入であるが、特に寺詣り、祭礼時の集団外出等は多くなり、前よりは伸びやかになった。

町方商人の出入は特に許された者のみであるが、丸山の遊女は特別に日を決めて入門した。此れは出島のオランダ商館も同様であった。

長崎の遊女達は始めは波止場や江戸町等に散在していたが、寛永十九年（一六四二）に他の城下町や宿場女郎のように二十数町の町外に、丸山、寄合の二町区を作って遊女達を集め、次第に繁昌して江戸吉原、京の島原と並ぶ花街となり、近藤重蔵が長崎に出向した寛政の頃には長崎の人口三万、遊女千五百となり妓楼も百軒余に及

んだ。

遊女の中にはどうしても異国の人には膚を穢されたくないと固く拒む者もいるし、唐人さんならば何日でも良いと言う者もいるので、遊女は日本行、唐人行、阿蘭陀行と分けられていた。特に丸山町の遊女が唐人に好まれた故か、丸山の遊女が長崎遊女の通り名となった。

出島や唐人屋敷に泊りに行く日には、それぞれ仲宿に集って揃って仲居に連れて行かれる、始めは一晩だけであったが、寛政の頃は五泊までを一応の区切としていた。

揚代は一泊銀八匁（八百文）で遊女が唐人屋敷の第二門に入る時に仲居に番所の周旋人より渡される。

一泊銀八匁（八百文）は当時大工の手間二百五十文、そば十六文、飯代二十文の時代では仲々の高値であるが、江戸吉原で一夜二朱（五百文）千住や板橋で四百文、市井の売女で百文と比べて相応な値であろう。勿論揚代全部が遊女のものにならない、多くは年期、身の代金等の返済に取られて仕舞う。だが遊女は揚代よりも唐人から直接貰う心付けの方が自分の身入りとなるので喜んだ。

遊女は番所で番役人に一々監札をみせて一人一人衣装から髪飾りまで検査されるので、自分では着飾って行かないが、遊女の身の廻りを世話する禿を供にする事は許されているので、居続ける場合は禿を通して着替とか、必要品等を町に買いに行かせる小銭が必要で、唐人よりの心付が嬉しいのであった。

禿も、遊女の日常の世話や掃除洗濯などの外に、唐人の走り使いも果して唐人より過分の手当を貰う、唐人は一泊銀八匁の揚代の外に遊女の寝巻や絹織物、帯や髪飾りまで買い与え、時には香炉や名香等の珍貴な品々をも与えた。

異国船には女性は乗って来ない、稀にオランダ船に船長や船医の夫人が同伴して来ることがあっても上陸は禁止されているので、出島のオランダ商館も唐人屋敷も男ばかりで、日を決めて来る遊女は非常に喜ばれ、男尊女卑の観念の無い外人は特に遊女を恋人か妻の如くに大切に扱い、唐人は其れ以上に女主人に仕える召使いのように遊女を大事にして、唐人屋敷の衣食の贅を尽して時には唐人仲間と一緒の宴を催けて豪奢な遊びをして楽しんだ。従って始めは怖れていた遊女も、歓待されて次第に情を通じ、深く馴染んで夫婦のように唐人に尽すようになり、定められている五日間では名残り惜しくて、一旦外に出て、仲居に唐人から貰った心付や贈物を渡し、直ぐ戻って居続けるようになるのであった。

中には、馴染んだ異人の船が国に帰る迄居続ける遊女も居て、唐人やオランダ人よりさまざまの知識を吸収したり、変った遊びの藤八拳とか、胡弓、月琴などを弾いたりするようになって、名の知られた太夫とか花魁とか称されるようになる遊女もいた。

元禄の頃、長崎に唐話を学びに留学した雨森芳洲も、

丸山遊郭の贅を平田仁兄に呈する消息文に残している、長崎の丸山を

「夫レ崎陽烟火ノ街、妖艶ニ夸(オゴ)リ、妍義ヲ負ハシムル者数百ヲ下ラズ」として、名妓を形容して

「重ネテ整フルノ粧、麗ヲ添ヘ、花ヲ羞カシメ、月ヲ閉チ魚ヲ沈テ雁ヲ落ス所以」

と豪華絢爛さを伝えている。

近藤重蔵は奉行中川飛騨守より三ケ月程先に長崎に着任しているので、奉行が各方面への臨検や訪問、饗宴には案内役として付き従ったが、丸山遊郭には秘かに岡元文右衛門が馴染みの引田屋にお忍びで案内し、茶屋花月で数名の名妓を揚げ、幇間踊りや端歌等に興じ、和漢洋折衷の春雨の間で一刻を過したが、他を憚りて近藤重蔵には知らせなかった。

続く

（合評会の評に鑑みて表題を改め、新たに第一章を起し、前述の章は序とし、近藤富蔵の生涯（一）よりの書き出しより（十八）迄は、後に続くものとする）

編集室のメモ

◆第五十一号である。第五十記念年号の峠を越えて、また新たな第一歩を歩みはじめる。

◆編集子は交替するはずであったが、社内事情があって、さしあたり、（お）の続投を余儀なくされた。雑誌を存続する以上、刊行のサイクルは絶対守られなければならないからである。

◆佐々木一郎の病状快方に向かうとともに再登場ということがあり、さらに金子正義のひたむきな執筆とに支えられ、本号は刊行の無事を得た。特筆しておきたい。

◆金子作品は改題して連載第一回となっているが、作者の構想としては、これまでの「近藤富蔵の生涯」と一体のものとして変わりがなく、これまでで全体の1/3を書き進め得たという、構想雄大な作者の述懐があるのでお伝えしておきたい。

◆郵便料金の値上げは小誌にとって、さしあたり書籍小包料金の据え置きにかかわらず、一冊のページ数によってはかなりダメージをうけ、経営上の問題になろう。

◆三戸岡道夫の「江戸妖草伝」が刊行された。内容中の四編は書き下ろしだが、新たな時代小説分野をひらくエンターテイメントの旗手の華やかな登場として、拍手をもって迎えられるに値する出来栄えの一冊である。（お）

「まんじ」　第五十一号

平成六年二月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎〇三（三二六一）一六一〇

目　次

病葉の青春譜への返歌 …… 井上二三男 1
詩　もう久しい　ほか …… 青木昭成 8
芭蕉のこと（二）一句「ひねる」 …… 青木昭成 11
漢詩　潮哳録（一） …… 鯨遊海 21
カラオケ …… 柴田富佐子 23
侍マラソン始末 …… 大和禎人 27
【連　載】
前橋公園殺人事件（五）完 …… 佐々木一郎 45
幻妖城異聞（一） …… 三戸岡道夫 62
近藤重蔵・富蔵の生涯と
その時代（二） …… 金子正義 80
編集子のメモ …… 91

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



病葉の青春譜への返歌

井　上　二三男

二月に入ってもおだやかな日が続く冬であった。

尚子は、聞き慣れない洋画グループの展覧会の案内状を受け取った。数通の郵便物の中にあったそのはがきの末尾に連絡先として印刷された氏名が尚子の四十数年のフィルムを巻き戻した。そして、若かったときの青い郷愁が滲み出てきた。

はがきには須田が当番として会場にいる日が記されていたが、その日は、嘱託として中学校の授業があり、行けない。そのことを謝っておこう、そう考えて、尚子は連絡先と記された須田の家の電話番号を押した。ボタンを押す指先に長い空白のためらいがあった。

「折原です。……折原、尚子です」

受話器の奥の声はすぐには解しかねたのであろうか、一瞬の間をおいて驚きの声を上げた。

「えっ、折原、尚子さん」

電話での須田の声は、若く聞こえた。

須田の声を聞いて尚子は須田の絵を見てみたいと思った。

その日は、須田の当番日ではなかったが、尚子は須田の所属する洋画グループの展覧会場へ誘われ、車で迎えに出た須田と四十余年を経て再会した。

須田の絵は、習作の域を出ないもののように思えたが、明るかった。ときには新聞紙上で、県の仕事や人事消息に、須田が役人として県史に残るような仕事を手がけていることを遠くのこととして見ていた尚子は、須田は今は余生を多才に生きて何の翳りもないのだと思った。展覧会の帰り、車の中で須田は尚子に薄い同人誌を手渡した。ページを開くと須田の『病葉の青春譜』という作品が眼についた。四十余年前の尚子と須田を結びつけたのは文学であった。そして、この作品は、尚子と須田の交

際を主題にしている。ページを飛ばして文字を拾う尚子の眼に、かつての須田が口にしたことがない尚子への想いが文字になって映った。その瞬間、四十余年の時間は消えた。

「あとで、ゆっくり読ませていただく」

ページを閉じ、瞼をふせた尚子の眼から涙が溢れた。

……

尚子の知る須田は都会的で華奢な、病的な文学青年であったのに『病葉の青春譜』の尚子の知らない頃の須田は、どこにこんな逞しさがあったのか、行動的で、尚子を驚かせた。

尚子は、二人のことを書いた部分よりも、尚子が知らなかった部分を繰り返し読んだ。「古い記憶は、明確な焦点を有する部分がありながら、周辺は朦朧となってしまっている。」と須田が書いているので、尚子の知らない須田の生活の記憶も覚束ないものがあるのかも知れないが、そこには、尚子には一分の曖昧さも感じられない確かな須田が息づいていた。

それに比べて二人のことを書いた部分は、ほとんど尚子の忘れていたことばかりで、同じ時間を共有し、同じ行動をとりながら記憶に残ることの大きな違いを感じた。これは須田の創作だから記憶の曖昧さだけでなく、フィクションの部分もあるだろうと尚子は思った。

須田とどんな出合いをしたのか記憶にないから、須田の記憶を共通のものにしよう。須田の友人で、尚子の同僚であった羽田に尚子が須田への手紙を託したということに……。

しかし、出合った年にははっきりと二年のずれがあった。須田は尚子と知り合ったのは昭和二十三年の秋としているが、尚子は、二十四年の四月、村の中学校に赴任し、わずか一年で小学校へ転任している。須田と知り合ったのはそれ以降だから二十五年の秋である。

尚子がたった一年で小学校へ転任した理由は二つあった。

一つは、二十歳を越えたばかりの未熟な尚子には自分よりいくつも年の離れていない中学生が手に負えなかったからである。

発足して間もない中学校の音楽室には、古びたピアノがあるだけで、机も椅子もなかった。立たせたり、座らせたり、歌わせたり、授業は中学生のお守りであった。冗談一つ言えない新米の尚子を生徒たちは遠慮会釈なくからかった。

「先生、こんなつまらない歌やめて流行歌にしようよ」

尚子が必死で『峠の我が家』を弾いても、『埴生の宿』を弾いても生徒たちは歌いはじめた。

「だれにあげよかくちびるを……」

尚子は頭を抱えるばかりだった。

大人になった生徒たちが言った。

「先生、ピアノの陰でよく泣いてたよねえ。ぼく達わるだったなあ」

もう一つは、職員のだれ一人知らない者はいなかったSとの恋愛である。評判の立った二人を同じ職場に置くわけにはいかない、という当たり前の理由である。

この恋は、実らなかった。

須田は、その理由を「精神世界の不一致で、尚子が長い間考え悩んだ末の結論」と書いているが、、それは当たらない。尚子が捨てられたのである。

Sには以前から子供のいない叔父夫婦の養子にという話があった。国内有数の企業の役員と聞く叔父夫婦の養子になれば安定した生活が待っていた筈である。しかし、Sはそれを蹴って、尚子をとってくれた。二人は将来のために共通の通帳を作って天引貯金をはじめた。

子供の頃、公職で留守がちな父に代わって家を切り廻していた母が「この子は家のあるところになんか嫁にやって苦労させたくない」と、よく言っていた意味がやっとわかった。「ゼロ」から出発し、二人で協力して家庭を築いて行く素晴らしい未来に尚子は酔っていた。

Sがいつ、何故、心変わりしたのか、尚子には今もってわからない。尚子が小学校へ赴任した年にはまだSとの仲は続いていた。小学校へ移って、生き生きとしてきた尚子のことを喜んでくれていたのだ。急に冷たくなったSのことがわからなくて、尚子はSの友人の同僚を訪ねて聞いた。彼は、びっくりして言った。

「尚子さん聞いてないの？　Sの奴それは卑怯だ」

尚子はそこで初めてSが養子に行くことを知らされた。ショックは大きく、生きることがまったく無意味になった。

尚子とSとの仲が決定的な破局を迎えたのは、翌年度末、Sが中学校を退職して上京してしまったからである。

須田は、須田の存在が或いは一因ではと心配して尚子に聞いたとあるが、そんな筈はなかった。片方でひたむきにSを愛しながら、片方で須田と付き合うなどという芸当が当時の尚子にできたとは思えない。ただ、須田と知り合った始めの頃、尚子はまだSの姿を切り離すことができなかったのだ。

「尚子がピアノを弾く後姿は何か悲しさを振り切るための行に耐えているように思えた」という須田の観察の確かさに驚く。

支えを失った尚子は、ピアノに打ち込むことでようやく自分を支えていた。それは、須田がいうように虚脱の淵からはい上がるための行であった。無から出なおすつもりで、厳しさで定評のあるT先生にレッスンを受けるようになった。自分を支えるものは、自分の中に求めるべきだと考えたのである。

レッスンは厳しく、励みにもなったが、打ちのめされもした。さんざん叱られての帰り、当時流行していた「ダンスホール」の前を通るのはつらかった。若い男女が組んで幸福そうに踊っていた。尚子は、優しくレッスンしてくれた師範学校時代のKを思い出して涙ぐんだ。

尚子が在学していた頃の師範学校は、予科二年・本科三年の5年制で、教員養成学校の性格上必修だったピアノは本科になると音楽専攻生だけの必修となった。音楽と国語とどちらを専攻するか迷った末、国語を選んだ尚子だったが、ピアノだけは続けたいと思い、専攻生に負けないくらいよく練習していた。音楽室は専攻生専用なので、尚子は講堂や体育館のピアノを使った。

あるとき、講堂に入ってきたK教官は、

「君、音楽の専攻生じゃないね。それにしてはうまい。よく弾いていたのは君だったのか」

そう言って、尚子にレッスンしてくれた。

当時、Kは全校生徒の憧れだった。

廊下ですれ違うとKは片手をあげて、五指を動かし尚子に合図した。「ピアノを弾いているか」の合図である。尚子は笑ってうなずく。事情を知らない学友たちが「尚子とK先生どうなっているの」と訝しがった。Kは時折ひそかに尚子にレッスンしてくれていた。

そのKに、音楽学校の同級生だという洗練された服装の女性が訪れるようになった。住宅難だった当時、寄宿舎の一隅には何人かの教官も住んでいてKもその一人だった。Kを訪れるその人を目撃して尚子のKへの思慕は消えた。

厳しいレッスンに耐え、Sとの思い出を消し去るために尚子はピアノに向かった。

須田と話しながら歩いた県道は決して短い距離ではない。須田と会った回数も期間も決して短かったとは思えない。それなのに須田と交わした会話を尚子は一言も覚えていない。「さようなら」を言った覚えも聞いた覚えもないのに別々の人生を歩いてしまったことだけが確かなのだ。

ひょっとすると、須田と尚子が付き合っていた期間は、意外に短かったのかも知れない。何故なら、尚子の瞼に浮かぶ須田は、黒いズボンに白い半袖シャツという夏姿ばかりで、セーターを着た姿やコートを着た姿は想像もできない。尚子と初めて会ったのは秋というけれど本当は夏の頃からだったのではないだろうか。

会話は楽しかったと須田は言う。文学のことが主だったなんて尚子は恥ずかしい気がした。いいところばかり見せようとして無理して、知ったかぶりをしていたに違いないのだ。

子どもたちのことだったら今でもいっぱい覚えている。忘れられない子どもたちがいっぱいいる。尚子は須田を

共感させ、感動させるようなどんなことを話したのだろう。

「冬眠する動物たちは、秋の中にお腹いっぱい食べて穴のなかで眠って暮らすの」と言えば「へえ、お腹こわさないんかなあ」と不思議がった話だろうか。

「温泉というのは地面の中から温かいお湯が湧いてくるの」と言えば「きっと魔法使いが沸かしているんだ」と真顔で答えた話だろうか。

それとも、尚子がきれいに作った模型のモーターはコトリともしないのに、子どもがいとも簡単に作り上げた見てくれの悪いモーターはビューンと音をたてて回った話だったのだろうか。

子どもたちの生き生きとした天衣無縫の行動や眼を見張る資質の輝きに囲まれて中学校での挫折感から立直り、生気を取り戻した尚子は、さらに、Sを失った虚脱を子どもたちに打ち込むことに救われたのではないか。それを須田に語ることによって確実なものにしてきたのではなかったか。須田の眼がそうした尚子を見守るような深みを帯びていたことを思い起こす。

須田は、尚子が「白い花の咲く頃」をよく口ずさんだと書いているが、尚子の口ずさんだ歌は、大ヒットしたこの歌ではない。「草の径を行き、流れを越えて去った人の後ろ姿が忘れられない」という意味の歌で、須田と付き合いながら尚子はいつまでもSのことを引きずっていたのだと思う。

その後、再び中学校へ移った尚子が数多く手がけた合唱曲の中に忘れられない曲が二曲ある。Kから教えを受けたその曲を生徒に指導するときは、尚子は少女になっていた。

野ばらの道を過ぎゆかば
師の家ありとわれおもう
野ばらの道を過ぎゆきて
赤き薔薇の見ゆる辺へに
われはいくたび通いけん
訪わでいくたび帰りけん
いつも日暮の帰り路に
しゃがはさびしき花なりき
Kがどこに住んでいるのか今は調べる手段もない。

その人は言いました
わたしにあの時言いました
花はどれも美しい
不思議だねと言いました
その人は言いました
浜辺に座って言いました
波はいつも変わらない

不思議だねと言いました
その人がいたならば
青空見上げて言うでしょう
空は何故に美しい
不思議だねと言うでしょう
その人の言葉わかってきました
この世界の美しさ
この世界の大きさ
そんなことを言ったのでしょう
この胸に何かを優しく育てて
今では遠くになった人です

Kの面影に、自分の人生を宇宙の痕跡に譬える須田がオーバーラップする。須田に会って、せめて主旋律だけでも歌ってみたいと尚子は思った。

須田が尚子の家を訪ねたという夜のことは、そういうことがあったかもしれないというほどに定かでない。しかし、尚子が太宰治について書いた『斜陽の問題』を須田が装丁してくれたブルーの表紙の冊子は、長く尚子の手元にあった。

また、器用で細工をよくした須田は、尚子に蔵書印を彫ってくれたことがある。二・五センチ角のその印には枠の内の上部にEXLIBRISと彫られ、地面を示す二本の横線から双葉が芽生え、その下部にNAOKOと彫りだされていた。尚子は、本や冊子にその印を押しまくった。

『斜陽の問題』も蔵書印も今はどこにあるのか、しまい忘れられている。

尚子は灰色の服地を使って、須田のためにペンケースを兼ねた小物入れを縫ったことがある。

「わたし、こんなものしか作れないの」

小さなチャックをつけたその小物入れに、須田は手帳と万年筆と印鑑を入れて持ち歩いていた。

須田が「病葉の青春」の挽歌の譜とする尚子との高崎行は、やはり尚子の記憶から遠くなっている。しかし、それは須田の夢の中のことではなく現実のことだったのだ。高崎にある尚子の師範学校時代の友人の家のたたずまいは、須田が書いているとおりである。友人の父は村上鬼城を師とし、中庭には句碑があった。何故、須田が一緒であったのか尚子にも思い当たるものがない。親友の家に異性を伴うということは、須田の存在そのことを尚子が肯定していたということであろう。そして、同行者に過ぎなかった須田のその家の描写の確かさに驚く。

Sとの別れは「さようなら」を言われなくても理由がわかる気がする。

須田が去って行ったことは自分に原因があるのだと長い間思い続けてきた尚子は『病葉の青春譜』の中の須田をにわかには信じられない。尚子にとって須田は何だったのだろう。今風にマスコミの造語を借りて言えば「友達以上、恋人以前」ということだったのだろうか。そんなことである筈はない。四十余年の歳月の中で尚子の須田に対する思いは風化されて崩れさっているのだろうか。いや、いや、そんなことの筈もない。

須田に対する尚子の思いは言葉を超えている。

「この人によってわが子を得たいという願いが心を掠めることがあった」なんて、嘘！そんな他人事みたいな言い方をしないで、それをいうなら「尚子を抱きたかった」と言って！尚子は須田がそこにいるかのように抗議した。

夜の帳の中にいて須田は尚子に指一本触れなかった。愛は狂気で、出たらめで、悲しくてもいいのに。「須田さんきらい。お説教ばかりするのね」と尚子が言っているのだ。

須田はもう、尚子を含めた「病葉の青春」を自分史の中の記念碑のようにしか考えていないと尚子は思った。

激しい喪失感が尚子を襲った。

「須田さんきらい」

尚子の叫びは声にならなかった。

（九四・三・一〇）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出があり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、別に月報「まんじだより」をお届けし合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ、交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　東京二一九〇八一五

加入者名　作家群編集部

もう久しい　ほか

青木昭成



もう久しい

（一）

どこの通りでも街路樹がすっくと立ち
人の匂いが　すっかり消されてしまうともう朝
雀たちが騒がしくついばむのは時刻　街は
うろつく犬の頭のうえの　霧をはがし灯をおとす
すずかけの幹の死角からタクシーが一台
昨夜の方角にむかってあわてて発進する
ひとしれず夜を寝そびれたのか　誰かが
問いのない答えのように　これから眠りこけるのか
石畳のうえのタバコの吸殻はひしゃげて
湿った車のドアーの音の　痕跡をのこしている

（二）

もうずっと　夜明けはこうして人の目にふれる
日の出まえのバス停からゆっくり現れて
わかい男が売店のスタンドの朝刊を
一瞥してから急に足ばやになる　そんなことまで
誰かが記憶するのか　アスファルトが剝がされて
花崗岩がぎっしり敷きつめられて　もう久しい
ストローをミルクパックにつきたてそのうえを
持ちあるく人の胸のおくの消化器官が
日々退化し　日々巧みになって　もう久しい

（三）

それはあたりまえな日ごとの感覚　人びとは笑わず
定刻に蜘蛛の子を散らすようにいっせいに
地下駅から飛びだして訳ありげで忙しい
あの口髭は彼　だから　あのパンプスは彼女
と確信ある身ぶりで諤きあいながら忙しい
手をあげて会話をさえぎり　人びとは分かれる

公園のふるい時計が長針をひとこま揺する

（四）

正午になれば陽ざしが男と女の髪を匂わせる
わらい声が　はなし声より大きいベンチで
弁当の「ちくわ」が事務服の裾から一つころがる
「芝生に立ち入るべからず」と木の立札が
土をつけて薄れてやっと読み取れるのは
ひくい柵を踏みこえて人が　ゆめみる証拠だ

（五）

あせばむ日和のビルかげの遊歩道で
ボール投げがはじまるのも皮肉　その場所が
かっては校庭であったと誰も思いおよばず
はなみずきの梢の　秋には剪定される運命の
やや茂りすぎた先端がおもいなしかまた伸びる
セルスマンが車の助手席からいま降りたって
スーツケースを街灯の柱に思わず打ちあてて
午後は時報が耳にとどかないまま　もう始まっている
風がでると　連立つのは人びとの心のうち
午後は電話ボックスの中で音をけして過ぎてゆく

（六）

まち角をまがるとき人は人の視線を気にする
廊下でゆきあうとき人は人の背後に気をつかう
机の隅のプリンターの袖から打ちだされ　つぎつぎ
血液検査の数値が折りたたまれるともう四時
誰もが　小言をいうことに飽き飽きしている
掌のなかの湯のみの煎茶は　いつ入れたものか
壁の世界地図の煤けたいろによく似ている
あの子午線のあたりでは昨日　海の事故があった

（七）

陽がしずむと　茜いろが街の空を駆けめぐる
博物館の裏手ではカラスがねぐらで騒ぎたてる
それは風のように流れて　匂って　風ではない
それは光のように走って　切れて　光ではない
サンドストーンの建物の壁　坂道の水銀灯
住居表示の文字板はくらく　ベイ・ブリッヂは明るい
こんなとき人は居ない者の名前を呼びたくなる
牙がないのに月に向かって吠えてみたくなる
眼に見えないものが見えた気がして　電話のベルが
耳のおくの闇のなかで鳴った気がする

ロングラン

ふるい事実を思いかさねて
事実は詩にならないと考えなおす
けれど時勢は食べることにさえ
ことかく窮乏のただなかにあった
その枕元へつぎづぎとどいた薬剤
送り主の　Oよ　Kよ
それは私のなかでいまも
ロングランする一編のドラマだ

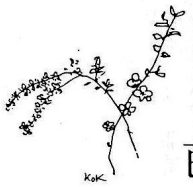
それは宿痾と呼ぶしかない病気
青春は萎えかけていた　そこから
ある日こつぜんと甦えるなんて
あの薬が届けられたのは単なる幸運か
それともなにかの因縁のせいか
いやいや私は君たちから
まったく別の命を貰ってしまった

そしてパス　そしてストレプトマイシン
そしてティビオン　そしてヒトラジット
なんと古典的な新薬ではないか　今は
よくもまあと苦笑してみせる余裕もある
けれど己の過去を微笑んでみるなんて
誰にもできはしない　それに私は
もう何倍の年月を生きながらえたのか

その送り主のKよ　ひにくにも君は
告知されない病気の質を知っていて
さりげない調子で電話口にでてきた
「元気かな　それならいい」と
思えば妙にそっけない会話だった
あくる日　入院してしまうなんて
なんと鈍感な奴なんだ　私は

古い友だちには病気を知らせまい
古い友だちには衰弱を見せまい
そういう人間だ　君は
最期の思いやりとプライドと
そのかけがえのない誠実にはばまれて
Oも　私も　とうとう会えず仕舞い
主役一人が欠けたこのドラマを
私はいつまで続演すればいいのだ

芭蕉のこと



青木昭成

（二）一句「ひねる」

ある紙上で、詩人大岡信が、「折々のうた」と表題して、日々、詩歌の寸評をここみられている。

白魚は仮名ちるごとく煮えにけり　（阿波野青畝）

氏は、この「西湖」所収の句を採りあげるのに、

白魚の小さき顔をもてりけり　（原　石　鼎）
白魚を煮る酒の香や細雪　（水原秋桜子）

の二句を引例して、「白魚には多くの佳作がある。」としながら、「しかし青畝のこの句は格別な味のする秀句だ。」と説かれる。

また、「〈仮名ちるごとく〉とはよくもいいとめたもの。」とも評し、「曲線の多い仮名文字が、まさにばらまかれたように散っていて、それが白魚である。言われて見ればその通り。だが、言われるまでは誰もそう見なかった。」と率直に結んでおられる。

この断章には、その短さから、まったき鑑賞やまった き評釈を、汲みとらせようとの意図はないだろう。詩人もまた、この企画が、限られた紙面のもとでは、舌たらずになることが避けられないのを承知していて、極めて暗示的に言葉をおわらせる。

けれども私は何気なく、ふと期待する。これらの言葉は、句作の秘密にいたる何か、俳句の源をさぐる何かを、言外にしていてはくれないか。

この日の寸評にかぎらず、このシリーズでは、さすがに詩人らしい解釈をされるものだ、としばしば感心させられる。そう付けくわえてしまうのは私の勝手な付会だが、氏がおのれの感覚で捉えたものを、おのれの言葉で

書き留められているのに接するとき、その奥にある感動を、私もおなじ位置に並んで享受してみたいものと、おこがましくも考えるのである。

すでに私は、芭蕉の発句の「白し」にかかわって、

藻にすだく白魚やとらば消えぬべし（延宝九年・春）
曙や白魚白きこと一寸（貞享元年・冬）
鮎の子の白魚送る別れかな（元禄二年・春）
白魚や黒き目をあく法の網（元禄五年・春）

を芭蕉の一連の発句のなかから挙げている。

後の二句はともかく、前の二句は、芭蕉のおかれた時代との隔たりを意識させない、まさしく、「言われて見ればその通り、だが、言われるまでは誰もそう見なかった」の類にはいる「白魚」を主題の発句である。

現代人のわるい癖で、そのあまりにも透明な詩的直観に出あうと、他にもっと何か隠された意味がないかと、探してみたくなる。しかし、ここにあるのは実にあざやかな、芭蕉の「白魚」のみである。

表現するとは、こうした無双の、較べられたことのない感覚を、眼前にとりだしてみせる「行為」を言うのであろうか。

それは、なるほど即物的ではある。が、決して即興的ではない。それを指摘できるほど軽いものではない。ひらめきや直観は、すぐれた作品の創造には欠かせない要素の一つかもしれない。ただ、一般的には、即興がそのまま完璧であることが、稀なのも事実である。俳句はまさしく十七字、極小の詩歌ゆえに、これに即興を載せ、詩想を盛り込むとしたら、叙述はとうぜん省略を余儀なくされる。そのうえで、その詩美は、矛盾や破綻を見せることなく完結していなくてはならない。俳句が暗黙のうちに、季や切字を必須の手法としてとりこみ、文語をもちい、「て、に、を、は」を大切なキー・ポイントとしてきた歴史、また比喩や象徴をともなう所以が、おもわれるのである。

それは句作の苦悩、そこのところを大岡信は、〈「仮名ちるごとく」とはよくも言いとめたもの。〉と指摘する。

「よくも言いとめたもの」とは面白い言いまわしである。もっとも、土芳の（三冊子）あたりには、この「留め」という言葉はよく出てくる。例えば、

「又句作りに、師の詞有。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいいとむべし。」（あかそうし）
「師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて不叶、物を見て取所を心に留メて不消、書写して静に句すべし。」（くろそうし）

と言うようにである。ならば句評では、あるいは常套の語句であろうか。だが、もうすこし卑近な表現を借りれば、詩人は「言い得て妙である」と書き留めたかもしれない。もっとも、この言いまわしは、あまりにも人口に膾炙しすぎて、氏の趣意には添いにくいものと推理すべきであろうが。

しかし、勝手に先へすすめさせてもらえば、「いいえて妙」は、「いいおおせて妙」でもある。つまり、言うことが叶っていて満足である状態を指すばかりでなく、事象を一言で言いあらわして過不足がないとの同感の念と、その巧緻への驚愕の心がこめられている。「言いとめる」とはそういう境地を指すのではないだろうか。

もっとも、単に「いいおおせる」ことと「妙」であることの二つを揃えていると言うならば、身近にある「標語」さえ、該当しよう。近年では、絶えまなく耳目にとどく宣伝「コピー」の喧騒がある。いや、様式を俳句とまったく同じくする「川柳」もある。

ただし、それらから、私たちが受けとり得るのは、あくまでも比喩や説得であり、ときには単なる駄洒落やくすぐり、また屁理屈である。決して心が波立つような「感動」とは言いがたい。この差異はなにか。それはただ一点、そのものが、私たちの感性と共鳴しあい、ひびきあえるクリエーティブな作品ではないことだ。

私の内部に感動をあたえてくれるもの、それが私には詩であって、同時に、詩は私のなかにあたらしく生まれた一つの世界、一つの秩序である。それを美しいと感ずるのは私の美意識でありモラルである。そして、詩人は言いとめる。言いかえれば、「言葉」によって、詩人は一つのあたらしい世界を構築してみせる。もう言いふるされてしまったが、現代詩の詩人たちはこれを、心象と呼ぶ。詩作品が言葉を素材としてなりたっている小宇宙のような存在であることを、自覚しなければならない瞬間でもある。

こう考えることで、初めて私のなかで、俳句には「ひねる」が適切であるとの、先人の言葉が納得される。俳句を作るという行為が、「ひねる」と言う積極的な作業に置き換えられる。その作業は、作法を離れることはできない、定型を踏みはずすこともならない。俳句革新をこころざす向きの意にはそわないだろうが、そのことが、俳句を俳句たらしめている根源であり、真実であるからだ、とも考える。

「その辨皆理屈なり」

芭蕉ならは、ここで一言、そう声をかけるにちがいない。だが、もうすこし勝手を言わせてもらおう。

日本の短詩型のなかで、短歌つまり和歌は「みそひともじ」、それはまさに「三十一文字」と呼ぶのにふさわしい叙情の詩型である。だが、俳句は「十七文字」と数えるよりも、むしろ「十七音」と言ってしまったほうが、

その本質にぴったりくる。

俳句では、一字・一音が決定的にその詩としての性格を方向づける。ことに助詞や助動詞のはたす役割は、受け取る側の感覚に予想外の変化をひきおこす。それは、あたかも音楽における転調のような作用である。メロディーのなかの一つの音の音程の跳躍（異動）が、長調から短調へ、短調から長調へと、その曲のなかの調性を変幻させてしまうのに似ている。

さらに短歌は叙情詩として、「詠む」とか「うたう」が、その創作活動のありようを言い表すのにふさわしい語彙だと説明できる。そうした意味では、同じ叙情詩でも俳句には「ひねる」しかない。俳句は「詠む」ではおもすぎる。俳句は「うたう」ではみやびすぎる。「作る」にはニュアンスがない。やはり「ひねり」が入って、言いおおせて妙である。

俳句を「ひねる」とは、語彙をただ「ねじまわす」ことではない。ましてや「やっつける」ことではない。「考えをめぐらす」ことや「くふうする」ことを含めて、作句の原点にたち返って考えてみる必要があろう。俳句はあくまでも俳句的方法によって俳句であり、それ意外のものではない理由を、芭蕉の発句にたち返って尋ねてみたいとも考える。

ここに、一九八九年発行の一冊の対談集がある。題して「芭蕉を読む」。国文学者遠藤嘉基の編になるこの書物の発行年代を、ことさらに明示した理由は、対談の行われたのが昭和一九年（一九四四年）の秋、この年代を心にとめて話をすすめたいと願うからで、その事実は同博士によって実証されている。しかも、座談集会の中心は、俳諧研究の泰斗である穎原退蔵博士、かこむ面々は京都在住の国語・国文・中国・ドイツ文学の、当時はまだわかい学者たち、それに吉井勇・湯川秀樹をくわえた方々である。この一冊に採り上げられた対談の対象は、つぎの三つの蕉句、

菊の香や奈良には古き仏達　（元禄七年　笈日記他）
草臥て宿かる頃や藤の花　（元禄元年　猿蓑　他）
白露をこほさぬ萩のうねり哉（元禄五・六年翁草他）

一見して、いずれにも共通する事項が、三点ある。

（一）　芭蕉晩年の元禄年間の作であること。
（二）　出典により大きな異同があること。
（三）　句のイメージが絵画的であること。

対談が、この三点のそれぞれについて、示唆しているわけではない。その考証は、専門家の集まりであるだけに、充分ゆきとどいたものであって、芭蕉的方法をさまざまな方向から眺めることで、むしろ解釈の多様性をかずかずみせてくれる。イメージが絵画的であるとの見方は、わずかに第三句において、「うねり」が絵画の抽象

性をみせるという意味で出てくる。

だが、私はこの三句とも、はっきりと絵画的であるとうけとる。あるいはそれが世に言う「余情」というものかもしれないとも考えるが、あまりに印象主義的な鑑賞にすぎるだろうか。

第一句、「菊の香」は空間の広がりを想像させ、「古き仏達」はすぎし時の流れ、「奈良」はそれらに一つのシチュエーションを設定する。一句のなかの三つの名詞は、効果的な、しかし最小の助詞をもって連ねられ、いっぷくの絵画となることで、永遠の生命をあたえられている。

第二句、「宿かる頃」はうつつの時を明示し、「藤の花」の花房が、ふじいろの空間の奥行きをひろげ、「草臥て」の、歩きつづけ辿りついた安堵感がシチュエーションを確かなものにする。垣根ごしにか、それとも縁側に腰を下ろしてか、暮れゆく春がやるせない一幅の絵画として写しこまれている。

第三句、「白露」は一個の点に過ぎない、が、それは無限の空間の広がりを予感させ、「うねり」はその波形がえがく線描のゆえに時の流れを留めない、こうして「萩」はなにいとつ「こほさぬ」静けさに占められ絵となり動かない。

以上、だが、あまりに性急な、こじつけの句解を試みてしまった。私は思わず興奮しているのかも知れない。私はめずらしく感激している。興奮が私に、この対談の文字をなぞるよう仕向けてくれたにちがいない。

そのうえ、出典により如何に異同が多いか、それは何故か、異同による句の表情や詩想の変化はどうであるかなど、おぼろげながら知りえた。ただ、どうして元禄年間の三句が選ばれているのか、には触れずしまいだが、私の目的がそこにないのを理由に措くことにしよう。

私を動かしたのは結局、「芭蕉を読む」の一巻のなかにある「静けさ」であった。

この静けさ、この静謐の正体は、いったい何なんだろう。昭和一九年を生きた人間ならば、誰もがこの一巻を読みすすむにしたがい、気づくはずのものである。

時勢は戦争の嵐のさなかにあった。外洋を吹き荒れる風雨。しかし、ここは高い防波堤にかこまれた港の、うちがわの平静がたもたれている。何が、熾烈な動乱から人々を隔絶してくれていたのか。

これを韜晦ととり、回避とうけとることは容易であろう。しかし、時と処を選ばずに、古典を古典として鑑賞できる精神の強靱さを理解せずに、それを言うのは許されまい。幸いなことに、ここに復刊という形が、半世紀の昔日に隠れようとしていた諸家の精神のあり方を、如実に甦らせてくれている。

そして、それはまさに芭蕉という偉大な詩人の遺業の確認であり、再発見である。これを芭蕉の普遍性と呼び、

芭蕉の永遠性と唱えて総括するのはたやすいが、今、私が為しうることは、ただただ、その作品に立ち還えることと。これ以外では、芭蕉に近づき、諸家の域にせまることは叶えられないであろう。

ここでふたたび、「一句ひねる」に返り、芭蕉の時代に帰ることとしよう。

わが芭蕉は、「ひねる」を、どう捉えていたか。

俳句は、その発生の道筋から、連歌の一躰である俳諧の連歌の、発句（すなわち第一句）が分離独立したものである、との見方がいまは常識である。

もっとも俳諧の連歌は、その長編のものを連句とも呼ぶが、連歌の歴史のうえで連句の最盛期とされる室町の、心敬（一四〇六～一四七五）あたりでも、すでに発句は独立にも作られていたことがみとめられる。ただし、今日のように、俳諧がジャンルとしては、もはやほとんど意識にあがらなくなった時代では、今日的な意味で、発句が俳諧の連句の部分からまったく切り離され独立に創作されるに至ったのは、天明の蕉村（一七一六～一七八三）あたりからだと考えるのが妥当であろう。

この独立の文学様式となった発句を、「俳句」の名で呼称しはじめたのは、明治の子規であった。

つまり、子規は連句の非芸術性を唱えることによって、あらためて発句の文学的な性格と言うものを主張し、自らもその様式のなかに、自らの文学理念を実践し唱道した、最初の人物であったわけである。

その子規に〔古池の句の弁〕という論考がある。子規はその中で、「古池の句の意義は一句の表面に現れるだけの意義にして、復他に意義なるものなし」と述べ、「芭蕉自ら此句を以て自家の新調に属する劈頭第一の作となしたるがため後人相和して亦これを口にしたりと見ゆ」と極論している。

創作の理論として写生説を説き、写生を旨として、その俳句における典型を蕉村にもとめた子規にあって、古池の句の意義についてのこの見解は、あるいは当然の帰結であったかもしれない。言いかえてみれば、子規は、俳句の歴史の上で芭蕉の存在を充分認めながらも、子規のもっていた近代文学の理念においては、その価値を、それ以上のものとは受けとることができなかった、と想像される。

その理由は、おなじ論考のなかで子規が、俳諧の歴史を説かなければ、古池の句を理解することが出来ないとして、「古俳諧の無味乾燥にして蠟を嚙むが如きは徒らに子の欠伸を催すに過ぎざるべきも、其欠伸を催さしむる処、便ち是古池の句を牽き出す所以ならずんばあらず」と言っている見方にある。

つまり、子規にとって「古俳諧の無味乾燥にして」とは、つぎのような観点においてであった。

要するに、俳諧の連歌に不満な者の新方面として、宗鑑（一四六五?～一五五三?）や守武（一四七三～一五四九）らが、陳腐な連歌に斬新の元素を加え、窮屈な連歌に広い区域を貸し、まじめな連歌におどけた趣向を与えた。それが一時貞徳（一五七一～一六五三）の時代に野卑に脱し、やがて宗因（一六〇五～一六八二）の談林派が現れるにおよんで、ようやく幼稚な俳諧が跡をたつことが出来たが、しかしなお、そこでは滑稽の域をはなれないで、「古池の句」が出現するまでついに、それは子規の表現をかりれば、「自然の妙を悟らなかった」と言うのである。

「自然の妙を悟らなかった」とは言わば、「古池の句」が、子規にとってはただ、自然の妙を俳句史上はじめて表現した発句であり、その観点においてだけ看過できなかったにすぎないことを意味する。しかも子規にとって自然の妙とは、芭蕉に関してそれほど深い感銘をもって、語られている言葉とは受けとりがたい。

なぜならば、子規は（俳諧大要）において「古池の句」を評して、「作者の理想は閑寂を現すにあらずんば、禅学上悟道の句ならんか、或は其他何処にかあらんなどと穿鑿する人あれども、それは只々其儘の理想も何も無き句と見る可し。古池に蛙が飛びこんでキャブンと音のしたるを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり。」と記していることでもうかがえる。

たしかにこの解釈は、それまでの芭蕉の発句理解の伝統にたいする子規らしい反論、また彼の理念にふさわしい詩論の展開とうけとることができる。だが、彼以降、今日にいたる芭蕉理解の方向は、いかにも多岐にわたる。ことに芭蕉没後三百年をむかえて、近年、その上梓の数は枚挙にいとまがなく、その論旨を理解することも容易ではない。一方、こと俳句創作の面からは、こうした子規のような一面的な発句解釈の域から、どれほどの距離をおくことが出来ているかは、おのおのの実作にであうと依然として疑わしい気がする。

戦後、現代の俳句にたいして華々しく展開された攻撃に、「第二芸術」の論議がある。しかし、その論者桑原武夫も、実はこういう解釈に足場をあたえる俳句創作の理想というものに、論点を置いているようである。

そこには、「そもそも俳句が、附合いの発句であることを止めて独立したところにジャンルとしての無理があったのであろうが、」（現代俳句について）という俳句の性格にたいする考察があり、「俳句はかっての第一芸術であった芭蕉にかえれなどといわずに、むしろ率直にその慰戯性を自覚し、宗因にこそかえるべきである」（同）と言うのがその結論である。

しかも、氏がこれらの背景として述べているところは、人々がつねに芭蕉を今日の俳句の祖師と仰いでいる理由が、ひとえに「中世詩人芭蕉をしらずしらず近代風にうけとっているからである。」として、「実感とか、体験

とか、自我とか、そういう近代文学の背景をもつ言葉を無理にもちこむからである。」（芭蕉について）とも言う。

つまり、芭蕉以降次第に形成された伝統的な解釈を、支持するにしろ、あるいは子規風の解釈をとるにしろ、その背後につねに、近代風の自意識なり、人生観なりを想像させる以上、そこでは妥当な芭蕉理解はのぞみえないとする。そもそも、芭蕉の発句はそうした個的な立場において創作されたものではなく、同好の連衆とのつきあいの場で成ったもの、現代の俳句が十七音という狭溢な様式の内で、社会性を失い、ひいては鑑賞にたえうるという文学の条件をも失っているのは、こうした自覚の欠乏に起因する。したがって、俳句はすべからく、発句が俳諧の発句として、社会に生きていた立場を回復すべきである、とも言うのである。

だが待てよ、と私は考えこむ。それからもう半世紀、子規からはすでに一世紀、俳句文学のうえに、なにか特筆すべき変化が起ったろうか。

なにも起こらなかった気もする。日本の社会は依然として俳句をうけいれ、俳諧は無視されたままである。わずかに特定の詩人たちの、連歌復興の試みがみられるが、これとて研究の一助であり、慰みの域を出ない。

だが一方では、恐ろしいほどの変革があった、という気もする。それはメディアの変転に伴ってである。

かっては夢みることしか出来なかった世界のいずれの都市・いずれの秘境へも、瞬時に案内してくれる。かっては想像することしか許されなかった肉体の深奥や生命の秩序についても、カメラは自在にあばいてみせる。だがそれは、あくまでも映像としてであり、幻の体験にすぎない。時間の速さで走り去った画像が、私たちに残してくれるものが何かあるか。光が消失した瞬間に幻は消えうせるのである。そして、私たちは「言葉」による以外に、それを手元に引き留めておく術をもたない。

短歌や俳句がいまなお、日本の社会で命脈をたもちつづけている理由の一端は、ここにあると私は考える。もっとも同時に、世代交代のすすむ将来についても、それを楽観できるかどうかには、確信がもてない。

さて、ふたたび本筋にもどろう。

曲折を経ながら、これまで私が筋道を辿ってみようと計ったのは、結局、これらの諸問題の中心に、つねに芭蕉の作品が、何故おかれているのか、の解明にある。

それは単純に、わが芭蕉の発句が、そうした近代風な解釈を生むであろう可能性を、三世紀を隔てて、なおしっかりと包含している、と言う事実だけだろうか。

芭蕉による蕉風確立の経緯は、子規の「自然の妙」の説をまつまでもなく、さまざまな附会や伝説にいろどられながら、一般的には「古池の句」成立の事情のうえに、象徴的に物語られている。

代表的な研究者のうち、山本健吉は「古池の句の歴史的価値は〈蛙飛ンだる〉のような俳言による俳意の強調や〈山吹や〉のような季語による情趣の強調を離れて、自然に閑寂な境地をうち開いたところにある。」（芭蕉）と言い、加藤楸邨は「子考の如く蕉風の眼を開悟したのはこの句であるというような大業な言い方は認めないが長い間求めて来た真実感合の態度がついに熟して来て、この句に自ら発するに至っているものと見たいと思ふ」（発句評釈）と述べられている。

これはいずれも子考の（俳諧十論）あるいは（葛の松原）によっての所説であるが、「閑寂な境地」といい「真実感合の態度」といい、ともにその評釈は、蕉風理解についての一般的な傾向を暗示している。

子考の（俳諧十論）がこの句をめぐって伝えるところは「天和の初ならん、武江の深川に隠遁して古池や蛙とびこむ水の音といへる幽玄の一句に自己の眼をひらきて、是より俳諧の一はひろまりけるとぞ」である。

また（葛の松原）もこれと同様の内容であるが、芭蕉が「蛙飛び込む水の音」と下七五を得たのに対して、晋子（其角）が傍らから「山吹や」と冠してはと提言したけれども、唯「古池や」と定まったとのエピソードを伝えている。

しかし、この句がこの形「古池や蛙飛こむ水の音」ではじめて収録されたのが、貞享三年（一六八六）閏三月刊行の「蛙合」（仙化撰）であり、それよりもややはやく同年正月下旬に、大阪で西吟撰にて刊行された「庵桜」には「古池や蛙飛ンだる水の音」の形で入集している。このことが「飛ンだる」の句形は談林風であり、初めであろうとの考証を生む結果になり、諸家により初案は天和（一六六一～一六八三）の初め、だが句形の定まったのは貞享三年、との推定をなりたたさせている。

もちろん、この句がとりわけて、その制作年代を問題にされるのは、結局は「古池の句」を子規流に受け止める場合でさえ、その歴史的価値が損なわれるものでなく、また、その句形の推移が、それ以上に蕉風発句の成立の過程を意義づけている、との観点からである。

こうした伝承を積みかさねた知識の故にか、たしかに私たちにあっても、芭蕉へのアプローチはまず、この発句の理解にはじまる。だが、それはまさしく独立の「俳句」としてであり、「古池の句」が俳句と呼ばれる文学形式の、典型的な性格を具現していて、俳句についての初歩的な、けれど根本的な理念を与えてくれているとの安心感、あるいは常識の上に立ってである。そして、さらに言い加えれば、それは又、この句が「俳句」として非常にわかりやすい自明な意味をそなえている、と受けとられていることでもある。

分かりやすさとは、或いは、優れた芸術作品が、人間の直感力に訴えるべくそなえている一つの特性である。

それは、いわゆる古典においても何ら変わるところがない。古典は、古典が成立した時代の典型として、伝統と時代の制約の申し子として形成され、時と処をへだてなお万人の認めるところでなくてはならない。

この点を、小宮豊隆は（発句翻訳の可能性）と言う一文の中で、発句のほんやくのむつかしさにからめて、

「この句の句眼は無論、古池に蛙が飛び込んだ〈水の音〉にあるが、諸家は〈水の音〉そのものを表すことに気を奪われて、〈水の音〉の暗示するものを表現することを知らない。」と言い、その上「発句には特有の古来から連歌師や俳諧師によって心血を濺いだ〈切字〉とか〈てにをは〉の工夫があるので、それは殆ど翻訳をゆるさない。」とのべている。

「翻訳ができない」と言えば異議があろう。だが、ほんとうのところは、「翻訳をゆるさない」のだと言うならば、私はこれに進んで賛同したいと思う。一句「ひねる」が、俳句の真実をあらわしていると考える一方で、必ずしも日本語についてだけでなく、ある国の言語がもつ固有の伝統のおくにある感覚は、翻訳の対象のわくの外にあるのではないか、と考える。

そして、芭蕉の一句「ひねる」姿こそ、この翻訳の対象にならない何かであって、この何かは芭蕉の発句の語句が、どんな推敲や異同を経たのちに成立してきたか、その経緯を追うことで、いずれ垣間見ることが可能になる、と私は推理する。

それがまた、俳諧がダイアローグからモノローグへの道筋をたどった歴史を、解きあかしてくれるに相違ないとも考える。

〈未完〉

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）
春季号……二月一日　十二月三十一日
夏季号……五月一日　三月三十一日
秋季号……八月一日　六月三十日
冬季号……十一月一日　九月三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。

第五十二号原稿締切り
六月三十日（木）必着

潮哨録（一）

鯨遊海

味讀吉川幸次郎著漱石詩注　　平成六年正月

漢句妙須思索深
風雲月露缺弦琴
潜心飛躍撼天地
漱石寸言何不吟

（韻・深琴吟）

漢句の妙はすべからく思索深かるべし
風雲月露つる欠けし琴(注)（のごとし）
潜心（沈思）飛躍して天地を揺がせる
漱石の寸言（漢詩）を何ぞ（君）吟ぜざるや

〔補　足〕

(注)陶潜は弦の無い琴を抱いて詩を吟じ友と斟交した。但しここでは、風月（詠嘆）を詠むのみでは漢詩としてもの足りないこと、及び漱石の詩の深さを言う。

☆漱石は漢詩もて挑む人麻呂に沈潜飛躍天地揺がす

訪洛東閑居恩師伊藤包先生經一別來五十年　　平成五年師走

別去迢迢五十年
紅塵風雪欲偏傳
敲門可怪白頭子
談笑更驚詩趣專

（韻・年傳專）

わかれ去って　ちょうちょうたり(注)五十年
紅塵（俗界）の風雪　ひとえに伝えんとほっす
門をたたくはあやしむべし　白頭（髪）の子
談笑（すれば）さらに驚く詩趣もっぱらにするを

〔補　足〕

(注)はるかなるさま、特に歳月の永遠なるさまを云う

※転結二句は先生の心中を忖度、その感慨を詠んだ

☆教え児に久しく逢いて驚きぬ鶴髪童顔漢詩詠らし

謝寄脱遠州新茶　　平成五年五月

江河滾滾幾千年
陶酔春秋左氏傳
讀了喫茶三椀熱
朦朧発汗氣如仙

（韻・年傳仙）

こうが（長江と黄河）こんこん(注)幾千年
陶酔す「しゅんじゅうさしでん(注)」に

読み了えて茶を喫す　三椀あつくして
もうろう発汗　氣は仙（人）のごとし
〔補　足〕
(注)大水がながれるさま。杜甫「不盡長江滾滾來」
(注)中國春秋時代の魯の國の歴史書。史伝説話の宝庫であり、古来わが國でも歴史や文学の源泉であった。
☆悠久の黄河滾滾五千年左氏伝読みて熱き茶を喫む

邂逅野口夫人詠蒲原美智子嬢青春懐
平成六年盛春

紅點草原湖口春
蒲生野猟王朝人
美男皇子秘振袖
何應額田天智嬪
（韻・春人嬪）

くれない草原にともして湖口春にして
蒲生野に狩りす王朝のひとびと
美男の皇子(注)　秘めやかに袖をふれど
何と応えん額田(注)は天智のひん（妻）なれば
〔補　足〕
(注)大海人皇子（おおあまのみこ）　天智天皇の弟で後の天武天皇。萬葉集「紫の匂える妹をにくくあらば人妻ゆえに吾れ恋めやも」後両派は壬申の乱で対決。
(注)額田王（ぬかたのおおきみ）　大海人皇子と恋愛関係にあった萬葉第一の女流歌人。萬葉集「あかねさす紫のゆきしめのゆき野守は見ずや君が袖ふる」
※詩題中の姓名七字を詩中に折込んだ。なお韻（春人嬪）固有名詞（蒲生野、額田、天智）骨子（皇子、振袖）は変えないで（当然大意は不変）他の字を差換えることによって、多くの女性の姓名を折込んで詠める不思議な詩となった。試してみられては如何。
☆蒲生野に紅萌えて幻の袖振る君はかぎろいに消ゆ

偶感平成昨今
平成六年正月

農工匠技秀商才
疑是倭人神國來
經世低迷何恐恐
可先君我始從隗
（韻・才來隗）

農も工もわざたくみにしてひいでし商才
うたごうらくはこれ倭人の神國より来たるかと
けいせいていめい何ぞ　きょうきょう
まず君と我れとかい(注)より始むべけんや
〔補　足〕
(注)燕國の食客。王に先ず自分を用いてみよと勧めた。
※転句は、畳韻四字分及び重言を連ね効果を狙った。
☆農も工も匠の技ぞ日の国ぞ隗より始めん何ぞ競競

カラオケ

柴田富佐子



結婚してから三十年余り経つ。
その間、私は夫の鼻唄を一度も聞いた事がない。大抵の人は、何か気分がいい時とか、嬉しい事の前などに、無意識のうちに鼻唄を歌うものだ。胸の底からフツフツと沸き上ってくる嬉しさは、軽い明るい歌になって口から出てくるものだろう。
鼻唄さえ口ずさまないのだから、唄らしい唄を歌うのを聞いた事がなかった。だから私は、いつからか、この人はひどい音痴で、歌いたくても歌えないのではないかと思っていた。
結婚式の翌日、私達は箱根でバスに乗った。遊覧バスだったのだろう。ガイドの娘さんが何かを一曲歌った後、お客様もどうぞ、と言ってマイクを廻した。右側の列の前から順にマイクは客の手に渡り、客は素直に一曲ずつ歌って後ろへ廻した。席はほぼ満席だった。
今程にカラオケが盛んではなかったから、みな申訳け程度に一番だけをそそくさと歌ってマイクを渡してしまうと、ほっとした顔をしていた。特に上手な人も、珍しい唄もなく右側が終り、左側の後ろから前へマイクが渡って来た。私達は左側の真中辺にいた。
後ろの人からマイクを突き出された時、夫の顔が見る間に赫くなるのを、私は驚いて見ていた。夫は首を横に振ってマイクを受取ろうともしないので、仕方なく私はマイクを受取った。すると夫は、見るもおぞましいという目でマイクを見つめ、早く前へ渡してしまえ、というように顎をしゃくった。
「済みません、パス」
私は小声で言って、前の席へマイクを送った。車中の視線が一瞬、私達に集った。私は体を縮めて座席に沈みこみながら、

（さらっと何か一番だけ歌えば済む事じゃない、あんなに赫くなるほどの事じゃないでしょ）

胸の内で夫を詰った。

夫が唄を歌うのを聞いた事がない、と前に書いたが、正確に言うと、一度だけ聞いた事がある。しかし、その時の唄が、果して唄と呼べるものかどうか、は疑わしい。

子供たちがまだ幼かった頃、姑に強く誘われて町会の旅行に同道した。十五、六人の団体で奥湯河原の温泉宿に泊った。お決りの宴会の後、これもお決りの一人ずつ何か芸をやる事になった。

「だから、来るの嫌だと言ったんだよ」

夫は姑に小声で言っていた。

湯上りの酒で、いい気分の年配者達は、民謡やら昔の流行歌やらを楽し気に歌っていた。姑はその頃、民謡の踊りをかなり熱心に習っていた。

「歌う替りに踊るから、だれか歌ってよ」

姑は傍らの丸盆から湯呑みや急須をどけて取上げると、赤い腰紐で襷がけし、「花笠音頭」を踊り出した。夫を除く一座の人々が手拍子をとって歌い出した。

ヨッシャマカショでシャンシャンシャン

盛り上った空気の中で、姑から目を外した夫の赤い顔は、酒のためだけではなかろう、と横目で見ながら私は思った。

やっと、婦人部の部長さんが言葉を出してくれた。

「ええ、ロシヤの唄です」

私はほっとした気持ちを抑えきれずに答えた。

小さくはあっても、一応古い看板を掲げる酒屋の屋台骨を支えながら、三人の子を育てて三十年が経った。

気がつくと、夫は定年の年令に達していた。退職して暇が出来ると、夫は酒屋の組合が主催する親睦旅行に参加するようになった。その最初の旅行が安芸の宮島行きであった。

例によって、旅館での宴会でカラオケが始まった。私は仕事をしながら、鼻唄を歌うことはあっても、人前で改って歌うのは嫌いで、ずっと断り続けていたので、今では無理強いされる事もない。好きな人が、好きな唄を歌えばいい。歌い慣れた人は結構上手で、普段のしかつめらしい顔を知ってる人が、思い入れたっぷりに歌う姿を見ているのは、なかなか楽しいものだ。

勤めていた三十年の間、夫は酒屋とは無関係の場所にいたが、それ以前の学生時代には父親の代理で組合の会合に出たりしているので、近所の酒屋さんとは顔見知りであった。

四、五人が夫の周りに集って飲んだり話したりしていたが、突然マイクの声が夫の名を呼んだ。

「初参加の記念に、一つ歌って下さい」

「さあ、今度は若旦那だよ」

「よおー　よおー」

近所の人達がはやした。

それまで手酌で酒ばかり飲んでいた夫は、盃を置くと、やおら立上った。私は何事が始まるのか不安で、夫の浴衣の裾を引張ったが、夫は左手で、離せ、という仕草をしただけだった。

夫の口から出たのは、「カチューシャ」の唄だった。それも原語で、幼い子供が、覚えたての台詞を忘れないうちに言ってしまおうとするような性急さで、歌うというより、わめくと行った方が適切な歌い方だった。

その頃、歌声運動が盛んで、新宿の「うたごえ喫茶」が大繁昌していた。そこで歌われたのはロシヤ民謡が多く、中でも「カチャーシャ」は最も人気を集めた唄であった。

しかし、この場に居合せた人々は年配者ばかりで「カチャーシャ」を知る人はいなかった。

夫の歌い方も異様であったが、聞く人々も戸惑った。歌い終って夫が座っても、誰れも何も言わない。食べつけないものを無理やり食べさせられて腹具合が悪くなったような浮かない表情の人々を見ていられなくて、私は俯向いていた。

「何だかさっぱりわからなかったけど、あれは日本の唄じゃないんでしょう」

しまった、と私は思った。絶対に夫を指名しないように、前以って頼んでおかなかった迂闊さを後悔した。

折角盛り上っている座を白けさせてしまったら、どうしよう。

夫の周囲にいた人達が手を叩いた。私はいざとなったら、代りに出て行って、歌ってもいいとさえ思った。珍らしい、という点では、夫が歌っても、私が歌っても同じ位の重みがあるのだから。

と、夫は何のためらいもなく立上り、司会者の方へ歩き出した。司会者と二、三言葉を交した後、音楽が流れ出した。

曲は都はるみの「大阪しぐれ」であった。演歌を夫が歌う―私には信じられない光景であった。左手の指先を、腰紐と浴衣の間に差し込み、右手に握ったマイクを口に近付けて、ごく自然に歌い出した。

その歌い方は、抑揚に乏しく、上手いとは言えないが、とに角、曲に乗って延すべき所は延し、力むべき所は、力んで歌っている。

へえー驚いた、としか私は言いようがなかった。その歌う姿を見ながら、私は別々に流れた夫と私の歳月の永さを思った。

別々の仕事を持ち、別々の世界で生きていれば、別々な変り方をするのは当然なのだろう。それに気付かず、私の中の夫は、新婚当時の姿のままであった。

一座の拍手を浴びて戻って来た夫は、席に着く前に、ちらりと私を見た。その顔には、真赤になって俯向いていた初々しさも、がむしゃらに原語の唄をわめいた羞らいもなかった。

ああ、三十年が経ったんだ。

二人の間に別々に流れた歳月の永さばかりを私は思っていた。

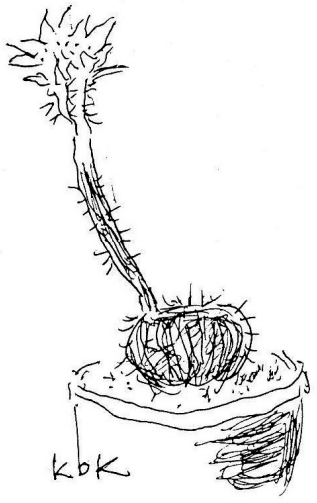
「旦那さん、結構歌うじゃありませんか」

日頃気安く商売上の付合いをしている隣席の人が言った。

「わたし、主人の唄を聞いたの、生まれて初めてなんです。びっくりしちゃって」

胸を押えて言う私に、夫と同じ年頃のその人は、声をたてて笑った。

「男が三十年も外に出てりゃ、カラオケの一つ位、だれだって歌うようになりますよ」



侍マラソン始末

大和禎人



安政二年は乙卯、その五月は大の月、いまの暦でいうなら六月十六日が五月朔（一日）に相当したので、まさに梅雨の季節であった。

安中藩主板倉勝明はなに思ってか、急に騎馬をもって遠駆けを行なう旨をもって、年寄り斉藤衛守ほか、ならびに警護役として物頭旗奉行の海保左次馬に先発を命じ、しかも自ら当日は先頭に立つという内意が伝えられた。

「殿の仰せじゃ、否やは申すべきではない、方々ご用意のうえ、遅れをとり申さぬよう」

海保は前日、大目付をとおして馬回り組に下知を与えている。当然の処置であった。

「なにごとかな、武よりも文の殿さまがのう」

「さよう、お珍しいことじゃ、だが、粗相があってはなるまい、たがいにのう」

「そうじゃ、だがのう、あまりにも急な、解せぬことよ、梅雨時じゃというのに、われらは行く先も告げられてはおらぬ」

「大目付からのお言いつけとしても、組頭は少なくも委細を知らされておろうが、水臭いことじゃ」

「しーっ、聞こえるわな」

馬屋の中であった。飼い葉、水飼いの日課も明日に備えれば手抜かりがあってはならないのだ。とくに藩主の乗馬の栗毛「節山」、「甘雨」の体調には気配りの必要があった。学者肌の藩主板倉は号を節山、または甘雨といい、愛馬にもその名をそのまま名づけていた。

別に藩医千木良昌達には藩主に先立ち前日出発せよと

いう内命が下達されていた。やはり大目付からである。

「ついては医師はおこと一人と限らず、典医方すべてあい勤めるようとくに申しつける、ご貴殿よりお伝えあるよう」

「これは、これは、なにごとでござろうか」

藩医の立場ではそんな反問が可能であった。茶筌髷にとり澄ます多少の権威もあって千木良はそう言ったが、相手は、

「いや、その儀、それがしにもあい分からぬ、殿のお言い出しを伝えるまでじゃ」

と、困惑の様子を示した。実のところ、この下達にあたって、真の用向き内容は知らされていなかったのである。

「すべて、ご出立のときには判明しよう」

と、曖昧に口を濁した。

千木良を筆頭として典医方は他に二名いた。竹内筍庵と津金長渓の二人である。

「殿さまはご乗馬と聞いている、わたしは馬を曳かせてお供をすることにしたいと思う、若いお手前がたは徒歩きで薬箱など備えてお抜かりなく、ご苦労でも後追いしてくれるよう、頼みますぞ」

「千木良さま、なにゆえ大層にわれら医師を三人までの必要でござろうか」

「それはわからぬ、殿さまのお胸の三寸にあること、ご用命とあれば誠意をもってお仕えするまでじゃ」

「とんと分かり申さぬ仕儀、これもお扶持を頂くからには、とやかく申すなということでござろうかのう」

「これ、さやうな、お慎みなされ」

千木良はたしなめをしたものの、内心では自らも大いに割り切れぬまま、若い人たちに注意を与える。

「よいかな、遠出に備えて万端の薬種を忘れまい」

「いかなる薬種をでござろうか、遠出と申して、殿ご一人ではござるまい、供の人数は、お女中も加えてか、また、いずれへのお越しか、一切お聞かせもなく用意のしようもありませぬな」

「黙らっしゃい、われら典医のご用は不時に備えるもの、いかなることにも臨機の処置あい叶う準備こそが必要でござる、医は仁の心を忘れてはならぬ、かようなことを言わせるではない、よろしいな」

と言いつつ、すこぶる不快がことの次第に対して千木良の胸にもあった。

「そこもとらも、ご苦労よのう、これで揃うたな、大義、大義」

集合地として指示のあった天神には斉藤衛守以下の数人が待ち受けていた。

「これは斉藤様、なにとぞご下知を、して、手前どもいずれへこれから……」

「なんじゃ、大目付は肝心のことを言うておらんな、かくべつ隠密にせいでものう、行く先は坂本じゃ、その余のところはわしにもとんと分からぬ、殿さま直々の仰せ出しじゃよ、お考えあってのことであろう、まぁな、われらゆるりと参ろうぞ」

老練円満、好人物の斉藤はそう言うと、笑って馬首を巡らせた。他に士分六名、供の者四名が従っていた。昼餉をすませた刻限の出発だった。遅くとも夕刻には坂本宿に達するはずであった。

「安政二卯年五月十一日
御領主様峠迄
御遠馬御休御用諸事留
御本陣　金井三郎左衛門」

右の表書きのある文書が昭和五十年七月、坂本宿本陣金井家の文書中より発見されている。安政二年を去る実に百二十年のことである。安中領主の企てを明るみに引き出す貴重な資料であろう。松井田町教育委員会所蔵の文書である。

坂本宿は安中から磯部、松井田を経て碓氷峠にかかる麓の宿である。中仙道は峠を超えれば信濃路である。

文書によれば本陣にあてあらかじめ前日に先触れがあったことが明らかである。

安政二卯年五月十一日

御領主様峠迄御遠馬御休御用諸事留
坂本御本陣　金井三郎左衛門

馳走ケ間敷儀いたし申間敷候此段申達置候
先触れの上、馳走饗応はしなくてよろしい、という趣旨である。

そして、「覚」として次の氏名が伝えられている。

斉藤衛守
富岡文平
千木良昌達
竹内筍庵
津金長渓
小田稔助
三田清次
岡本清吉
小野半七
岡村喜四郎

とある。斉藤は家老級（安中藩には家老の称がなく、年寄・年寄役と称した）、富岡は上士、千木良以下の三名はくだんの医師たちであり、他は下士であろう。かれら十名が先発であったことは続く文言に明らかである。

明十一日
殿様御馬上ニ而峠迄被為入候ニ付右之面々今昼時出宅相越其宿本陣金井三郎左衛門方へ宿申付候間其旨相心得可申候此段申達候以上

五月十日　　久保庭　谷五郎
　　坂本宿
　　問屋
　　中
　　年寄
追テ御馬七疋分飼料用意イタシ可申候
以上

先発の一行中七人までが騎馬であったらしい。馳走がましきことはするな言いながら、なかなか高飛車に「達置候」とある。久保庭は現地所管の代官である。下達の姿勢は問屋、年寄中とある宛先を下位に置くことでも明白である。

本陣とは参勤交代を軍旅とみなすことから言う呼称であり、主は苗字帯刀を許され、宿場最高の身分であり宿場全体でこれを維持したものだ。本陣に宿泊する大名には宿泊料を支払う義務はなく、祝儀を三両か五両ていど包むだけであった。利用が重複して予約がとれないときのため脇本陣があり、また家臣団受け入れとなれば脇本陣、民宿をあてることで宿場全体としてはうるおう仕組であった。

さて、ここでは安中藩の年寄斉藤衛守ほかの先発一行は夕刻坂本宿に到着している。

五月十日夕刻御着御泊
斉藤衛守様御始御人数拾人
御供方四人
当日夜ニ入御着
海保左次馬様　外御壱人
御供壱人
〆御上下拾七人　前夜御泊
御上下　一同酒肴出ス

はたせるかな、馳走がましきこと不要とする建前と実際は違うのだ。先着十名のほか、本陣金井文書は夜に入ってさらにあの物頭旗奉行海保左次馬が他に一名の士分ならびに供の者を従え到着している事実を伝え、すべてに饗応の酒肴を供したことを記録している。

海保左次馬は後日、「侍マラソン」采配をすることになる海保順三の姻戚でもあった。かれは警護の役向きばかりでなく、なにごとか別命により追尾したものであったろう。

ここで気づくことは、「〆御上下拾七人」とあることである。総数はまさにそれとして、上下とあるのはこの場合身分を分けた部屋割と思われることである。上は上階を意味したものに相違なく、記録は御上向拾弐人、御下五人として上には茶菓子、吸い物、三つ物がついても下にはそれはなく、夕食膳に添えて引き物も上のみ、明らかな差別扱いが記されて入る。「御下五人」は御供とあるものの数に相当するのである。

（殿のお言い出し）とあった大目付の言い条はこの前

夜からすでに、しかくものものしく、大山鳴動の波紋を広げる成り行きであった。

（左次馬め、なにごとがあってわられを追うてきおったか、殿様からあらためて別命を授かっておるに相違ないが、白々しく同席しおって、気色が悪い）

床前に年寄の斉藤は引き連れた上士の富岡と並んでいるが、その隣に身分上海保は座を占めている。なにかと小賢しいこの男は斉藤老人の好みではなかった。一応の献酬はあったが、あとは口をきかないままでいた。

実はこのときより数日前になるが、斉藤は海保と城中で言い争うことがあった。勝明公の面前であった。

「殿のご内意はこの場の限りにて承りおきましょう、かりそめにも遠駆けなぞと、おん若気にすぎまする、なにとぞよしなの分別なさいませ、どうやら、近ごろ馬場にお出ましのようす、お見かけしておりましたが、そのような」

月初の伺候に際し、勝明は先代からの重臣である斉藤に漏らしたのである。

「余も近頃文事にようやく飽いた、気晴らしに遠駆けなぞ試みようかと思う」

というのであった。

「爺いめ、耳を疑いましてござる、おん年をお考えあそばされませ、また、おん身、お一人ではあいすまされぬこと、警護のこともございます」

思わずにじり出て、あえての言葉を吐かねばならぬ仕儀であった。

その場に海保左次馬がいた。近習からいまの地位に登用され、なお側近にある立場を与えられていたのだ。

「憚りながら、殿には武辺のこと大事にお考えの上の思召しと拝察いたしおりまする、おん殿自ら疾走をもって遠駆けされようというのではござらぬ、申さば遠馬、ただに範をお示しなろうお考えまで」

「いいや、ご無理があってはなりませぬ、先殿勝尚公のおん跡目を襲われてより、はや三十五年ばかりに相成りまするおん治世、ご父君創立の「造士館」の充実に止まらず松井田の五料には「桃渓書院」を創設を認可せられ、これを郷学校として領民の教育に意をお用いになられたのみならず、おん自らはお励みなされてご当代高名の学者、思想家の未刊の著述をお集めになられ、「甘雨亭叢書」をお編みなされた、文治の目覚ましきご治績は他家、他藩に誇るともおかしからず、あまりあるもの、このうえの武事、太平の世になんの必要がござろうや、憚り多けれど殿のおん齢をお考えあれ、平地に波乱とはこのことでござろう、殿ご一人ですむことではありませぬ」

老いの身、膝においたこぶしを震わせて言いつのったが、海保も負けてはいなかった。

「お言葉ながら、太平の世なればこそ、武事を忘れざる必要があるのではありませぬか、殿の御意那辺におありかご賢察あれ」

激しく切り返した。

「両名とも、もうよい、そのへんにいたせ、左次馬は下がっておれ、ちと、爺いめに話がある……」

勝明は海保を退けて、斉藤衛守を招き寄せた。

「心配いたすな、余に少しばかり思案があってのことじゃ、もそっと近こう寄れ、これからはそちと相対の内緒の話じゃ」

と言った。

安政二年五月十一日の朝を迎えた。九十九川の朝霧が消えた刻限、本丸を出て川に北面する坂下門から吐き出された騎馬の一群があり、徒歩のものの人影がこれに続き、広小路を通り荘厳寺の山門を左に見て、街道への道を粛々として出て行った。

街道へ出たところで、いったん列が整えられると、藩主板倉は手綱をひきしぼり、馬首を松井田に向けた。そして、かつかつと蹄を鳴らせ先頭に駆けて出た。だが、あらかじめ伝えていた遠駆けの出で立ちでも姿勢でもなかった。城下を離れてから下知をと考えていた。

どうやら雲低く垂れて梅雨の気配であったが、馬上の主は意を決していて、たじろがぬ様子に見えた。

「余に従って参れ」

と行って馬の歩足をととのえた。

城下を出離れると、

「行き先は碓氷峠」

と、はじめて告げた。

五月十一日正四ツ時御着雨天

御殿様　御賄御持参ニ付一切不仕候

はたして、藩主の一行は折から梅雨しとど降る中、午前十時に到着したものだ。七里余、約二十九キロを騎馬遠駆けの前触れから言えばかなりゆっくりのペースであった。御賄い持参とあることから、藩主の膳をととのえるためには賄い方、さらに配膳のためには女人も従っていたものと推察される。

前夜御泊共御人数四拾七人

本膳ニイタシ御一同御引物ナシ

御馬弐疋分　台所

同　六疋分　荷蔵

庇下拵

〆八疋用意イタシ候処六疋分ニ而宜候

飼料、飼葉、大豆、粉ヌカ等不残用意イタシ

掛リ久蔵、太郎兵衛外五人

なぞと、細かく記録されている。藩主一行の到着した人数は前夜宿泊の先発人数を差し引き三十名ということになる。そして馬疋は「〆八疋」とあるから意外に少ない。これでは「遠駆け」どころの態勢ではない。藩主気紛れの遠馬散策というあんばいに受けとれるものであった。

本陣はにわかに慌ただしい空気に包まれている。飼い葉の準備、繋留の場所、その世話人の割り振りまで気遣いをしている。二疋分を余したのは領主の乗馬「節山」と、控えの「甘雨」について貴人の乗馬ゆえに、とくに大事をとって飼料まで携行させていたものであろう。それにしても、本陣の気の使いようは大変なものである。

御巡見之節の通宿内の清掃申付候

御登之節斗　小左衛門方　御小休

御登之節斗　左次兵門方　御小休

御入之節問屋麻上下（裃）

山之内御案内一同野服

御発輿引続恐悦ニ問屋年寄罷出候

「御巡見」の文字が見える。藩主一行を迎えた本陣がことさら藩主の巡見ととらえたのは無理からぬことであった。

碓氷の関は代々安中藩の管理下に置かれ明治二年に及んでいる。江戸期に入って慶長九年仮の関が置かれ、元和九年にはあらためて関所を設置、これを横川の関とも呼んだものであった。坂本宿はいよいよ難所に向かう麓にあり、関はむしろ手前の五料・横川茶屋本陣に近かったからである。両本陣ともに碓氷峠の要衝を控える街道のかなめであった。

さて、ものものしい出迎えは右のようで、恐懼して麻裃などを着用におよび、宿場をあげて送迎を行なっている。小休二ヵ所をあげているのも、あえてお休みを願うもので、そうした現地の配慮を無視できない休憩となったもので、予期したものではない。板倉勝明の内心にも少々辟易の思いがあった。

（殿ご一人ですむことではありませぬ）

と行った斉藤衛守の言葉があらためて甦った。

その斉藤老人はそば近く供奉し、梅雨に濡れるのも厭わず主を気遣いながら馬を進めている。事に慣れたかれの振る舞いは本陣での一挙手一投足によく現れていて、領主の勝明はあらためて舌をまくものがあった。この行に見込んで随行を命じた甲斐が十分あったのである。接遇の妙というべきであろう、接して威をかざさず、円満おのずから人を動かす徳がこの老人にはあった。

「殿、海保左次馬の姿がありませぬが、いかがいたしました」

「うむ、あれは先を急がせておる、峠の熊野権現の社中に申しつける用向きを了え、折返して横川にも寄らせ万端指図のため帰城をさせる手筈じゃ」

「やはり、ご計画をお進めになるおつもりですな」

「そうじゃ、そちの申し条に対しては済まんがのう、

これは余の賭けなのだ、安中の士風を試そうと思う」

斉藤はいまさらの言葉を慎み、いっそう黙々として駒を進めた。

勝明の乗馬は「節山」から若駒の「甘雨」に変えられていた。いよいよ九十九折の急坂を登らねばならない。碓氷峠は往時の旧道では海抜一、二〇〇メートルを登る険しさであった。

（士風を試そう賭けとの仰せだが、なんのための賭けぞ、いやはや辛いことじゃ、まことに辛い）

斉藤衛守はそうした思い馬上に乗せ、その辛い士道に従って歩みを進めていた。

上野安中の板倉氏は板倉重宗の次男重形を始祖として勝明は七代目にあたる。板倉家は三河いらい徳川家の世臣である。宗家の板倉は重用され移封しきりで、重宗の代は下総関宿を領し、父勝重、その子重宗の二代にわたり、京都所司代の重職にあった。別に備中庭瀬には重宗の弟重昌を祖とする分家があった。この板倉重昌は寛永十四年、島原の乱に際し、翌正月元旦、松平伊豆守信綱の援軍を潔しとせず、あえて総攻撃をかけ戦死したあの内膳正重昌である。

ところでいま、安中城主板倉勝明は治世の晩年にあたってなにごとか、賭けて士風を試そうという、止みがたい発意を抱いていた。

（この上の武事、太平の世になんの必要がござろう）

といったんの諫めをした斉藤衛守はこの主君の文事に優れた業績を惜しまずにはいられないのである。父勝尚の薫陶をうけ学問を好み、藩儒に大山融斉や山田三川を招き、砲術に高島秋帆を迎えるなど進歩的な学風をひらき、さきに触れた「甘雨亭叢書」全五集を編み、みずからの編述も多く、「桃渓書院」をもって庶民の教育を施した安中藩好学の伝統はこの勝明によって樹立されたと言ってよい。

（なんぞ惜しむべき）

という慨歎が胸に上るのである。だが、いまは主命を重しとする苦しい立場だけが待っていた。

『安政二卯年
案詞　壱番
正月より
六月迄　御用部屋』

こうした表書きの文書が発見されている。「案詞」とあり、安中藩御用部屋、すなわち藩政の中枢機関の記録簿である。壱番とあるのは正月より六月の半年分を第一冊としたものと思われる。昭和六十年九月、高崎市の小林光子氏所蔵の文書中より発見したものである。

安中藩の藩政は年寄五、用人三をもって構成されるこの御用部屋制度によって万事を取り仕切られていたので

ある。

さて、右の記録簿中、五月の項に次の記事がしたためられていることを発見するのである。

覚

海保順三、横山鉄之助、江場六蔵、田中豊七郎、竹内園次郎、安中表江罷越嶮岨之遠足掛被仰付候間、近々右之趣御申越之令承知候　以上

五月六日　　両人

両人殿

藩主の碓氷峠踏査は十一日のことであったから、それより早い時期、すでにこうした内命が行なわれていた事実が浮かぶ内容なのである。

海保順三らの顔触れは血気の武辺、そして「嶮岨之遠足掛」という文字が目を射るようである。この文面に言う両人とは尾崎直右衛門、清水五郎左右衛門であり、両人殿とあるのは横山孫右衛門、星野三太夫を指すものでいずれも藩の重役たちであった。記事を察するに持ち回りの認証であったろう。御用部屋の一員として年寄り斉藤衛守は当然その渦中にあり、かれの苦悩はその頃から抱えられていたものと知れるのである。

ところで、はじめて「遠足」なる字句がここに登場するが、（とおあし）と訓み、後世に言うピクニックの色彩をもつ（えんそく）ではない。（とおあし）は武士道の訓練に位置づけられるものであった。

覚

一　去十一日遠足之義被仰出大目付ヲ以向々江相達候義別紙書付位壱通遣之候　以上

五月廿二日　　両人

両人殿

さらに五月の記事には藩主みずからの実地踏査後、旬日を経ていよいよ「遠足」の実施について要項を示達された経緯を読み取れる。その別紙は次のようである。

五十歳以下諸士野面々碓氷峠迄遠足之義仰出候
六七人ツツ申合可相越候

但相越候節者前日大目付江届ケ可申候
大目付ヨリ同日近習頭ヲ以可申上候。
御太鼓六ツ時出宅相越候砌、遅速無之様
当朝一緒ニ近習頭江相届可相越候。
右前日申上相済候へ者如何様大風雨に而モ
相越候。
御関所番頭并峠神主触流江兼相達置候間
何刻御関所通行何刻ニ峠江参着与申書付
請取罷帰リ大目付へ差出可申候。
足痛等ニ而延引之義者無余義候得共、
内々ニ而馬駕籠雇候而早々帰着之趣
申成候輩有之後日ニ達御聴候ハ厳重

ニ御沙汰被及候間兼此旨相心得候
右之趣　仰出候間　向々江早々可被相達候
五月

この文書の用字は無頓着で「儀」とすべきを「義」とし、「予て」は「兼ねて」となっており、「触流」とある箇所など、どう訓むべきか判読に苦しむ部分がある。だが、ともあれ、ここに見る限りはなはだ厳しい内容である。遠足への参加は任意のごとく受けとれるが、決してそうではない。

五十歳以下の諸士は六、七人づつ申し合わせ、前日に大目付へ届け出る。そして翌朝、六ツ時の太鼓の音を合図に家を出て、一緒に近習頭へ届け出てから出発すること。いかなる大風雨でも実行すること、横川の関所や峠の神社へあらかじめ連絡してあるから、通過時刻を記した書付を受け取って帰城し、大目付へ提出すること、足痛で延引するのは仕方がないが、馬や駕籠を雇って早々帰着したものがあれば厳重に処罰する。

大要このようである。

「われら、言うなれば文治派を殿は利用なされたのじゃよ、お手前もその仲間じゃ、造士館出仕とあれば、恰好ではないか、衆目、そう見るであろう」

あの実施踏査の役目に伴った富岡文平が斉藤衛守の屋敷を訪ねていた。二人が顔を合わせるのは過日いらいのことであった。当然「遠足」のことが話題になった。話題になるというより、むしろそのことが若い富岡を突き上げて足を運ばせたとするのが適当であったろう。

「利用なされたとの仰せ、いかなる意味あいでございましょう」

「こたびのこと、いや（とおあし）とはいかにも見事な命名でござるな、あの折、遠駆けと仰せられ、われらを驚かせなされたが、まことは遠馬、騎馬ならず徒歩きなれば（とおあるき）、つまり（とおあし）、まことおん巧みな名づけようでござる。いずれにせよ実行にお移しなされるには、われらもこの計画に同心と見做される必要があってのこと、いかがかな、お手前、そうは思われないかな、そうであろうが」

「うかがうほどに、いよいよ残念至極なことでございます、殿のなされよう姑息に過ぎまする、まことに遺憾でございます、われらを囮と申されますか」

「まぁ、言いたもうな、殿さまは藩の全貌をご覧なされる立場にあられる、文と武の調和をお考えなされ、こたび（遠足）をお考えなされた、のう、そうであろう」

「これを文武調和のためとご家老は真実お考えになるのでありましょうか、はたして（遠足）とよびまするもの、武の本筋でござりましょうか、そうとはとうてい思われませぬ、お医師方までお召しは、（遠足）は士を損ずることの万一をお考えでありましょう、いたずらなるかかる行事に士を損じて武の道立ちまするか」

「なぜに、おことそうまでに言われるか」

「真の文、真の武をお上はお考えあそばされねばなりませぬ、御用部屋にあられる斉藤さまには進言の機会もおありと存じて、あえて申し上げるのでございます」

「いかにも、ごもっともじゃ、しかし、もはや矢は弓弦を離れており申す、この老人とて同心じゃが、お殿さまは先手をうたれて封じておしまいなのだ、ご賢明を信じ今回限りの行事として見守ってはくれぬかな」

いちずな富岡をなだめるのに苦労した。

「貴殿はこの挙、賛成でないとして、年齢は該当するのだが、どうするおつもりかな」

「主命に従いまする、ただし、考えがございます、いずれの成り行きお分かりいただけましょう」

「どういうことかな、お手前のことゆえ、短慮のこともあるまいが、自重をな」

玄関式台まで見送りに立って、斉藤衛守は客の背に向かってせめてもの言葉を投げかけた。

安中藩の武術は藩主先代勝尚の文化の頃より槍術は宝蔵院流磯野派で師範に和田氏の義生、近義、義達の歴代を迎え、また剣術は一刀流で根岸文右衛門宜延、宜将、宜徳、宜教の父子歴代を師範としていた。当代勝明にいたって弓術に日置流竹林派を採用し、師範に酒井数馬義徳を迎え、砲術は父勝尚の代は武衛流であったものを高島流に改め、星野闐四郎舎正を指南役に迎え、星野の師高島秋帆にも礼をつくし、教えを請うことのあったことはすでに触れたとおりである。また、その治世の弘化二年には川口の鋳物師に大砲三門を注文し、備えている。決して武の道を疎かにしていたものではない。

いま、「遠足」を加えて意図するところはなんであったろう。藩臣すべてが戸惑いを覚え、当惑してうろたえた、とするのが実際であった。

足の痛みを訴え不参加を選べば、後日、かならず朋輩の誹りをうけるであろうし、届出の定めは任意のごとく見えて、参加を明確に把握するためと承知できても、むしろ強制の傾行を免れないものだ。不参加は士道の面目にかけて許されないように仕向けられている。

一方には六、七人ずつ申し合わせの上とあることでは心知れた範囲が語り合い、チームを作らねばならない。これも実は厄介なことだ。その顔触れは大方職種役柄の同じものに落ち着くであろうが、親疎はおのずから表に現われて上司に把握されよう、途中の関門で通過時刻を記した通過証を受ける定めは歩速の優劣を競わざる得ない仕組みである。親しきもの同士とはいえ、たがいに先後を争わねばならない、などなど、憶測をまじえて騒然の空気が藩士の間にひろまった。

ここで安中板倉家、表高三万石、実高三万三、二一五

石余の藩の家臣団の数はなにほどであったかを知っておかねばならなくなる。

まず格式別に見ると、

年寄	五	小納戸近習	九
用人	三	中小姓	四二
物頭旗奉行	一	中小姓格	二四
留守居	一	中小姓格席	九
給人	三四	徒小姓	二八
医師	三	徒目付徒組頭	二二
大小姓	一三	徒士格	二一
大小姓格	二三	足軽	一九

すべてで二五八名である。

ただし、このうち知行地を与えられている給人、すなわち上士に相当するものは四六人にすぎない。徒侍は九〇という数である。

「遠足」参加を五十歳以下とした資格に該当するものははたして何名であったろう。要所に配置されている本地の郡奉行三、代官四、さらに飛地として下総には香取ほかの所領があり、そこにも陣屋がおかれて別に代官二を配置していたから、これらに付属する定付同心や町同心らは職務上対象から外されたであろうし、身分上軽い中間足軽以下は除かれたものと思われる。概して一〇〇名内外という数ではなかったろうか。

この年の梅雨の入りは旧五月三日であったが、下旬近く、なお霖雨止まぬ毎日であった。

五月十七日、いよいよ「遠足」の実施間近かに控え、コースの通過点にあたる要所の準備がいそがれていた。かねて遠足掛りの命をうけていた海保順三ほかの四名は松井田、横川、坂本、碓氷峠の四ヵ所をおさえて配置についてた。とくに峠は海保が当たることになった。

板倉の家紋左三巴の幟が打ち立てられ、幔幕が張られた。在所の名主、組頭、百姓代などの村役が動員され、城方からは目付も派遣されてこれに詰めた。

五月十七日夜四ッ時（十時）過
御代官久保庭谷五郎殿ヨリ御状ニ付十八日未
明出立安中ニ参候処御家中御徒士方已下之面
面碓氷峠迄御遠足被成候ニ付割附札五拾枚御
渡シニ相成則帰宅之処暮ニ及殊ニ雨天続ニ付
道悪シク候ニ付坂本宿ニ泊リ申候

これは碓氷峠神主組頭の書き残している記事である。昭和三十年五月、碓氷峠熊野権現茶屋東屋曾野あき氏所蔵の文書中より発見され、

『安政二卯年五月十九日
安中御城内御諸士御遠足着帳
碓氷峠　神主組頭』

と標記のある貴重な文書である。そして着順別の姓名

が記録されているというものだ。

ここでは実施の前々日夜更けて峠の熊野権現の神官が代官から呼出しをうけ、翌日未明に発って城に到着し、「遠足」当日にそなえ使われるはずの割符五十枚を受取り、折返し帰路についたが、長雨による悪路に妨げられ、やむなく麓の坂本に泊まったという事情を伝えている点が注目される。割符の五十枚は「遠足」参加の見込数であったかどうか、興味をひくものがあるが、それよりなによりこの神官は未明に発っているのだから、少なくとも明るい中に坂本に着いているはずである。峠道を目の前にして、しかも道に慣れているものが、行き着けば安堵できる社家があるにかかわらず悪路を見て断念したというのである。この事実は重大で見過ごせない記事であろう。

碓氷峠の権現様は　ハイーハイ
わしがためには守り神　ハイーハイ
雨が降りゃこそ松井田泊り
降らなきゃ越します坂本へ

坂本馬子歌も旅人の上り下りに馬の背を借りる難所を唄いあげている。これから行なわれる「遠足」のコースがいかに条件が悪く困難なものかということを物語っている。

「こたびのこと、ご無理なことでございましたな、申すならササラホウサラでござるよ、ときに、千木良様、ご用意のほどよろしゅうございますかな」

代官の久保庭谷五郎だった。本陣に入ってくるなり遠慮のない声であった。

「これは、これは久保庭どの、ササラホウサラとおっしゃいますか、なにが滅茶、なにを無理とおっしゃいますのかな、殿様のご発案を指してですかな」

「さよう、恐れのあることながら、そう思われてなりませぬ、役儀ながら拙者昨夜いらいとくと寝ずのままですわい、こたびのこと、峠への道は憚りながら手前はわが庭のごとく承知でござる、なれば、あえてさように」

相手が医師と見て、心を許すフシもあったようだ。

「お役柄、さようでありましょう、貴殿がご無理とされますものを、藩士の方々の難儀はいよいよ明らか、医師たる手前のご用少しも軽きを願うほかありませぬな」

「お抜かりなく薬ととのえておられましょうな」

「もちろんのこと、ご念にはおよばぬ」

「これは、これは余分のことを、ご無礼お許しあれ、平に、平にご容赦願いまする」

久保庭は夕刻になって横川の本陣に現われ、医家としてここに部署を受けもった千木良昌達と顔を合わせた上の会話であった。

久保庭は代官古参の筆頭として上野尻村を頭村とし、十二ヵ村、原市、八元木、梁瀬、郷原、松井田、新堀、五料、横川、原、入山、坂本におよぶ枢要の地区を受持

として、道程のすべてを子細に熟知しているのだった。

「過日はご重役斉藤様ともども、殿に従われ実地をご見聞でありましたが、御用部屋のほうは斉藤様のお力すでにおよばぬ成り行き、あのお方あたりが頼みと思っておりましたが、まことにアテコトモなく、ナマラハンジャクなご計画、侍どもがブノクド逆立ちいたして、この平時になんの甲斐があるかと、わしゃ思うちょります」

代官職に長く、世故を知る久保庭らしく、ことさら土地の言葉をポンポンまじえ、千木良が医者であることに気を許したもののようであった。

（とんでもない生半可な計画、侍どもが自分の能力の限界に逆立ちして、この平時になんの甲斐があるか）

という激しい内容なのである。

「おチョンベェは海保様あたりと、拙者は睨んでおりますがのう」

千木良昌達はあっけにとられながら、まざまざ旗奉行の海保左次馬の顔を思い浮べ、世辞ものと久保庭が言い切った言葉には千木良としても、過ぎた日のことが思いあたるのだ。坂本宿の夜、年寄斉藤衛守が海保と同席した宴席での苦り切ったあの顔である。

同じ頃、城内の奥書院では板倉勝明がいよいよ明十九日「遠足」実施として大目付へ届けのあった顔触れを書き出した人名簿を近習から受け取ったところへ、斉藤衛守が仕侯してきた。勝明は傍らへ文机を追い寄せて、書きものの手を休めることになった。

「殿にはなにやらご精進であられますところ、参上いたし恐れ入りまする、著述にお励みようす、祝着に存じまする。そのお姿がなによりお似合いでございます」

かつて「西征紀行」「東還紀行」などの著述はいま勝明が向かっていた同じ机上に生れたことを知っているのだ。

「いや、これは碑文の原案じゃ、「漆園之記」として後代へ伝えたいと思うてのう」

「さようでございましたか、ご領内休閑の地に漆苗一〇〇万本、また桐苗の植栽をお勧めなされましたことはまこと先見の明と申せましょう、爺いめも両手をあげて賛成でございました、碑文と申せばいっそうお若きころ安中宿の人馬半減勤を認可した道中奉行石川忠房の生祠と碑石の撰文をなさいました、ご治世の善政まこと枚挙にいとまなく、「極貧窮人名前家内数書上帳」を各村に求められ、「殿様御救殻」を窮民に支給、年貢を三分の一にお減らしなされ、養育奉行を新設し堕胎や間引を取り締まるなど、領民の上につねに仁慈を施され、いまは漆、桐の植栽へのご熱意、殖産への着眼としてまたお見事と申せましょう、碑石の撰文は後世に伝えられましょうものを、首尾よき撰文を願い上げまする」

斉藤衛守は一気に言いおいて、言葉の鋒先を変えた。

「しかしながら、こたびのことは……」

「そろりと、本音を申すのであろう、そちの「遠足」反対は言わいでも、わかっておる」

「もはや帰らぬ覆水、いかんとも……、せめて、今回を限られ、このこと後ひかぬようご分別を願わしゅう存じまする、たってお願いでござりまする」

板倉勝明はわずか十四歳で先代勝尚に代わり襲封していた。先代勝尚が三十五歳で早世したためである。この年ようやく四十六歳であり、斉藤は文字どおり宿老として幼君を補佐してきたものであった。

「責めてくれるな、あえて士風の発憤を促そうため、そちもいったん承知ではなかったか、まぁよい、明日出立の届出の名簿がこれにある、見てみよ」

「それなれば、大目付より聞きおよんでおりまする、初回七名の由、遺憾ながら追々にあたり見回し、参加は増えるでありましょう」

「遺憾ながらであろうか、爺いにはかなわぬな」

「余儀なく早きを競い、峠に達しその刻限を記録した割符を持ち帰るものとあれば、競わぬが不思議でござりましょう、はなはだ下々に無理をお強いでありまする、本来なればお取り止めあってしかるべきもの」

「さように厳しゅう言うてくれるな」

「もとより殿をお痛め申すが本意ではありませぬ、ご政道を案ずるために外なりませぬ」

「わかっておる、わかっておるから、そのへんでおさめおけ、ときに、名簿のうちに思いがけぬものの名がある、富岡など造士館からの参加は意外じゃった」

「お気づきでございましたか、少しも意外ではありませぬ、造士館出仕ゆえ範を示そうためでござりましょう、かのもの律儀ゆえ、あえての参加でございましょう」

「あえてとはなぜに、……」

「されば、あえてはあえてと申すほかありませぬ」

斉藤はそう突き放すように言った。

五月十九日の朝が明けた。旧暦の指定の明け六ツは江戸時代の場合、季節により日の出、日没の相違にしたがい昼夜を六等分するものであったから、一刻の長さは昼夜それぞれの長さにより随分違いがあった。いまこの梅雨時の明け六ツはおよそ今なら午前四時半という早朝にあたる。そして一刻がこの季節では二時間を超えることを頭に入れた上、これらか行なわれる「遠足」のタイムを検証する必要があろう。

どんより曇った梅雨空のもとだったが、第一団の七名が出発地点の坂下門口に集合し、出発合図の太鼓を待ちつつ、大目付と旗奉行海保左次馬の呼名をうけ、なにやら注意をうける様子が見えた。

坂下門は本丸の眼下にある。藩主板倉勝明は三層目の武者窓から密かに一部始終を見下ろしていた。七名は率

先した参加者である。実施を下令した立場からいえば参加者の数は気がかりであった。続く参加はどうであろうか、出来れば激励の言葉も与えたいと思ったが、軽挙を慎む気持ちでそれは控えられた。

一方、海保左次馬が集合の場に臨んでまず気づいたことは、参加者たちの身拵えがきわめてまちまちで、むしろそれは異様とも言えるものだったことだ。

りりしい鉢巻姿があり、裁付袴姿が大方であったが、狩袴、半袴、馬乗袴と多様で、足拵えは草鞋履きが多いが、これも素足、もしくは足袋を用いるの相違があり、さらには足袋はだしのものもある。

いっそう問題なのは腰のものの帯びかたにもある、大刀を下げ諸で背負うものがあり、太刀を帯びず、小刀だけのものがあるところへ、遅れてついに無刀のものが現われたのである。

「そこもと、なぜに腰のものを帯びられぬ」

「ご奉行、格別服装についてはご指示ござらなかったと心得ております、いけませぬか」

「……」

海保は言葉に窮して、相手を睨みすえた。

富岡文平であった。造士館出仕の身分を考えると、海保としてはそれ以上の強腰には出られなかった。

「本日はお役目まことにご苦労さまでございます、旗奉行殿とあって、武者ぶりまことにお見事でございますな」

富岡は海保の陣羽織姿を諷してそんな言葉を吐いた。

「なれど、「遠足」なるもの、いくさ場ではござりませねば腰のものなぞは無用でございましょう、手前そう判断いたし、ことさら軽装にて参加いたしまする、ご不興げにお見受けしますが、お許しあれ」

坂本宿に同宿する夜があったことは互いに覚えも新しいことだ。「遠足」の挙に旗奉行の海保がどうかかわりもつものか、また富岡が宿老斉藤と近い関係にあることなど有無を言わずとも互いに読めているのだ。

「勝手にさっしゃい、もののふの道さようでよろしいものか、考えの相違と申すものであろう」

「いかように相違いたしますとも、手前は手前のもののふの道を違えずに歩みまする」

富岡がさらに鋭い一矢を報いた。

明け六ツの太鼓が打ち鳴らされた。

「いざ、方々出発召されよ、いま一度念のため申す、峠に達したる上は、着到の刻限を記録したる割符を熊野権現社頭にて受取り、持ち帰らるること、よろしいな」

海保左次馬が七名を追いかけ大音声で叫びあげた。

七名のものがまなじりを決し、坂下門に殺到し、たちまちに姿を消した。

折しも、梅雨の雨足がひとしきり、激しくその後ろを

追うようにしぶきをあげた。険しい黒雲が空を覆って暗くなった。どうやら梅雨明けを先触れする雷雨の気配であった。

七名の藩士たちが一人の落伍もなく全コースを踏破して帰城した。かれらがいかに悪路と戦い抜いたあげくの帰着であったかは、ドブねずみ同様に泥濘を浴びたその姿が雄弁に物語っていた。困憊にだれ彼なく眼窩を窪ませ、一瞬目を背かせるほどであった。

岡野文平が一番の到着を果たした。この侍マラソンには決勝点のテープがあったわけでなく、順位を争う定めもなかったが、着順の先後をおのずから避けられない成り行きであった。無腰の勝利はかれの意地であった。

十九日朝安中ヨリ七人御出被成候ニ付早々坂本出立イタシ羽根石ニテ御遠足之御方ト御同道ニ相成帰リ申候。巳ノ上刻頃、始メテノ日ニ御座候ニ付熊野宮ニ御神酒差上、酒少々御出之方江出シ申候。御肴、ヒダラ、ミノホシ大根、キウリモミ、力モチ五ヅツ、茶、右之品差上申候。

さきに夜中城に呼び出され、翌朝安中を発ちながら悪路に妨げられ坂本に一泊した神主組頭が第一団の一行と合流し、峠へ登った事情がここに記されている。しかもまことに暢然、神事が行なわれた雰囲気が伝えられていて、「遠足」の実態の一面をうかがえて面白い。

峠の記録に残るところによればこの挙への参加は十六チームで延べて九十八名であった。

廿三日巳ノ上刻参着、実ハ辰中刻位ト思イ候へドモ巳ノ上刻ニイタシ可申由ニ付少シク遅ク認申候

なんとこれはわざわざ遅い参着記録を望んで、証明を持ち帰ったもののある事実が記されている。だが、このものの氏名は明らかに記されてはいない。

(岡野もあっぱれ、遅きを望めるものもあっぱれのものよのう)

斉藤衛守は「遠足」の事後、すべての経過を吟味し心うちにそんな叫びをもった。

文書の伝えるところ、

(巳ノ上刻頃)

また、

(辰ノ中刻位ト思イ候へドモ巳の上刻ニイタシ)

とあり、ストップウォッチのない時代で「頃」とか、「位」という曖昧さであるのも愛嬌で、峠への到着は巳の上刻あたりに妥当な平均値を求められそうである。

ここで、七里余、約二十九キロをどのくらいで踏破したものか検証すると、いまの暦の六月一日(旧四月二十二日)の日の出は四時二十七分、日没は十八時五十一分である。なんと日中は十四時間二十四分になる。夏至は

旧暦の五月十三日であるから、「遠足」の行なわれた五月十七日はもっとも日中の長い時期にあたる、往時の十二支、十二刻のとらえ方で日中を六等分し、これを計算すると一刻は約二時間三十分に相当し、上、中、下刻の三等分の数値は約五十分になる。

峠到着は巳の上刻として五時間五十分。あるものの達したとする辰の中刻では四時間十分ぐらいということになる。峠道への九十九折、一、二〇〇メートルの高所への急坂を考慮するなら、健脚を誇るハイカーが平地で持続出来る速度で一時間五キロというから、かなりの速さである。この試練に耐えた安中藩士は九十八名、個々のタイムは詳らかを得ないが、（士風を試そう）とした藩主の意図は十分足りるものがあり、以後この挙を繰り返すことはなかった。

今日のマラソンにこれをなぞらえ「侍マラソン」と呼んだり、わが国マラソンのルーツなどとこれをとらえることは不当であり、無理なことに思える。

板倉家の参勤交代による江戸参府は毎年八月、御暇帰国は二月、雁の間詰、三代勝清の老中を除いては歴代奏者番を勤めている。「遠足」の挙は在国半年の間の試みたものだ。梅雨あければ間もなく参府である。

江戸詰の間に、遠く領国の空を思い、あれこれ思いを馳せる時、あらためて「遠足」の愚挙に気づかぬほど当代藩主板倉勝明は不明の君主ではなかったはずである。

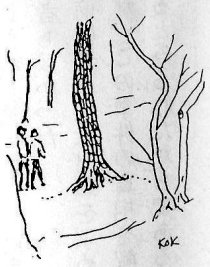
この時より二年後、安政四年四月十日（公表十九日）安中藩第七代藩主板倉伊予守勝明は四十八歳の若さで死去している。戒名の智照院殿英俊源雄大居士の称はこの人の英邁を物語るようであり、板倉氏始祖ゆかりの愛知県西尾市貝吹町長円寺に歴代とともに葬られている。

「遠足」の挙はかれの短い生涯の一失であったかも知れない。

（六・三・三〇）

前橋公園殺人事件（完）

佐々木一郎



十二

「ありません……。まいった」

漆原政吉は、ちょっと頭を下げ、握っていた駒を将棋盤の上に投げ出すと、とたんに笑い出した。

「ハハハハ、強くなったねえ。若先生。ほんとうにまいったよ、さっきの三七角打ちには……。どこであんな鬼手を覚えなすったんですい？　それに、振り飛車、それもお得意の四間で攻めてこられちゃあ、あっしにはふせぎようがねえよ。えらく強くなったもんだ」

「おいおい。そんなおだてには乗らないよ。そちらさんじゃあ、ちゃんと芋筋をお見通しだったくせに」

琴野田真一郎は、火照ったほほを軽くたたきながら言い返した。部屋にはいつの間にか石油ファン・ヒーターが点火され、室温もかなり高くなっていた。

「若先生。今度の昇段試験には必ず出ておくんなさいよ。あんたが早く四段を取ってくんなきゃ、あっしはもう将棋は指しませんからね。三段が二段に、先番で指したり香車をはずされたりするんじゃみっともねえや」

政吉は、日本将棋連盟の三段の免状を持っている。前橋支部の幹事をつとめているが、定職のほかに、賭け将棋をしているらしいという噂もある。

「しかし、考えてみると、月日の経つのは早えもんだねえ。中学二年生だったあんたに将棋を教えたのはついこのごろだと思っていたのに、もうあっしより強くなっちまった。年には勝てねえや」

政吉は、肩の盛り上がったガッチリとした体格だが、さすが、六十代に入ってからはめっきり白髪が目立つよ

うになった。
長身の真一郎は、座ったまま政吉を見下すようにして微笑した。顔は、相変わらず青白い。
政吉と房江夫婦は、もと、琴野田医院に勤めていた。政吉は事務員、房江は臨時看護婦だったが、父母の愛情が薄かった真一郎にとっては、ヨチヨチ歩きのころからまるで自分の子どものようにかわいがってくれたこの二人は、もう肉親以上の存在になっていた。
現在、政吉と真一郎を強く結びつけているのは将棋で、この夫婦が奥次郎の媒酌で結婚し相次いで医院を去ってからも、家が近いせいもあって、真一郎は、診療が終了するとよくこの家に出入りしていた。
「ところで、例の刑事だけどさ」
房江が、眉を顰めていった。
「あの年とったじいさんと若造の二人組かい？」
「うん。また、何か嗅ぎ廻っているらしいよ」
彼女は、夫たちが対局しているときは隣の部屋で編み物をして待っているが、一段落したのをみると部屋に入って来て茶を入れたり食事を出したりする。もちろん、ときに酒も出す。知らない人が見たら、まるで親子団欒の光景である。
「あっしたちのアリバイなら、もう散々しらべあげて、納得してるはずなんだけどなあ」
「また、何か新発見でもあって、そのウラをとるために走り廻っているんじゃないのかい？」
真一郎が口を挟んだ。
「ちげえねえ。とにかく、〈このうちから、あの時間に、出掛けて行った姿を見た〉なんてガセネタをたれ込む奴でもいた日にゃあ、すぐに御用とくる。そして、徹底的に調べやがるんだ。いまのサッてえのは」
賭け事で何回か警察に逮捕されている政吉は、警察に好意を持っていない。
「だって、あの晩はまちがいなく二人ともいたよ」
房江が笑いながらいうと
「それが駄目なんだよ。おめえのような身内じゃ証人にならねえんだとよ」
「ま、そんな馬鹿な……」
しかしこのころ、前橋署は、漆原夫妻や真一郎のアリバイ崩しに躍起になっていた。課長の陣頭指揮のもとに、捜査課刑事総動員で、再度の近辺の聞き込みを行った。
なかでも、横谷警部補を長とする班は、事件の日の午後九時から十時までの間に漆原家に掛かってきた電話や訪問者について徹底的に調査したが、結局、この時間帯には一回の電話も一人の訪問者もなかった。
けれども、真一郎だけは、前橋署に任意出頭を求められた。加害者の疑いは消えたが、この事件の真相を解き明かす重要な情報を握っているとみられたからである。

面接には、捜査主任の吉岡と蛭田があたった。
「警部、わたしのアリバイについては、この前の調査ですでに証明ずみだったのじゃないのか？」
部屋に入るや不愉快そうに詰め寄る真一郎を、吉岡は、軽くなだめながら、
「まあまあ、先生。けしてあなたを疑っているわけじゃないんですよ。ま、お掛けください。出がらしですが、お茶をどうぞ……。ただね、あなたの関係した出来事と今度の浩氏殺害事件がどこでどう繋がっているかを知りたいだけなんですよ」
「じゃあ、あの前橋公園で浩君と争ったことで呼ばれたのかね？」
「ま、それもその一つなんですけどね。じゃあ、そのトラブルの真相を聞かせてくれませんか？」
吉岡は、やわらかい口調で、いきなり核心に触れた。心なしか銀縁の眼鏡がキラリと光る。
「真相って？　いや、単なる口喧嘩だよ。浩君とは子供のころからの顔なじみでね。お互いに遠慮のない口を利くんですよ」
真一郎は、さりげなく答えた。吉岡はその顔つきをじっとみつめて、
「しかしねえ、先生。浩氏との口論の原因は、奥様と浩氏との関係をあなたが嫉妬したんだという噂もあるんですがねえ」
「止めてくれよ。浩君とうちの真弓は、大学時代の同窓生なんだ。クラブ活動も一緒だった。だから、親しくしていたって不思議でもなんでもないんだ」
真一郎は、吉岡を、睨みつけながらいった。イギリス製らしい紺のスーツが長身によく似合い、昂然とした姿勢を崩さない。
吉岡は、〈怒りやすい性格。ちょっとしたことにすぐカッとなる〉と書かれた調書にチラッと目をやって
「まあまあ、そんなに大声を出さないでください。ただ問題は、何でもないとわかっていても、二人が親しくしている現場を見るとついカッとなってしまう、その火種が何か知りたいんです。
そうでもなければ、人の見ている前であれだけ派手な喧嘩はできませんよ。聞けば、あなたは、暴力を振るったそうじゃありませんか？」
「いや、それは」
痛いところを突かれて、真一郎はたじたじとなった。
「たとえば、二人がデートしている現場を見たとか、浩氏が奥様へ出したラブ・レターを読んだとか、何かその伏線になることがあるじゃないんですか？」
吉岡は、なかなか、追求の手を緩めない。
尋問が延々と続き、夕食のために休憩に入ったとき、根負けしたのか、これ以上糊塗しきれないと覚悟をきめ

たのか、真一郎は、とうとう口を割りだした。
「本当は、ね。わたしは、警部のいうとおり、浩君と真弓の仲を疑っていたんだ」
「おやっ？　さっきは、同窓生だから疑ってないっていいましたよ」
「それが、信頼できる人からの話だったからねえ」
「ほほう、その信頼できる人とは？」
「……」
「奥様の日記ですか？　それとも、浩氏の手紙？」
「いや、小奴、つまり、鈴木京子さんなんだよ」
「な、何ですって。小奴！」
吉岡ばかりか、蛭田までが飛び上がった。

真一郎は、しばらく口を閉じたのち、意を決したように話し出した。
「ご承知のように、琴野田家は、父奥次郎の独裁家庭でね。わが家のあらゆるうごきは、一切合切、父の裁量どおり行われていたんですよ。父に逆うことは琴野田家と縁を切ることを意味していたし、もちろんわたしも、例外じゃなかった。
そのワン・マンの父も、小奴、つまり、京子さんに対してだけは、なぜか絶対の信頼を寄せていてね。だから、彼女がいい出したことはほとんど聞き入れられるし、また逆に、父のことはすべて彼女が承知していたといってもいいんだ。死後彼女に二億円の生命保険金を残したのをみても、父の気持ちがわかるってもんですよ」
「お父上が、それほど、小奴を信頼した理由は何だったんですか？　ふつうなら、お妾さんなんて、単なるセックスの対象としか考えないものなんですがね」
真一郎は、うなづいて、
「わたしもそう思ったんだが、どうも違ったようです。十五年前に母が死んだときは、父は落胆のあまり、再起不能とまでいわれたんです。それが、十年前に小奴を得てからは、人が変わったように明るくなって、また、研究に打ち込むようになったんです。
これは、彼女の優しさや明るさの影響もあったでしょうが、何といっても父に対する献身的な愛情が父をあそこまで立ち直らせたんですよ。
いい方は妙ですが、父は若い彼女の中に母の面影を見い出していたんだと思います。母も、父のためにいるような昔の良妻型の女性でしたからね」
「うーむ。そこのところがよくわからないんですが、あなたは、彼女に対して嫉妬を感じないんですか？」
吉岡は、少し当惑した顔付きになってたずねた。蛭田も、聞き耳を立てている。
「初めは、不潔だと感じましたよ。妾を囲うなんて許せないと思いました。彼女に対しても、金目当ての卑しい女だと軽蔑してました。しかし、月日がたつにつれて、

ふたりの間の信頼関係が色恋沙汰ではなく、また、単なる〈旦那とお妾さん〉の関係ではないことを知ってから、だんだんその不信感がなくなってきたんですよ。
父は、小奴の美しさにひかれたというより、その純粋さを見込んだんですね。だから、それまでの父に対するわたしの印象は、ただ、偉い人、こわい人、めったに笑わない人というものだったから、彼女に向ける父の明るい笑顔を見て、実はビックリしたんです。〈ああ、この父にも、人間らしい感情があったんだなア〉って、はじめて気がついたんですよ」
真一郎は、ほほえみさえ浮かべている。
「それで、小奴さんの言葉を信じたわけですね」
「ええ。この人のいうことならまちがいないって思ったんです。」
「一体、どういうことをいわれたんですか？」
「いや、簡単なことですよ。『真弓さんと浩さんの仲は、ほんとうかも知れなくてよ』って」
「……」
真一郎のいい方には、京子の言葉を信じて疑わない真情のようなものがあった。ことによると、彼も彼女の魅力に取りつかれているのかも知れなかった。
「それから、これは聞きにくいことなんですが、奥様は正常分娩できる体なのに、なぜ人工授精などなさったんですか？」
「ああ、そのことねえ。これは、父の命令でした。真弓の実家の父は、わたしの父と親しい友人でしたが、事業に失敗して大きな借財ができたのを、父に肩代わりをしてもらっていたんです。億単位だと聞いてます。わたしは、父の希望で、真弓と見合い結婚しましたが、そのときにはすでに、このことは約束されていたんだそうです。もちろん、わたしは何も知らされていなかったので、最期まで人工授精に反対したんですが、真弓に事情を打ち明けられて、渋々承諾しました」
「なるほど。そういうことだったんですか」
吉岡は、何度もうなづいた。
「いやあ、幼いころ、本で読んだジェンナーのことを思い出しましてね」
真一郎は、さっきとはまったく違った声音で呟いた。
「ジェンナー？　ああ、種痘の」
「そうです。科学者の子供は惨めなものだと思いましたよ」

十三

次の日曜日、上田警部補と蛭田部長刑事は、琴野田邸を訪れて、真弓夫人に面会した。
琴野田邸は、琴野田医院の裏手にあった。先々代の院

長時代に建てられたという、大正の面影を残した重厚な西洋館であった。その横には、これも二階建ての「人工授精研究所」が、寄り添うように建っている。

二十畳ほどの広さのある静寂な応接室で待っていると、静かに、和服姿の真弓が現れた。噂には聞いていたが、いかにも良家の若奥様らしい美しい女性だった。

すでに真一郎から琴野田家の内情は聞いていたので、蛭田は、早速、本論に入った。

「……。ところで、奥様は、家族でもない小奴、いや、京子さんがお屋敷に入り込んでいたことをどうお考えですか？」

蛭田は、真弓の顔をまぶしそうに見ながらたずねた。

「あら、京子さんは、家族同様な方ですわ。むしろ、あたくしは、一番信頼できる方だとおもっていますの」

真弓は、ほほえみながら答えた。その形のよい指先にはダイヤの指輪が光っている。

「おやっ、そんなに信用なさっていいんですか。だって、京子さんは、小奴というちゃきちゃきの芸者ですよ」

「もちろん、それを充分承知のうえで申し上げていますのよ。すばらしい方だと思いますわ。それとも刑事さん方は、芸者は信用できないとお考えですの？」

「いえいえ、そんなことはありません」

「あたくしは、京子さんとお付き合いするようになって、〈人の性格なんて、身分や職業とは何の関係もない〉ってことを、つくづくと知りましたわ」

真弓は、二人に、茶をすすめながら

「正直いって、あたくしも、お会いする前は、あの方を手練手管の上手な人だと疑っておりましたわ。

でも、今は違います。長い月日がたつうちに、あの方の義父に対する愛情は本物だとわかってきましたの。

一口に芸者といいますけれども、あれほど明るくて心が澄んでいる方って、ほかの世界にもそうはいらっしゃらないのではないかしら。

あの方のお陰で、暗かった琴野田家に、明るさが戻ってきたといってもよろしいとおもいますわ」

いつの間にか部屋には、さわやかな初冬の日差しが深々と入り込んでいる。

「そうですか。ところで京子さんは、一か月のうちにいく日くらいここに出入りしていたんですか？」

「義父の奥次郎が存命中は、月に四、五回ぐらい研究所のほうに見えていましたわ。たまには、こちらへもお茶にお呼びしていました」

「研究所では、彼女は何を？」

蛭田には、なかなか琴野田家と京子との関係が飲み込めないようだった。

「さあ、わかりませんわ。多分、義父の手伝いをしていらっしゃったのだと思いますわ」

「じゃ、看護婦さんたちはどうしていたんですか？」

「あら、彼女たちは、真一郎が使っている看護婦ですわ。第一、義父は、研究はほとんど大学の研究室でしておりましたの。秘密の多い研究なので、こちらの看護婦は使わなかったようですわ」

答える真弓の顔には、人工授精で受けた陰りはどこにも見えなかった。

「じゃあ、京子さん一人で手伝っていたんですか？」

蛭田の言葉には、すこし焦りがみえた。

「さあ、それはわかりませんわ。あたくしは、研究所のことは一切タッチしておりませんので」

蛭田が、攻めあぐんでいるのを見て、上田警部補が助け舟を出した。

「あの、奥さん。話は違いますが、浩氏の事件の日の午後九時から十時までの間はどこにいらっしゃいましたか？」

上田は、ほほえみながらたずねた。小奴をこれほど褒められては、彼も、悪い気持ちがしなかった。

「あら、そのことは、前に、別の刑事さんにお話したはずですわ」

「看護婦の花井園子さんとご一緒だったわけですね」

「ええ、あたくしは、絵を描いていますの。こう見えても、二科会の会員で、県展に二回も入選していますの。意外でございましょ。ホホホホ……。園ちゃんは、月、水、金と週三回、習いに来ますの」

ちらっと白い歯がこぼれた。

「しかし、勉強は七時半から九時までだったね」

「ええ」

「じゃ、九時から十時までは何をしていたんですか？」

上田は、冷えかかった茶をゴクンと飲んで、たずねた。

「あの日は、主人が政さんのお宅に伺って遅くなることがわかっていましたので、絵のお勉強が終わってからも、園ちゃんとおしゃべりをしておりましたの」

「もう一人の看護婦さんは、帰ったんですね？」

「ええ、江田さんにはご主人も子供さんもありますから、定時の六時に帰りましたわ。それに、あの人は、園ちゃんと違って、お宅が新前橋ですから」

新前橋は、利根川を隔てた新市街地で、利根橋を越えて行かねばならない。

「花井さんの家の方は近いんですね」

「ええ、ここから、歩いて約五、六分のところにある『花井屋』という雑貨屋さんですわ。ですから、いつも、家に戻って夕食を済ませてから出直して来るのですの」

「ところで、奥様」

今度は、蛭田が横から口を出した。ちょうどそこへ、女中が茶菓子を運んで来て茶を入れ替えたので、蛭田は、彼女たちが立ち去るのを待って

「大変失礼なことをお聞きしますが、何分、殺人事件がからんでおりますのでお許しください。あの、奥様の

人工授精のいきさつについては、真一郎先生にお聞きしましたが、これは、奥次郎博士のご依頼だった、と受け取ってよろしいでしょうか？」

と、たずねた。

「……。はい」

真弓は、端正な顔をしばらくうつむけていたが、やがて、そう答えた。

「しかし、わたしには、いくら博士の要望があったといっても、正常分娩できるあなたが人工授精の手術を受けるなどとは、よほどの事情があってのことと思うんですが……」

「いえ、あの、真一郎が申しました通り、あたくしの実家の都合でございますわ」

「さぞかし、博士をお恨みになったことでしょう？」

「いいえ、義父の研究は、尊い研究だと思って協力いたしましたの」

真弓が伏し目になって黙り込むと、室内に、一瞬、重苦しい空気が流れた。

彼女は、蛭田がいくら〈義父奥次郎への恨み〉の言葉を引き出そうとしても、乗ってこなかった。

琴野田邸を辞してから、二人は、「花井屋」を訪れた。この家は、何代か続いた老舗の荒物屋で、昔風に、雑貨のほかにもパンや駄菓子などの食べ物や日常薬などを扱っていた。

堀り炬燵のある八畳の客間で、二人はゆったりとした恰好で、まだ子供っぽい感じがする園子から、真弓の言葉のウラをとった。

「あなたは、いつから琴野田医院に勤めているの？」

蛭田が、まず口を切った。このような若い娘から話を聞き出す技術は、五十四才の彼のほうが、三十二才の上田よりも優れている。

「今年、高校を卒業してから勤めています」

園子は、ニコニコして、答えた。近く顔を合わせてみると、それでも、娘の香りが結構漂っている。

「小奴という人に合ったことある？」

「うん。大先生が亡くなってからも、何回か来たわ」

「どんな感じの人？」

「きれいで明るくて、優しそうな人」

「ふーむ。話したことがある？」

「ない。けど、若奥様は親しくしているみたいよ」

園子は、好奇心にかられた目をして答えた。

「九月十六日の夜のことを離してくれないかね」

「九月十六日の夜？」

「ほら、蛎沢浩さんが殺された夜さ」

「ああ、あの夜ね。いつもと同じように、帰ってから夕飯を食べて、若奥様に絵を習いに行きました」

「七時半から九時までだったね。それから、君は帰ったんだろう？」

蛭田は、誘導尋問のような聞き方をした。

「ううん、あの日は、若先生が遅く帰ることになっていたんで、あたしも残って、おせんべや蜜柑をたべながらいろいろおしゃべりしたわ」

「そう。じゃ、だいたいどのくらいの時間いたの？」

「そうねえ、一時間ぐらいかなあ」

新前橋の江田の自宅を訪れたときは、午後一時を回っていた。しかし、十年以上も琴野田医院に勤めている正看の彼女は、勤務先の内情を語ることに抵抗があるらしく、口が重くてあまり収穫がなかった。二人は、婦人会館地下食堂で、遅い昼飯を取った。

お絞りで手を拭きながら、上田は

「チョウさん。われわれは、事件の核心に近づいていると思うかい？」

と、自信をなくしたように、たずねた。

「もちろん、近づいていると思いますよ」

蛭田は、定食のヒレカツをナイフで突っつきながら、ハッキリと答えた。

「これから小奴に話を聞くんだけど、また、真一郎や真弓のように、はぐらかされちまうのかねえ」

「いえ、そんなことはありませんよ。警部補。それぞれの話だけじゃわからなくても、三人の話を総合してみると、必ず何か矛盾があるもんですよ」

「うん。あとは、どうまとめていくかだなあ」

上田は、コップの水を飲んだ。まだ定食には手をつけていない。

「この事件のなぞは、大きくわけると四つになりますね」

蛭田は、フォークにのせた飯を口の中にほうり込みながらいった。

「まず、洋子の子供の明は果たしてだれの子か？　蛎沢家で騒いでいるように奥次郎の子か、それとも浩の子か？　このことが一つですね。

それから、真弓は〈実家の借金〉という理由だけで人工授精の手術を承諾したのだろうか。わたしは、それにしては、真弓の表情が明るすぎるように思えてならないんですよ。これが、第二です」

蛭田は、Vサインのように指を二本立てた

「三番目は、真弓がなぜ小奴をあれほどまでに褒めたたえるのか？　そりゃあ、小奴の明るいかざりっ気のない性格はわたしも好きです。しかし、ここまでくると、あのこが、犯罪に加担していないとはいいきれなくなってきました。現段階ではですよ。

しかし、真弓は、不自然なほど小奴を褒めている。

別に、わたしは、医者の奥方と芸者は身分が違うなんて野暮なことは考えませんがね。どうも、二人の間には

何かあるような気がするんですよ」
「たとえば、二人が口裏を合わせて犯罪を隠匿するというようなことだね」
上田は、ようやく茶わん蒸しの蓋を取りながら、あいづちをうった。
「それ、それですよ。純粋に尊敬し合っているのなら問題はないんですが、もし罪をかばい合っているとすれば、どちらかが犯人の可能性だって出てきますよ」
「うーん。それはいえるなあ。どうも、そう考えると、小奴の供述が大きな意味をもってくるねえ」
上田は腕を組んで大きくうなづいた。
「はい、そうなんです。そして、その結果いかんでは、〈真犯人はだれか〉の問題にも触れてきます。警部補」
「わかった。ま、僕に任せてくれ。小奴とは幼友達なんだ。何としても聞きだしてみせる」

十四

ホテル・ニューマエバシの屋上に三つの人影があった。小奴と上田、そしてその後ろには蛭田がいた。今日は、高気圧の影響で、あれほど毎日ふきすさんでいたからっ風がぴったりとやんで、一日中晴れ上がったおだやかな冬日和となった。
午後七時。空にはまばゆいほどの星が輝いている。
「もう、山じゃあ雪が積もっているだろうなあ」
上田が、ポツンとつぶやいた。
「そうねえ。子供たちは、スキーや橇遊びで大騒ぎだわね」
小奴の京子も、しんみりといった。彼女は、今日は、お座敷着のままである。
二人は、いつの間にか谷川岳の方角を眺めて、それぞれ故郷花咲村を偲んでいた。村内には小学校の分校きりないので、中学生になると水上中学校の近くにある寄宿舎に入って通学し、夏休み、冬休みのような長い休暇には山を越えて自宅に帰って来る。この休みが、子供たちにとっては、たまらなく楽しいひとときなのだ。
「ところで、京子」
上田は、意を決したように京子の方に向き直って
「今日は、京子のことについていろいろ聞かなければならないんだ」
と、宣告した。京子は、じっと上田の顔を見つめて
「あら、そうなの。何でも答えるわ」
と、いった。しかし、二人ともなかなかいつものような同級生同士のくだけた口調になれない。
「琴野田先生とのことをくわしく話してくれないか」
「ええ、いいわ。
パパは、あたしにとっては、お父さんでもあったし恋人でもあった人よ。あたしが、〈生きていてよかったなあ〉って、つくづく思ったのは、パパ、琴野田先生に会うことができたお陰なの。
啓くん。きみは、花咲村で一番貧乏だったあたしの家を覚えているでしょ。もともと貧乏だったのに、母ちゃんに死なれると父ちゃんは酒浸りになっちゃって、あげくの果てにはばくちで借金をたくさん拵えちゃったの。あたしが、中学二年生のときよ。
その借金を返すために、あたしは、中学卒業と同時に今の芸者置屋の『松本』に売られたの。売るなんて言葉は法律で禁じられているから、表面上は就職したように繕っているけど、金を受け取って自由を縛られるんだから結局は売られたのよ。
中学二年生のころからパパに出合うまでの十年間のあたしの生活は、そりゃあ口では言えないほどつらい毎日だったわ。うちにいたときには、毎日父ちゃんに怒鳴られたりなぐられたりしたし、『松本』へ来てからは、休みももらえないで芸事を仕込まれたわ。それよりもっと辛かったのは女中仕事よ。まるで体がボロ雑巾のようになるまで家の者にこき使われたわ」
京子は、一気に語った。
「うーん。その話は薄々聞いていたけど、随分苦労したんだなあ。それなのに君は、けしてそんなそぶりもみせなかった」
上田は、戸惑ったようないい方をした。
「我慢してきたのよ。耐え抜いてきたの。……。それにあたしって、生まれつき物事を明るく考えるたちだし、我慢強いのよ。だから、陰では泣いても人前では絶対に涙を見せないように努力してきたの」
「確かにそうだったろうな。君と二十年ぶりに出会ったときだって、相変わらず朗らかな京子だったものなあ」
上田は、ホッとしたようにあいづちを打った。
「あら、今は別よ。今のあたしは、何ひとつ不自由してない幸せいっぱいの京子よ。芸者も自前だから、おかあさんも独立した人格として扱ってくれてるわ。あたしの悲しくて暗い人生は、十年前にパパ、琴野田先生に出会ったときで終ったのよ。
それ以来、あたしは、このとおり屈託のない明るい女に戻ったの」
「相手が六十爺さんでもか？」
いつの間にか、上田は、同級生向きの乱暴な言葉遣いになっていた。
京子は、微笑しながらいった。
「恋愛に年の差はないわ。年が離れていたって、うまくいく人はうまくいくのよ。琴野田先生は、あたしを心から愛してくれたわ。もったいないほど。
啓くん。あたしは、生まれてこのかた人に心から愛されたことなんかなかったの。だから、先生に愛されて涙

が出るほど嬉しかったの。そしていつの間にか、この幸せを壊さないためには、どんな苦労も厭うまいと心に誓ったの」

京子の目は、心なしかうるんでいるようだった。満点の星が、三人をじっと見つめている。

「啓くん。そして気がついたら、先生のことばっかり考えてるあたしに変わっていたの。先生のいない人生なんて想像するだけでも怖くなっちゃうあたしになっていたの。

これが、あたしの初めての恋だったのね。

先生もまた、五年前に奥様を無くしてできた大きな愛情の傷口を、あたしという女で埋めようとなさったのね。

だからあたしも、一生懸命に仕えてきたの。

でも、楽しかったこの十年間も、アッというまに闇の中に走り去って行ってしまったわ！」

「……」

京子は、それでも語り続ける。

「あの方は、世界的な学者として表面上は華やかな生活を送っているように思われていたけれど、ほんとうはいつも一人ぼっちの孤高の人だったのね。天才の宿命といってしまえばそれまでだけど、お淋しかったのよ。

だから、あたしでもお役に立てたのね」

「ふーん。それで、借金を肩代わりしてくれたのか。しかし、年の差があんなに違っていちゃあうまくいってなかったんじゃないのか？」

上田は明らかに、京子の心をここまでとらえた奥次郎に嫉妬している。

「それがうまくいったのよ。

啓くん。きみは独身でわからないと思うから、後学のために話してあげるわ。

そりゃあ、あの方もお年寄りだから性生活を送ったのは初めの二、三年きりだったけど、それでも、その間の性生活では、いつもあたしは満足させられていたわ。何回、いえ何十回もエクスタシーを味合わせていただいているの。筋骨たくましい若者でもないし、シックス・ナインの技術さえ知らないあの人に抱かれただけで、体が濡れて、あまりの幸せさに、必死になってあの方に取りすがって、のけ反って泣いたのよ。

啓くん。そんな京子の姿、想像できる？　おぼこ娘じゃあるまいし、この小奴ねえさんともあろう者がよ！

ね、わかる？　啓くん。このことが。

あたし、トコトンまで先生に惚れていたのよ」

「……」

上田の背後で黒い影が動いた。蛭田も、息をのんで、京子の告白に耳を傾けている。

やっと、気を取り直した上田が

「しかし、博士は、むかし、現蛎沢夫人まさ子さんに横恋慕して、惣吉との婚約が整ってからもプロポーズして蛎沢家を怒らせたことがあったそうじゃないか？」

と、怒ったようにいい返した。京子は、大きくうなづいて、

「ああ、あのことね……。あれは、惣吉さんのお母さんのお指図だったの。お母様は、お父様と違って、秀才の青年医師琴野田奥次郎がお気に召したのね。だから、わざわざ琴野田医院までたずねて来て、〈万一、間に合わなくて、惣吉さんとの間に婚約が整うようなことがあっても、もう一度だけプロポーズしてほしい。それまでには必ず夫を説き伏せてO・Kを取って置くから〉と、約束して帰ったそうよ。

学問一筋で人を疑うことを知らないあの人は、それを真に受けてプロポーズしただけなのよ。結局、そのことはお母様お一人の胸の内だけに仕舞われて、何も知らないまさ子さんは怖がるし惣吉さんは怒るし……。

そういうわけだったの」

「ふーむ、そうだったのかあ。でも、京子にはその方が反ってよかったんじゃないのか」

「そうねえ。人間は同時に二つの道を歩けないっていうからどちらともいえないけれど、少なくともあたしはお陰で幸せになれたわ」

京子の顔が上気している。上田が、今までに見たこともない京子の顔になっている。彼は、いつの間にか職務質問から逸脱して、京子の身の上相談になっているのに気づいて、あわてて訊問に立ち戻った。

「真一郎夫人の真弓さんのことだけどね。あの人は、どうしてあんなに君のことを信じているのかな。まるで尊敬しているような口ぶりだったぜ」

京子は、クスッと笑って

「あら、尊敬だなんて……。あたしと真弓さんは親友なのよ。あたしにとっては、彼女は、先生の次に心の許せるともだちなの」

明るく答える京子をじっと見つめていた上田は、

「おいおい、京子。どうして君までがそういういい方をするんだ。君がそういうふうに上手に真実をはぐらかしてしまう限り、この事件の捜査は一向に進展しないんだ。けれど、こういう事件だから、君自身が進んで供述してくれなくちゃあなあ……」

といって、ホッとため息をついた。

上田の様子に気づいた京子は、島田の簪をいじっていた手をあわてて下ろすと

「どうしたの、啓くん？　あたしが真弓さんと仲良くしてしてはいけなかったの？」

と尋ねた。上田は、京子の方にキッと向き直り、

「京子！　僕は刑事だぜ。君がいつから真弓さんと親しくなったのかぐらいは、ちゃんと調べてあるんだ。

君たちが親しくなったのは、五年前、つまり真弓さんが人工授精手術を受ける直前からさ」

「何ですって？　警部補」
それまで黙ってそばに控えていた蛭田が、大声を上げた。彼は、つかつかと上田のそばに歩み寄ると
「それ、どういう意味なんですか？　まさか、真弓夫人が人工授精実験を承諾したことと、この殺人事件が関係があるなんていうんじゃないでしょうね？」
蛭田と上田の視線が、期せずして京子に集中した。やがて彼女は、観念したように笑いだした。
「ホホホホ。さすがは刑事さんね。負けたわ。啓くんも、よくそこまで調べたわね。立派だわ。何でも話す約束だったから、話すわね。
確かに、その頃から二人は急に親しくなったのよ」
「原因は？」
上田の声が少し震えた。
「……」
「君が、真弓さんを説得したんだね」
「……」
「真弓さんの実家の借金の返済のほかに、何か有利な条件を出したんだね」
「……ええ、出したわ」
「それは、なんだったんだ？」
「浩さんの精子よ」
「な、何だって？」
上田と蛭田は、異口同音に叫んだ。
「真弓さんに人工授精手術を受諾してもらうために、あたしは禁を犯して人工授精の秘密の一端を知らせたの。『浩さんがオナニーで出した精子は、培養液の入ったシャーレの中に二、三時間漬けて置くの。それを、あたしが、先生に内緒で、弱アルカリ性の培養液に入っている真弓さんの卵子に注ぐから、まちがいなくあなたと浩さんの子供がうまれてくるはずよ』って話したの」
「それで？」
「そしたら、真弓さんは安心した顔つきになって、先生の実験に協力することを承諾してくれたの。あとで聞いたんだけど、真弓さんは、大学生のころからずっと浩さんを慕っていたみたいね」
「ああ、それで真弓夫人が暗い顔をみせなかったのか」
上田も蛭田も、合点した。
「だけどね。今考えると、そのときあたし、取り返しのつかないことをしちゃったの。
真弓さんに、『それじゃあ、明くんはだれとだれの子になるの？』って聞かれたとき、あたしは返事しなかったの。考えてもごらんなさい。いくら手術の承諾を取るためとはいって、こんな大事なことを先生に内緒で打ち明けちゃって、あたしは体が震えるほど後悔していたの。もう明くんのことを話すどころではなかったのよ。でもそれが、真弓さんの口から浩さんにどう伝えられたかは、あの恐ろしい噂が立ったことで大体想像がついたわ。

あたしは、大変なことをしてしまったんだわ」
「蛎沢家の中に広がった妄想は、それが直接の原因になったのかも知れんな」
上田も、憮然として面持ちでつぶやいた。
「きっとそうに違いないわ」
「ついでに聞いておくけど、真一郎氏に『真弓さんと浩さんの仲は、ほんとうかもしれない』っていったことはあるのか？」
「え？　ああ、あのこと。あれは何かの話の中で、すこし真一郎さんをたしなめてやったのよ」
「何だって？　たしなめた言葉だったのか」
「ええ、真一郎さんが、あんまり政さんちへ入り浸ってばかりいるので、真弓さんが、淋しがっていたから」
「ふーむ」
上田は、署で供述したという真一郎の青白い顔を思い浮べた。
このとき後ろから、蛭田が素っ頓狂な声を出した。
「警部補！　浩氏の精子が真弓さんの方に廻されたとすると、蛎沢家の洋子さんへ廻す精子がなくなってしまいますよ」
「あっ、そうか」
上田と蛭田は、顔を見合わせた。もしそうならば、やはり明は浩の子ではないことになる。
その様子をながめた京子は、笑って、
「それは心配ないのよ。シャーレは、いつも、二つ用意してあるの。だから、洋子さんちの明くんは、間違いなく、浩さんと洋子さんの子供よ。
あら、ことによると真弓さんもそういうふうに考えたのかしら。もしそうだったとすると大変なことだわ」
とにかく、これで四つの謎のうち三つは解けたことになる。残るのは、第四番目の〈真犯人〉だけとなった。
「京子。浩氏が殺された夜、午後九時から十時の間はどこにいた？」
「あらっ、今度は、あたしのアリバイね。それは、前にも宝生警部が見えたときお話ししたわ。うちにいたけれど、証明できるのは、おかあさん一人だって」
「そうか。けどね……」
上田は、現場に落ちていたフランス製のハンカチーフが京子の持物であることを確認していたが、なぜかその事実を切り出すことがためらわれて、一瞬沈黙した。
それを、ふたたび上田が苦悩していると考えたのか、京子は、
「あらあら、また、しょげちゃった。ホホホホ。名刑事になったり、ダメ刑事になったり、啓くんは子供の頃とちっとも変わっていないのね。
いいわ。あたしの取って置きの情報を提供するわ。きみが、名刑事だという証拠になるような、ね」

「え？　何だい、それ」
「二、三日、待ってて」
京子は、にこやかにほほえんだ。

十五

尾瀬ヶ原で、女性の死体が発見された。所持品から、この女性は、前橋市峰町三丁目九十八鈴木京子（三十三才）と判明した。死因は、飲み残しの睡眠薬や遺書から、覚悟の自殺と判定された。
悲報を受けた上田と蛭田は、直ちに現場に急行した。
死体は、深い雪に埋もれた尾瀬ヶ原の入口近くに、まるで眠っているような顔つきで横たわっていた。正面には、白い衣をまとった燧岳が見える。三メートル近く積もった雪は、尾瀬沼も山小屋も飲み込んで見渡す限り広大な雪野原となっている。夏になると顔を出すミズバショウの群生も浮き島も、まだ底に沈んだままである。
京子の死体は、まるで、大きな白いキャンバスに描かれた人物画のようであった。美しい死に顔だった。

上田は、蒼白な顔で、自分あての遺書の封を切った。
「啓くん。ごめんなさい。できれば、生きていて君に話したかったけれど、あとあとのことを考えると、こうするより仕方なかったの。
この間、きみと蛭田さんに話したことは、全部ほんとうです。
つけ加えたいことは、真弓さんと心を許し合える親友になれたのは、人工授精が直接の動機にはちがいないけれど、それよりも、お互いに親の犠牲になった同士が同情し合ったためなの。それぞれちがった育ちの二人だったけれど、お互いに励まし合っていくうちに親しくなったんです。だから、いくら真弓さんを責めても、あたしのことを聞き出すことはできないと思います。
だけど、担当の刑事さんが啓くんということになると、話はちがってきます。幼友達で、初恋の人だったきみに恥をかかせることは、あたしにはできないの。
啓くん。浩さん殺しの真犯人は、このあたしです」
上田は、そこまで読むと、おもわず目頭を熱くした。
今にも、京子がそこに現れるような気がした。
「あの晩、『明くんのことで話がある』と浩さんを呼び出しました。そして、『明くんは、正真正銘、浩さんと洋子さんの子供なんです。奥次郎が自分自身の精子を使ったという噂は根も葉もないデマなんです』と、繰り返し説明したの。
けれども、浩さんは、かたくなにあたしの話を信じてくれないばかりか、ついには、『俺が琴野田奥次郎を殺したんだ』とさも勝ち誇ったようにしゃべりだしたの。
これには、驚きました。
そのときまで、先生はただの心臓発作とばかり思っていたあたしは、目の前が真っ暗になりました。あたしにとっては命にも代えがたい大切な人をこの男が殺したんだとわかって、もう、髪の毛が逆立つほど怒りがこみ上げてきたの。
そして、隙を見て、そばに落ちていた石で浩さんの頭を強く打ちすえてしまったんです。
すぐに自首しようと思ったけれど、今すぐでは差し支えることがあったんです。
その一つは、あたしの病気のこと。あたしは、いつの間にか癌に侵されていたの。けれど、早期発見だったので、『すぐ手術すれば治る』って琴野田先生にいわれて、入院手術の準備をしていたの。それが、突然先生に死なれて、もう生きる張り合いがなくなってしまったことです。
もう一つの理由は、先生の一周忌にお墓を建ててから自首しようと考えたの。もちろん、琴野田家には先祖代々の立派なお墓はあるけれど、あたしは、先生ひとりを葬ったお墓を建てたかったんです。そして、できるなら、分骨してもらって、あたしもそこへ入れてもらいたかったの。
そんなことで、ついつい自首を遅らせてしまいました。
しかし、啓くんの追求が、意外に早くて、とてもそれまで逃げ切ることはできないと知ったの。
啓くん。君は、立派な刑事になっていたのね。正面からは、とてもまぶしくて見ていられないほど素敵な警察官になっていたのね。うれしかったわ」

（なにいってるんだい。僕なんか、ずっと京子から情報を貰いながら、やっとここまで来たのに……）
上田は、小さな声でつぶやいた。
「死ぬ場所については、いろいろ考えてみたの。
そりゃあ、ふるさとの花咲村が一番いいのにきまっているけど、それじゃ知り合いのひとに迷惑をかけると思って、ここにしたの。ここは、なんとなく花咲小学校の裏の景色に似ていると思えないかしら。ね、啓くん。
あたしは、いま、ふるさとの大きな懐ろに抱かれて眠りにつきます。
きみと別れるのは辛いけれど、あちらには先生が待っていてくれます。あたしは、永遠に、先生と一緒なの」

（ばか……）
上田は、終わりまで読まないで、遺書を封筒に戻し、じっと死体の方を眺めた。そして、ほろりと涙をこぼした。（完）



幻妖城異聞（一）

三戸岡道夫

（一）

深山の国は、山の奥である。どこを見ても山と深い谷で、いたるところに椿の森があった。

かって幻妖城とよばれた妖かしの城は、その山の高みに偉容を誇っていたが、いまは無い。贅をつくして建てられたその城は、城主が死ぬと、まもなく炎上して、地上から姿を消してしまったからである。

幻妖城が炎上すると、しばらくして、織田信長の築いた安土城も炎上した。城主の後を追うようにして、悲劇的な最期をとげた二つの城には、どこか似通ったところがあった。

幻妖城の城主は、水清寺晃長といった。

狂気の城主として名を残したその晃長の肖像画が、いま、四枚ほど、菩提寺に残っている。

晃長には、おのれの肖像画を描かせる趣味があったらしく、かかえの絵師に何枚も描かせては、御殿の広間や、居間に飾らせていた。

晃長が死んだとき、その一部がとり外されて、菩提寺に納められたために、炎上をまぬがれて、今日に残ったのである。

四枚の肖像画は、菩提寺の浮見堂に飾られている。

いちばん年令の若い肖像画の一枚は、髪形からして、晃長が元服前の、十二、三歳ころの、ものと思われる。腰から上の半身像で、まだ、あどけなさの残る顔を、やや、ななめ左にむけて、なにかを見つめている。このように、いつもなにかを見つめつづけている、それが晃長の幼いころからの性癖といってよかった。

きわだった特長は、顔の中央に輝く眼であった。すこし上向きかげんに描かれた二つの眼は、はっと、人を惹きつけるほど大きく、つぶらで、金属的な硬質さで、いちずに輝いている。

だが、その少年の瞳には、どこか、うつろで、虚無的なところがあるのだった。この瞳の傾向も、後につづく三枚の絵に共通している。

二枚目は、晃長が城主の座についたころの肖像画である。十九歳ということになる。

その眼はあいかわらず大きい。晃長は背の高い、痩せ形で、色白の青年に成長しており、長身のためやや小さめに見える顔は、利かぬ気の濃い眉を、きびしく寄せている。

肖像は、袴をつけた涼やかな姿の全身像で、左足をすこし前にだし、やや腰をひねった恰好である。腕は下にたらしているが、なにか腕をもてあましているようなところがあった。右手に扇でも持たせたら、よかったのかもしれない。

青年になった晃長の顔には、城主としての尊大さに並んで、美しいものへの憧憬が、狂おしいほどにあふれていたが、そのなかには、もの思いにふける憂鬱さが入りまじっていた。

この肖像画も、顔をななめ左にした姿勢は一枚目と同じであり、両眼も、上むきかげんの左の一点を見つめている。だが、やはり、どこかうつろなところがあった。

三枚目の絵は、城主となってから、相当の年月がたったころの肖像画と、推定された。城主になったばかりのころの肖像画とくらべると、晃長なりの落着きと、重厚さが身につき、やや肥りぎみの顔になっている。

だが、顔の角度がななめ左むきなのは、前の二枚とほとんど変っていない。そして、左上向きの両眼がうつろなのも、前の二枚と同じであるが、そのなかには、暗く重いものが沈んで、いらいらした落着きのなさが感ぜられる。この頃の晃長の心にひそむ、苦悩のようなものが、そこに見てとれた。

最期の四枚目の絵姿は、ちょっと変ったものだった。いわば、晃長の武者絵とでもいえばよかろうか。鎧兜に身をかため、出陣の衣装で盛装した晃長が、床几に腰掛けている。両足を開いて大地を踏みしめ、膝におかれた右手には軍配がにぎられ、上半身をまっすぐにのばしている。

戦争とか、荒事のきらいな晃長にしては珍しい、りりしい武者姿なのであるが、よく見ると、鎧兜は源平合戦のころの古い形であり、晃長が実際に使ったものではない。すなわちこの武者絵は、自分の合戦時の姿を描かせたものではなくて、晩年、晃長が好んだ仮装、すなわち平家の公達の若武者姿に仮装したときの、絵姿だったのである。

あこがれの平家の若武者に扮した晃長の両眼からは、うつろさが消え、誇らしさと、よろこびに輝いているが、そのかわりに、狂気が色濃くしのび寄っている。

鎧兜に身を固めていても、顔の角度がやや左上にむけられ、視線もおなじ方向をさまよっているのは、依然として前の三枚とおなじであった。

さて、こうした四枚の肖像画に共通しているのは、やや左に向けられた顔の角度である。生涯、晃長は絵師の前に立つと、いつもおなじ姿勢をとるのが癖になっていたのであろう。それは意識してか、無意識なのか、推しはかるすべもないが、そこに、なにか、晃長の偏執狂のようなものが、感ぜられるのであった。

もうひとつ、どの絵にも変わらないのは、その眼であった。いつも、ななめ左上の遠くを凝視する金属的な大きな瞳が、どれもうつろで、狂気を宿しているのである。だから、どの肖像画も、姿形はちがっても、眼だけは、まるで、おなじ眼を共通に嵌めこんだようにみえるのである。

いつも遠い一点を見つめている眼は、なにを見ていたのであろうか。晃長が見ていたのは、この世のものではなかった、という感じがするのである。

（二）

後世へ狂気の城主として伝えられている水清寺晃長は、幼いころから、深山城の天守へのぼって、遠い景色をながめるのがすきだった。その傾向は、少年期、青年期になってもかわらず、成長するにしたがって、ますます傾斜を深めていた。

晃長は十六歳になっていた。

元服の日が近ずいている。元服すれば、病身の父に代わって、やがて城主の地位を継ぐことになろう。だが、晃長はそんなことにはまったく無関心で、今日も天守にのぼっていた。

深山の国は、森が美しい。天守の眼下にひろがる樹海のみどり、見えがくれする家並の陰翳、ひときわあざやかな寺院の屋根の勾配や、五重の塔、はるかな出城の白壁のかがやき、四方に走る街道や小径のあいだを縫って、銀の帯のように川が流れている。

視線を背後に廻すと、山の高みに椿城がそびえ、その彼方に、雄大な鬼姫連山がかすんで見えた。

椿城は、この深山城から北へ十里（約四十キロ）ばかりのところにある、別城である。規模は小さいが、歴史は古い。晃長の祖父が精魂をかたむけて築いた城で、芸術の粋が投入されている。だから、戦略のための城というよりも、いわば別邸とでもいえばよかった。春、夏、秋、冬、たえず城主は家族をつれて、この館へ憩いに行った。したがって、呼び名も、いつのまにか、椿城でなく、椿館の名でよばれるようになっていた。

晃長も、館の美しい形や、念入りに装飾された館の内部、その山頂からの眺めが、ことのほか気に入っていて、幼年時代からの大半を、椿館ですごしてきた。

椿館の白亜のきらめきを遠望すると、晃長の気持ちはにわかに高ぶってきて、

「これから椿館へ行く。馬を曳け！」

階段をあわただしくかけ降りると、側近に命じた。

「かしこまりました」

天守にのぼった後は、かならず椿館へ行く晃長の習性を心得ている側近たちは、すでに馬の用意をととのえて、階下でひかえていた。

晃長は武将なのに、武術がきらいである。例外的に、ただひとつ得意なのが、馬術だった。

晃長の馬は、白馬である。深山の国では、白馬は神の使いだとされている。晃長は白馬に、神椿と名をつけて、ことのほかかわいがっていた。

白馬に赤い鞍という、華やかな色彩の馬上に、若草色の乗馬袴で晃長はまたがると、二人の側近をしたがえて、椿館へむかって駆けだした。

森から森へ、三頭の馬は、はねるように走る。森には杉、桧、楠、椿など、さまざまな樹木がおい茂り、その下かげには、春の匂いが濃密にむれていた。椿の大下の下には、点々と落椿が散り、森は椿の花ざかりであった。

身体が熱く、汗ばんでくる。

顔にあたる風が、心地よい。

そのとき、森の奥から、

ピ、ピ、ピーッ

かん高い、鳥のなき声が聞こえてきた。だが、鳥の声にしては、大きすぎる。それは、人の声であった。

晃長の視界に、華やかな色彩がひろがったかと思うと、かるい蹄の音が近ずいてきて、

「晃長さま」

さえずるような声とともに、馬に乗った姫が近づいてきた。

家老の娘の、朱葉であった。家老の水清寺定国は、晃長の叔父にあたる。ということは、朱葉は晃長の従妹である。

「また馬に乗っているのか。おてんば娘め……」

晃長がからかうように言うと、朱葉はすこし上気した顔をあげて、

「晃長さまが出掛けたと聞いて、わたくしもいそいで駆けてきたのです」

「馬などに乗っていないで、琴のけいことか、書を習うとかせぬと、母上が心配するぞ」

「心配させておけばいいのです」

朱葉は定国夫婦のひとり娘である。なのに、すこしも女らしくないのが、両親の頭痛の種であった。普通の娘のように、琴をひいたり、美しい着物を着たりすることに関心を示さず、馬に乗って野山を駆けまわるのがすきな、じゃじゃ馬であった。

美しい顔を化粧することもなく、長い黒髪を束ねただけで、野袴をはき、手綱をにぎった朱葉は、

「これを首におかけなさいませ」

馬上から、真紅の花輪を差し出した。それは椿の花をひもに通した、花輪であった。

「いつのまに、こんなものを作ったのだ」

「晃長さまより、わたくしのほうが馬の名手でございますわよ。晃長さまよりあとから城を出ましても、わたくしのほうが先に森につき、紅椿を集めたのです」

じゃじゃ馬娘が椿の花輪づくりをするなんてことは、絶対ないのだったが、晃長にたいしてだけは別だった。ときには竜胆の花を両手に盛りこぼれんばかりにつんで、晃長の部屋へ持ってきたり、また、炎のような紅葉の枝を折って、見せにやってきたりもした。

晃長が馬上で片手をのばして花輪を受け取ろうとすると、朱葉はその手をはらいのけて、直接自分の手で花輪を晃長の首にかけた。すると、二人の頬と頬とがふれあいそうになり、野性の花のような朱葉の匂りが、晃長の鼻をくすぐった。

花輪を晃長の首にかけると、朱葉はひらりと馬上に身をおどらせて、

「じゃ、またね」

甘い声をのこして、華麗な蝶のように、森の奥へ消えていった。

晃長はふたたび馬を走らせた。走ると、椿の花輪が首のまわりで、炎のようにゆれた。

やがて視界がひらけて、椿館の石垣が見えてきた。石垣のうえにそびえる優美な館にむかって、晃長は一気に坂を駆けのぼった。

城門を入る。

馬が、地上にひろがる真赤な色彩の氾濫を、波のようにけ散らした。

右手の石垣のきわに、椿の老樹が、祭りの華麗な装飾のように、咲き誇っていた。地上の真紅な色彩は、そのおびただしい落椿の堆積だったのである。

樹が巨大であるので、落椿の数もおびただしく、それが散るがままに放置されているので、樹の下が落椿で真紅にうまり、あたかも城門にひろがる血の海のように見える。

晃長は、一瞬、血の海を馬で渡ったような錯覚におちいり、なにか不吉な出来ごとの前兆ではないかと、ふと気になった。

「落椿を早々に掃除せよ。なにか、不吉じゃ」

出迎えた家臣たちに、叱りつけるように命じた。

「はっ、ただちに」

晃長は馬から降りると、天守への階段をのぼっていった。

天守閣は三層であるが、立地が、深山城よりも高い山の頂にあるので、そこからは、一段と広く、雄大な、深山の国土の眺めを満喫することができた。

鬼姫連山が、深山城の天守で見るときよりも、力強い迫力で、眼の前に立ちはだかるように見えた。

眼下にひろがる鬱蒼とした樹海は、びっしりと地をおおった苔の海を見るようで、天守の高みからその上に身を投げても、ふんわり抱きとめてくれそうにみえた。

森のかげに、天神湖の水面が細く長く、横たわっていた。

方向を南にかえると、樹海のかなたに、深山城の天守閣や、深山の里が見え、そのはるか遠くに海が見えた。海に小さな島がかすんでいる。荒磯島という。

晃長は、深山城の天守のときと同じように、その一大俯瞰図を、魅入られたように眺めつづけていた。

だが晃長は、なにをそんなに眺めたのであろうか。

晃長が見ていたのは、これから自分が城主になって納めていく領国の様子を、遠くから視察しているわけではなかった。晃長は、人間の潜む領国には、関心がないのだった。晃長が見ていたのは、領国ではなかった。海でも、島でもなかった。

その、ずっと彼方にあるものだった。それは、はるかな空の果てにひろがる、白昼夢、この世のものでない幻想だった。

もっとはっきりいえば、夢の城。心に描いている幻の城。晃長の、人間世界への無関心さが、裏返しとなり、城の白昼夢となって、そこにひろがっているのだった。

(三)

そのとき、森の急な山道を、駆けのぼってくる一頭の馬が見えた。

馬は猛烈ないきおいで、椿館を目ざして走ってくる。だが、放心状態の晃長は、それに気ずかなかった。

馬はまもなく館に到着した。

近習が取次ぎに、天守への急な階段をのぼってきた。晃長が天守で遠望しているときは、誰もそばにいることを許さず、また、声をかけることも禁じていた。その禁をやぶって、近習が階段をのぼってきたのは、よほど緊急の用件がおきたのに、ちがいなかった。

「申し上げます」

だが、晃長は、はるかな空を見つめたままで、返事をしなかった。振りむきもしない。近習は気がせいていた。

「申し上げます。緊急でございますので」

「何事だ」

どっぷりつかっていた白尽夢の世界から、突然呼びもどされて、晃長は不快げな顔で振りかえった。

「御殿から、急ぎの使者がまいりました」

「なに……、父上から」

「はい、至急、城へお戻りくださるように、とのことです」

「なにか起きたのか」

「使者がお待ちしております」
晃長を不安がおそった。晃長はやっと現実にもどると、足ばやに階段をおりた。
「何事だ」
階下の暗がりに、使者がひれ伏している。
「はい、お方さまが急にお亡くなりになりました」
「えっ、母上が！」
晃長はおどろきで、目まいのようなものを感じた。
「死んだなどと、信じられん。けさまでは、あれほどお元気だったのに」
晃長は、朝、母に逢ったばかりである。異常はなかった。
「ご自害でございます」
「自殺……」
晃長は二度の衝撃をうけた。使者とそれ以上、問答を重ねているひまはなかった。
「馬を曳け」
と叫ぶと、晃長は馬にまたがり、駆けだした。
城門を出るとき、椿の落花が、ふたたび晃長の眼に入った。
「なぜ、すぐに掃除をしておかぬ」
晃長には、落椿の血の海が、母の死因のようにおもわれたのである。
晃長は落椿の海を、馬で荒々しく蹴ちらすと、城外へ走り去った。そのあとを、使者と側近の馬が追った。
森をぬけて走る晃長の頭のなかは、まっ白で、なにも考える余裕がなかった。
深山城へ着く。城中は上を下への大さわぎかと思ったが、思いのほか平静であった。
城主の館は三の丸にあり、本御殿、奥御殿、向屋敷の三つに分かれている。母の遺体は、奥御殿の座敷に安置されていた。
顔をおおった白布をとりのぞくと、自殺とは思えない、安らかな顔があらわれた。晃長は、母の死顔に、自分の頬を重ねた。すると、その顔の冷たさによって、はじめて母の死が実感された。
（それにしても、なぜ、自殺を……？）
晃長の母、萩の方は、突然の発狂によって、天守閣の最上階からとび降りて、自殺をはかったのだという。人々が気がついたときは、すでに萩の方は天守にのぼって、もう止めようがなく。
「お方さま、お危うございます」
侍女たちがさけび、
「おやめください」
二、三人の家臣が、天守への階段をかけのぼったが、まにあわなかった。萩の方は天守の欄干から身を宙におどらせると、矢のように落ちて、息たえた。
もちろん、発作的な自殺であったから、遺書はなく、

自殺の原因はわからなかった。
晃長がやっと母の遺体から身をおこすと、座敷の片すみに、ひとりの老女が、うずくまっているのが見えた。全身をおおうほどの白髪の老女は、もう長いあいだ、そうして座っているようだった。
（誰だろう）
そのとき、老女が顔をあげた。
「やっ、そなたは笛川ではないか」
笛川は、萩の方の忠節な侍女だった。
「見まちがいなさるのも、むりはございません。この通り、笛川の髪は、おどろきと悲しみで、まっ白になりました」
笛川の丈なす黒髪は、じまんのものだった。それが一瞬にして白髪となり、だから、その老女が笛川だとは、晃長にわからなかったのである。
「これまでの笛川は、お方さまといっしょに死んでしまったのです。ここに座っているのは、笛川の脱けがらでございます」
死んだ萩の方は、京都の公家の娘に生れた。が、その貧乏公家は、水清寺家からの経済的援助を得んがために、娘を深山の国へ嫁がせたのである。そのとき笛川も、萩の方につき添って京都からきたのである。
「お方さまは、いつも京を恋しがっておりました。京へ帰りたいと、いつも泣いておりました。だが、それがかなわぬうちに、お亡くなりになってしまいました」
笛川は、まるで異界からの言葉のように、そうつぶやいた。
（母が京へ帰りたがっていた）
晃長がはじめてきく言葉であった。自分が知らない、母の一面を見た気がした。母は嫁いできてから、晃長を生み、広大な屋敷のなかで平穏にくらしているものとばかり思っていたのに、そうではなかったのだ。晃長は愕然とした。
「京恋しさが、とうとうお方さまを、もの狂いにまで追いつめてしまったのでございます」
京育ちの萩の方には、深山の国の生活は、たえられなかったのだという。
「でも、それはほんとうの理由ではありません。ほんとうの原因は、二人の女狐でございます」
笛川は、女狐という、毒々しい言葉を投げつけた。
女狐というのは、父頼之の二人の側室を指した。一人は鶴の前、もう一人を亀の前といったが、当然のことながら、萩の方はその二人をきらっていた。晃長も、ものごころつく頃から、そのことを、うすうすは知っていたが、それが母を発狂にまで追いつめるほどのものだったとは、知らなかった。
二人の側室のうち、若い亀の前のほうを、とくに頼之は愛していた。亀の前は、京生まれの萩の方とちがって、

深山の国生まれの女で、その情熱的な女ぶりが、頼之の気に入っているのだった。

亀の前は、寿丸という男子を一人生んでいた。晃長にとって、異母弟である。頼之が萩の方よりも亀の前を愛していたように、子供についても、晃長よりも、弟の寿丸のほうをかわいがっていた。だから晃長は、亀の前も、寿丸も、きらいだった。

だが、発狂の原因がなんであれ、母が発狂によって自殺したと知ったとき、晃長は心の冷えるような不安におそわれた。それは、

（自分は発狂の血を引いている）

という、暗い血への恐れであった。

（自分もいつかは発狂するのではないか）

という不安が頭をかすめて、慄然としたのである。

晃長は、今朝、遠望のために、天守へのぼったばかりである。しかし、母が身を投げたその天守を、もういちど、自分の眼でたしかめてみたいと思った。

晃長は部屋の障子を、すこしあけた。

天守閣は、石垣と木立のあいだの空に、そそりたって見えた。

晃長は外に出ると、石段の坂道をひとりで歩み、天守閣の最上階へのぼった。欄干から身をのりだすようにして、母が落下した地面のあたりを見下した。

吸い込まれていきそうな地表との落差に、ふと晃長は魅せられて、母は天守の高みから落下したというよりも、宙の魔力に魅せられて、空のかなたへ飛翔したのではないかと思った。

晃長は、母の死骸が片づけられたあとの、地表の血の痕跡を見下した。そして、うつぶせに倒れた、母の姿を想像してみた。華麗な羽衣のようにひろがった着物の模様、そのうえに大きく扇のように散った黒髪……。それは悲惨というよりも、華麗な幻影として、晃長の脳裏に映った。

血跡のまわりには、真紅の色彩が、点々と散っている。それは、赤い椿の落花だった。

深山城は椿の森でかこまれているが、天守閣のわきには、ひときわ巨大な椿が茂っていた。花は、その梢から、散っていた。

そのとき、人の気配いがして、振りむくと、笛川が立っていた。晃長の後をつけて、天守へのぼってきたのであろう。天守へのぼるときは、誰も近づくのを禁じていたが、笛川だけは別であった。

「お方さまは、椿の花になったのでございますよ」

笛川は、うわごとのように、そう言った。

「お方さまは死んだのではございません。天守から椿の森へ翔びたって、椿の花になったのでございます」

笛川の言おうとしていることが、晃長にはわかるような気がした。

「ごらんなされませ。あの枝々に咲いている椿の花も、地表に散った無数の落椿も、みんなお方さまの化身でございます」

それを聞いたとき、晃長は、椿館の城門に散りしいた、落椿の海を思いおこした。あの落椿の血の海は、母の流した血だったのかもしれない。

奥御殿では、夜を徹して、萩の方の通夜が行われた。

その夜は気温がにわかに下って、季節はずれの冷えこんだ夜になった。その夜の雫のような、

ぽたり

ぽたり

という音が、闇のなかから聞えてきた。それは、しめって、柔らかく、すこし重みのある、空中に浮遊する魂が、凝固して、地表に落ちるような音だった。

ぽたり、ぽたり、

と、緩慢に聞えてくるかと思うと、ときには、

ぽた、ぽた、ぽた、

と、あわただしく連続して、聞えてくる。

それは落椿の音であった。

最初は屋根の上から聞えていたものが、夜がふけるにつれて、地表、木の葉、草の上、石垣の上と、あらゆるところから聞えてきて、深山城が落椿の雨につつまれたようであった。それは全山の椿が、萩の方の死を悲しんで、散り急いでいるかのようだった。

一夜明けた。

障子をあけると、

「ああ、これは、なんと……」

城の人々は、朝の光のなかへ、嘆声とも、驚きとも、恐怖ともつかぬ声をなげた。

深山城の森の紅椿は、一夜にして散りつくして、梢には一輪の花もなく、そのかわり、地表は真赤な落椿でうめつくされて、深山城は、血の海に浮かぶ城のように見えたのであった。

（四）

萩の方が死んで、しばらくすると、晃長は供養のために、持仏堂を建てたいと思うようになった。生涯を、城作りの狂人としてすごした晃長の、最初の徴候があらわれたといってよかった。

持仏堂を建てようとした、そのときの気持は、もちろん、母をおもう純粋な気持ちからであった。

どんなものがよかろうかと、晃長はあれこれ考えた。平凡でないものがいい。母の霊がなぐさめられような、優美な堂。

晃長の頭に、法隆寺の夢殿が浮かんだ。夢殿の姿は、絵で何回も見たことがあるし、いちど訪れて、拝観したこともある。八角形の、屋根の曲線がたおやかに宙にの

びた、おおらかな飛鳥時代の堂の美しさは、くっきりと晃長の頭にのこってた。母の霊をまつるには、この上ない建物の姿に思われた。

（夢殿の形をかりよう。母を供養するためならば、聖徳太子もお許しくださるであろう）

と、晃長はただちに、そうきめた。

問題は、晃長の持仏堂の構想が、そこで止まらないことであった。持仏堂をきっかけにして、晃長の夢が、どんどん翼をひろげてしまった。

晃長はたんに持仏堂を建てるだけでは、満足できなくなったのである。

（持仏堂と城とが、いっしょにならないか。持仏堂を拡大して、城にしてしまうのだ）

いつのまにか持仏堂の上に、晃長の夢みている城の姿が、二重うつしになっていくのだった。

幼いころから晃長は、城にあこがれていた。それも、美しい城に。城へのあこがれが、いつしか、自分で城を作りたいという願望へ、ふくれあがっていった。天守からの遠望のとき、晃長は、その願望の城、あこがれの城の姿を、空のかなたに夢みていたのである。

その長年の願望が、持仏堂の建築を機会に、いっきに噴き出したのである。

持仏堂は、いつしか晃長の計画のなかで、城へと形を変えてしまっていた。

（持仏堂だけでなく、ひとつの城郭を作るのだ。城郭の中央に夢殿を模した八角形の持仏堂を建てる。城郭の隅々には美麗な櫓をつくり、その櫓の群と持仏堂とを、回廊でむすぶのだ）

持仏堂を建てるとすれば、菩提寺の境内に建てるのが普通なのに、こうした晃長の願いから、深山城の郭の内部に取りこまれることになったのである。

（城の西北には、まだ空地がある。そこへ城郭をのばせばいい）

と晃長は考えた。これまでは、ただ空想していただけの城が、自分の手で実現するのだと思うと、その充実感が、晃長を狂おしいものにした。

考えがまとまると、晃長は、笛川に相談した。

萩の方が死んでからの笛川は、もっぱら晃長の世話掛りになっていた。萩の方にたいする忠勤を、そのまま晃長の上に移したように、笛川はまめまめしく仕えた。

相談を受けると笛川は、

「お方さまも、あの世で、きっとおよろこびになられることでございましょう」

と涙をながし、

「まずは、鏡に、おうかがいしてみましょう」

「それがいい。わしも鏡に聞いてみたいのじゃ」

鏡とは、笛川が京から持ってきている、古鏡であった。その古鏡には、人の未来を見通す神通力があるのだった。

だから、なにかを決めるとき、笛川はかならずその古鏡に、おうかがいをするようにしていた。

笛川の父は神官であった。神社は京都からすこし離れた山里にあり、御神体が鏡であった。笛川は乙女のころ、父のもとでしばらく巫女をつとめていたことがあった。白衣に緋の袴をつけて、神に仕えるのである。笛川には天性の霊感があったのか、ときに父に代わって神に祈ると、父が受けられない神の啓示も、笛川なら受けることができた。

神社には、神鏡を模した古鏡が、たくさんあった。神社に願をかけた人間が、満願の日に、神社に納めた鏡である。笛川は、深山の国へくるとき、古鏡のひとつを、護身用に持ってきたのである。

古鏡は八角神鴉鏡で、銅製の鏡面は磨きあげられて神秘的な色をたたえ、裏面には鴉の群が図案化されて、精緻に彫りこまれていた。その昔、誰か貴人が満願成就を記念して、神社に納めた鏡のひとつで、神霊のやどる鏡とされていた。

古鏡は別室の神棚にまつってある。

笛川はうやうやしく古鏡の前にぬかづくと、

かけまくもかしこし

おお神のみ前に……

のりとをとなえはじめ、しばらく笛川の声が、神の啓示を求めてひそやかに流れた。やがて、笛川の身体が前後にゆれはじめると、古鏡からたちのぼる神意と、ほんとうに対話しているように、晃長には見えた。

祈りが終わりに近くなったころ、急に笛川は身体を小きざみにふるわせ、なにものかを拒否するような動きを示した。笛川のなかに、なにか異変がおきたらしい。

が、まもなく笛川の祈りはおわった。

「御鏡体さまも、若君さまのご孝養のほどを、いたくめでておられます」

「それはよかった。それで、持仏堂を八角形にすることも……」

「結構とのことでございます」

しかし、笛川は、祈りの最期の段階での古鏡のお告げを、晃長には言わなかった。

祈りが終わるころになって、古鏡は、

（持仏堂を城郭の中に取り入れるのはよいが、それを機会に晃長はしだいに築城に淫し、ついに身を滅ぼすであろう）

という、恐ろしいことをつげたのである。最期のほうで笛川が、拒否するように身をふるわせたのは、このためだった。

（このことは、ぜったい、若君へ申しあげてはならない）

笛川は固く心にきめた。その笛川の蒼ざめた顔を見て、晃長は、

「なにか、あったのか」
「いえ、以上のとおりでございます。持仏堂はりっぱに、お出来になりましょう」
つぎに晃長が古鏡の前へぬかづくと、にぶく光った古鏡の奥を、じっと見つめた。鏡面に霧のような白い影が、あらわれてきた。それが、ある形に固っていったかと思うと、そこに城の形が浮かんできた。
どこの城なのか、それはわからない。三層の美しい城だった。とくに、張り出した破風の曲線が美しい。城郭を設計するのに、参考になる美しさだった。
「笛川、紙と筆をくれ」
晃長は、その城の形を、すばやく紙に写しとった。
やがてその城は消えて、つぎの城があらわれた。晃長は、その形も手早く写しとった。こうして古鏡の奥から幻の城が、現れては消え、消えては現われ、晃長のまわりには、城の写生図が散乱していった。
持仏堂建設のことを、父の頼之に相談すると、病身で床に伏せがちな頼之は、気が弱っているせいか、わけもなく感激して、すぐ承諾した。
「お前はやさしい気持の子供だと思ったが、よくそこへ気がついてくれた」
ただ、持仏堂のために深山城の城郭を大きく増築し、その中央に建立するという点には、やや難色を示したが、それも笛川の、
「古鏡にお伺いをたてましたところ、城郭との一体がよろしいとの神意でございました」
という、とりなしで、頼之は承諾した。

（五）

それから三年の歳月が流れた。
晃長は十九歳である。萩の方の死んだ翌年に晃長は元服し、すがすがしい青年になっていた。
三年前に建築に着工した持仏堂は、九分通り出来上っていたが、まだ完成してはいなかった。持仏堂を建立するだけでなく、城郭のなかに組み込むという、大規模なものだったからであるが、それに加えて、晃長が、凝りに凝った注文を、次から次へと出すので、必要以上に時間がかかったのである。
増築された郭の四隅には櫓が築かれ、四つの櫓のなかの一つを、三層の天守造りにしたので、その小天守と、これまでの五層の天守閣との組合わせの妙が、深山城に新たな美観を与えていた。
それに加えて、城郭の中心に建立された八角形の持仏堂の優美さが、賞賛のまとであった。晃長は持仏堂の内に、この世の天国、浄土を作ろうとしていた。その参考のために、わざわざ匠たちを、法隆寺の夢殿、平泉の金光堂などを見にいかせるという、力の入れようであった。

持仏堂の天井はいちめんの飛天の図で、羽衣を風になびかせた天女が、あまた、空に舞っていた。壁面には浄土曼陀羅の世界が、精密に描きすすめられていたが、まだ完成していなかった。素描の段階から晃長の意見で、構想が何度もかわったり、ほぼ完成近くなってからも、気に入らないと、描き直させたからであった。
正面には須弥檀（しゅみだん）が作られていた。三体の仏像を安置する予定である。だが、この仏像も、目下、仏師が精魂こめて彫っている最中で、まだ完成していない。堂内の浄土感をもりあげるために、須弥檀のまわりや、柱、天井、入口の扉などは、精巧な彫刻で飾られ、ふんだんに朱と金を使った色彩で、まばゆく輝いていた。
こうして、晃長は、萩の方が死んでから三年間というもの、ほとんど持仏堂と城郭の建築に、かかりきりだったのである。

この三年のあいだに、晃長を魅了したものが、もうひとつあった。能楽である。
深山城のなかには能舞台があり、これまでにも晃長は、そこで演ぜられる能を、しばしば見てはいた。しかし、それほど晃長は能楽に興味を示さなかった。能楽を理解するのには、まだ晃長は幼なかったのかもしれない。それが、嵐が襲うように、とつぜん、能楽が晃長のなかへ侵入してきたのである。
萩の方の死の打撃が強かったためか、頼之はますます気弱になり、身体の衰弱もはなはだしかった。頼之の無聊をなぐさめる能の上演が、ひんぱんになった。
そんなある日、清阿弥という能楽師が京からまねかれて、桜川、石橋、敦盛、羽衣、の四種目が上演された。が、その敦盛と羽衣を見たとき、晃長はまるで稲妻に射られたような衝撃をうけ、ほとんど失神せんばかりになったのである。
一の谷の合戦で、若い命を散らせた平家の公達、平敦盛の悲劇が、晃長の胸を、甘美な悲しみで、かきむしったのである。晃長は、自分がその敦盛になったように思った。
（能楽がこんなにすばらしいものだとは、知らなかった）
晃長の頭のなかは、きらきらと輝き、眼の前に、これまで知らない世界が開けたように感じた。
舞台は、敦盛から、羽衣へと変わる。
すると、その上へ、持仏堂の天井で舞う天女の絵が、二重うつしになった。
その晃長の心の動きをすばやく読んだ笛川が、
「あれは、お方さまの魂が、舞っているのでございますよ」
と、ささやいた。晃長には、舞台の上の天女が母の化身かと思われ、母を失った悲しみの心へ、羽衣の舞台が

魔物のようにすべりこんできた。

このときから能楽が、城造りとともに、晃長の幻夢の両翼となったのである。

晃長が能の魔力に魅入るれたのには、すでに晃長のなかで、時間をかけて、その素地ができていたからであった。物語の世界への耽溺である。

それは、叔父の水清寺教春に原因があるといってよかった。

晃長の父、**頼之**は、三人兄弟であった。**頼之**が長男で、次男が教春、三男が定国と名づけられた。が、国主としての資質という点からいうと、三男の定国がもっともすぐれ、次が教春、最期が長男の**頼之**という順序であった。だが、資質がいちばん凡庸な**頼之**が国主の座についたのは、ひとえに、長男相続という、昔からのしきたりによってであった。

長男相続には、それなりの理由があった。

世は乱世である。天下統一をめざした織田信長の進撃が、いつ、深山の国を襲わないともかぎらない。また、とつぜん隣国が敵となって、攻めこんでこないという保証はない。

そのとき、頼みとするのは、軍力である。軍力とは、国土の広さと、人口の多さである。だから、兄弟が国土を分割相続するようなことは、なんとしても避けねばならなかった。国土の分裂は、国の滅亡につながる。そこで、国主一族の団結をはかるために、長男だけが国主を継ぐ長男相続制が、深山の国の掟となっていたのである。

同じ兄弟に生れても、長男と次男以下とでは、天と地ほどの差があるのだった。

長男は、長男に生れたというだけで、国主の地位を継ぎ、一族を統帥し、国に君臨するのにたいし、次男以下はいかに秀でていようとも、その配下にあって、国主に仕えるしかない。それがいやならば、出家して寺に入るか、学問にはげんで学者になるとか、絵師になるとか、自分独自の道に生きるしかないのである。万が一、国主が死亡したり、国主に子供がない場合には、第二次の相続権者としてその存在が浮上してくることがないではないが、そうでなければ、一族での、いわば、やっかい者といっていいのだった。

水清寺家における次男の教春と、三男の定国が、まさにそれであった。

生まれつき性格が温厚で、学問好きの次男の教春は、武士の道をすてて、僧体となり、悦山と称していた。僧体となったといっても、正式に仏門に入って修業に打ちこんでいるわけではなく、本をよんだり、和歌を作ったり、ときには絵を描いたりして、要するに水清寺家の資力をたのんで、遊芸の道に遊んでいるのだった。

その教春は、たまにしか城を訪ねてこない。が、城主

の**頼之**は、この軟弱な弟があまり好きでなかった。この弟にたびたび城へ出入りされると、城の空気が軟弱になり、深山の軍力が弱体化して、はげしい戦乱に生き抜く力が、低下するような気分になるからだった。

だから、教春の挨拶を受けても、**頼之**は露骨にいやな顔をし、ときには、ぷいと横をむいてしまう。そこで、教春は兄への挨拶がすむと、のこのこと、晃長の部屋へ入ってくるのであった。

少年のころから、晃長はこの教春叔父がすきだった。この叔父のなかには、晃長に共通するなにかが、流れているからだった。父の監督のもとで、厳格な薫陶を受けている晃長は、この叔父に逢うと、ほっと安らぎのようなものをおぼえた。それは、安らぎというよりも、もっと甘やかなもの、強く晃長をしびれさす、なにかだった。それは叔父のなかにあって、父のなかには、ないものだった。

少年晃長のところにくると、教春はきまって、歴史の話をしてくれた。もともと夢みがちな少年だった晃長は、歴史や物語りを聞くのが大好きだったので、教春のはなしは大歓迎だった。いつも、晃長は、叔父のくるのを待ちかねた。

晃長はとりわけ、合戦の物語りを好んだ。現実の戦争や、武術はきらいであるのに、物語の世界の合戦は、大好きだった。

話術の巧みな教春は、必要以上に、勇ましく、華やかに、悲劇的に、美化して話すので、いやが上にも少年の心をあおりたてたが、源平合戦の話になると、とりわけ晃長の心は魅了された。

義経の華々しい活躍や、その後の悲劇的な都落ち、平敦盛に代表される、一の谷の合戦や、壇の浦の合戦であえなく敗れ、西海のはてに亡んでいった、平家の公達のくだりになると、その華やかな悲運に、晃長の魂はとけたようになり、自分がその主人になりきって、悲運の夢幻のなかを、さまようのだった。

すなわち、教春は、晃長を、この世とは別の世界、夢幻の世界へつれていってくれる、唯一の人だったのである。そして、もともと夢みがちな少年は、やすやすとその導きに、のったのである。

だが、その陰に、実は教春のある意図がかくされていたのだった。というのは、教春の胸にはたえず、(兄貴のやつは、ただ長男に生まれたというだけで、国主におさまって、ふんぞり返っているが、わしだって国主の座につけば、あれくらいのことは、らくらくとできる。いや、あれ以上のことを、やってみせる。それなのに、おれは次男に生れたばかりに……)

という無念の思いが、たえずくすぶりつづけているのだった。その教春が、晃長のなかの夢想癖を、嗅ぎとったのである。

（そうだ、この小悴の夢想癖のなかへ、もっと毒を注入してやるのだ。そして、うんと軟弱にして、次の城主としては不適格者にしてやろう）

教春のなかで、そう悪魔がささやいた。

（そうすれば、ひょっとして、次の城主の座が、わしのところへ廻ってくるかもしれないし、まあ、そううまくいかなくても、兄貴の困惑は眼に見えるようだ。兄貴への復讐として、胸のつかえが下りる）

表面上は世をすて、遊芸の道に遊んでいる教春のなかにも、ひと皮むけば、これだけの魂胆がかくされていたのである。

幸いなことに、晃長は教春を好いていた。少年晃長の心をあやつるのは、たやすいことだった。

もちろん、**頼之**のほうは、そんなことにすこしも気づいていない。

そして、晃長のほうも、そんな毒牙にかけられていようとは、夢にも思っていない。が、しだいにその魔力におぼれ、現実の世界よりも、物語の世界へのめりこんでいく青年へ、晃長は育っていった。

こうした背景があったから、いったん能楽の世界へのめりこむと、晃長は、そのなかの人物と、自分との区別が、つかなくなってしまうのだった。敦盛の舞台にそそぐ晃長の視線の異常さは、同時に彼が舞台の上の敦盛になりきっていることを、示していた。

さらに問題なのは、感受性の豊かな晃長は、ただ、たんに従来の能楽を観賞しているだけでは、もの足らなくなるのだった。すなわち、自分の工夫の入った能楽を、作りたがるようになるのである。

たとえば衣裳である。

「敦盛に鎧を着せたらどうか」

などと、晃長は言い出す。清阿弥は驚いた。鎧をつけた能舞台など、見たこともない。

「それはなりませぬ。そのような能衣裳のしきたりは、ございません。能の伝統に反します」

だが、晃長は能楽師などの言葉には、したがわない。

「なにも、能楽の伝統にこだわる必要はない。わしは、わしの欲しい能舞台を、作りたいのだ。わしが見て美しければ、それでよいのだ。ほかの観客には、どうでもいい。わし個人の能舞台をつくるのだ」

たしかに、源平合戦の世界に惑溺しきっている晃長の美意識からすれば、敦盛の能舞台で鎧を着けさせることぐらい、すこしもおかしくはないのである。

清阿弥がしかたなく、鎧を身につけて、敦盛の舞台をつとめると、

「うん、これはいい」

晃長は満足の表情を浮かべるのだが、しかし、充分に満足はしていない。

「だが、ちょっと、鎧の感じがちがうな」

清阿弥は、とりあえず城中にある鎧のなかから、適当なものをさがして、身につけたのである。しかし、今の鎧と、源平合戦の鎧とでは、ちがいがある。ましてや、落日の平家の公達が着ける鎧である。鎧にも、おのずと悲劇の美の匂りが、なくてはならない。

晃長は、安芸の厳島神社へ使いを走らせて、そこに残る平家の鎧をしらべさせたり、また、絵巻物をくりひろげながら、

「あれだ」

「この形だ」

と指図しながら、とくべつ能楽のための鎧を作るところまで凝るのであった。

こうなると、もう鑑賞しているだけでは晃長はもの足らなくなり、ときには自分自身が鎧をつけて、能舞台に上ることもあった。

つぎに晃長が大きく変革を要求をしたのは、音響効果であった。能舞台へ琵琶を持ちこめと、指示するのである。能楽は謡が中心で、楽器を使うのは、わずかに笛と、若干の打楽器である。そこへ琵琶を加えろとは、敦盛の鎧以上の異例事といわねばならぬ。

「それだけは、いかなることがあっても、許されませぬ。それでは、もはや、能楽ではございません」

清阿弥はあきれはてて、

（もう、京へ帰らせてもらいます）

と言いだす始末だった。

だが、晃長は大まじめなのである。清阿弥が応じないとみるや、自分の手で琵琶法師をつれてきた。平家琵琶にあわせて、敦盛を舞わてみると、琵琶の嫋々たる音につつみこまれた舞台は、さながら平家物語絵巻を眼前にくりひろげたかのようで、晃長の要求にぴったりだった。

こうして青年になった晃長は、国政、軍政にはまったく無関心で、ひたすら、持仏堂の建築と、能楽の世界に、生き甲斐を見つけているのだった。城郭の造営を指図し、新しい能楽の工夫を考えているときの晃長は、生気にあふれ、輝いてみえた。

とくに椿の花の雨がふる夜などは、晃長は一人で笛川の古鏡の前へぬかずいて、祈った。御殿の屋根に落ちる、

ぽたり、ぽたり、

という、しめった肉感的な落椿の音に耳をすませていると、古鏡の奥が白くかすんで、そのなかから源平合戦の世界が、幻のように浮かんでくるのだった。それが、つぎの能楽の新しい工夫へつながっていくのである。

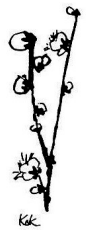
（つづく）

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二）

第一章　重蔵大空に羽搏く

一、長崎出向・世界に目を開く

金子正義



（六）

奉行中川飛驒守忠英が長崎着任後、公式に唐人屋敷を訪問した折、自由な懇親の宴の招待を受けたので、貿易外交上より交誼を深める為に唐人屋敷に赴いたのは、十月の諏訪神社の「おくんち」の午後であった。

其の日は吟味役組頭の岡元文右衛門、目付役石川三平太や通詞役の林貞裕と共に近藤重蔵も供奉した。

土塀に囲まれた唐人屋敷と町境の濠に架る石橋の前で駕籠を下りた中川奉行は、警護侍を帰し僅かの供奉の者を従えて石橋を渡り番士の徒列する大門を通った。

赤煉瓦造りの商館の前に出迎えの唐人頭や唐人書記役達の案内で、階下の客間に招かれた。

床は赤毛氈が敷き詰められ、左側の出窓からは中庭が見られ、右奥には陶器が置かれた飾棚がある。

次の間は畳敷で二間共に中央に大きな唐卓子が置かれてあった。

中川奉行が飾棚を背にして座ると、鼻下に八の字髭を伸ばした赫ら顔の商館長が片言乍ら挨拶を述べ、次々に入室する碇泊中の泉州船、南京船の船長や唐通詞を紹介した。

二人の船長は初対面の故もあってか、船長服の乗馬袴のような細身の長袴で窮屈そうに座って潮焼けした顔を緊張させていた。

最期に今日の接待役の在留華僑頭陳伯達が、首を差し伸ばし屈み込んで入室して、健康そうな和やかな顔に絶えず笑を浮かべ乍ら、自由に日本語と唐言葉を操って何にかと気を配り、控の間にいる顔見知りの岡元文右衛門や林貞裕にも声をかけていた。

「キヨ　オクチャンの日、ドゾブレコウで」

と商館長の陸王斉が先に立って二階の広間に入った。

内は下の二間を併せた程の広さで、南側は自由に出入で

きる露台になって、唐人屋敷の植え込み越しに港がみえる。床は文様を打ち出した手入れの良い鞣皮で張りつめ、天井は紅色の地に黄や青・白の花模様で、漆塗りの支桁で支えられている。その真下に大きな楕円形の唐卓子が据え置かれ、卓上には香磁器や皿小鉢が置かれ、背張りのある唐椅子が二十脚程向い合わせに揃えてある。

部屋の北側に、冬のオンドルが設けられ隅に鉄平石を張り積んだ暖炉もあり、台上に飾り灯籠や花壺が置かれてある。天井から赤いローソクをいくつも美しく差し立てた灯籠がシャンデリヤのよう下っていた。

唐卓子の一番奥に中川奉行斜め左に吟味役組頭の岡元文右衛門、次に目付の石川三平太次で奉行所通詞林貞裕や調べ吟味役の近藤重蔵と云う順に椅子に掛け、向い側に唐大通詞役、商館長、二人の船長、商館書記役、華僑頭の順に並び掛け、陳伯達が合図すると、円形の褐色頭巾を被り半袖上着を着けた料理頭が一礼して入室し、同じ服装の料理人二人が山盛りにした料理を次々に運び込んで料理頭の指図で卓上に並べた。日本の料理の如く一人一人の膳の皿小鉢腕ごとに色の調和も鮮やかに少量ずつ盛りつけるのとは全く違って、大皿や大鉢に油で炒めたり、衣に包んで揚げたりした牛や豚、雉、家鴨の丸揚げ等が次々と出される。刺身に代って臘干と云う肉の塩漬もあった。酒は日本酒より強い黄酒（老酒）や、黒砂糖を醪りながら呑む白酒（高粱酒）等であった。

無礼講なので、日本人と一緒に食べる卓袱料理の時の堅苦しさを棄て、主客、上下の区別はあるものの、卓上の料理は銘々自分勝手に大皿より小皿に取って食べ、酒もおのおの好みに任せて緩ったり呑んで親交を深めた。

酒宴の半ば頃、陳伯達が月琴と称する円形の胴に短い棹を取りつけ、四本の弦を張ってベッコウ爪で弾く楽器を巧みに弾き乍ら唐の俗曲を披露した。

唐人側は勿論のこと、奉行所の一同も外交上の交流を深め一層の親睦をはかろうと和やかに談笑し、料理の食べ方や、器物の扱い方などに失敗して大笑などしたが、近藤重蔵には泉州船、南京船の船長の言葉など全く解らず、自分が学んだ儒学の古注学派の漢文の解釈とは全く違い、唐通詞の通訳する唐言葉すら分からなかった。

寛政初めより朱子学派と異学諸派の論争が激しかったが、古注学折衷派の山本北山に学んだ近藤重蔵は、朱子学の理・気二元論、窮理居敬の説よりも、朱子呈伊川の解釈を通さず直接に孔子の論語孝経を学び、更に書経、礼記、詩経を古注学で学んだが、学問は窮理居敬の観念や教養に留まらず、其の実践にあるとして同志と共に開いた白山義学塾で、学は世の為人の為のものとして実践主義の陽明学派の説も併せて説いていた。

然るに何んとしたことか、今、実際に儒学の宗家唐国の人々と交わり乍ら自由に話し得ないとは情無きこと限りなし、と自嘲の笑みを浮べ乍ら酒盃ばかり傾けていた。

宴が果てて奉行所役宅の私室に戻ると、強い酒の酔で忽ち睡りに陥ちたが、夢の中でも唐言葉不明の恥辱感に悩まされ自己嫌悪の昂ぶりで目を覚ました。

重蔵は幼少の頃より神童よ、天才よと秀れた知能を持て囃され、奚疑塾入門して早くも十歳にし年少組の先達となり、十三歳以後は師山本北山の代講として諸侯の子弟に講義していた。十七歳にして志を立て同志と共に白山義学塾を開き、著名なる文人学者を招いて共に講義もした。父右膳守知の意に従って家督を継いで御先手組与力となったが、二十三歳の若さで人材登用学問吟味に通って今日長崎奉行所吟味役になるに至ったが、今だ嘗て己の才能学識に自信を失したことは無かった。処が唐人屋敷での懇親に商館長の陸王斉や華僑頭の陳伯達の話は兎も角、二人の船長の言葉などは全く分らなかった。

重蔵には其れを酒席の事と意に介しないでは済まされなかっだ。酔が醒めて冷静に反省すれば、長崎に来て見聞するもの全てが好奇心の対象となる珍奇なものばかりであったが、如何に紅毛文化が便利調法であっても尊しとせず、鉄砲火砲を備える大船であろうが駭かず蘭語はしらずとも恥とは思わなかった。だが父祖同胞共々に学んだ唐国の漢文字で意が通せず、言葉も解し得ずとは大きな衝撃であった。それは今までの能力過信に対する天の警告であると受け止め、一念発起して唐語を学ばなければならぬと新たな意欲を沸き立たせるのであった。

重蔵は唐人屋敷の訪問後、日を経ずして奉行所内の唐人通詞役の何人かに唐語の教を請うたが、重蔵の役職に遠慮して仲々応じて呉れなかった。

長崎奉行所の通詞役は、唐通詞オラング通詞に分かれ、唐通詞は大通詞・小通詞が各々数十名、稽古通詞が三十名、その下に内通詞百三十名で合せて二百人程であった。大通詞は其の職を家代々継ぎ伝える習わしで一戸を構え、半数は交替で唐人屋敷内に詰めていた。

大通詞の中には江戸や京大坂に家塾を開く儒学者以上に、学殖豊かな一級学者も居たが謙虚に身を持して弟子を採らなかった。

然し熱心な重蔵の願いに唐人屋敷の唐通詞が応えて、風雅の文友として唐言葉や古文献の解読を共にし、明・清朝の新文典の読解啓発にも及んで呉れた。

中川奉行の命によって吟味役目安方を務めるようになると、港の華僑や埠頭に働く唐人の沖仲仕達にも接して活きた唐言葉を耳にし、来航する唐船オランダ船にも臨検に行くので、通詞だけでなく、船員達とも直接話す事もあって、唐語と同じようにオランダ語も片言乍ら覚え始めるようになった。

（七）

中川奉行の長崎着任と前後して、江戸へ入貢参府していた商館長が長崎に戻って間も無く、港内碇泊中のオラ

ンダ船が慌しく出港した。

積荷は既に満積して何時でも出帆できる準備が出来ていたが、出港に当っては長崎奉行所の厳重な積荷と人員の検査や、船内の臨検がある。近藤重蔵は吟味役目安方として其の掌に当った。

積荷は出国目録と売買領収証と一々照合し、船倉より船室・船底の機関器具に至る迄隅なく点検し、抜荷や密出国者の有無を確認するのである。現場は貿易担当役人や通詞がやるが、重蔵は船長室で全ての文書を検閲し、船長所管の航海日誌や船員名簿、海図、地図に至る迄目を通す。オランダ通詞を介しての事であるが重蔵は自分のオランダ語が役に立たず、船長室の棚にある分厚いオランダの書籍が何んであるかも分らず苛立ちを覚え、唐言葉と同じように長崎在任中にオランダ語も身につけなければ物の用に立たず、と発憤するのであった。

其んな折から中川奉行のオランダ商館訪問に供奉することになった。

出島のオランダ商館を訪問したのは諏訪神社の祭礼が終って月が改まった、十一月のオランダの大陽日の午後であった。

奉行に供奉する顔触れは岡元文右衛門と入れ替って、長崎会所の勘定役高木彦右衛門と町役人（自治）監督の町年寄役組頭久松土岐太郎であった。

高木彦右衛門は五十半ばの小柄の老人であるが、赭顔の酒脱な男で蘭語が通詞よりも達者だった。

久松土岐太郎は未だ二十代の若者であるが、堂々たる大兵肥満の武芸者の風貌で、

「手前は、前年家を継いだばかりで、本日は町年寄役筆頭の高島四郎兵衛殿がお伴の予定でありましたが、所要の為に代理仕ります」

と弁舌爽やかに自己紹介した。

近藤重蔵は、高島四郎兵衛が長崎会所調役頭取であると共に長崎港防備担当で、江戸に迄名の知れた砲術家であると、父守知から長崎に行ったら教えを請うように言われていたので、此の日に同行できなかったのが残念で、後日崇福寺の南東のどんの山の麓にある正覚寺ヶ丘の斜面にある城塞のような高島邸を訪問した。

高島四郎兵衛は色浅黒く筋骨の引き締った偉丈夫で礼儀正しく寡黙であったが、重蔵が父の右膳守知が前将軍家治に目をかけられた砲術家であると口にすると、気を許してか長崎港湾の警備や砲台が、長年の平穏に狎れて到る処老朽不備となり、砲台は長崎湾入口の西泊りの台場を始め旧砲ばかりで、大坂の陣や島原の乱の原城攻略の旧式砲で役立たず、オランダ船の搭載砲石火矢にも劣る。現今、長崎より西海凡そ七千六十里余りと云う遠きエウロッピア（欧羅巴）より天竺のベルガル（弁柄）の海まで押し渡ってくるエンゲリア（諳厄利亜）の軍船が本気になって長崎に討ちかけたら、長崎港はゴア、セイ

ロンのようにエンゲリアに奪われて仕舞うであろう、と慨嘆した。

重蔵は林子平の「海国兵談」を思い起し乍ら、自由にものを言う長崎の町年寄役を頼もしく思った。

程なく美しく和やかな夫人が挨拶に出て酒肴を勧め、後から幼少の男子が人懐い顔を見せていた。後年幕末に有名な砲術家の秋帆は四郎兵衛の三男であるが、寛政十年の生れで未だ此の世には居なかった。

さて、中川忠英奉行一行が訪問する当時の長崎出島のオランダ商館は、中島川が長崎港湾に流れ込む西岸に築かれた約四千坪の扇形の出島で、長崎奉行所とは江戸町の道一筋を隔て、潮の満干の差位の大きい濠を境にして出島東側のほぼ中央の表門と横幅四間程の石の架橋で繋っている。

石橋は中程が扇の元締のように菱形になっている。渡り口の北側には番所を設け、出島乙名の支配下の番士が出入を厳しく監視して、暮れ六つには出島側の表門は閉され、明け六つ迄開かれない。出入を許されている者は奉行所役人・長崎町年寄のオランダ通詞・出島乙名（町役人）配下の下役・出島内の町人（火消・料理人・大工使丁等）の公用の時のみである。

オランダ商館出入の商人・職人・遊女等は、居住町の乙名（町役人）を通して出島乙名に人数・用件・日時等を届け出て許可を得、其の鑑札を受けた者のみ許される厳しさである。

出島の北側には貿易品や出島の必要物資を搬出入する荷上水門があり、海に面した外側に石段で降る石積みの広場があって、船舶よりの陸上げの場となっている。

水門の内側にも番所があって表門同様に出入を厳しく監視している。

西の港湾に面しては扇を開いたように築地石垣を巡らせ、中央と両側には見張り櫓のある警備所が設けてある。

表門よりコンパニヤ（商館公班衛）に到る中央通路を軸にして東西南北に道をつけ出島内は四区画になっている。

荷上水門のある北側の一画は石垣に沿って二階建の大小倉庫十六棟が並び建ち、水門より南側に在る管理棟には、出島役人の乙名・組頭・警備番士・日直使丁等の部屋がある。其の端に火消道具を置いた火消番小屋や調理場があり、通勤町人・使用人・遊女接え部屋等の数棟もあった。

中央区画は表門より生垣や建物で境された中央道で商館公班衛に向い、其処に書記・医師・オランダ通詞・入札証人等が詰めている。

コンパニヤとは渡り廊下でカピタン（商館長）やヘトル（次席）上級船員等の居住する独立棟に繋がり、十五、六人程のオランダ人が住んでいる。殆ど二階建の木造白壁瓦葺の防火構造である。

コンパニヤで働く者は書記通詞の他に、乙名の下組頭大工・鍛冶・荷倉役・小使等約四十名程でそれぞれ管理棟内に居住している。

表門中央道より左側に石垣に沿って二棟の二階建の長大な倉庫があり、入口前にオランダ国旗を高く掲げる旗塔があって赤白青横三色の旗が翩翻と翻っていて、其の前は広場となっている。

海に面した南西の区画は石垣沿いに松・杉を植え花畑なども設け、牛舎や鶏小屋などもあり、運動場を兼ねる草原となっていた。

長崎奉行中川忠英の訪問は、オランダ太陽日であるので非公式の懇親とされていたが、商館ヘルト（次席）のレオポルト・ウエルレム・ラスが表門で出迎えて出島中央のコンパニアに案内し、入口扉を開けるとカピタン・ゲイスルト・ヘンミイが両手を広げてにこやかに

「ヨウコソ　オイデクダサレ」

と双手で中川忠英の右掌を包むように握り恭しく拝した。

中川奉行は既にカピタンとは長崎奉行就任出発前の三月江戸参府のヘンミイが、表敬挨拶に邸に来た初対面以来、長崎に着任してから何回も会っていた。

板張りの玄関広間（ホール）を沓の侭で行く蘭人と同じように、中川奉行以下の者も下履で通り、接待控えの間に入った。

カピタンより今日の懇親に列するオランダ側を中川忠英に紹介された。

表門で一行を迎えた商館ヘルトのレオポルト・ウエルレム・ラス。二十代半ばであろうか背丈良く伸び豊かな赤褐の頭髪は後で束ねたように纏っていて、顔色は紅味を帯び赤毛の眉の下に落ち窪んだ大きな碧眼が静かである。礼儀正しく代赭色の胴衣に黒革色の長裾の上着を着け、弁柄縞の袴を穿いている。

其れに引き替えてカピタンの頭髪はふわふわと浮き上ったように薄くなって綿毛のようである。勿も其の分、揉上げより頬まで鐘馗のように鬢髪が豊かで、大きな赤鼻と顎が突き出ている、ずんぐりした体軀で背丈は六尺豊かであるが近藤重蔵には及ばない。着衣は首廻りに花弁飾りのある浅黄更紗の胴衣に肩に飾りのあるゆったりした猩々緋の上着を着て、長袴は白羅紗である。

次に紹介された外科医のヘルンソルト・ケレルは髪を左髪から三七に別け額より眉近く右耳にかけて切髪のように下げていた。両眉の間は広く離れて天狗のように大きい鼻が、蓄えた八字髭で止っている。服は詰襟の浅黄更紗の上衣で七つの衣紐で留め、桟留縞の袴はゆったりとした乗馬袴で下肢に白絹の脚絆をつけ、黄の飾紐半沓を履いて悠然と構えている三十代半ばであろうか。

カピタン・ゲイスルト・ヘンミイは在日は長く、商館

長として寛政四年（一七九二）より三年も勤めているので通詞を用いず会話が出来るが、外科医のヘルンソルト・ケレルも仲々日本語が達者であった。

それでも、大通詞の加福安次郎と小通詞の今村金兵衛も懇談に加わり、今村金兵衛は給仕の黒人やオランダ料理人等を指示していた。

中川奉行の供奉の一同は大通詞の加福安次郎がオランダ語で紹介し、カピタンと交互にコンパニア内部の部屋の配置や出島内の建物や設備等を説明した。

控えの間を出ると廊下を隔てた向い側は開け放された談合の間や記録所となっていて用途に応じた机や腰掛丸椅子長椅子などが配置され、隣室は談合か集会の為であろうか畳が敷かれた広間となっていた。

板張りの廊下の行き止りが階段で、二階は四部屋程に区切られてカピタンと次席の執務室や書庫になっている。

一同はコンパニア棟と屋根のある渡り廊下で続いているカピタン棟に案内された。

カピタン棟は黒瓦葺白粘土壁の重厚な総二階で、表面玄関は煉瓦で固められ、入口の廂の上に銅組の飾り垣の出張り（バルコニー）があって見晴らしが出来るようになっている。

内部はコンパニア棟と同じように階下に板張りのホールや広間があり、各部屋の窓は縦長に大きく取り、窓の外側は雨戸で内側はビイドロ障子であった。

カピタンの部屋は二十畳程で畳の上に花模様の絨毯が敷かれ、中央に白布で被われた大きな横長の卓子が据えられ、背張のある椅子が十脚程向い合いに設けられ、卓上には色鮮やかな花を活けた花瓶が飾られ、ギヤマンの酒器や銀の食用小刀などが揃えてある。

天井は四方が飾り欄間で中央から玻璃燈が吊り下っていた。

港湾に面した側はビイドロ障子の窓のある白壁で、左に廊下に出る扉があって出ると長崎港が一望に見える。

反対側は暖炉や飾り棚となって銀細工のビイドロランプや有田・伊万里の磁器などが並べてあった。

カピタンの寝室となっている奥の間とは江戸歌舞伎の引き幕のような布で境されている。半分の壁にはオランダの風車小屋のある風景画が掲げてある。

次の間は板敷となっていて厨房から運んでくる料理の配膳室を兼ねていた。厨房はカピタン棟の横手にある、通詞や上級船員居住棟の裏にあって、蘭人調理人と数人の日本人調理人で鶏や犢を料理していた。

此の日本人調理人を長崎の町人は親しみを込めて「オランダくすねり」と呼んでいた。

カピタン棟に接して娯楽棟もあって、玉突き場やさまざまの楽器のある音楽室もあった。

コンパニア棟カピタン棟を一巡して懇親の会食となった。暖炉を背にした一番奥に中川忠英奉行、其の左に高

木彦右衛門、次に近藤重蔵と久松土岐太郎と横に並び、奉行と向い合ってカピタン・ヘンミイ、ヘルトのレオポルト、ドクトル・ヘルンソルト・ケレルと順次席に着き、大通詞の加福安次郎は奉行とカピタンの間の角席に着き、小通詞の今村金兵衛は久松土岐太郎の横の席である。

カピタンの歓迎スピーチと中川奉行の挨拶が終ると、今村金兵衛が次の間で待っていた白衣の調理頭に合図し、二人の給仕人が恭しく銀の大皿にギャマンの酒杯や、赤や黄色の酒を詰めたオランダ徳利を運んできた。給仕人一人は黒人であった。調理頭が卓上の銘々のギャマンの杯にゼネーフル（蒸留酒）を注ぎカピタンの合図で一同は立ち上って杯を見せ合って呑み乾して無礼講となった。

自ずと笑いを引き起す日本語を使い乍ら自由闊達に話題を提供するカピタンに釣られて和やかな雰囲気となった。黒人給仕人は次々と料理や酒を運んでは各人の皿やグラスに給仕して歩いた。牛や鳥の焼肉は重蔵も既に味わっていたが、オランダ商館で始めて口にする料理が多かった。

通詞の今村金兵衛は然り気なく日本語に訳して、汁物のヒカドは鮪の細片と野菜類とを甘藷で煮込んだスープであるとか、ヒリョウス（飛竜頭）はガンモドキのようなものであるとかを中川奉行や重蔵達に知らせた。

重蔵もよく知っている赤葡萄酒も給仕の黒人が南蛮鋸（のこぎり）とか言う螺施のついた三角錐をオランダ徳利の元栓に打ち込んで手を回して栓を抜き取って注いだ酒が珍駄酒（チンダ酒）であることを知り、始め口にしたアラック酒とか、アネィス・ウェイン（アニィス・ワイン）とかの強い酒には舌を焼かれるかと恐れをなした。

酒が回ると日蘭の人種の異なりや、身分上下の差も気にせず向い合う者隣席の者同志が、自由気儘に話し合って宴は和やかに盛り上がっていった。

重蔵も先頃の唐人屋敷の訪問の宴とは違って、言語の障害を余り意識せず、己れを拘束する職責や世のきまりや習慣が霧散するような軽やかな気分になっていった。

歓談の中でも何度も江戸入貢参府をしているカピタンが、東海道の往還での珍しい見聞を面白お可笑しく話して一同を爆笑させた。

「今年オオイリバー（大井川）のカワドメにあって、三日も待って、恐ろしいオニノヨウナヒトがワタクシの乗った駕籠ごと担いで川を渡って呉れた。川の真中で投げ出されるかとブルブル震えていました。

ワタクシの国のオランダは国土の四分の一は海面より低く、半分以上は砂丘や堤防が無いと、海水に国土は水没して仕舞います。オオイリバーやテンリュウのようなタキのようなリバーなど見たことありません」

と大袈裟に肩を竦めて恐ろしがったり、

「ワタクシ江戸にイクタノシミフジヤマ見ることです。フジヤマのように高くウツクシイヤマどこにもありませ

ん。ニポンの人が高イヤマだけでなく、ヤマを神サマとシテ仰ぎ尊ぶこと、ヨクワカリマス。ワタクシフジヤマニポンダイスキです」

オランダ商館長は一年か二年で交代するのであるが、もう三年も交替要員が本国から来ないので、ゲイスルトヘンミイは留任の侭であった。母国の妻子が気遣われであろうに哀愁の気振りも見せずに快活そのものであった。

中川奉行は

「西南の海が不穏で本国からはの航行が困難とか、先頃は停泊していたオランダ船は急いで出航したが、ヨーロッパの争乱はどうなり申したか」

カピタン・ゲイスルト・ヘンミイが、寛政六年三月の江戸参府貢納の際に、幕府に提出した『風説書』を中川忠英は長崎奉行拝命後に見ているので、商館長交代の船も入らない事を気にして其れとなく訊いたのであった。

『風説書』は、幕府が鎖国中海外の事情を得る為に毎年長崎に入るオランダ船に対して、海外情報を『風説書』として文書で提出することを義務づけた。後に口上の場合もあり、日本との貿易の独占を保つ為に、オランダの不利な事やヨーロッパ全体のこと等は詳細には伝え無かった。

例えば、一七八九年（寛政元年）に始ったフランス大革命のようすも（一七九三）一月にルイ一六世が処刑されたことも『風説書』にも口上でも幕府に伝えなかった。

勿論一七七六年のアメリカ独立宣言、一七八三年のイギリスのアメリカ独立承認などは全く伝えられなかった。

処が、寛政六年（一七九四）寛政六年三月に江戸参府貢納の際カピタン・ゲイスルト・ヘンミイが幕府に提出した『風説書』には、始めてフランス革命に触れたのである。それは、

「ふらんす国臣下之者徒党仕、国王並王子を殺し国中乱妨に及び申候に付、阿蘭陀国其外近国より同所え押寄及合戦申候段に付、蛟留吧（バタビヤ）表より軍船等差越申候。右之次第に而咬留吧表混雑仕、此節船仕出候儀も難相成程之儀に御座候共、外国筋至而不穏儀をも申上度奉存、廻着有合之荷物取集、此節積渡申候……下略」

と通詞の訳を以って届け出たものであるが、日本への貿易が暴乱中のフランスとの合戦でオランダ本国から来航できず、バタビヤで荷物取集めて来航し、貿易に支障なきよう努めていると弁明しているのみであった。

だがオランダは一七八九年（寛政元年）のフランス大革命の影響で、既に寛政二年のオランダ本国よりの船は日本航行が困難となり、バタビヤで日本向け物資を積んで長崎へ来航していた。特に一七九三（寛政五年）ルイ一六世の処刑後、対仏、英・伊・蘭の戦闘となり、翌一七九四年オランダはフランスの侵入を受けてオランダのウィレム五世は家族と共にイギリスに亡命し、オランダ本国はフランスの占領下連邦共和国となり、一転してオランダはイギリスと戦争状態となり、イギリス海軍によって海上を制せられ、喜望峰よりベンガル・セイロン等のオランダ商館は占領される状態であった。

此等のことは、寛政四年九月日本人漂流者大黒屋光太夫等を送り届けに来た、露国のラックマンの来航以来中川忠英を始め幕府要路の諸太夫や蘭学者が、海外事情に注意を払って僅かの情報を通して或る程度推定していたことであった。

亦、アメリカについても、天明年間より寛政にかけて露国船の北辺よりの南下と共に、九州紀伊の海に出没する異国船や、暴風雨で漂着して薪炭食糧を求める異国船が、オランダ船でもイギリス船とも異なる船であるとの報告が度々あった。

特に寛政三年熊野の大島浦・樫の崎へ漂着した蛮船が広東よりボストンに帰る途中暴風で吹き寄せられたもので、北亜墨利加洲（アメリカしゅう）の角利勿爾尼亜（カリボルニア）の船であることが分った。だが、日本ではアメリカが独立国であるとは知らずカルホニアは諳厄利亜（イギリス）の領有地であると推定した。

其の様に漠たる海外事情をより明らかにしたい思いがあって、中川奉行がオランダ本国よりの航行の杜絶に触れたと思ったカピタン・ゲイスルト・ヘンミイは、

「ゴシンパイ・アリガタク・オランダ本国は七州の連合政府となりフランスと和睦しましたがイギリスと戦争となり、オランダ本国からはナカナカ船が来ないので、ワタクシもカピタン交代できません。今年三月江戸へマイリマシタとき、このこと特に許してイタダキました。献上品もバタビヤで集めた品々をタクサン納めました」

とカピタン交代できない弁明を頻りに述べた。

商館長の交代は寛永一七年（一六四〇）に一年毎に交代すべきことをオランダ側に命じていたが、遠方よりの航行を考慮して再任をも認めていた。寛政四年着任したヘンミイの後任は着任の途中病死したこともあって交代できなかった。

ヘンミイは在日が年を経るにつれ、日本の美しい自然や、人情細やかな土地の人々に親愛の情が深まり、動乱打ち続くヨーロッパに早く帰ろうとは思わなくなった。

だが不幸なことに、寛政十年（一七九二）三月江戸参府の帰途、遠州掛川の宿で急病死した。せめてもの慰めは、憧憬した秀麗富士を存分に眺望した掛川の宿で生涯を閉じたことだった。享年四十七歳だった。

それは後のことで今は未だ寛政七年である。誰も未来のことは知る由もなしである。中川奉行は更に

「今年三月の参府での『風説書』で、オランダ本国は七王持ち合いの国（連邦共和国）となって平穏に戻ったが、海上はイギリス海軍に制せられ、バタビヤの海も、イギリス軍船に包囲され、長崎への航行は困難のように伝えられたが、今後のオランダ船の航行は如何かな」

と訊いたが、ゲイスルト・ヘンミイは、ヨーロッパの動乱でイギリス船がベンガルの海まで暴れ廻っているが、バタビヤは防衛厳重でイギリスも攻略できない。バタビヤ総督は手持の品々を集めて長崎貿易に精一杯の努力をしていると繰り返すのみだった。

自由な懇親の宴のことなので中川奉行も其れ以上深くは問わなかった。宴も終りに近づいて余り酒を飲まない奉行の為にバテイラ（寿司の一種）が出され、一同にはボートル（バター）を供えイブロート（パン）が出て、デザートにザボンの実を齧ってコッヒーを啜った。

重蔵は芳しい香りの煮汁は追儺の豆の濃い福茶のようなものだが、砂糖を入れ牛乳を加えて呑むのはオランダ流儀か、と今村金兵衛に訊くと、

「コッヒーは仰せの通り、我が国の大豆の如きものをよく炒り申して湯水にて煎じて飲む蘭人の茶の如きものであります」

と答えたが外科医のヘルンソルト・ケレルが

「モトモトコッヒーはオランダやヨーロッパではできない、ワレワレ、オランダ人ガアラビヤからナエギをジャワにハコビ、ジャワノヒトにつくらせ、タチマチタクサンとれ、ヨーロッパにハコビ、ヨロコバレテイマス」

と説明した。重蔵はジャワの土地にジャワ人を使ってコッヒーを栽培しヨーロッパに運んで大儲をするオランダ貿易の雛形を見るような思いで褐色のコッヒーを呑んだ。

一応散会となったがカピタンが頻りと玉つき遊びをしようと勧めるので別棟の娯楽室に行くと、板敷の室の真中に四尺に七尺程に羅紗を張った机を置き、数個の赤白青の丸玉をおいて鞭の如き棒で玉を突き四隅の穴に突き入れる遊びであった。

重蔵は今村金兵衛より手解きを受け、何に程のことやあらん、と台の縁に寄り伏せて何度も鞭を扱ったが、突き過ぎたり、弱かったりして玉は勢いよく打ち当って轉がり走ったが少しも四隅の穴に入らず、蘭人の大袈裟な拍手や哄笑に辟易して止めて仕舞い、引き揚げる中川忠英の供を口実に中止した。

高木彦右衛門と久松土岐太郎は依前何度も試みているので、外科医のヘルンソルト・ケレルと勝負すると残った。

カピタンとヘルトのレオポルトの見送りを受け、中川奉行に従う近藤重蔵は、商館を出て渡り口の番所で待っていた警護の同心・小者を従えて奉行所へ戻って自室に入ると、強い酒の酔が急に出て倒れるように睡った。

翌朝目を覚すと、枕元の乱れ箱に見馴れぬ布包みがあった。昨夜商館を出る時出島乙名よりカピタンの贈り物と、何にやら渡されたように思い出され包みを開らくと黒羅紗の合羽であった。厚手の毛織物で軽く保温防水に適している。鎖国前から平戸の南蛮人や紅毛のオランダ

人も外出の時に肩から羽織り颯爽と歩いていた。

元亀天正の武将達は堺で南蛮人から買って陣羽織に直し戦場で其の勇姿を競い合った。特に南蛮文化好みの信長は緋猩々の陣羽織を着けて戦場や京の造営に指揮を采ったと云う。重蔵は滑らかな羅紗地の合羽を掌で撫で乍ら、昨夜の宴のさまざまの光景を思い出した。江戸幕府二百年の泰平に狎れ弓馬刀槍の技も疎かにして紅毛の玉突き遊びに興じている時に、遙かエウロッピアでは諸国攻め合い、西の海ではイギリスの戦さ船がオランダ、フランスの船を襲い、南の島々や天竺の海のセイロン・ブンガル・マカオ等のオランダ商館をも占領していると云う。北の海には露西亜の大船が度々南下し千島蝦夷地を犯して通商を求めている。泰平日本の外洋は波騒がしい。

此の黒羅紗の合羽も陣羽織に仕立て異国船の侵寇に立ち向う日もあるであろう。それにしても昨夜商館の蘭人と自由に歓談できたのは、二人の通詞の助けもあってのことで、果して単独ではあのように気安く話も出来ないであろう。長崎在勤中に蘭語や唐語・露語をも自在に使えるようになり度いものであると、洋学への向学心が群がり興るのであった。

続く

紹細隼太子のメモ

◆第五十二号をお届けする。夏季号である。ご覧のような充実のページ建ては社中みな元気の証拠であろう。

◆新たに鯨遊海をわが陣営に迎えた。漢詩を引っ提げての登壇である。本誌のキャラクターに一異風を盛り、他誌の追随を許さぬ特色となろう。

◆井上三男は前作の「返し歌」という意表をつく技法を駆使し、肌理細やかな佳品を寄せた。

◆柴田富佐子は佳作「逆立ち」いらいの登場となった。

◆佐々木一郎の病状は快方に向かいつつあり、前号に再登場を果たして、今号ではついに連載完結に至った。奮迅の努力に拍手を送りたい。

◆三戸岡道夫は構想新たに時代小説連載に挑戦する。目してわが社中の異能とする向きのあるのもむべなるかな、天馬空の概がある。平成の林不忘と見つけたり。

◆郵便料金の値上げについては前号でも触れたところだが、小誌にとってやはりダメージは大きい。ページ数が太れば発送経費はハネ上りを避けられない。社告は今号も改訂しないままだが、「まんじだより」廃刊は別事情に基づくものとして理解を頂いても、会合その他の連絡を欠くことになるので、代えて号外を発行することにした。季刊の間合いを縫う二回ていどの発行を考えている。（お）

「まんじ」　第五十二号
平成六年五月一日発行（非売）
編集　大和禎人
発行　柴田富佐子
〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと
郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」
印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎〇三（三二六一）一六一〇

目次

ついていない男 …… 佐々木一郎 1
潮哮録（二） …… 鯨遊海 28
詩「ついばむ」 …… 青木昭成 32
母の修学旅行 …… 大和禎人 36
病葉の青春譜・終章 …… 井上二三男 44
【連載】
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代（三） 金子正義 61
幻妖城異聞（二） …… 三戸岡道夫 73

編集子のメモ

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



ついてない男

佐々木一郎

一

平成X年三月九日未明、目黒区を縦貫している駒沢通りでひき逃げ事故が起きた。被害者は、桑原啓介（三五才）で、池袋サンシャイン内にある「日本交通公社」海外旅行部に所属するコンダクターだった。目黒署では、さっそく捜査員を派遣して、事故の目撃者探しや近所の聞き込みを開始した。しかし、夜半であったことと、近くに中目黒小学校、保育園、中目黒八幡などの並ぶ文教地区であったため、事故らしい音を聞いた者は何人かいたが、目撃者はとうとう現れなかった。鑑識は、「事故が起きたのは午前一時から二時の間。おそらくダンプカーのような大型車輛に追突され、即死したと思われる。気になるのは、車がブレーキを掛けた形跡がないことで、計画的な殺人の線も考えられる」と、発表した。逃走した大型車を追うほかに、桑原が、なぜ、こんな時間に、こんなところで、なにをしていたかも、合わせて捜査していくことになった。

二

「ここだな」

長谷川常夫は、五階建ての、ところどころに雨もりの跡のあるモルタル塗りの雑居ビルを見上げた。屋上には、「千代田第二ビル」と書かれた大きなプレートが、四月の春の日ざしに輝いている。このあたりは、前橋市の中

目次

ついていない男……佐々木一郎 1
潮哮録（二）……鯨遊海 28
詩「ついばむ」……青木昭成 32
母の修学旅行……大和禎人 36
病葉の青春譜・終章……井上二三男 44
【連載】
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代（三）……金子正義 61
幻妖城異聞（二）……三戸岡道夫 73

編集子のメモ

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



ついてない男

佐々木一郎

一

平成X年三月九日未明、目黒区を縦貫している駒沢通りでひき逃げ事故が起きた。被害者は、桑原啓介（三五才）で、池袋サンシャイン内にある「日本交通公社」海外旅行部に所属するコンダクターだった。目黒署では、さっそく捜査員を派遣して、事故の目撃者探しや近所の聞き込みを開始した。しかし、夜半であったことと、近くに中目黒小学校、保育園、中目黒八幡などの並ぶ文教地区であったため、事故らしい音を聞いた者は何人かいたが、目撃者はとうとう現れなかった。鑑識は、「事故が起きたのは午前一時から二時の間。おそらくダンプカーのような大型車輛に追突され、即死したと思われる。気になるのは、車がブレーキを掛けた形跡がないことで、計画的な殺人の線も考えられる」と、発表した。逃走した大型車を追うほかに、桑原が、なぜ、こんな時間に、こんなところで、なにをしていたかも、合わせて捜査していくことになった。

二

「ここだな」

長谷川常夫は、五階建ての、ところどころに雨もりの跡のあるモルタル塗りの雑居ビルを見上げた。屋上には、「千代田第二ビル」と書かれた大きなプレートが、四月の春の日ざしに輝いている。このあたりは、前橋市の中

心繁華街千代田町四丁目のすぐ裏手になる。
エレベーターで五階までのぼり長いリノリュームの廊下を突きあたると、そこに、ガラス戸に金文字で「前橋サービス株式会社」と書いた入り口があった。
二十坪ほどの部屋は、二間に仕切られていて、広い方が事務室で、奥の四、五坪のせまい部屋には社長室の札が下がっている。事務室の中では、三、四人の男女がなにやら談笑していたが、長谷川の姿を認めた女子社員が、
「あらっ、晴子のお兄さんじゃない」
と、驚いたように立ち上がった。見ると、長谷川の妹と高校時代の同級生だった設楽澄江だった。一しょにいる若い女性と同じ鶯色の事務服を着ている。
「ひょっとすると、長谷川さん。今日の面接の人って、あなたのこと?」
澄江は、長谷川の側に歩みより、その手に握っているハガキにちらっと目をやると、大きな目をいっそう大きくした。あいかわらず、すらっとした脚である。
「うん、そうなんだけどね」
「やっぱり……。でも、五年ぶりですよね」
澄江は、やっと笑顔を見せると、
「ご案内しますわ」
と、社長室の扉を開けた。

設楽盛吉社長は、五十五、六才のでっぷりと太った男だった。ブランド品らしい格子模様の背広に身をつつんでいるが、後退したうすい髪の毛とこい眉毛が妙にアンバランスで、おせじにも上品とはいえない。
設楽社長は、長谷川の履歴書を見ながら、
「住所は、群馬県群馬町板戸か。隣町やな。父梨次郎は群馬町役場戸籍課長、母は農業か。じゃ、兼業農家やな。生活には困ってない、と」
「ええ、町では中産階級です」
「ふーん。おや、学歴は、前橋高校、群馬大学教育学部卒業。なんや、こりゃあ。秀才コースやないか。あんた。なんぞ、学校の先生でしくじったのか?」
「いえ、しくじるもなにも、第一、採用試験で落とされました」
「ほう。それでも、別のいい口があったろうに」
社長は、ふしぎそうな顔をした。
「じつは、いくつか勤めてみたんですが、どれもこれもすぐダメになっちゃうんです。なにしろ、『ついてない男』というあだ名が付けられたほどなんですから、なにをしてもうまくいかないんです」
「なんや、その『ついてない』ってのは?」
「はい、僕は、小中学生のときは、『雨男』とよばれていました」
いつの間にか、学校の運動会や遠足が雨で中止になると、長谷川がいたせいだ、といわれるようになった。そ

れに尾ひれがついて、長谷川が入学してくる前はこんなに雨がふらなかったとか、彼が休んだ日は晴れるとかいううわさが立った。別に、運動会のたびにふるわけでもないし、クラス全員のことなのに、「長谷川常夫ちゃんは雨男だ」ということになってしまった。
高校、大学では、今度は一変して、「つきのない男」として友人からあわれみの目で見られるようになった。
ある日教師が廊下でカンニング・ペーパーを拾いひょいと前を見ると彼が歩いていたので落とし主と誤解されて叱責されたり、隣の農業高校の硬派と対立している最中に、家の用事でその学校の前を通りかかり、斥候とまちがえられて殴られたこともあった。
大学では、二回失恋し、三回就職試験に失敗した。
「うーん。この職業歴をみると、どこの会社も、ずい分短いんやな。あんた、飽きっぽいのとちがうか?」
「いいえ、はじめて就職した町内の土地家屋会社は、僕が勤めた三か月後にバブルの崩壊で倒産してしまったんです。つぎの会社は、前橋の中心街にあった一流商社だったんですが、一年後に大幅な部課の統廃合と人員整理がおこなわれて、僕はちょうど廃部課に属していましたので退職勧告を受けました。最後の勤め先は、父がほん走してやっとありついた市中の銀行でしたが、ある日突然、現金輸送車が強盗に襲われて、関係者全員が責任をおわされました。僕は、配転されたばかりでしたが、やはり身を引かなければなりませんでした」
「おうおう、なるほど運のない奴やな。しかし、君。ものは考えようやで。君が、高い競争率を突破して県内一流の学校に入れたことは、『つき』があったのとちゃうか? 『禍福はあざなえる縄のごとし』だ」
「はい。だから、今度は、この会社で僕の運をためしてみたいんです。どうか、僕にチャンスをください」
「なんだって! 運だめしをこの会社でだと。ワハハハ。あんたは、この会社の仕事知ってるんかいな」
「広告を見て来ました」
「広告にのせた仕事は建前だけや。本音は、学校出のお前はんなんかできるような仕事じゃあらへん」
「だって、サービス業なんでしょう?」
「サービスといったって、警備会社や人材派遣会社とはちがうんや。便利屋の下うけの仕事と思えばええ。たとえば、縁の下の奥の方にある猫の死骸を片づけるとか、旧式便所の便槽のパイプを糞だらけになって取りかえるとか、池の中に潜って落とした財布を探すとか、よそ様が見向きもしない仕事をもらうんや。汚れ仕事なんちゅうもんじゃないで!」

三

結局、長谷川は採用になった。と、いっても、俸給が出るわけではない。月給が出るのは社員の四名だけで、外務員は、仕事でもうけた額を、会社と折半することになっていた。なにしろ基本給がないのだから、もし五十万円の収入をあげることができれば二十五万円手に入るが、一か月かかってやっと五万円の収入きりあげられなかった場合は、二万五千円の月収でがまんしなければならない。それでもトラブルが起きないのは、採用の条件として、ここの収入をあてにしないですむ家庭環境の者だけを採用していたからである。

仕事の内容も、社長のいうほどひどいものではなかった。外務員の数は公称二十名となっているが、じっさい働いているのは十名前後らしい。

入社した長谷川にも、二回ほど仕事が回ってきた。ひとつは老人夫婦の引っ越しの手伝いで、一万円の報酬を得た。本来は、老人福祉として無料奉仕でもよいのだが、お役所仕事を嫌う老夫婦のたっての希望だったので、商売とわり切って、受けとった。

つぎにきた仕事は、犬の散歩のお供だった。糞などをひろう袋をもって、セントバーナードの首輪に太い綱をつけて自分の体に巻いて歩く。ときどき人間の方が引っ張られそうになるが、「綱引き」の要領で体を思い切って反らしながら歩く。口の悪いのが、まるで犬が人間を散歩に連れて歩いてるようだといった。朝昼晩三回で報酬は五千円だった。

一週間ほどたったころ、長谷川は、社長室によばれた。社長は、妙に緊張した顔で

「今日から一か月間、この地図の家に行って任務についてもらう。秘密を要する仕事やから、慎重にやってほしい。これは百万円の契約やから、あんたには、五十万円を支払うで。紹介状は、ここに用意した」

見ると、社長の名刺の裏に「本社調査課長長谷川常夫君を紹介します。長谷川君は、この種の仕事の専門家であります」と書いてあった。

「社長。僕は、こんな仕事は、生まれてはじめてです」

しかし、設楽社長は、その声を無視して、

「さ、これが藤木義茂氏宅の地図や。行けばわかるわい。儂は、これから会議所に顔を出すよって」

社長は、とりすがる長谷川をふり切って、ポルシェをみずから運転して出て行った。

四

設楽澄江が、同僚の本木マリと、長谷川の歓迎会を開いてくれた。会場は、「厩橋」という料亭だった。

「まず、自己紹介するわね」

澄江は、すわり直すと、エヘンと小さく咳をした。

いつの間に着がえたのか、二人とも、会社にいたときの事務服から、澄江は、淡いベージュのスーツ、マリは、胸元をレースであしらった黄色いジャケットにパンツスタイルになっていて、部屋は、いっぺんに春がきたようになった。

「あたしは、ご存じね。マリは社長秘書。十八才」

「あら、ほんとうは、お茶くみですよ。お客様の接待係。部屋のおそうじにあと片づけ」

「えっ、そんなことまでやるんですか?」

長谷川は、びっくりしてたずねた。

「そうよ。あたしも、会計課長となっているけど、どんどん外務員の仕事もしているんですからね」

「よく、そんな苛酷な労働条件にたえていますね」

そこへ、女中がビールを運んで来た。マリが、「うなぎ定食の〝竹〟ね」と、小声で耳打ちした。

「そこが、設楽社長のずるいところなのよ。あたしもマリも、あの人の姪なの。あたしは、社長の死んだ兄貴の子供。マリは、社長の奥方の実家の娘。だから、いくらぶつぶついっても、結局は、母におさえられちゃうの」

「あれっ、社長は、関西出身じゃないんですか?」

「とんでもない。生粋の上州っ子だわ。ただ、奥方がとびきりの大阪美人だから、それにやに下がって怪しげな関西弁をあやつっているだけ。いやらしいのよ」

澄江は、長谷川の酌を受けながら笑った。

「あの叔父が警察をやめて会社を作ったのは六年前なの。あたしと、むかし自分の手で検挙して更生させた白井実さんと芥川一さんの三人をさそって」

そこへ、うなぎの蒲焼きや肝吸い、刺し身、サラダなどが運ばれてきたので、しばらく話がとだえた。

「社長は、もと警察官だったんですね?」

「そう、もと警部だったの。警視とか警視正になって署長にならないうちにやめたのがよかったみたいね」

「なぜですか?」

「お偉方になるとみんなと疎遠になっちゃうでしょう。叔父は、第一線刑事でやめたおかげで、もとの同僚や部下だった人から情報をもらいやすいのよ」

マリは、ビールはあまりやらず、せっせとうなぎを小さく切っては口に運んでいる。

「しかし、会社の事業内容からいえば、それはあんまり関係ないでしょう」

「不思議に思うでしょうね。ところが、叔父のほんとうのねらいは、便利屋の下うけじゃなかったのよ」

「なんだったんですか?」

「探偵業とか、もめごとの仲裁だとか」

「つまり、秘密を要する調査だとか……」

澄江は、ちょっと言葉につまったが、

「ま、それはご想像におまかせしますわ。とにかく、白井さんと芥川さんという忍者みたいな人を使っている

のを見てもわかるでしょう」

どうも、澄江は、叔父ややや批判的なようだ。

「そこへ、思いがけず、あなたのような優秀な青年が舞いおりてきたのよ。これは、会社創立以来のパニックだったの。いえ、ほんとうよ。叔父は、たちまち、あなたのほんとうの実力を調べあげたわ。そしてあなたが、優秀な才能に恵まれていながら、「ついてない病」で、一時的なエンジン・トラブルを起こしていることを見抜いたの。そこで叔父は、あなたを中心幹部に育て、これを機会に、いっきに、念願の会社に切りかえようと決心したのね。だから、さっそく、あなたに、重要任務を授けたんだわ。ただね。うちの会社の仕事は、あなたが銀行や商社で覚えてきたこととはずいぶんちがうところがあるから、それだけは、覚悟しておいてくださらないとね」

澄江は、ビールでかなり酔ったのか、大きな目で長谷川の顔をジッと見つめた。

（やっぱり、僕は、ついてなかったんかな）

と、小声でつぶやくと、たちまち、それを聞きとがめ、

「あなた、社長に『教員採用試験に落ちました』って答えたでしょう。ほんとうは、試験当日の朝、急におじいさんが脳卒中で倒れたのを看病して、受験をあきらめたからなのに……。大学の成績だって、教授に大学に残れっていわれたほど優秀だったそうね。いつか、晴子が村のチンピラにからまれたとき、あなたは一人で、あっという間に三人をなぐり倒したことがあったでしょう。『つきがない』っていいながら、その半面には、物凄い『つき』に恵まれていることを、あなた自身が自覚していらっしゃらないみたいね。それは、甘えにすぎないんじゃありません？　とにかく、もう、賽は投げられたの。社長もあたしたちも、一日も早く、今まで他人に見せなかった、あなたのハードボイルドな半面を見たいわ」

五

「上毛いろはかるた」の中に「老農船津傳次平」という一枚がある。いうまでもなく、明治の農政家船津傳次平翁のことである。

この船津家の五男が近村の豪農藤木家の婿養子に入り、その孫が藤木義茂である。藤木家は、長屋門のついた堂々たる構えの屋敷だった。

長谷川は、増築された新しい部屋へ案内された。

藤木義茂は、やせ細ってはいるが、かくしゃくとした、いかにも気の強そうな老人だった。毎日畑仕事の励んでいるせいか、真っ黒に日焼けしている。

調査課長　長谷川常夫　の名刺を押していただいて、

「これは何ともありがたいことだ……。まさか、調査課長をよこしてくれるとは思わなんだ。社長には、くれぐれもよろしくな」

で、はじまった説明の概要は、つぎのようだった。

四月五日の午前七時ごろ、小森新造は、隣家の藤木藤吉をおとずれた。農協の理事選挙の相談のためだったが、いくら声をかけても応答がない。戸を開けて入って見ると、親子三人の姿がどこにも見あたらない。そのうえ、寝床は敷きっ放しになっているし、台所には洗いかけの食器が放り出されている。異変を察知した新造は、あわてて納屋や物置、牛小屋まで調べ、急いでわが家にとって帰り女房の八重と手わけをしてあちらこちらの心あたりの連絡をとった。本家の義茂宅に電話で情報が入ったのはこのときだった。

はじめは、家族に急病人が出たので急いで病院へかけつけたのだろうと考えて、行きつけの診療所、医院、病院にたずねたが、どこへもおとずれた気配がない。そこで今度は、思いつくかぎりの家々に電話してみたが、どこへも現れていなかった。

そして、その夜もとうとう帰らなかったことがわかると、今度は、村中の大ニュースとなった。

当然、駐在所には、義茂自身が出向いた。しかし、この若い駐在巡査の懸命な電話連絡も、「今、本署で何百通の家出捜索願いを預かっているのか、貴様はわかっとるのかっ！　一日や二日で大騒ぎするなっ！」と、一喝されてしまった。

「そこで、甚兵衛に頼むことにしたのよ」

「誰ですか。その甚兵衛って方は？」

「うん。藤木甚兵衛といってな。遠い親戚筋にあたる男で、今、前橋署の捜査課長をしとる。いや、じつは、両親にはやく死に別れたので、儂が、親代わりに育てた子なんじゃよ。

この甚兵衛に相談したんじゃ。署長も、知りあいだから、内々でならと、甚兵衛が調査にあたることを許可してくれた」

「それじゃ、間もなく解決するんじゃないですか？」

長谷川は、とても自分の出る幕ではないと思った。

「いや、それが、甚兵衛のいうには、例の〝弁護士一家蒸発事件〟に似ているつうんだな」

「ああ、あの事件ですか？　あれなら僕も知ってます。新聞やテレビで見た記憶がありますよ」

「あの事件のように、迷宮入りになる恐れがあるというんだ」

「ええっ、それじゃあ、甚兵衛警部にやらせることは、ちょっと酷じゃありませんか！」

「そうなんじゃ！　そこなんじゃよ。長谷川さん。この際、甚兵衛に絶対傷がつかないようにする方法はなかんべえかのう？　なあ？」

「……」

「儂は、あんたにお願いするよりしかたがないと思っとる」

義茂は、ゆっくりと煙草の煙を吸いこんだ。庭先には、赤、白、黄、青、色とりどりの春の花が咲き乱れている。

長谷川は、胸のうちで、（やっぱり、僕はついてないんだ）とつぶやいた。

「つまり、捜査が行きづまったら、僕に責任をとれ、というんでしょう？」

「……」

「いっそのこと、捜査を甚兵衛警部に頼むのをやめたらどうですか？」

長谷川は、皮肉ではなく、いった。義茂の言葉は、あまりにも虫がよすぎる。

「それができればねえ……。しかし、捜査は、どうしても、甚兵衛にやらせなければならねえんだよ」

「どうも、わかりませんねえ。署長昇進のための点数かせぎですか？」

「もっと大きなことだ。藤木一族のためだ。いや、城山村のためでもある。署長昇進なんか問題じゃない」

義茂は、座りなおして形をあらためると、

「この城山村は、平家伝説があるほど古い歴史のある村でなあ。その落人の一人、藤木新兵衛門良政という人が、この藤木家のご先祖様とされているんだ。

だから、この藤木家は、村の名家として、江戸時代から明治、大正、昭和と、名主や村長の職をつとめてきた。

ところが、終戦以来のこの五十年間、ただの一度も、この藤木家から村長が出ていない。家柄や資産で村長に推される時代ではなくなったとはいっても、これでは、あんまりご先祖様に申しわけがない。そこで仕方なしに、二年前、儂が村長選に立候補したんだ。ところが、かんたんに負けた。

儂には今の選挙の仕組みがわからなかったから、ついつい、村の衆に、この数百年間の藤木の先祖の功績を長々とぶっちゃったんだ。これが裏目に出てなあ。五十年前までは小作だった田中和吉のやつに大差で破れてしまったんだ。あのときのくやしさは、今思い出しても、震えがくるようだで。

この仇はきっと取ると、儂ら一族は、すぐ、次期村長選挙の準備にとりかかった。菩提寺の和尚も、鎮守様の神主も、診療所の医者も、みんな、一族だで。

もちろん、藤木一族の代表で立候補するのは、甚兵衛だ。

年は四十八の働き盛りだし、頭は切れるし、顔だって警察官にしておくのは惜しいほどの男前だ。

ただ、弱点は、警察勤めが長かったから、村の衆になじみが少ないことだ。何かうまい方法がないかと考えているところへ、あの事件が起きた。儂は、〝願ってもねえ天の恵みだ〟と思った。これを活用しない手はない。

甚兵衛には、事件の捜査の名目で、万遍なく各戸を回らせるんだ。そして、みなが関心をもっている事件のことに触れながら、優しい笑顔を見せたり、慰めたり、励ましたりして顔を売りこませるんだ。

軍資金の方は、心配ねい。資産五十億といわれる藤木家本家がついてるんだ。いくらでも出してやるべい。

ただ一つ心配だったのは、さっきもいったように、もしこの捜査が不首尾に終わったときに責任をとる人間を確保できるかどうかということだった。それも、だれもがなっとくするような立派な肩書をもった人をだ。

しかし、これは、設楽社長が引きうけてくれたよ」

義茂老人は、一気呵成にまくし立てると、さすがに疲れたらしく、茶をゴボゴボと音を立てて飲んだ。

長谷川が会社に戻ると、澄江はまだ残業していた。どうも、裏帳簿づくりに取りくんでいたらしい。

長谷川から概要を聞くと、クスクス笑いながら

「いよいよ、長谷川さんも、狸と狐の戦争に巻きこまれましたね」といいながら、コーヒーを入れてくれた。

「参りましたね。かんじんの、行方不明の分家のことを全然心配してないんだから……」

「ま、そんなこともないでしょうけど。でも、政治家なんて、大体そんなものよ」

「しかし、僕が、事件捜査失敗の人身御供にあげられていたとは驚きました！」

澄江は、コーヒー茶碗を下げて、日本茶を出しながら、

「あら、それはないわ。あの社長がそんな契約をするはずはありません。断言してもいいわ」

「え、どうしてですか？」

「百万円ぽっちで、そんな約束なんて……。そうね。あの社長だったら、一千万円は吹っかけるわね」

「そ、そんな」

「社長はいってたわ。まあ、百万きりだから、一月間だけなんか調べるまねでもしていればいいさ、って」

澄江は、また、クスッと笑った。

六

長谷川は、藤木甚兵衛と、市立図書館の閲覧室で落ち合った。非公式に会いたかったことと、ここには、「弁護士一家蒸発事件」の資料が保存されているからだった。

藤木甚兵衛は、その古めかしい名前とは似ても似つかない近代的なマスクをした男だった。

全体的な風貌は、柔道の山下六段に似ているが、日焼けした顔と鋭い目はさすが、刑事特有のものだった。

しかし、明るい色のブルゾンを着こなしている姿が、あいかわらず紺の背広に吊るしのネクタイという長谷川

の目には、まぶしかった。
「弁護士一家蒸発事件のコピーは、とっておきましたよ」
甚兵衛は、さっそく要件に入った。
渡された朝日新聞の記事の概要はつぎのようだった。

〈平成元年十一月十五日記事〉
弁護士一家が不明　横浜　10日以上、事件の可能性
「横浜市内に住む弁護士が、妻子とともに十日以上も行方が分からなくなり、弁護士の母親から神奈川県警に捜索願が出されていたことが十五日、分かった。（略）
行方不明になっているのは、横浜市磯子区洋光台三丁目横浜弁護士会所属坂本堤さんと、妻の郁子さんと、長男の竜彦ちゃんらの一家三人。同県警の調べでは、坂本さんは、今年三日夜知人と電話で話した後、週明けの六日以降、横浜地裁で担当している法廷にも姿を見せなかった。このため、母親と弁護士事務所関係者が自宅のアパートを訪ねたところ、だれもいなかった。その後も、なんの連絡もないため、七日、同県警に捜索願を出した。自宅には、荒らされたような跡はなく、現金やハンドバッグも残っていた。また、坂本さん夫妻がふだん使っていた眼鏡が置いてあったほか、炊飯器が保温のままになっているなど、長期間外出するような様子は見られなかったという。
一家で外出をする動機も見当たらないことから、同県警は、坂本さんが担当している事件でのトラブルなどから、三日夜から四日未明にかけて、何者かに連れ去られた可能性もあるとみて、親類や仕事上の関係者から事情を聞くなどして、慎重に捜査を進めている。（略）これまで労働争議事件や消費者問題に取り組んでいたほか、最近は宗教法人がらみの被害者の会の交渉役を努めて訴訟の準備を進めていたという」

二人は、この切り抜きをくり返し読んで、思わず顔を見合わせた。
「この記事の横にのっている、日弁連会長の中坊公平さんのインタビュー談話はこわいですね」
「うん。こわい。姿なき暴力による拉致となるとね」
「民主主義の代弁者である弁護士やジャーナリストの生命の危険も……」
「いや、それは、われわれだって同じだよ。警察官、判事、検事、それに君のような探偵さんもね」
「はあ」
「ところで、君は、今いくつ？」

「二十八才です」
「うーむ。やっぱり二十代か。うちの長男と四つちがいだ。馬力もあるが、こわいもの知らずの年令だな」
「それが、何か？」
「いやね。今度の事件は、私も、はじめての経験だけに不安なんだよ。何しろ、動機がまったくつかめない。まず、美人の噂の高い妻君のカネさんとの間は至極円満だし、カネさんの実家や本家との行き来もよくしている。職場の評判だっていいし、女遊びや賭けごとはやらない。山城小学校、中学校、前橋農林高校時代の友人を調べても、怪しい人物は一人も見あたらない。こういう一見無風状態のように見えるヤマは、往々危険をはらんでいることが多いんだ。杞憂かもしれんが、若さに任せて突っ走ると、命をねらわれることもある」
「はあ、それは、僕だってこわいですから、じゅうぶん気をつけます。しかし、そんなに、手がかりになるものがなかったんですかねえ？」
「思い出した。一つだけある。それは、藤吉さんは、去年の夏、県農協主催の『ヨーロッパ旅行』に参加していることだ」
「えっ、それは、だいぶ匂うんじゃありませんか？」
「うん。それも、いつもは親子そろった家族旅行をしていた男が、突然、一人で出かけたんだからね」
「ますますおかしい。なぜ一人だったんですか？」
「いや、これも親子三人の連名で申しこんだけど、直前になって、カネさんの母親の具合が悪くなったとかで、急遽、ひとりで行くことになったらしい」
「どうも、そのあたりに、作為が認められますね」
「さあ、どうかな。あとは君自身の手で調べてみたまえ。目下のところ、私が得た情報はこれぐらいだ」

長谷川は、まず、藤吉の妻の実家に向かった。
カネの実家は、ふつうどこにでも見られるような板葺き屋根の農家だったが、年老いた母親は、半信半疑ながら、かなりのダメージを受けているようだった。
「あしが、はあ、あんなことさにならんきゃあ、カネもヨーロッパに行けたのにのう……」
「たしか、脳卒中のようなご病気でしたね？」
「蜘蛛膜下出血。六か月も寝込んだんだよう」
「藤吉さん一人で出かけたんですね？　どうして、おかあさんの病気が治るまで待てなかったんですかね？」
「いや、藤吉は行かないっていったのを、あしが無理やりいかせたのさね。あしのせいで、かわいい婿どんのたった一つの楽しみをとっちゃなんねえと思っての」
城山村農協では、長谷川は、主として女子職員から取材したが、藤吉は、たしかにだれにも好かれていたし信頼もされていた。
小森新造の家を訪ねたときは、もう夕闇が迫っていた。

晩酌をはじめているところへ踏みこれまた新造は、すこぶる不機嫌だったが、藤木義茂の紹介状を見せたので渋々家に入れた。客間でぬるい茶をすすりながら、長谷川は、今日の調査結果をかんたんに説明して、

「ところで、小森さん。藤吉さんの家へ入ったとき、〝何かちがうな〟って感じたことはなかったですか？」

「〝ちがう〟のはあたり前じゃねいか。あれだけの事件が起きたんだ。ちがわなてくってどうするんだ！」

「まあまあ、そうおこらないで……。僕の言い方がまずかった。言いなおします。じゃ、いつもと変わらなかったところは？」

「おめえもしつこい野郎だな。かわってねえっていえば、何にもかわってねえよ。家の形だって、畳みの敷き方だって、タンスの置き方だって……」

「そういう大きいものじゃなくて、もっと小さなもの。例えば、足跡だとか、落とし物だとか」

「そんなもんは、駐在にも、甚兵衛さんにも、みんな話してあるよ」

「そこをもう一度思い出してくれませんか？」

「うるせえなあ。本家の紹介じゃなけりゃあ。叩き出してやるとこだ。かわらなかったもんなんって……。あっ、一つあった！」

「な、何ですか？」

「あの包丁が一本、いつものように差してあったな。あの三本組みの中の一本が」

「何のことですか？　くわしく話してください」

「あの家の三本組みの包丁は、隣組の御祝儀の引き出物として、おらちも一緒にもらったものなんだ。だから、あの家へ行くたびに目についてたんだが、あの日に限って、二本は放り出してあったのに、一本だけは、いつものように差してあった。あのきれい好きなカネちゃんは、いつも、三本ともよく洗って並べて差しておいたんだ。それが、ちらっと、おらが頭に焼きついた。あ、それから、柱の傷、ま、こりゃいいか」

「な、何ですか？　その柱の傷って」

「なにね。その横の柱に、うすく引っかいたような傷があったんだ。よく見ると、『ツバ』って読めねえこともねえ。そのことを甚兵衛さんに話したら、ただ、笑っていたっけな。そのくせ、それを写真に撮ったり、庖丁もハンカチにくるんでもってっちゃった」

（おのれ、甚兵衛警部め。僕をだましたな！）

「ほかの人も、『ツバ』って、読んだんですか？」

「さあ、そいつはわからねえ」

その帰りに会社に寄ると、今夜は、澄江の外に白井や芥川もいた。

「社長が、長谷川さんの報告を聞いて、三人に知恵を貸してやれっていうのよ」

澄江が、いいわけのようにいった。

こう近くで見ると、白井も芥川も、四十才前後の落ち着いた人柄である。二人とも、話し方がおだやかで、この人々がかつて名の知られた盗人だったとはとても信じられない。しかし、やはり常人とはちがい、澄江が『忍者みたい』と表現したように、彼女が残業をしながらふと横を向くと、いつの間にかそばに立っていたことがあったそうだ。

長谷川の経過報告を聞くと、

「長谷川課長。じつは、私と芥川は、社長命令で、この数日間、あなたを尾行していたんですよ」

白井が、頭を掻きながらいった。

「課長？　何ですかそれ。止めてくださいよ。白井さん。僕は、外務員に過ぎないんですから」

「あら、長谷川さん。白井さんのいったことはほんとうよ。社長は、あなたを正式に調査課長に任命したいらしいの」

澄江が、真剣な顔で告げた。長谷川は、驚いたが、

「そんな……。それより、僕を尾行したっていうのは？」

「協力と警備ですよ」

「協力はありがたいけれど、警備はいらないんじゃないかな」

「いや、今度の事件は、何か不気味なものがあります。課長は、もう二度も襲われているんですよ」

「えっ、なんですって」

「甚兵衛警部と別れた直後と、小森さんの家を出てここへ来る途中です」

「じょ、冗談じゃないぜ」

「どっちも、襲いかかる寸前に私たちがかけつけたので、そのまますっと消えちゃったんですが……」

「へえー。全然気がつかなかったなあ。第一、白井さんたちが尾行していたことも知らなかったなあ」

長谷川は、ゾッとした。

それから十時近くまで話し合いが続いた。中でも、藤吉宅に残された「ツバ」の二字が話題の中心になった。

解散してから、長谷川は、ふと、その字を自分の目で確認しておかなかったことに気がついて、その足で、藤吉宅に向かった。もちろん、後ろのどこかに、白井たちが尾行してくれているはずだった。

藤吉宅は、真っ暗だった。明日になれば、義茂が捜索願を出すだろうから、この家に自由に出入りできなくなる。懐中電灯で周囲を照らしながら、そろそろ歩いて、台所の流し台に近づいたとき、ブスッと小さな音がしたかと思うと、右肩が焼けるような激痛を覚え、思わず懐中電灯を取り落としてしまった。同時に、自分でも驚くほどの早さで、床に転がって身を伏せた。一、二分もたたないうちに、風のように走り寄った白井が、長谷川を

かばうように体でおおったが、右肩の傷口からの出血を見つけると、手早く服を脱がせ、消毒をし抗生物質を擦りこむと、いつも用意してあるのか包帯できつく縛った。

「いや、ありがとう」

長谷川が痛みをこらえて礼をいうと

「今、芥川が、敵を追っています。もし、つかまれば、正体がわかるでしょう。傷は、たんなる擦過傷です。たいしたことありません。課長の若さなら、寝て起きればなおりますよ」

いとも簡単にいう白井の顔は、まさしく忍者だった。

そこへ、芥川が戻って来た。

「いやあ、逃げられた。あの逃げ方はプロだな。俺の想像じゃ、どこかの特殊部隊出身かな」

「そうなると、課長をねらった弾をわざと外したのは、多分、警告だな」

「そういうこと。この事件から手を引け、ってな」

「しかし、事件の動機が皆目分からないのだから、手の引きようもない」

このとき、長谷川が気がついて

「なぞの文字を確認しておきましょう。できれば、写真に撮っておきます」

あわてて、台所の柱に懐中電灯の光をあてて見ると、そこは、鋭い刃物でえぐりとられていた。

七

久々に、全メンバーが社長室に集まった。設楽盛吉社長、本木マリ社長秘書、設楽澄江会計課長、長谷川常夫調査課長、白井実、芥川一の六名。

社長は、長谷川の社員への引き上げと課長昇進を披露したあと、

「どうもこの事件は、奥が深いかもしれんな。何となく不気味な感じや。儂も、長谷川君を、一か月ばかりぶらぶらして来いと藤木義茂のところにやったんだが、とんでもない成り行きになってきたもんや」

珍しく、深刻な顔をしていた。

「社長。これは、バックに、かなりの大物がついていますね。依頼者の藤木義茂の身元についても、洗い直す必要がありますな」

その白井の言葉を遮るように

「いや、あの『ツバ』の文字を解き明かす方が先だ。これは、まちがいなく、警部が何か知ってるはずだ」

芥川が、主張した。

「つばき、唾とか、椿の樹とか」

「いやいや、ちがうな。ふつう、漢字が思い出せなくて書くとしたら、平仮名だ。カタカナの場合は、外国語のことが多い」

そこへ、電話が入った。くわえ煙草で受話器をとった社長の顔色が変わった。

「なんだって？　小森新造が襲われたって！」

「えっ、社長！　殺されたんですか？」

「いやいや、命には別状はない。ただ、殴られただけだ。診療所の医者が手当したが、どうやら、コブ程度ですんだらしい」

「そりゃよかった。しかし、一体、どうして……」

「今朝、女の声で、『ツバ』の文字に心あたりがあるから、鎮守の森まで出かけて来てもらいたい、と電話があったんだそうだ」

鎮守の森は、村の鎮守の神八幡宮の森のことである。新造の家から十分たらずで行くことができる。

「突然後ろからやられたので、人相はわからなかったそうだ」

急に、一座が静まり返ってしまった。やがて、社長が、

「いよいよ決戦か。長谷川君。とにかくまず、甚兵衛警部に会うことだ。義茂氏を通して依頼すれば、きっとなにか知っていることを話してくれるはずだ」

それから五日後、長谷川は、ようやく、前橋署で甚兵衛警部をつかまえることができた。彼は、あいかわらずおだやかな顔で、茶も、自分で運んで来た。

「さきに、知らせておこう。藤吉さん宅の包丁の鑑識結果が出た。『ツバ』の字を掘ったのは、たしかにあの包丁だそうだ。包丁の先に柱の繊維がついてた。それから、君の会社の社長や本家のおやじさんに会って来た。おやじさんの頼みとあれば、話さないわけにもいくまい。そのかわり、君にも、わたしの話を信じ、絶対に口外しないと誓ってもらいたい」

「えっ、社長にもですか？」

「いや、社長には、わたしから直接話す。あの人は、関西弁を使ったり、いろいろなかけ引きなどをして、君ら若い人には誤解されているかもしれないが、あの人は、骨の髄までデカだ。絶対信頼できる」

「はい。口外しないと約束します」

「うん。君はアフリカの原住民の一つ、トゥアレグ族という種族を知っているかい？」

「いいえ。全然」

「そうか。今から六十年以上前の話だ。ある日本の青年がトゥアレグ族の娘と恋に落ち、男の子を得た。トゥアレグ族は、アルジェリアの南東部に位置するタマルカンセットを首都とした原住民だ。その数は、およそ四十万人。ここを中心に、リビア、チャド、アルジェリア、ニジェール、マリなどの国々に分散して住んでいる。その国々の政府とは没交渉で、政府は、彼らに対して一切干渉しないかわりに援助もしない。ま、わたしたち日本人には理解できないことだがね。

その祖先については、いろいろな説があるが、白色系ベルベル族から出ていることはまちがいがない。端正な顔立ちや鋭い目、二メートルの背丈の写真が、それを物語っている。その日本の青年の恋した女性も、さぞかし、美しい人だったろうと思う。この民族のすべての部族が使うのは、タマシェク語と呼ばれる独特な言葉だ。遊牧民として生活している者も住居生活者も、かたくなに自分たちだけの生活圏を守っている。ところが、近年、若いトゥアレグ人の中に、フランス語を使える者も増えてきた。フランス人のサハラ砂漠探検隊のポーターをつとめれば、遊牧や耕作とは比較にならないほど高収入になることに気がついたからだ。こうして現在は、外国人との交際も生まれるようになった。この日本人の青年も、その一人と考えてよい。しかし、不幸にも、その女性は間もなく男の子を残して亡くなった。その青年は、昭和二十年の敗戦のときに、子供の手を引いて引き上げて来た。そして、子供を仙台市に住む親友に実子として引きとってもらった。その子供は成人して家業の農業に専念し、結婚して男児を得た。この男児、市村光太郎は、現在はすでに二十歳。東北大学二年に在学している。もちろんトゥアレグ族のことなどは、何も知らされていないし、完全に日本人の青年だ。ただ、背だけは、君とおなじく、百八十センチぐらいはあるがね」

話おわって、警部は、笑い、ゆっくりと茶をすすった。

予想もしない話を聞かされて、長谷川は、目を見張った。警部の意向がわからない。

「じゃ、警部は、市村光太郎君を疑ったわけですね？」

「うん。柱に残された『ツバ』という奇妙な言葉から、トゥアレグ民族を想像した。そこで、君には申しわけなかったが、なん日か、その調査で走り回った」

「それで、柱の文字を写真に撮ったり、包丁を持ち去ったんですね」

「いや、長谷川君に、というより、村の人々にあまり見せたくなかったんだ」

「なぜですか？」

「追々説明する。わたしは、密かに、『ツバ』の二字がトゥアレグの言葉タマシェク語の中にあるのかどうかを調べたんだ」

「ありましたか？」

「むかし、シャルル・フーコという宣教師が、『タマシェク語字典』を作っていた。それを、我が国の国会図書館で発見したんだ。もちろん、いくら見ても、『ツバ』なんて言葉はなかったよ。また、光太郎君のアリバイも、宮城県警に出向いて、この目で確かめて来た。これも、完全なアリバイがあった。どの事件のときも、ね」

警部は、にこやかに笑った。長谷川の知らない間に、これだけの仕事をやっていたのだ。

「それは、よかったですねえ。でも、どうしてそんな

に光太郎君のことをかばうんですか？　まさか」

「その、まさかだ。光太郎君の祖父――かっての日本青年は、現村長田中和吉さんの父上だ。わたしが、これを秘密裏に調べたのには、二つの理由があった。一つは、もしこれをこじらせると国際問題にもなりかねないと考えたことと、もう一つは、これが明らかになれば、この平和な村に波風が立つことだ」

「あっ、選挙に悪用されるからですね」

「うん。ま、そういうことだ」

藤木藤吉の調査は、捜索願が出されたので、前橋警察署の扱いとなった。甚兵衛警部は、駅前通りの「日本交通公社前橋支社」をおとずれた。そこへ、打ち合わせどおり、長谷川が、偶然出あわせたように近づいて来た。

警察手帳を示して用件を述べたので、支社長代理が応接室へ案内した。もちろん、長谷川もそれに続いた。

藤吉が参加したツアーは、「農協特別企画・二週間のヨーロッパの旅」だった。県下の農協職員、家族や預金者対象に企画されたもので、二十名ほどの応募者があった。

八月七日に成田空港を出発。ロンドン二泊、マドリッド二泊、ローマ二泊、ベルン二泊、フランクフルト、ヴィスバーデン、ベルリン各一泊、パリ二泊して、二十三日帰国。ほとんどを航空機で結ぶかなりハードなスケジュールだった。

「このコンダクターに会えませんか？」

「はい、ちょっとお待ちを」

と、答えて、支社長代理は、事務員をよんでスケジュール表を持参させしばらく眺めていたが、顔色を変えて、

「あ、これは、東京の池袋支店の桑原啓介です。あの、交通事故で殺された……」

「えっ、あの、目黒でひき逃げされた、あの桑原！」

甚兵衛警部と長谷川は、顔を見合わせた。二人とも、なにかがひらめいた。そこで、桑原の性格を、根掘り葉掘り突っ込んでたずねると、どうやら、乗客に報酬をもらってなにかを引き受けることがあったらしい。

ここで、あのひき逃げ事件が、再び、クローズアップしてきた。

前橋署は、俄然、色めき立った。

東京の警視庁と共同で、ツアーの参加者名簿が調べられ、参加者にそのとき撮った写真や記録の提出を求めた。

前橋署捜査課には、数百枚の写真や数十のメモ、手帳の類がうずたかく積まれた。しかし、完全に全員の動向をとらえるためには、どうしてもコンダクターの協力が必要だった。そのコンダクターがいないのだ。

すべての考えがいき詰まったとみえたとき、長谷川が、

「甚兵衛警部。もし藤吉が、桑原を買収して、どこかで別行動をとったとしたら、列車で移動するときだけだ

と思うんですけどね」

「うん。当然だろうな」

「そこで警部。この日程を見ると、日本――ロンドン、ロンドン――マドリッド、マドリッド――ローマ、ローマ――ベルン、ベルン――フランクフルト、ウィスバーデン――ベルリン、ベルリン――パリ、パリ――日本は、すべて空路による移動ですが、ドイツのフランクフルト――ヴィスバーデンだけは列車を使っています。外国旅行がはじめての藤吉が、もしなにかを企てるとしたら、このあたりきりないのじゃありませんか？」

「うーむ」

甚兵衛警部は、うなった。これは、新しい発見である。真っ暗やみの中に、一条の燭光が射した思いがした。

「そのうえ、地図で、ヴィスバーデンの近辺を探すと、ツバイブルッケン市があるんですよ」

「な、何だって？」

甚兵衛警部は、長谷川から、地図をひったくった。

このとき、長谷川の「ついてない病」が、はらりと落ちた。

八

トモコ・バルツは、雨空を見上げて、ルイゼがそろそろ帰って来る時間だわ、とつぶやいた。

ルイゼは、トモコとペーター・バルツとの間に生まれた一人娘。もうグレンツ・シューレ（基礎学校）四年を終了して、今は、ギムナジュウム（大学進学コース）に通っている。授業は、十二時ごろ終わるので、間もなく腹を空かせて帰って来るだろう。彼女は、このごろ、自分より背が高くなった娘の顔を思い浮かべて、満ち足りた幸福感に思わず「ウフフ」とひとり笑いをした。

思えば、数奇な運命だった。エスペラントの取り持つ縁が、トモコを、このドイツ西南端のフランス国境の町ツバイブルッケン市に永住させることになった。

彼女は幼いころから外国語に興味をもち、それが、長野県立女子大在学中に国際語であるエスペラントクラブに所属させた。エスペランチストの集まりである「日本エスペラント協会」にも入会した。十八年前、日本の鹿児島市で世界大会が開かれたとき、ドイツから来日したのがペーター・バルツで、二人は、たちまち恋に落ちた。バルツは、ドイツの若い歯科医師だった。

一年間、二人は真剣に文通や国際電話で愛情を確かめあったのち、結婚した。

このツバイブルッケン市は、フランスとの国境を接する「ザール地方」にある人口五万人ほどの地方都市だ。

中世には数多くの貴族たちの所領にされ、動乱の起こるたびにドイツ、フランス、スエーデン、ポーランドの

領地に分割、編入され、被占領市民としての苦しみを長い間なめ続けてきた悲劇の都市で、千九百四十五年の連合軍の大空襲では、一時、市街地は壊滅した。

その街が、日本の諸都市と同じように、まさに不死鳥のようによみがえり、現在は、ドイツ屈指の「バラ公園」をもつ観光地に変身している。

市街地には中世ヨーロッパ風の建物や赤煉瓦の住宅、近代的な市役所、銀行などが建ち並び、周囲は、緑の野山や美しい川に囲まれて、まさに平和都市の姿である。

生活にゆとりが出るようになってから、トモコは、夫と娘を連れて日本へ「里帰り」をした。二度目には、両親をツバイブルッケンまで連れて来て、ライン川などの観光地を案内して、老いた両親をよろこばせた。

その里帰りのときだった。東京の銀座の服部時計店前で、幼馴染みのとうちゃん（藤木藤吉）に、三十年ぶりに出会ったのは。トモコが城山村の幼稚園に在園したのは一年間だけだったが、さすが「仲良し三人組」といわれていた間柄だけあって、たがいに一目で気がついた。どちらも、幼いころの面影を残していたのである。

夕食をともにするだけの短い時間だったが、とうちゃんは、すっかりトモコの話に魅せられてしまった。

そして、去年の七月、突然、彼から「ヨーロッパ団体旅行の一日を割いて訪問したい」という国際電話が入った。もちろん、トモコも大歓迎で、すぐにツバイブルッケンまでの道順を知らせてやった。

八月十七日午後六時ごろ、ザールブルッケン駅から電話連絡が入ったので、トモコみずからマイカーで迎えに出向いた。ツバイブルッケンからザールブルッケンまでは、国道四二五号線（アウトバーン）を平均百三十キロで飛ばして三十分である。

十八日は、一日中、ヨーロッパ屈指といわれる「バラ公園」や千年の歴史をもつ古城ベルベルトシュタイン城、ワイン・タワーなどを案内した。

アメリカ軍基地近くの売店で買い物をしていたとき、ちょっとしたトラブルが起きた。

猛烈な勢いで走って来た黒人が、藤吉と正面衝突したのである。激しくかたわらの柵に打ち当たった藤吉は、額、あご、手首から出血し、黒人も顔を真っ赤にしていたが、なぜか、軽いびっこを引きながら逃走してしまった。このツバイブルッケンには、周囲にドイツ、フランス、アメリカの三つの軍事基地がある。そのため、兵士たちもトラブルがたえない。この黒人は軍服を着ていなかったが、おそらく脱走兵だろうと思われた。

ヴィスバーデンのナッサー・ホッフ・ホテルに着いたときは、約束どおり、添乗員の桑原啓介は門口で出迎えた。ツアーのメンバーたちは、数人の浪人が部屋に引きこもったほかは、全員出かけていて、藤吉が単独行動を

とったことに気付いた者はいなかった。
「いまごろ、とうちゃんは、一体、何をしているかしら。きっと、きれいな奥さんと畑仕事だわ」
ふっと、トモコは、幼なじみの顔を思い浮かべた。

九

その藤吉は、同じツバイブルッケンにいた。
「在独米軍ツバイブルッケン基地」特種病院付属「リハビリテーション棟」は、病院とは隔離された場所にあり、全快した患者たちが収容されていた。ここにいる人々は、社会復帰訓練と称して、米軍宿舎の軽労働、草むしりとか庭そうじに従事していた。
藤吉と、今日も、ぼんやりと自分の過去について考えていた。医師からは全快を告げられたが、記憶が完全には戻らないのである。覚えているのは、快方に向かったころからの自分のことだけであり、ほかの患者の様子も知らなかった。
ただ、この棟に移されてから、同じ部屋に入ってきた女性と子供が自分の妻と息子であることは、日が経つにつれてわかってきた。
ある日、係のギャラガン軍曹に、自分たちの入院のいきさつについてたずねた。
「あなたたち三人は、ヨーロッパ旅行に来ました。そして、この基地の前で病気になりました。ドクターが調べたら、伝染病とわかったので、急いでここの病院へ収容したのです。さいわい、全快したので、あとは記憶が回復すれば退院になりますヨ」
と、笑いながら、答えた。
「わたしたちが、どこの人間かわかりますか？」
「あなたたち、日本人」
「倒れたとき、パスポートがあったはずですが」
「伝染病なので、急いで、衣類と一緒に焼きました」
「そのとき、字を読まなかったんですか？」
「オー、ノー。『急いで焼け』、これは命令です。軍人は命令には絶対服従します。それに、日本の字、世界一むずかしい。ジュッセルドルフかボンにでもいかなけりゃ、日本の字の読める人はいませんね」
この親切な軍曹は、本心からそう思っているらしい。
ある日、藤吉は、思い切って、漠然とではあるが、いつも頭にこびりついているイメージを訴えた。
「わたしが、ナイフのような物で、柱に〝ツバ〟って書いているんです」
「なるほど。医者が、記憶喪失の回復期には色々なことが断片的に頭に浮かぶ、といってます。まあ、上に報告だけはしておこう」
しかし、いつになってもその返事はなく、あいかわらず、単調な日々が続いた。

ふと、藤吉は、なにかが気になって、なに気なく外を眺めて愕然とした。
軍人宿舎、それも高級将校宿舎あたりから、めらめらと火の手があがっているではないか。
「たいへんだっ。火事だあ」
いいながら、もう藤吉は走っていた。走りながら、上着を脱いで片手にもっていた。
現場に着いてみると、意外に火の回りが早かった。
入口のあたりでは、髪振り乱した五十年配の夫人が、大声でわめきながら、三階を指さし、自分もかけのぼろうとしては周囲の人に押し止められている。
藤吉は、なにもいわず、もっていた上着を水道の水に浸けると、それを被り、全速力で階段をかけのぼった。
火の粉をかいくぐりながら三階に着くと、一才ぐらいの幼児を抱えた老女が、盛んに助けを求めている。藤吉は、その子を受けとると、猛スピードで階段をかけおり、半狂乱になっている夫人にわたし、再び、三階へとって返した。そして、力尽きて倒れている老夫人を背負うと、残った全精力をふりしぼって階段をかけおりた。しかし、一階で背中から老夫人をおろしたとたん、中から吹き出した熱風に包み込まれ、火だるまになった。
藤吉が意識を回復するまでに丸二昼夜かかった。あまりの大やけどで、一時は、生命が危うかったという。
彼が目を開けたとき、大声を上げて泣きさけんだのは、あの入口で幼児を受け取った婦人だった。そして、そのそばでは、妻と息子がかいがいしく働いていた。
在独米軍ツバイブルッケン基地司令官室には、四名の幹部が、急きょ顔をそろえた。併設の「細菌兵器研究所」内の患者に変化が生じたからである。
議題は、「細菌兵器『HN——コンドロシン』汚染患者藤木藤吉の記憶回復状況について」となっている。
出席者は、軍司令官オルソン少将、参謀長ジョンソン大佐、軍医マコーリー中佐、参謀マローイ大尉。
まず、マローイ参謀の説明からはじまった。
「藤木藤吉。三十八才。日本国群馬県勢多郡城山村穴山二十四番地。平成X年八月七日から「農協特別企画・二週間のヨーロッパの旅」に参加し、十七日、十八日の両日、ツバイブルッケン市アーバー地区のペーター・バルツ宅に滞在。
十八日午後三時半ごろ、基地前で、脱走患者カルジャンと接触、「HN——コンドロシン」病に感染。翌年四月五日、当病院へ強制収用。以後、解毒剤の注射および口径による治療を実施。六月二十日、体内における病原菌は完全に消滅。以降、リハビリテーション棟に移し、親子三人の同居を許可。

これは、三年にわたるわが国軍事医学の勝利であります。解毒剤が完成したので、この細菌兵器「HN――コンドロシン」は、いつでも、使用が可能であります。八月十六日、解毒剤の副作用による記憶喪失中であるにもかかわらず、『柱にツバの文字を彫った』記憶のみ回復。目下、観察治療中。以上であります」

「よろしい。これまで順調に快方に向かっていた患者が、なぜ、突然、今回のような行動に出たか、マコーリー軍医中佐、説明をしてくれたまえ」

軍司令官のオルソン少将が、重々しくいった。

「結論から申し上げますと、この原因は、まだ、不明であります。なぜならば、この種のケースのデータはあまりにも少なく、突発的な事例と断言せざるを得ません。一般論で申し上げるならば、記憶喪失症の回復期には、断片的な記憶回復は往々みられる現象で、次第しだいに完全な回復に向かう傾向と考えております」

軍医は、いくぶん、当惑しながら答えた。実際には、この細菌兵器「HN――コンドロシン」解毒剤使用による副作用の記憶喪失からわずかでも回復した患者は、藤木藤吉が第一号なのである。

「藤木の思い出したのは、柱にツバと彫ったこと一つと考えてよいのか？」

参謀長ジョンソン大佐の質問だった。この髭のこい大男は、歴戦の勇者だった。

「はあ、あの時期の患者の心は少年のように素直でありまして、ほかになにかあれば、必ず話します」

「軍の機密に関する事項を察知しているようすはないか？」

参謀長の質問はきびしかった。

「ありません。担当のギャラガン軍曹の話では、患者は、きわめて明るくおだやかにすごしているそうです」

今度は、参謀のマローイ大尉が答えた。

「そこがむずかしいところだ。わしが、かって歴戦して来たヴェトナム戦争でも、スパイたちは、みなおとなしかった。なにも知らんふりをしておった」

マコーイ軍医注意は、首を振って

「藤木藤吉は、そんな男ではありません。彼の、日本における生活も調べあげてありますが、正直で、友情にあつい人物だと確信します」

「それは、君個人の考えか？」

「いえ、精神科医としての判断であります。もし、彼が懼病していなければ、静かな日本の生活を送れたのに、と、同情しております」

いくぶん紅潮した顔でマコーリイ軍医はいった。患者としての藤吉の人柄にひかれていることがわかる。

「拉致したときの模様はどうだったのかな」

あいかわらず、重々しい声で、司令官が下問した。

「はっ。四月五日午前一時前後、CIAの手で藤木宅

を急襲し、強い睡眠剤を注射して、運び出しました。ただ、藤吉は、ちょうどそのとき、水を飲むために台所におりましたので、少し抵抗したようであります。彼が、そのときとっさに柱に傷をつけたことは、後日の調査でわかり、警察が動き出す直前に削りとりました。運び出した藤吉夫婦と子供は、横田基地からここへ直接輸送しましたので、だれにも感知されることはなかったと思います」

マローイ参謀がこたえた。彼は、さらに、

「しかし、今回のCIAのとった行動は、後手に回る動きが多かったように思います。藤吉の計画に協力したコンダクター桑原啓介の存在に気づくのが遅かったばかりに、交通事故に見せかけた殺人を犯さなければなりませんでした。長谷川探偵や小森新造をおそって警告したのも、CIAのあせり以外のなにものでもなく、かえって、手掛かりを残してしまいました」

と、つけ加えた。彼は、かなり深刻な顔をしている。

マコーリイ軍医中佐は、彼の話をなんどもうなづきながら聞いていたが、

「しかし、今回のE作戦（藤吉たち拉致計画）は、別の面では、正確だと考えています。少なくとも人間の生命の救助の面では、です。三名とも、収容してからすぐ診断したところ、すでに罹病していました。そして、一か月後には藤吉が、二か月後には妻子が発病しました。もし、あと一月遅ければ、あの部落は、原因不明の伝染病で全滅するところでした」

と、マコーリイは、医師の顔になっていった。

「さて、諸君。そこで、今後、この藤吉家族の処置をどうしたらよいか、意見を聞きたい」

オルソン少将は、きわめて厳粛な顔で一座を見た。

一瞬、静寂がおとづれた。

先日、藤吉が、自分の生命をもかえりみず、司令官の母親、一人息子の忘れ形見のエリザベスを助けたことはだれも知っていた。しかも、相手が司令官の家族と気づかずにおこなった行為だったと知って、高級将校宿舎の夫人たちの評価は、俄然、高くなったらしい。

「いいにくいことだが、わしの歴戦の経験からいうと、一人の評判のよい男を助けたために、のちのち、数多くの人々を殺すようなことになってはならないと思う」

「と、いわれると？」

「なるべく早い機会に、藤木藤吉を処刑することだ」

「しかし、彼はまだ、完全に回復していません」

マコーリイ軍医が、あわてていった。

「細菌兵器「HN――コンドロシン」病からは、回復しておるよ。解毒剤の成果があがったということだ。記憶機能の実験は、残った妻子でおこなえばいい。そして、追ってこの二人も処刑する。銃殺でも、毒殺でもよい」

「それは、参謀長のお言葉とも思えません。それが、

名誉あるアメリカ軍人の態度でありますか？」

興奮したようにマローイ大尉がさけんだ。目がぎらぎらしている。

「だまれっ。マローイ。うわさによれば、貴様の妻マイザは、『あれこそ、人類愛の発露だ』などと、宿舎中にいいふらして回っているそうだな」

「それがどうかしましたか。大佐。あなたの奥様だって、たいへん感激していらっしゃいました」

「そうだ。亢奮のあまり、一晩中眠れなかったそうだ。涙ぐんでな。しかし、それがどうしたというのだ。今、われわれが協議しておることは、いかにして細菌兵器「HN——コンドロシン」の秘密をロシヤのKGBやイラクのモサド情報機関から守るかということだ。過去、これらの秘密が、個人的感情から外部に流れ、そのために味方が全滅した不幸な例があったことを忘れてはならない」

気まずい空気が流れた。もちろん、この会議では、これまでに何回か意見の対立はあった。しかし、人道と軍事機密の間に立った議論はなかった。軍人たちは、その両立が不可能であることを、経験を通して知っているからだった。軍隊は、人を殺すためにあるのではなく、人を生かすために人を殺すのだ、という矛盾に絶えず悩まされているのだ。

オルソン司令官は、最後まで、重々しい顔付きで、会議を閉じた。

マイケル・オルソンは、ローズ夫人と母親サマンサと睨み合っていた。食事の途中で、藤木藤吉の話が出て、意見がかみ合わなくなってしまったのだ。

「ローズ。君は、それを、だれから聞いたのだ？　マローイだな」

「それは、話せませんわ。それよりも、あの藤木を処刑するときめた、あなたの心の底が知りたいの」

「別に、きまったわけではない」

「マイケル。あなたはまた、いつものように、家族には一切知らせずに、将軍の威厳を保とうとなさるの？　しかし、今度という今度は、あたくしも、いいたいことは、全部、いわせていただくわ」

「それほど目に角を立てるほどのことでもない」

「とんでもない。これを黙認したら、あたくし自身、人間として失格します。あたくしは、軍人の妻である前に一人の人間でありたいの。すぐれた人間愛を目撃して、すなおに感動できる人間でありたいのよ。マイケル。あなたは、すばらしく親孝行だった。女手一つであなたを育てたお母様を大事にしていらっしゃった。あたくしは、あなたのその誠実さに、一生を託す気になったんです。ところが、あなたは、地位が上がり責任が増すごとに、かわっていった。そして、とうとう、今日、鬼のような

行為をなさった。世界一大切なお母様を命懸けて助けてくれた藤木を、処刑しようとなさった。あたくしは、絶対許しません」

夫人は、とうとう泣き出してしまった。それは、藤吉が、病床で目を開けたとき、枕元で、声を上げて泣き叫んだ老夫人の姿であった。

オルソン少将は、言葉もなく、黙りこんでいたが、ふと立ち上がろうとすると、

「お待ち、マイケル」

母親のサマンサが呼び止めた。

「お前、一人っ子のヘンリイ空軍中尉が戦死したとき、遺骨に向かって、なんとおいいだった！　『パパがエリザベスを必ずりっぱに育てる』といわなかったかい？。母親のローラが死ぬ枕元でも、お前は、同じようなことをおいいだった。そのエリザベスが、今にも焼け死にそうになったとき、お前はなにをしていたの？。お前は、助けにも来なかった。わたしはあのとき、火にかこまれながら、ヘンリイとローラの恨めしそうな顔を見たわ。あたしはもうお前を息子とはよびたくない！」

「ママ、ちょっとまってくれ。あのとき私は、ほんとうに、離れた場所で会議をしていたんだ。だから、助けに行くことができなかったんだよ。ママ」

オルソンの顔色は、蒼白になった。戦死した息子や未練を残して死んだ嫁が、オルソンの目に浮かんだ。

それよりも、現在自分を見つめている母親や妻、それにエリザベスまでが、まるで冷ややかな他人の顔になっていることに、はじめて、気がついた。

「ママ、まってくれ。とにかく、三時間だけ考える時間をくれ。わたしは、一生懸命、考える。それから、必ずよい返事するから」

あたふたと奥の部屋に引き込んだオルソンに、追いかけるように参謀長ジョンソン大佐から電話が入った。

「閣下。わが家は、ただ今崩壊しました。妻、長男、長女、次女、それに従卒までが家を出て行きました。どの置き手紙にも、『長い間、世界に冠たるアメリカ軍人の家族として誇り高く生きて来ましたが、今度はじめて、あなたが、旧ドイツ軍のヘス将軍のような性格の人とわかったので、家を出て行きます』と書いてあるんです。ああ、どうしたものか、わしは、軍人であろうと努力して、家族を失ってしまった。ユダヤ人を何百万人も虐殺した鬼畜ヘスと同じ目で見られるなんて！　これでは、わしは、なんのために生きてきたのか、わからなくなった。閣下！」

強気で知られた参謀長が、混乱して、泣き声を出している。

「まて！　上部へ伺いを立ててみる。それまでは、軽挙妄動はならん。いいか。本官も、人間愛を崩壊させるような軍律などあってはならないことに、はじめて気が

ついた。これから、職をかけても、上官に嘆願する」
電話を切ると、早速、暗号送話器を取った。欧州米軍総司令部とアメリカ合衆国大統領府あてである。

三時間後、オルソン少将は、ほほえみをたたえながら、食堂に姿を現した。いつの間にか、ジョンソン少佐、マコーリイ軍医中佐、マナーイ大尉も顔を見せている。
「ワシントンからの指令を伝える。偉大なる人道の実践者藤木藤吉の家族三名は、ワシントン郊外のオルソン少将宅――つまり、本官宅に移し、アメリカ市民として生活することを認める。もちろん、少将の母サマンサおよび孫エリザベスがともに暮らすことはいっこうに差し支えない」
部屋の一隅で歓声が上がった。
「なお、藤木藤吉の長男玲治は、将来、希望があれば、大学教育を受けることができ、その費用の一切はアメリカ合衆国において支弁する。また、彼らに記憶が回復したときには、彼らの意志によって、帰国し、日本に永住することも認める。これは、ツバイブルッケン基地付属研究所が協力して解毒剤研究を完成し、さらに高性能な新細菌兵器製造に着手することができたので、連合国特別規定に基づき、来春までには、日本を含む各連合国に公開されることになったからである」
マローイ大尉が、両手を挙げて飛び上がった。

十

城山村には、冷たい赤城おろしが吹いていた。
藤木義茂宅の客間では、甚兵衛警部、長谷川、義茂の長男義盛が地酒を酌み交わしている。義茂老人はすでに寝所に引き取ったようだ。甚兵衛が、義盛に、
「義盛さん。その後のおやじさんの具合はどうだ？」
「めっきり年を取ったが、頑固はなおらねえ」
「ハハハハ、あのおやじさんから頑固をとったらなにが残るかねえ」
「ところで、老人の、村長選の夢のほうはどうなりましたか？」
長谷川がたずねた。彼は、あれ依頼、義茂に会っていない。今日は、あの続きを聞くつもりできたのだが、もう早々と寝てしまっている。
「いやあ、選挙の話にでもなると、あいかわらず威勢のいいことをいうがのう。しかし、うすうすは現村長の評判がいいことは認めているのさね」
義盛は、村の名物の大根千しを皿にとりわけながら、笑った。
「ところで、長谷川君。藤木藤吉さん一家の消息がわかったよ」

「えっ、どうなってるんですか？　もちろん、元気なんでしょうね」
「先日、署長と一しょに、県警本部によばれてね。情報をもらった。親子三人、元気だそうだ。来年あたりには、村へもどってくるかも知れない」
「……」
「どうも、あの一家に、まだ抗生物質の開発されていない伝染病が発生したらしいんだな。そこで、国の方で急きょ収容したらしい。この事実が世間に知れ渡ると、地域の大恐慌を引き起こすおそれがあったので、極秘理に処理したようだ」
長谷川は、ふっと、国家権力や国際情報機関の影を頭に描いたが、あわてて打ち消した。
「それで、一体、どういう経路で伝染したんですか？」
「それは、君のカンがぴったりあたったんだ。ツバイブルッケンだよ。藤吉さんは、やはり、ヨーロッパ旅行の途中で、幼友達のいるツバイブルッケンに寄っていたんだ。そこで、病院から脱走して来た患者と衝突して、血液感染した。幼友達の女性とは、別になんでもなかったのだが、あのまじめな藤吉さんのことだ。不倫のように思われては困る、と、恋女房には内しょにしていたのだな」
「それで、今どこに？」
「それはわからない。当分伏せておくのじゃないかな。エイズのときのように」
「僕や小森さんを襲った事件はどうなりました？」
「あれは、暴力団の抗争かなにかで、この事件とは関係がないことがわかった。今は、県警で捜査を続けている。それにしても、今度の事件では、君の捜査能力は優秀だったなあ。これじゃ、社長が婿にほしがるのも無理はないよ」
「なんですか。婿って？」
「あれっ。君は知らなかったのか。社長は、近く澄江さんを養女にし、君と結婚させようとしているよ」
「そ、そんな」
長谷川は、赤くになった。澄江の大きな目と、すらっとした脚が目に浮かんだ。
彼は、はじめて、（僕は、ついている）と思った。

（完）

潮哳録（二）

鯨　遊　海

讃長谷川貴子嬢青春

平成五年初夏

珠玉輝肌漆黒瞳
娥眉婉轉貴妃風
可憐微笑疑天使
髣髴佳人名畫中

（韻・瞳風中）

〈長谷川貴子嬢の青春を讃える〉

珠玉の輝肌漆黒のひとみ
がびえんてん(注)貴妃のふう
可憐な微笑は天使かと疑い
ほうふつす佳人名画の中

〔口語訳〕

真珠の様な純白に輝やく肌、漆の様な純黒に輝やく瞳、
すらりとしてあでやかでまるで楊貴妃のようだ。
あどけないほほえみは天使かと疑う程で、
想い浮かべるのはあの名画の中の美人モナリザかとも。

〔補　足〕

桃や李の花を私は何十年と賞でて来たがこの年になって
貴女の様に才色兼備で情ある花を始めて知った。
結婚してもせめて余香を世の為人の為に発して欲しい。
芳ばしい名梅が自庭で私かに咲くのを誰も許さないよ。

〔補　足〕

(注)人について「知る」と云うときは、単に「知り合い」と云う意味を越えて、その人の「人格、才能の良き理解者である」の意をもつ。史記「士為知己者死」

☆年経りて始めて知りぬ芳梅の
秘かに咲くを誰か許さん

讃小野瀬陽子嬢青春惜退職

平成六年四月

李咲社中充雅香
明眸皓歯映春陽
子行寂寂誰能耐
彼我朝朝懶起牀

（韻・香陽牀）

〈小野瀬陽子嬢の青春を讃え退職を惜しむ〉

李咲きて社中雅香充ち
明眸皓歯(注)春陽に映ゆ
子行きて寂寂たれかよく耐えん

(注)すらりとしてあでやかな美人のさま。
※姓名の一字「貴」を詩中に折込んだ。以下詩題中の・印は「その字を詩中に折込み済み」の意とする。
※グラマーで色白なところは楊貴妃を、微笑は天使を、それでいて智的で謎めいた瞳はモナリザを連想させるお嬢様。あどけなさと妖艶の予感。女性は永遠の謎か

☆柔肌の眩しく妖し君知らで
黒きひとみは童女のごとく

讃飯田美幸嬢青春祝婚約

平成六年二月

賞李嘆桃幾十年
始知才色有情鮮
餘香希發爲天下
誰許芳梅私苑專

（韻・年鮮專）

〈飯田美幸嬢の青春を讃え婚約を祝す〉

すももを賞で桃を嘆じて幾十年
始めて知る(注)才色有情鮮やかなるを
余香ねがわくは発せよ天下の為に
誰か許さん芳梅の私苑もっぱらにするを

〔口語訳〕

彼我朝朝(注)起床ものうし
白いすももの花が咲き、社中には上品な香りが充ちて、
明眸皓歯の美しい貴女は春の陽に輝やくようだ。
その君が去って了えばこの寂しさに耐えられる人は先ずいないだろう。
彼の人も此の人もそして私も毎朝起きるのがおっくうになることだろう。出社しても君は居ないのだから。

〔補　足〕

(注1)明るい眸と白い歯＝美人の比喩。杜甫・哀江頭「明眸皓歯今何在」
(注2)毎朝毎朝。白樂天・長恨歌「朝朝慕慕情」

☆咲き初めし李花かと紛う君去りて
何ぞかうつろに朝はものうし

讃加藤直美夫人雅麗送退職

平成五年晩秋

美貌欲歌詩未知
雅麗擬寫筆猶辭
不能直視藤棚畔
風弄浴衣加艶姿

（韻・知辭姿）

＜加藤直美夫人の雅麗を讃え退職するを送る＞

美貌歌わんと欲すれど詩未だ知らず
雅麗写さんと擬（欲）すれど筆　猶(注)辞す
直視する能わず藤棚のほとり
風浴衣をもてあそんで艶加わる姿を

〔口語訳〕

美貌の貴女を歌おうと思っても余りにも美しいので未だふさわしい詩を知らない。
雅麗さを絵に描こうと思ってもやはり絵筆がためらう。
私は庭の藤棚のあたりを直かに見るのをはばかって了う
何故なら風が吹いて貴女の浴衣のすそをひらひらさせてえもいわれぬ程艶っぽい姿なので。

〔補　足〕

(注)もと疑い深い猿の一種で、一歩毎に後を振り返りなかなか進まないと云う。ここからぐずぐずと後を曳く感じの助辞。

☆美しき歌わんとして詩知らず
　描かんとして絵の筆も辞す

讃母詠帰省車中

平成五年晩春

漣不能忘滋賀灣

峰容同昔比良山
歸心如矢光號走
窓望倚門母笑顔

（韻・灣山顔）

＜母を讃え帰省の車中にて詠む＞

さざなみ（滋賀の縁語）忘る能わず滋賀の湾
峰容昔と同じ比良の山
帰心矢の如く光号は叫び走りて
窓に、門に倚縋ってわれを待つ母(注)の笑顔をみる

〔口語訳〕

忘れることはなかったさざなみの琵琶湖の岸の湾曲。
峰のすがたも昔と同じ比良の山なみ。
帰心矢の如く私を乗せた光号は疾走して、
車窓に、既に門に縋って私の帰りを待っている母の笑顔が写っているのが私には見える。

〔補　足〕

(注)戦國策斉「倚門望＝母は門に寄り縋って、異郷から勉学を卒えて帰って来るわが子を待つ」

☆漣の琵琶湖も過ぎて故郷の
　母は待つらむ門に縋りて

讃内田晶子嬢青春惜離別

雲霧隠高嶺
月光侵滿天
霜華流影秘
紅葉黎明鮮
楚楚未知濁
晶晶含愁妍
遂來離別曰
子去更重年

平成五年師走

＜内田晶子嬢の青春を讃え別れを惜しむ＞

雲霧高嶺にかくれ(注1)
月光滿天をおかす
霜華(注2)流影(注3)秘めやかに
紅葉黎明に鮮やかなり
楚楚(注4)として未だ濁りを知らず
晶晶(注5)として愁を含んであでやかなり
遂に來たる離別の日
子去りて更年を重ねん

〔口語訳〕

雲や霧はいつの間にか高い嶺に隠れ、
代って月の光が大空いっぱいに広がった。
大地には霜の華が咲き、中空には流れ星が音もなく秘めやかに消えて、
山々には紅葉があけぼのの薄明かりに鮮やかだ。
君は楚々として清らかで美しく未だ濁りを知らない。
君は晶晶として明るくまた愁を帯びてあでやかだ。
遂に来て了った。君と離別する時が。
君が去って、私はまた一つ年をとって了うだろう。

〔補　足〕

(注1)古來雲や霧は山上の岩石が吐く息と信じられていた。
(注2)霜を花にたとえた語。白楽天・長恨歌「鴛鴦瓦冷霜華重」
(注3)流れ星。
(注4)清楚で美しい。
(注5)明るいさま。
※前半の四句（首聯、頷聯）は、前日の夕暮れから今日の黎明迄の時間の推移をたどりつつ大自然の荘厳な美を歌って後半の四句（頸聯、尾聯）、特に最後に現われる子の字へ収斂していく。雲霧、月光、霜華、流影、紅葉は全て子のイメージであり、動きはあるが音の無いパントマイムの世界で、離別する淋しさがつのって来る。
※律詩（八句詩）は、頷聯と頸聯を必らず対句とするが此の詩は首聯、尾聯も含め全句対となっている。

☆楚々として月光の如濁りなき
　君去りて更年を重ねん

〈加藤直美夫人の雅麗を讃え退職するを送る〉

美貌歌わんと欲すれど詩未だ知らず
雅麗写さんと擬（欲）すれど筆　猶(注)辞す
直視する能わず藤棚のほとり
風浴衣をもてあそんで艶加わる姿を

〔口語訳〕

美貌の貴女を歌おうと思っても余りにも美しいので未だふさわしい詩を知らない。
雅麗さを絵に描こうと思ってもやはり絵筆がためらう。
私は庭の藤棚のあたりを直かに見るのをはばかって了う
何故なら風が吹いて貴女の浴衣のすそをひらひらさせてえもいわれぬ程艶っぽい姿なので。

〔補　足〕

(注)もと疑い深い猿の一種で、一歩毎に後を振り返りなかなか進まないと云う。ここからぐずぐずと後を曳く感じの助辞。

☆美しき歌わんとして詩知らず
　描かんとして絵の筆も辞す

讃母詠歸省車中

平成五年晩春

漣不能忘滋賀灣

峰容同昔比良山
歸心如矢光號走
窓望倚門母笑顔

（韻・灣山顔）

〈母を讃え帰省の車中にて詠む〉

さざなみ（滋賀の縁語）忘る能わず滋賀の湾
峰容昔と同じ比良の山
帰心矢の如く光号は叫び走りて
窓に、門に倚縋ってわれを待つ母(注)の笑顔をみる

〔口語訳〕

忘れることはなかったさざなみの琵琶湖の岸の湾曲。
峰のすがたも昔と同じ比良の山なみ。
帰心矢の如く私を乗せた光号は疾走して、
車窓に、既に門に縋って私の帰りを待っている母の笑顔が写っているのが私には見える。

〔補　足〕

(注)戦國策斉「倚門望＝母は門に寄り縋って、異郷から勉学を卒えて帰って来るわが子を待つ」

☆漣の琵琶湖も過ぎて故郷の
　母は待つらむ門に縋りて

讃内田晶子嬢青春惜離別

雲霧隠高嶺
月光侵滿天
霜華流影秘
紅葉黎明鮮
楚楚未知濁
晶晶含愁妍
遂來離別曰
子去更重年

平成五年師走

〈内田晶子嬢の青春を讃え別れを惜しむ〉

雲霧高嶺にかくれ(注1)
月光滿天をおかす
霜華(注2)流影(注3)秘めやかに
紅葉黎明に鮮やかなり
楚楚(注4)として未だ濁りを知らず
晶晶(注5)として愁を含んであでやかなり
遂に來たる離別の日
子去りて更年を重ねん

〔口語訳〕

雲や霧はいつの間にか高い嶺に隠れ、
代って月の光が大空いっぱいに広がった。
大地には霜の華が咲き、中空には流れ星が音もなく秘めやかに消えて、
山々には紅葉があけぼのの薄明かりに鮮やかだ。
君は楚々として清らかで美しく未だ濁りを知らない。
君は晶晶として明るくまた愁を帯びてあでやかだ。
遂に来て了った。君と離別する時が。
君が去って、私はまた一つ年をとって了うだろう。

〔補　足〕

(注1)古來雲や霧は山上の岩石が吐く息と信じられていた。
(注2)霜を花にたとえた語。白楽天・長恨歌「鴛鴦瓦冷霜華重」
(注3)流れ星。
(注4)清楚で美しい。
(注5)明るいさま。
※前半の四句（首聯、頷聯）は、前日の夕暮れから今日の黎明迄の時間の推移をたどりつつ大自然の荘厳な美を歌って後半の四句（頸聯、尾聯）、特に最後に現われる子の字へ収斂していく。雲霧、月光、霜華、流影、紅葉は全て子のイメージであり、動きはあるが音の無いパントマイムの世界で、離別する淋しさがつのって来る。
※律詩（八句詩）は、頷聯と頸聯を必らず対句とするが此の詩は首聯、尾聯も含め全句対となっている。

☆楚々として月光の如濁りなき
　君去りて更年を重ねん



「ついばむ」ほか

青木昭成

ついばむ

庭に鵯たちがやってくる
つがいと、ひとりものと
つよいのがよわいのを脅す
懲りないで
よわいのがつよいのを騙す
それでも南天のあかい実は
すっかり ついばみつくされた
だれの許しがいるわけもないが
はばたき とびかい さえずり
時に すてぜりふを残して去る
それでも青木のあかい実は
すっかり ついばみつくされた
テリトリーは ないのか あるのか
八つ手の実が珊瑚のように白い
ついばむのに あれはまだ早い

二つ割り

ひよどりに二つ割りの
リンゴなどを与えてはいけない
気まぐれが留鳥の生態系をくずす
そういいながら庭のめじろのために
二つ割りのミカンなど用意して
ひねもす眺めている男がいる
春がゆき 夏がすぎ 秋がくる
漂鳥は山々のふもとの方から また
ひょっこり下りてくる

裏の空き地

塗装のはげたロータスの
廃車が つぎからつぎから
裏の空き地にはこびこまれてくる
あたまとあたまが揃えられ
おしりとおしりが並べられ
頭とお尻が突きあわされて それら
屍は無言でよこたわることで屍なのだ
やがて見しらぬ人間がやってきて
腕やら 肝やら 目玉やら 取はずし
あたらしいサイボーグを きっと
組みあげるにちがいない
水平線のむこうがわの国で おおぜいで
歓声をあげ疾走させるにちがいない
空き地が家々にとり囲まれて
ずっと 裏の空き地でいるあいだ

展示場

太陽がその肌を じりじり
傷めつける だが車は
うつらうつらと広場にある
あのライトとライトの間隔は
離れすぎていてはいけない
引っつきすぎていてもいけない
おとといきのう きょう
もうずっと フロントガラスに
貼りつけられた値札はかわらず
それでネオンのアーチが目だって
とりどりの万国旗がひらめいて
そこぬけにあかるい空の下
人は 車を眺め 眺め
通りすぎるのが好き

ともかく

駅へのぬけみち　ぼくの路地の
家と家のあいだの
平屋が　ある日とり毀された
ぼくのこころに　しばらく
小さな空き地ができていた
それが昨日たちまち
工事がはかどって　ともかく
総二階家がたってしまった
それでぼくのこころに
義歯が1本嵌めこまれた気分で
吹くかぜが　どうにも
頬になじまない

同級生

しぜん足がそちらに向いてしまって
地下道の階段をおりきるともう流れ解散
いつもそうして同級会はおわりになる

つり革にぶらさがりながら話すのは三人がいい
世間ばなしを一人がしゃべると二人がわらい
二人が細君をひきあいにだすと一人がうなずく

流れていた窓の明かりがゆっくり止まると
三人の会話はふつっととぎれている
だれもが希薄な空気をかんじているから

だれもが同意のほかは求める用意がないから
くらい線路のうえを走っている電車のように
さきをいそぐ気持ちにそれぞれがなっている

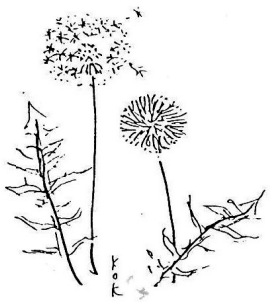
ある駅で一人がおりれば後は二人になる
つぎの駅で一人がおりれば一人だけが残される
両腕にいっぱい捨てるつもりの空白を抱えこんで

手記

「描こうよ」ときみがいう
「とにもかくにも」とかれがいう
そうだ「おたがいにね」
それはセピアいろの
みんなが知っている一枚
だがぼくには誰彼がなかなか
うまく識別できそうにない原画
だから描けば　ゆくりなくも
きみも　ぼくも　かれも色わけされて
もちろん　きみはきみの部分を
ぼくはぼくの部分を塗ればいい
そのうえ出来ばえを　おたがい
語らないのがもっといい
ぼくらは　ぼくらの「自分流」を
仕上げて満足する

遠いお話

ぼくと書いたつもりが　たまたま
きみと書かれていたことがある
それが信用できない　と訴える時
いまでもきみは不機嫌
だけど　言葉を選んでいるうちに
むやみに原稿が膨らんで
だから　それは故のないとり違え
ぼくがきみで　きみがぼくで
どちらがどこで裏返しになったのか
もっとも　ぼくにはそれも遠いお話



母の修学旅行

大和禎人

わたしは写真による自分史の編纂を始めている。A5版二〇ページの手頃な薄手規格、台紙は好んで渋味を選び黒のアルバムを十冊、つまりは二〇〇ページに集約して、わが生きざまを児孫に伝えようという意図である。

「少年編」その一・その二（一巻・二巻）
「青春編」その一・その二（三巻・四巻）
「壮年編」その一・その二（五巻・六巻）
「晩節編」その一・その二（七巻・八巻）
「晦日編」その一・その二（九巻・十巻）

こんなふうに十冊を五編、各二冊に分類し「少年編」に始まり、「晦日編」をもって完結するプランである。「晦日編」などのネーミングはわれながらいささかおぞましくも思うのだが、こうしたアルバムを編もうとする心境から言えば、必ずしも早まったものでもないと思われる。以前、「午後の肖像写真」という作品を書き、だれかれ友人知己の点鬼簿を繰りくり、それぞれ末期の写真を揶揄批判したおりにはブラックユーモアとして思わざる好評を頂いた覚えがある。

そうしたことに図に乗ってということではなく、むしろ逆の心境をもって、すでに「午後の肖像写真」のほうは用意を終っている。

これは「寿像」であると、わが身に言い聞かせ、たまたまひとつの賀寿にも相当するところから、プロの写真師のカメラの前に顔をさらすという愚行をあえてしているのだ。

腕の見事なその写真師は名人気質で仕上げが度はずれて遅く、よほどの忍耐を必要としたが、出来上がりは流石なものであった。カラーとモノクロと、両様に撮ってもらい、親しい関係とあってまず各十枚ほどのショットの中から自分の気に入ったものを選ばせてもらったのであった。

「ミヤワキさん、これは万が一のときの話になるんだが、近ごろカラーという場合も見かけるようだが、どうかねぇ、カラーとモノクロとどちらが良いと思う、写真師のあなたならどちらをとるかな」

「さぁ、好みの問題ですが、考えようでしょうなぁ、どちらとも言えませんが……、やはり……」

「やはりモノクロを選ぶべきじゃないかな」

「そう、だと思います」

「そうに決まってる、仏さまが色つきで飾られては可笑しなものさ、格好も悪い」

「そうだと思います。やはりモノクロが良いのではありませんか」

宮脇というわたしの折紙する名人写真師はそう答えたものだ。わたしのほうから誘導したフシがないではないが、異論はなかったものと信じたい。

この折にはテレホンカードを作って親しい関係に配っている。

さて、アルバムは表紙を白、赤、黒の三色、二冊ずつ交互に選んで、装丁はこれまでに刊行している本の装画から採り、縮小したカラーコピーで飾ることにした。

「大正っ子」少年編その他からである。つまりはアルバムの性格を多面的に、編集の工夫を凝らし「写真図説大正っ子」という趣のものに仕上げたいという意図をもつものであった。装丁はそんなわけで故人岸田幸雄さんによる少年編の貼り函から「揺り篭のわらべ人形」を第一巻に、つづく第二巻は同じ本の扉絵の紙人形「男女わらべ群像」といったあんばいである。この世に一冊しかない写真帖だから、できるだけ豪華に飾り、夢多きものに仕上げたいと思うのであった。

とりあえずはじめに用意したアルバムの規格が発売元の都合で規格変更される事態にも出会って、補充のため慌てて、あちらこちら捜し求め、ようやく十冊を揃える苦心もあった。ゆっくり時間を要する仕事だから、追々に買い揃えればよいという考えは甘かったのである。よろず、アルバムごときでも油断していては素早いモデルチェンジが行なわれる時代だった。こうして準備はととのったが、編集はじっくり時間をかけなければならない仕事になるはずであった。

東京市本郷区四丁目十番地、望月写真館というところで撮影されたものが、わたしの生後二〇六日目の写真としてもっとも古いものだ。郵送で届けられた封筒まで残っている。五枚一組のところ、四枚について届け先が父の手蹟で記されている。この封筒は縮小コピーして写真の脇に添えられる。つづいては五月、初節句を祝って父の友人で半田良平さんという知名の歌人から贈られた五月人形の写真をとり上げている。それは「神功皇后と武

内宿禰」で宿禰が嬰児を抱いているという人形だ。やはり父の箱書きでそれと知れるものだ。わたしはマイクロレンズの接写でこれを捉えて貼り込むことにした。続いて四歳、九歳の時の写真が並ぶのである。ここには「種痘証明書」の縮小コピーと父が買い与えた印篭をその桐箱の写真とともに添えられる。

ところで、これらは当然「少年編」の第一巻の巻頭に相当するページに収められるべきものなのだが、第一ページには意外なものを収める編集になっている。

大正四乙卯年
九月廿二日午前五時出生

と表書きのある小さな半紙の包みは（臍の緒）さらに、もう一つ。それは、

大正四乙卯年
十一月廿七日初毛採

とあるものだ。二つながらこちらは母の手蹟である。（大正四乙卯年）といった年号の表記は明らかに父が指示して書かせたものに違いないものである。母の書は手習いの基礎の確かな、流麗さがあった。まさにそれこそ巻頭に収めるにふさわしく、そうあらねばならぬものとして接写し用意されたのである。

小さなこの包み二つは母の手蹟を見ることでいっそう尊く、ともに家庭用の小金庫を買ってからは引出しの底に大切に蔵まわれているものだ。わたしはついぞ包みを開けたことはない。開けてはならない出生の神秘がそこには包まれているからだ。

こうした配置に始まる第一ページの下の余白をわたしは楽しんで次のような写真によるイラストを仕組み、埋めている。ある方面から賀寿に際し贈られた記念品で、紫地の縮緬に大きく「寿」の一字を染め抜いた座布団があって、その上に、前記四歳の折の写真に見られる幼児帽を置くといった構図である。これこそは奇跡に近い保存を物語り、いまとなれば貴重な文化財にも等しいものである。往時のことでビロード生地で仕立てられ、つばの部分は皮で縁どり、皮リボンに飾られるという品物なのだ。しかも紺と茶色の二つ、失われずに、愛着をもって、後生大事に守りぬかれたものなのであった。

こうしたやり方で整理を進めるのだから、資料の発掘に莫大な時間が必要であった。ポジフィルムの発見からあらためて焼き直したり、コピースタンドを買いもとめて、マイクロレンズを装着したカメラで複写をしたり、接写したりの作業も必要を生じたのであった。そのためにはわざわざモノクロフィルムが用意された。

変色した印画は複写することで甦りを得られることを知ったのである。モノクロフィルムはこの場合に役立ったことだ。友人Kの大陸戦場のスナップなぞ自らは疎開荷物に入れて発送直前に、駅頭の野積みのまま一夜の空襲の災厄に会い、家財とともにすっかり失っていたのでたいと思う。限りあるスペースだが、あくまで欲深く埋め尽くしたいのである。

この際の提供を大変喜ばれるという功徳を経験した。

よろず保存には自信があったが、丹念なアルバム整理の時を持てない宮仕えの怱忙の時代は長く、おまけに戦争では兵隊にとられ、荷物疎開をも経ているのだから、奇跡を拾い上げる作業を免れないのであった。おまけに近年は家屋の取り壊し、改築にあたって、梱包してコンテナに託し、保管を他に任せているから、しまい忘れてどうしても出てこないものが多いのである。

来し方、わたしの心象に触れ、人生のどの時期かに交差したことのある風景、人、そして物にもおよんで出来るだけ多くアルバムのスペースを割きたい。一コマでも多く編集に組み入れたいと欲張っている。

たとえば、住み古りた路地、わが家、わが庭、近隣のうつりかわり、幼な友だち、同窓、同僚、先輩、また教師勤めの関係からは教え子、というすべてにおよびその面ざしを伝えたいのだ。

そうした願いをもち、心象を過ぎり、印象に刻み込まれた読み物などについても少年時代にさかのぼり、朝日新聞社の「正チャンの冒険」や「コドモアサヒ」、興文社版「小学童話読本」、報知新聞に関東大震災後に登場し大正漫画のエポックをなした「ノンキナトウサン」など、みな無事にせっかく保存されているからには、その体裁について接写を試み、載せることにしたのであった。その他としてわが家の古道具、文化財にもページを割き

イメージとしては脳裏に焼きついていて、あの写真はどうしたものかと、散逸がちなものを捜しあぐねて、いたずらな時間が流れることが多い。そうした箇所は空白にして発見を待つことにする。かと思えば、一方には忘却の過去を呼び戻してくれる意外な写真の発見もある。

某日、妹の宅から思わざるボール箱一杯の古い写真が届けられた。一見、箱は多分鶏卵が貴重品だった時代、卵をモミ殻に埋め贈答用に供された時代のものに相違ないものであったが、母が箪笥に秘蔵していたものを発見したのであった。母の家具は二人兄妹それぞれのこどもたちの世話をする都合から、二か所に分散していた事情によるのである。ガラス種板時代のものが大方という内容なのであった。

わたしにも覚えがあり、見せてもらったことのある母の娘時代の写真が大方で、庇髪に袴というスタイルの女学校時代のものやら、二人姉妹の並ぶもの、親しかった学友とともに写したもの、なによりも驚いたことに、母の父母、つまりわたしにとっては祖父母とともに母の出生間もない博多時代のものまで、ギッシリと箱詰めの中から出てきたことであった。母は明治二十一年の生まれで、昭和五十六年、九十三歳で没しているのだから、ま

さに一世紀をさかのぼる古い時代の写真であった。

わたしは当然父母の写真を載せるためにもスペースを割くべきであると考えているのだが、父についてはほとんど材料がない。百姓の家に生まれた父だから、致し方がないのである。それにくらべて母のほうは士族の家に生まれ、不自由はなに一つなく、高等女学校を卒えた人であったから、かなり写真を残しているのであった。

写真の中には、

「おばぁちゃんが道端で眠っているよ」

と知らされ、大往生を発見されたという母の祖母が在りし日、お被布姿で幼い孫姉妹たちの肩に、両の手をそっと置くといった写真まで出てきたことだ。

せっかくだから、これらの母の映像を複写し甦らせようと思い立った。幸い、この方法は変色著しいものを甦らせ、思いのほか良い結果をもたらしてくれた。

たまたま、昨年、平成五年は母の十三回忌にあたる法要に際し、これらの写真の複写は間に合って親類縁者の供覧にそなえ、供養に役立ったことだった。

「往々にして、目前のことすらこのようであれば、なにをもって悠久の歴史に真実をもとめられようか」

として筆を投げたという史家の話があるが、わたしの写真自分史もまた、しばしばそうした嘆きに突き当たった。データーバックで焼き込まれた日付明らかなものは最近に限られ、長編「大正っ子」執筆に利用することの多かった、長く記しつづけている手帳の「一口メモ」に拾おうとしても、ついに不明のまま考証し得ないものが残念ながら多い。日付の裏書きの怠りはいまさら悔いてもおよばない場合がしばしばである。

かくて、渋滞をのりこえ、のりこえて、ただいま第八冊までの編集をほぼ了えかけている。昭和四十八年によううやく達したところだ。

ここで、第七冊目の母にかかわる、ある一ページに目を注ぎたい。

第一景。

京都、南禅寺の総門にて。

母は雨コートを着、バックの下げ輪を左腕に通し、両手を組む格好で、総門の巨大な丸柱を背にして立っている。柄を逆さにこうもり傘が礎石に立てかけられている。洋傘のことを母の時代（こうもり）と呼んでいたものだ。足許に目をやると爪皮（つまかわ）をつけた日和下駄である。そうしたものまで用意して出かけた旅行であったことが知れ、驚くばかりである。

第二景。

京都、東寺の五重の塔を背景に金堂前にて。

こちらはどうやら、晴れの日差しの中だ。堂宇

の前の大きな青銅の香炉を前にして、その基台に手さげを置き、左手に数珠を持つ立ち姿だ。

ここでは羽織姿で雪駄履きに変わっている。

第三景。

伊勢神宮内宮の参拝を了えて。

母は緩やかな傾斜の、幅のひろい石段を下りてくるところだ。周囲の参拝者のようすを見るかぎり雨ではないが、また、爪皮の日和下駄を履いている。前屈みに下りてくるその姿は母以外のなにものでもない。

第四景。

二見ヶ浦の夫婦岩を背景にして。

背後の海が波荒く、どんよりと空が暗い。天気はやはり神宮参拝の頃から雨もようであったのだろう。前景の爪皮、日和下駄の謎が解けたあんばいに見受ける。

第五景。

わが家のリビングにて。

わが家に甥の真史が訪れていて、如上の旅行のスナップを母とともに眺めながら、談笑している。

昭和四十五年、母はこの年八十一歳である。甥の真史は十九歳だった。かれは妹真澄のほうの長男で教育大付属高校を卒えて、東大に入学した年にあたる。

前年、考えあって京大を受験した際の止宿をこの祖母を伴う観光旅行の拠点にしたものであった。

いまとなればこの企てはどうした心情にもとづいたものか、伯父たるわたしは推量するほかないのだが、かれは幼時をこの母の、かれにとっては祖母の保育をうけた時期が長く、とくに初孫という関係からも、また、母はまだ六十代という年齢で元気であったから、妹である母親が勤めの身という事情に代わり、この上ない愛育を加えられたという事実があった。そうしたことへのかれの報恩の挙として、計らずも美談をなしたと考えるとしても、大方間違いではあるまい。

かれは東大からその後信州大医学部に転じ、やがて医師となり、いまは母校に帰り医学部付属病院の循環器系内科の医師として勤務をし、すでに、不惑を越えた男盛り、一男二女の父親になっている。職業がら滅私多忙の明け暮れだから、これらの写真のことは恐らく忘れ去っていることであろう。

母の修学旅行

生前、苦労ばかりの生涯で旅行なぞロクにしたことのない母が京都・奈良、さらに伊勢に遊んだ。孫の大和真史が手引きし、お婆ぁちゃん孝行をしたものであった。

四十五年五月である。

わたしはワープロでこんなふうの説明を加え、母の思い出として貴重な一ページを構成した。

ここでわたしはいったんデーターを五月と推定したのだが、服装に疑問を抱き、いまは松本市に住むかれだから、生家に残されているアルバムについて調べてもらったところ、正しくは十月十三日から十五日へかけてのことと判明している。母の誕生日は同じ月の八日であるから、なおのこと、素晴らしいプレゼントにあたるのだ。

こうして、追及しデーターの判然を見ると、わたしの編集作業はこれを修正するため、ページの入れ替えが必要になるのであった。

ところで、

（生前、苦労ばかりの生涯で…）

と綴る母の生涯はすでに「大正っ子」に書いていることなので、あらためて取り上げまいと思う。

そして、ここではアルバムの意図に添い、わが家の古道具を映像化し収めるページのことを紹介することにしたい。

それは、

戦争下の混乱をくぐり、戦火をまぬがれ奇跡に近い保存を得たものばかり、生活用小道具のたぐいを紹介するものなのだが、

＊常滑の水甕二つ、もちろん井戸水の貯水用。

＊鰹節削りはカンナをのせた箱形で、引き出しに削り貯める仕組みのもの。

＊灰ならしは火鉢の灰を掻きならし、掻き寄せ、きれいに条痕をつけたりする、銘も明珍とあって弾くとよい音色を出すものだった。

＊湯沸かし、往時の据え風呂タイプのミニチュアで炭を使い、行水の湯を沸かした。

＊米櫃。説明するまでもないが、近ごろのストッカーのような計量器付きと異なり、頑丈な木製。

など、いずれも民具といった範疇のものだが、わが家の歴史を秘め、どれをとっても母の思い出につながり、昔年の生活が滲むものばかりだ。しかも、これらは同時にかかわって、わたしも少なからず母の手伝いをして馴染んだものばかりだから、捨てかねて物置の隅などに眠っていたものなのだ。

わけても、米櫃についてわたしの思いは深く、母の生涯の苦労をまざまざと思い浮べるのである。櫃の蓋をあけて溜め息をついていた母の姿が重なり、簞笥から質種を取り出し、そっと門口を出て行った母のうしろ姿が焼きついている。父の事業の失敗から、昭和初頭の不況時代を貧窮に喘いだ悲しい記憶である。

同じ米櫃はあの戦中、戦後にかけての苦しい食料事情に際して、母がか細い体力を奮い立たせて買い出しに奔走し、なんとか凌ぎの量を確保した懸命な努力をも刻んでいるのだ。

いま、その母の晩年に一ページを割き、京都・奈良、そして「お伊勢参り」まで孫に手を曳かれ、修学旅行を果たし得た至福の日があり、微笑しい映像をアルバムに飾れたことは、なにやら、ほっとする思いなのだ。母に対する孝養のなにほどもなし得なかった悔いに責められつつ、せめてもの救いを与えられるのである。

母のこの旅行の後、なお十余年の齢を保ち、卒寿を超え天寿を全うしている。いささかなりとも後生には平安の日々を得られ、苦難の半生を償うものがあったと信じたいのである。

「写真図説大正っ子」の編集をなおこの先を進めるにあたって、さきに記した母の筐底から出た生い立ちを物語る写真の数々は、あらためてそのページを用意して飾りたいと考えている。

（六・六・二六）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）

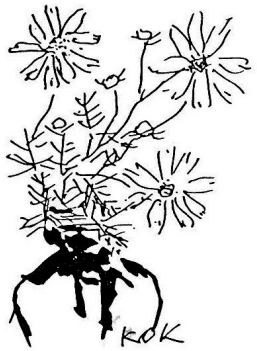
春季号……二月一日　十二月三十一日

夏季号……五月一日　三月三十一日

秋季号……八月一日　六月　三十日

冬季号……十一月一日　九月　三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。



病葉の青春譜・終章（フィナーレ）

井上二三男

（一）

老齢の境に入り、宿痾も悪化の道を辿って、終末は眼には見ることはできないけれども、残された時間には限りがあると思うとき、須田は一人荒涼の世界に立っている寂寞を感じることがあった。

グループ展の案内をして、四十数年の空白を経て、尚子と再会できたことは荒涼の中に緑が芽吹く思いであった。お互いにそれぞれの道を歩いて青春は遙か遠い過去になっているが、尚子に乙女の頃の面影を見て、須田の心はそのとき、二十歳の青春に還っていた。僅かいっときの再会であったが、須田は長い間背負っていた課題を果たしたように思った。

次の邂逅は意外に早く訪れた。その二月の末の夕刻近く、須田は油絵のキャンバスや絵の具などの画材を購入しての帰り、私鉄の駅に通じる道を車を運転していると、柔らかそうなベージュのコートを纏った尚子が道の左側を歩いてくるではないか。自分の位置に近寄って止まった車に、一瞬怪訝な眼を向けた尚子は、運転席の須田を認めてにこりとした。須田はドアを開けて尚子に助手席を勧めた。

「奇遇だなあ。四十年会わなかったのが、この間会えたばかりだというのに」

尚子は、今、かって勤めていた中学校に非常勤で通っているという。

「新任教諭に指導者がつくという制度、ご存じ?その仕事なの」

平素はこの道は通らず、しかも、今日は一電車早く乗れての帰りだという。尚子と須田のそれぞれの行動の線の予期しない交わりの不思議を思った。

尚子の家までは、須田の車でなら五分もかからない。折角の邂逅をこのままでは惜しいように思う、もっと話を聞きたい。

「時間、ある?」

という須田の問いに

「一電車早かったから・・・・・」

尚子は頷いた。

須田は、裏道の小さなカフェ・レストランに車を止めた。小じんまりとしたヴェルディタル・ブルーの壁の北欧の場末の店を思わせるその店は住宅地の中にひっそりとある感じで、駐車スペースは広い。内部の白壁はフロアのバーントアンバーの色調と調和して明るいが落ち着いた雰囲気を醸している。壁に飾られたリクムトの金茶を基調とする「充足・抱擁」の複製画もデヴィス・グレイの光りの中にふさわしい。

須田は絵の仲間と利用することがあって、オーナーのシェフとも顔知りになっている。カウンターに沿ったL字形のフロアに円テーブルが五つ並んでいるが、客はなかった。

「どこにようか・・・・」

「生徒にだったら、奥から掛けなさいって言うのよ」

「じゃ、生徒に倣うか」

赤煉瓦で組まれた装飾のマントルピースに近い奥のテーブルを挟んで対する尚子は、経験豊かな教師としての落着きを持ちながら乙女の愛らしさとあの独特の抑揚の楽しそうな語り口は変っていない。ときに見える翳りは年輪の中に帯びたものであろうか。

いま、尚子が受け持っているのは、恵まれた家庭で大切に育てられた一人娘の音楽の新任教諭で、荒々しい言動の男子中学生や忙しさが渦を巻いている教員室になじめず、ナーバスになっているのであろうか、生徒に「音楽室には幽霊がいるよ」と脅されて、誰も弾いていないのにピアノの音が聞こえると怯えて尚子に訴えるという。

「死んだ人なんか恐くないわ。恐いのは生きている人・・・そうじゃない」

と、慰め励ます尚子はちょうど母親のようなのだろうと思う。

「ピアノは上手なのだけれど生徒の前では恥ずかしくて大きな声で歌えないって言うのよ。・・・・私もピアノの陰で泣いたことを思い出すわ」

昭和二十四年四月、村の中学校の始業式に中学生だった妹の父兄として出席した須田は、その席で新任教師として紹介された尚子を見ている。師範学校を卒業したばかりの二十歳の尚子は、初々しく爽やかであった。

「早く一人前の先生になってくれるといいんだけれど・・・心配」

職場に慣れない新任教師の指導に打ち込んでいる尚子を見て、須田は、かって、小学校で子どもたちの生き生

きとした天衣無縫の行動の中に自分を投入して打ち込んでいた尚子を思った。

尚子の快活な語り口と仕事への打ち込みに旧懐の想いを重ねて須田は快く、尚子は明るかった。

（二）

尚子の家の玄関の戸をためらいをもって開くと尚子が立っていた。

玄関脇の南に面したグランドピアノのある洋間に案内される。面する庭は常磐の立木と程よい下草の植込の中に石灯籠が寂びた佇まいをつくっている。渋い色調のソファに庭からの光が調和して、落ち着いた部屋である。ピアノの側面の壁に利根川を描いたものであろうか、崖下の流れの油絵が掛けられている。やや暗い色調の筆のタッチが感じられる絵はやはり部屋の雰囲気に調和して静かである。

尚子も須田も相対してソファに腰を降ろす。

「ここは、まさに尚子の部屋だ」と思った。ピアノの横にいる尚子は、処を得て自然である。この部屋にいる尚子は、人間として、主婦として気品と落ち着きを備えて、結婚して数十年の歳月が醸し出している静寂の空間に溶け込んでいる。そして、須田は、若い日の尚子の部屋を思い出す。記憶は既に淡く、しかとは思い出せないが、黒く光る太い骨組みの大きな農家の西の庭に面した部屋で落ち着いた雰囲気があった。天井も高かったように思う。秋の夜の語らいに時を忘れて、周囲の静寂に深更に至っていることに気がついたのであった。今のこの部屋の静寂の源は、あの尚子の部屋にあったのではなかったか。

ピアノは、尚子になくてはならない。夏の夕闇が迫る小学校の音楽室で一心不乱に鍵を叩いていた尚子に想いをめぐらせる。いま、自分の部屋のピアノの横の尚子は四十余年の歳月を経て花開き、実を結んだ豊かな存在として、近寄りがたいような雰囲気さえ感じる。

話題は、音楽のことが中心になった。

須田は、音楽について関心がないわけではなく、レコードも何枚か持っている。しかし、ついに楽譜も読めず、全く音痴といってよい。音楽が溢れる今の時代に音楽を知らないで生きるのは、宝の山に入りながら宝を知らずに通り過ぎるようなものではないかと考えている。音痴は音痴なりに、作曲理論などを学んで理論面から親しむことはできないかと考えたことがある。尚子に音楽についていろいろと教えてもらいたいものだと思う。

「バッハは背筋を張ってしゃきっとした気持ちで弾かなくてはいけないし、モーツァルトは楽しくていいの」

そうした話を須田は興味をもって聴いた。

「最近ツィゴイネルワイゼンのヴァイオリンの突き通すような響きと絶妙な音色に魅せられているのだけれどピアノ曲については全く知識がなくて手がつけられないんだ。何か僕のようなものが聴くのにいい曲はない？」

須田は聞く。

「ツィゴイネルワイゼンはたぶんヴァイオリンを習い始めた人がいつかは弾きたいと思う曲だと思う。ピアノでは・・・ショパンの幻想即興曲・・・私もいつかはと思ってきたの」

何かを追うように遠くに眼をやった尚子のことばが不意に途絶えた。そして、その眼から涙がこぼれる。

「ごめんなさい。Jが好きでよく弾いていた曲を思い出したの」

尚子の息子Jがパイロット志望であることを須田も人ずてに聞いていた。ふとしたことから高校時代のJを須田は見ている。

「J君はもう国際線に乗っているのでしょう」

須田の問いに

「亡くなったの。半年ほど前三回忌をすませたところなの」

須田は一瞬言葉を失った。何ということか。尚子にとって最愛の、優秀な子息で希望の星でもあったはずである。その息子さんが国際空路を飛翔する夢が叶う直前に亡くなったとは。人の親としてこんなに悲しいことがあるだろうか。尚子の悲痛を思うと胸が潰れる。幸せな道を歩んでいるものとばかり思っていた尚子がそんな悲しみに遭っているとは。須田は茫然として言うべき言葉を知らない。尚子は眼を押さえながら語る。

「いい息子だったの。健康で、思いやりがあって、私が家で炊事やお掃除をして仕事を終えてエプロン姿のまま休んでいるとそっと私の後へ回ってエプロンの紐を解くの・・・ピアノもよく弾いていたわ。・・・スキーが上手だった。〈白い恋人たち〉の曲が好きだったわ。あのメロディーが今でも時々聞こえてくるの」

須田は黙って聞く。尚子の悲しみにはどんな慰めの言葉も無力だと思う。尚子の悲しみの言葉を受けとめてやることが須田にできるただ一つのことだろう。

三十三歳の若い身体は癌の進行も早かったのだろう。夢に見た機長の制服を身につけて昇天したというJよ。自分の病気を不治と知り、死期を悟りながら、稚けない愛娘と愛する美しい妻を残して永遠の飛翔に旅立ったJよ。無念はいかばかりであったろう。

「悲しくて、悲しくて、泣いてばかりいたの」

死ぬ勇気もなく、生きる気力もなく、ただ泣けて泣けてしょうがなかったという尚子。まだ何処か知らない土地には息子が生きているように思えてならないという。

須田の眼も潤み、ピアノも、尚子も、霞んだ。

「あまり泣いてばかりいるので、皆に呆れられたわ。このごろやっと自分に戻ったように思うの。でも、思い

出すのよ。何処にいてもふっと思い出して涙が溢れちゃうの」

「思い出してあげなさい。泣いてあげなさい」

思い出すことによってJは尚子の胸に生きているのだと須田は思う。

尚子があまり悲しみを新たにする姿を夫である人は見兼ねるのであろうか、或いは共に悲しむことが堪え難いのであろうか、夫婦の間ではJのことを語れないのだという。

「今は、孫のために生きなくちゃって思っている」

孫は女の子だから「おばあちゃんは、ショパンを弾くのよ」と自慢できるようなおばあちゃんになりたい。そのために、今は、毎日十時から午後二時までピアノに向かうという。ピアノの上のノートには右手、左手それぞれの練習の回数を記録する符丁が記されている。

次の間の仏壇は、心を籠めて選んだであろう佛具によって荘厳され、飾られた花には亡き子息への日々の思いが籠められているように思えた。

尚子が蠟燭を灯し、須田は香を薫いて合掌する。

六畳の和室の部屋もゆかしい思い出の品が置かれ、操縦士の制服を纏ったJの写真が飾られていた。須田の記憶にある高校時代のJより逞しく、凛々しい青年のJの姿に須田も涙が溢れ、ハンカチで眼を掩った。

いとまを告げて立ち上がった須田を尚子は廊下に送った。

「須田さん」

尚子が小さく呼びかけた。振り向くと、眼に涙を浮べた尚子が須田の胸に飛び込んできた。胸にすがって肩を震わせて嗚咽する尚子を須田はしっかり抱き留めた。

接近した二つの線が離れて四十数年、別々の道を歩く中ではさまざまな幸・不幸があったであろう。しかし、尚子のJを失った悲しみは全てを消し去ってしまうほど強烈なものだと思う。尚子よ、思い切り泣け。須田は尚子の背を撫でた。

二十代の尚子は「S」の影を引きずっていた。今の尚子は息子の影に泣く。須田の前に現われる尚子はいつも影を引きずって泣いている。須田は何かの力で尚子に逢わされているように思った。そして、尚子の話を受けとめてやることによって須田の心も深くなり、生きかたに大きな影響があった。尚子への精神的な葛藤が転機となって、須田自身の人生の展開があった。現に、尚子に会うことによって老境の荒涼に緑が芽吹く思いがあるではないか。ともに家庭がある身で波風をたてることは心しなければならないが、尚子の明るい笑顔が戻ることを喜びとしたいと思った。

須田を送り出してからピアノの部屋のソファに腰を降ろした尚子は、自分の身体から何かが抜け出していったような虚脱感の中にいた。その虚脱は、空疎なものではなく、自分を悲しませ苛む何かが去ったようで、爽やかな思いであった。

Jを亡くして心の中にぽっかりと空いた穴は埋めても埋めてもいつの間にかまた空いていた。一人になると何処ででも不意に涙が溢れた。トイレの中でも嗚咽した。

「埋め草」を求めて彷徨う尚子だった。

過去の霧の中から不意に出現した須田は、道ですれ違っても須田だと分からないだろうと思えるほど、老境を感じさせたが、須田の眼を見て尚子は「あっ、須田だ。須田のあの眼だ」と思った。かって、四十数年前、離れがたいSの影を追う尚子を見守り、足を攫う沼から尚子を引き上げてくれたあの須田の眼だ。そして、今の心の穴を埋める「埋め草」を尚子は須田に求めたら須田は怒るだろうか。尚子は叫んでいた。

「須田さん、救けて」

たまたま、夫は上京した。それぞれの立場を考えるとためらいがあった。ためらい、迷った末、尚子は須田に電話をしたのだった。

須田と話をしていて、尚子は須田に来てもらってよかったと思った。話を頷きながら静かに聞いてくれる須田の前では尚子は昔の尚子に返ったように安らいだ。

帰りかけた須田の胸に飛び込んだとき、華奢な須田の胸は思いがけず分厚く、細い腕も力強かった。尚子の悲しみを本当に受けとめてくれるのはこの人なんだと尚子は思った。たった一人の肉親に会えたような気がして、このまま須田の腕の中で傷の癒えるまで眠ってしまいたいと思った。

(三)

三月十七日、この日は新任教諭指導者としての尚子の最後の登校日の筈であった。須田は、下校する尚子を迎えてやろうと考えた。下校時刻は電車の時刻から推測した。須田は車を走らせた。

村の中学校は役場や農協がある村の中心にあることが多い。役場の駐車場に車を止めて、公衆電話で中学校に電話をした。迎えにきたという須田に尚子は一瞬びっくりした声を上げた。

「えっ、何処にいらっしゃるの」

「役場の駐車場で待っている」

役場は、村の行政の中心の存在にふさわしく、南北に走る県道に面し、広い駐車場を前面にして、左右に広がる植込の中の松は昔からの古木をその位置に残したものであろうか、コンクリートの庁舎に落ち着きをもたせている。

県道を歩いて役場にさしかかった尚子は、駐車場の車の中の須田を認めると小走りに駆け寄った。

「驚いた?」
「びっくりした。でも嬉しい」
その顔は、少女のような嬉しさを浮かべていた。
市街地を避けて、赤城の南麓を走る。
春分に近く、山も冬景色から春の肌に変ろうとしている。まだ、木々の芽吹きは見えないが、空を流れる雲や樹間に見え隠れする遙かな街の鳥瞰にそれとない気配を感じる。車は西からの太陽の光を受けて、交通量の少ない赤城南面道路を流れるように走る。
かっては、二人は赤城の麓の砂利道を歩いた。今日は車で走る。時代の経過はあるが、二人の胸中の思いには共通するものがある。こうして須田と同じ時間を共有すると尚子も霧の中からかっての記憶が断片的に蘇る。
「尚子さん、着ていたね。赤と黒の横縞の・・・」
「毛糸のヴェストね」
登校する子どもに囲まれて行く尚子だった。
二人が訪れた高崎の尚子の友人は上野栄子という音楽専攻生だという。
「栄子さんは覚えているかしら、今度会ったら聞いてみよう」
須田は、尚子が須田を知る以前から尚子を見ていたという。まだ、尚子が女子師範学校の学生だった頃、須田はたまたま東京で尚子の叔父と生活したことがあって、その叔父に頼まれて三省堂で求めた英語や物理の参考書を尚子に届けたこと、山野中学校で新任教諭として紹介された尚子を須田は父兄の立場で見ていたということ、バスの中でも尚子を見かけたという。尚子が全く知らない断片を須田は確かに記憶していた。お互いの胸の中をそれぞれの感慨が走って、会話が途切れる。
「私、もう、こわいものは何もないの」
ぽつりと尚子が言う。
最愛の者を失ってからは、もう、失うものは何もなくなって、死を見つめていると恐れるものは何もないのだと言う。活字も読まなくなった。今は、死と対決した人がどのようにしてそれを克服したか、それを知りたいと言う。
「僕も病葉だから、死と対決させられた。今も毎日死を見つめているよ」
〈どうして〉というように一瞬不審の影が尚子の表情に走った。
須田がいま病院で受けている処置を受けなければ「あと二年」と宣告されて二年を経過した。今は、毎日が生きていることの記録の更新なのだ。須田はそのことは尚子に言わなかった。
山麓を走る道にしては数少ない信号のある交差点にさしかかる。左側から登ってくる道に沿って松並木が右手の山へ続く。須田は松並木に沿った道を右へハンドルをきる。並木の松の古木は根元を躑躅が覆い、道路に沿う旧道には車は入れない。並木が登り詰めたところは鬱蒼とした樹林に囲まれた赤城神社の神域が鎮まっている。鳥居の脇の社務所の前に車を止める。鳥居から石段が続き、境内は杉の巨木が生い茂り、冬の午後の日を遮って仄暗い。静寂の気が冴えかえる。
二人は語らず、肩を寄せるように階段を登る。
本殿前では須田は無言で合掌する。
須田は神様の存在を信じてはいない。ただ、宇宙を運行する何ものかを神と呼ぶならそれが神だと思う。須田にとっては〈天〉と言い換えてもよいであろう。

散りし花びらは
土にかえれど
咲きにし花は
天にかえるなり

須田の書斎の壁に掲げる高橋元吉の詩に言う〈天〉である。須田は、かって、友人が主宰する同人誌に〈愛〉についての一文を載せたことがある。
「夜、一人して思わず合掌することがある。祈り。あたたかい想いが胸に満ちて、わけもなく涙が溢れる。そんな時の気持ちは尊い。そして、そのただ溢れる想いが合掌となった姿。そこに私は祈りがあるように思う。所詮、祈りは言葉ではない。そして、私は愛の姿の在りようも空極するところ、この祈りの姿に他ならないと思うのである。・・・・・・それは、冷徹な世界ではなく、素直な心の中に湧き出る生命に対する感激、それが愛なのだ。大自然の運行の中に、母が子を思う心の中に、少女が花を愛でる心の中に、道端に落ちている一本の藁しべの中に、溢れるばかりの生命を発見して感激する。そこに愛がある。・・・・・
恋を失った人にとって優しいいたわりも、慰めも一切はむしろ苦痛であろう。そして私は、そうした人に真実何の力ある言葉を持たないのだ。徹底的な無力感の中から私は、ただ祈るばかりである。
昭和二十五年十二月のこの文章は、当時、尚子に寄せる想いを静め、自らを慰めるためのものであった。
神前で合掌する須田の胸にあるものは、幾歳月を経た今も変わりはない。天に還ったJも、ここにいる二人も天の下の生命なのだと思う。無言で合掌する。ただそれだけなのだ。
無言で合掌していた須田に尚子は声をかける。
「何をお祈りしたの。・・・・・私はお祈りはしないの。私の神は私の中にいるの」
「僕は、ただ合掌しただけ」
森閑とした境内は二人の他に人はいない。仄暗い樹影の影で、須田は尚子を見据えて若い日に言えなかった言葉を口にした。
「君を抱きたい」

頷いて尚子は
「でも・・もう、子供は産めないわよ」
と、はぐらかすように言った。
静謐な空間を楽しみながら、階段をゆっくり下る。鳥居に近く杉の木立に囲まれた池がある。鯉が悠然と泳いでいる。身体をくねらせないでそのままゆったりと進む。身体が細く、動きが早い魚は鱒であろう。金色の鱒が混じっている。尚子は池の傍に佇んで動こうとしなかった。水面を見守る尚子の胸を何が去来するのであろう。須田には淋しさを押さえ、悲しみを耐えこらえているように見えた。かって、小学校の音楽室で悲しみを振り切る行のようにピアノの鍵を叩いていた尚子には、激しい動きがあった。今の尚子は悲しみを静かに受容する行を自らに課しているように見えた。
車での帰途、尚子は独り言のように呟いた。
「私、幸福じゃないのよ」
にわかには意味を解せなかったが、須田は、夫とのことがあるのかと思った。須田は何も言わなかった。
「どう、だいじょうぶ」
須田が声をかける。
「ええ、もうだいじょうぶ。元気になったわ。ありがとう」
答える尚子の耳に風のように須田の呟きが通りすぎた。
「もう、しばらくは会えない・・・」
尚子の自宅近く公園の脇に車を停めて、須田は尚子が襟に巻いている黒地に華やかな小蝶をデザインしたハンカチを指して言った。
「そのハンカチ僕に呉れないか」
「これ。いやよ。汗じみているし」
「いや、欲しい」
須田の真面目な眼に、尚子はハンカチを解いて差し出した。
須田の車を見送りながら尚子は、胸の前で小さく手を振った。

(四)

赤城神社へ寄ったあの日から、尚子には気になることがあった。車の中で須田が何気ないように洩らした一言である。
「もう、しばらくは会えない・・・」
その時、尚子は二人の立場から当たり前のことを言ったに過ぎないと考えていた。日が経つにつれて、須田に会いたいという思いが強くなって、何か落ち着かなかった。そうして、「会えない」と言われたことが心に引っ掛かるのだった。そして「いつも、死を見つめている」と言ったことも何か不安だ。ときが経つにつれて不安が増幅されて胸に波立つ。直ぐにも飛んで行きたい思いに

駆られる。毎週火曜日の午後須田は専門学校の講義を受け持っている。その日の午前、尚子は須田の家の電話番号をダイヤルした。
須田の静かな声を聞くと尚子は涙が溢れそうになった。泣きそうな尚子の声を聞いて須田は
「どうしたの、何かあったの。元気になったのじゃないの」
と訊く。
「このあいだの須田さんの言葉、気になって」
「あ、ごめん。余計な心配させたね。実はちょっと入院する」
長く持っている病気で、定期的に入院して処置をするので、入院期間も三、四週間と分かっている。心配しないでという。放送大学で学び、油絵を描き、専門学校の非常勤講師をし、役所の何やらの委員を務めるなど退職後の余暇を十分に楽しんでいるものと思っていた須田にそうした苦しみもあるとは・・・もう、二、三年前から入退院を繰り返しているという。尚子の不安が確かなものになって眼の前に立ちはだかったように思った。
「死を見つめている」と言い、自分では使うこともできない尚子のハンカチを欲しがった須田の真剣な眼差しは、やはり、何かを覚悟していたのだろう。今は、「心配しないで」と言う須田の言葉を信じるほかはない。
「でも、無理しないで、大事にしてね」
尚子は須田に何かしてあげられることはないか。見舞いは須田の方から誰にも言っていないし、つらい姿をみられたくないと断られた。
何か、何とか思案している尚子は自分がつらいときに励まされたものは何だったろうと考えた。それは、産休補助教員として務めた中学校の子どもたちからの尚子のための文集だった。
Jを亡くして半年、悲嘆の淵のただ中にいたとき、今は県の教育委員会の指導主事をしているかっての教え子からあの初任の村の中学校の産休補助教員をしてくれないかと話があった。尚子のことを知って、家にいて悲しみに浸かっているよりは慰められるのではないかという配慮が嬉しかった。体力が弱り、気力も失せて自信がなかったが、社会的な責任を負う仕事を持てば確りしなくてはならない、それによって辛い今を生き抜けるかもしれない。そう考えて尚子は好意を受けることにした。
気力を奮い立たせて教壇に立った当初は、元気な子どもたちを見るにつけ、この年代の頃のJを思い出して辛かったが、尚子は精一杯の努力をした。国語が不得意の子どもたちにどうして興味を持たせるか、計画し、教材研究に打ち込んだ。担当の国語のほか音楽も任されたが楽しかった。尚子が指導した混声合唱組曲『筑後川』の「河口」を歌った子どもたちが県の合唱コンクールに入賞したときは、子どもたちと抱き合って喜んだ。現職の

当時、家庭を持つ身であってみれば、正直、夏や冬の長い休みが待たれた。しかし、今度は夏休みを欲しくないと思った。

尚子の任が明けるとき子どもたちが文集を作って贈ってくれた。

尚子はこうして立ち直った。

この文集を病気療養中の須田に読んでもらおう。子どもの眼を通した尚子の姿がそこにあるし、純真な子どもたちの声はきっと須田を慰めるだろうと尚子は思った。

「私は、この子たちのお陰で立直ることができました。今は、私の宝物です。ご病気のお見舞いをこの文集に託します。ご気分のよいとき、お読みになって。

ショパンの幻想即興曲と混声合唱組曲『筑後川』のテープを同封します。

早くよくなってね、またお会いしましょう。　尚子」

子どもたちの文集にテープを添えて尚子は、須田に送った。

（五）

生命の限りが遠くはないと覚悟して須田は多くのことを為し遂げておきたいと思っている。一瞬の存在にすぎない自分を考えると全てが空しく思われるが、その一瞬に深い、広い人間の生命が涙や歓喜となって展開する。

須田は多くのことを喜び、多くのことに感激し、多くの美しいことに浸りたいと思っている。生命に限りがあるならば、今のこのとき多くのことをせざるをえない。須田は平素は週二回、近くの掛りつけの医師の注射を受けながら多くのことに挑戦する。

定期に受診する総合病院の外来での診察で

「入院予約をしてください」

と医師から宣告されるつど、さあ、またきたなと思う。

妻は

「モグラ叩き、頑張ってください。生きるために」

と病気をモグラに例えて言う。モグラは叩き潰すしかないのだ。

ここ三年程の間に入院は八回目になる。さきの検事総長伊藤栄樹氏が『人は死ねばゴミになる』という本を残されたが、須田は始めて古い病院の薄汚れたようなカーテンで仕切られた六人部屋のベッドに臥したとき、生きながらゴミになったように思った。治療の苦痛は止むを得ないこととして身を任せるが、日常的でない環境にいることがむしろ苦痛である。そして、貴重な時間を本意でないことに消費することの焦りがある。

約一ヵ月の入院期間の最小限の生活用具に絞りながら、病院へ持ち込むバックの中は書物が多くなる。貴重な時間を無為に失う不安が大きいのだ。尚子からの子どもたちの文集は書類袋に入れて、バックにつめた。

ベッドの上での余暇はたっぷりある。しかし、日中は患者相互の話声、入れ替わり立ち替わり点滴、採血、投薬、患者の容体の確認などをする看護婦の動き、見舞い客の動静などの中で書物に自分を投入することは困難である。他の部屋で患者に変化があったときには、廊下を走るように急ぐ看護婦の動きが交差する。

病院の夕食は早い。夕食後消灯までの時間を須田は読書に充てている。この時間を利用して平素はなかなかできない纏った書物を確りと読みたいと思うが、しかし、横臥しての読書は頭に入らない。こんなとき、尚子からの文集は、須田を楽しませた。

文集は三冊あった。担当した三つのクラスの子どもたちのものである。尚子が繰り返し読んだのであろう、色模造紙の表紙の端は皺が寄り、角は擦り減って丸くなっている。

緑色の表紙の文集は〈田中先生へ　1－1〉と大きく太いフェルトペンで書かれている。

黄色の表紙の文集は下半分がアニメ映画の主人公の動物トトロが〈1－2〉と表示したプラカードを持ち、〈田中先生へ〉という大きな文字が明朝体活字を模して丹念に書かれている。裏表紙の中央には校舎が描かれ、校舎から四色の光が発射されてファイトと言う字が浮き出ている。校舎の左下の女の子がSee you againと言っている。

淡いピンクの表紙には校舎の二階から三階の窓が表紙一杯に描かれ、屋上の柵に全クラスの生徒が群がり手を振っている様が描かれている。空の部分には大きな白抜き文字〈せんせーありがとー〉が黄で着色されている。下の部分には〈田中先生・・for you〉と書かれている。裏表紙には大きなピアノが描かれ、〈1年7組の元気な仲間達より〉と書かれている。表紙を見ているだけでもそれぞれに田中尚子先生への思い入れがあって、楽しい。

「たった一学期の間だけでしたが、とても楽しく、よくわかりました。たまに、おこられたりしましたがとにかく楽しかったです。山野中学校をはなれてもぼくたちのことを、わすれないで下さい。たまには、はな歌でいいですから、山野中学校校歌を歌ったり、みんなの書いたこの作文を読み直したりしてください。ぼくたちも先生の顔を忘れないと思います。これからも健康に気をつけてがんばって下さい。　さようなら。」

その裏には、教室の様子が漫画で描かれ、尚子の顔が身体の十倍以上に大きく描かれている。簡単な線画のその顔は尚子の特徴を捕えていて須田の頬が弛む。黒板には尚子が生徒の興味を引き出そうとして考案した文字を埋め込む図表の一部が描かれている。子どもがこれを絵に書き込んだことは尚子の考案が成功していることの証

だと須田は思った。

「・・・先生は、『できま・・・?』、『わかりま・・・?』と、とてもおもしろい先生でした。・・・山野中のことは絶対忘れないでもらいたいです。私が一年一組にいたことも ・・・」

「先生はピアノがとても上手ですね。私もピアノは習っていますが、早く田中先生のように上手になりたいです・・・」

「私は小学校の時国語はあまり好きではなかったのですが、中学校に入学して田中先生に会えてうれしかったです（国語大好き）だから今は、とても残念な気持ちでいっぱいです。漢字テストの合格したときの約束のマウンテンバイクをもらえないのも少し残念ですでも先生との思い出だけで十分です。・・・」

そして、欄外には沢山のみつばちが飛んでいる絵が描かれ一匹の大きなみつばちに矢印が付いて田中先生と記されている。これも、尚子の存在が子どもに大きな印象を与えている証であろう。

「先生!今まで（ごくろうさまでした）ありがとうございました。私は、国語の授業の時などなぜか『ほっ』っとするのです。たぶんそれは先生がやさしくておもしろかったからだと思います。でも、国語はあまり好きではありませんが!?先生は好きです。副担でいてくれて本当にありがとうございます。きっと、ずっと、私は先生のことを忘れません、夏休みがおわって学校へ行っても先生がいないとつまらない。上野動物園に行くバスの中で歌ってくれた「翼をください」も忘れません。1－2は「翼をください」を歌うことになりました。先生が歌ってくれたように上手に歌います。本当に、いなくなると思うと泣きたいほどかなしくなります。年が状などだすので、返事くださいね!これからも、時々、山野中に遊びに来て下さい。それでは、ずっと、ずっと・・元気でいて下さい。どこかで、会ったら声、かけて下さい。PSありがとうばかりですいません。

（欄外に）漢字の覚え方をおしえてくれてthank you very mush!! おかげでけっこう覚えられました。ノートすごくわかりやすかったです。ますをうめるのに苦労した事もあったなあ!（そして、大きな字で）Prtty な　田中先生へ!」

最愛の子息Jを失って、悲嘆のうちにありながら、その悲しみを秘めて子どもたちには〈やさしい〉〈おもしろい〉〈楽しい〉果ては〈プリティ〉という印象を与え、楽しい授業を展開する尚子を思って須田は、ベッドに横たわり眼を閉じる。

「・・・教えかたもいいし、おもしろいし、おもしろいからとてもいい先生です、でもたまに、いやたまにでなく、いつもボケ ボケしていました、けれどそうゆう所もおもしろいと思います、・・・元気でいてちょんまげ、きんさん、ぎんさんのようにいつまでも長生をしてください（100才以上）」

そして、猿のピエロが鼻水と涙を流している絵が描かれている。このクラスは「ボケ」が印象にあるようだ。

「・・・田中先生、ボケが多すぎるから少しぐらいなおしたほうがよいと思います。得に二階と三階を誤えたりするのは、やめたほうがよいと思います。田中先生のおかげで漢字がだいぶ書けてきたり、文章の問題も解けるようになったりしました。本当に感謝しています。田中先生優しくておもしろいけど、おこるとこわいけど、おこるとしわが多くなるのでやめたほうがいいと思います。・・・」

「ボケ」と「しわ」には須田も思わず笑ってしまって、脇腹の処置の痕の痛む部位を押さえた。きっと、真面目な子どもなのだろうと思う。

「・・・今僕たちも明るく楽しく生きています。先生も病気やけがやボケにきよつけてがんばって下さい・・・」

たどたどしい大きな文字で、〈明るく、楽しく生きている〉という。おそらく尚子にとって力強い言葉だったろう。

「・・・授業はとても楽しかったです。たまには先生がボケをかましてくれたりもしてくれましたね、それと・・・田中先生の国語はとてもわかりやすかったです、また、一度、書いたノートを見ても、その時の様子が思い出されます（!?）。それから、先生のニックネームは〝おばあちゃん先生〟とか〝おばあちゃん〟とかまだあると思いますが、とにかくよく生徒に親しまれた先生だと私はそう思っています。また先生もどんな生徒に対しても公平にあつかっていたのがとてもよかったです・・・」

「先生、短い間だったけど、お世話になりました! 私は授業中いつも〝ボー〟としていましたのです。ゴメンなさい!テストの点も悪くって・・・でもね、先生の授業っておもしろかった。国語の時間が待ち遠しくてしょうがなかった。先生、いつもNICEボケかましてくれたり、とっても優秀な生徒の話をしてくれたり・・・やさしくって、おこった姿はほんの一回ていど、そんな先生が私は好きです。クラス全員が田中先生のことが好きなんです。じゃあ、先生、これからもお元気で・・・学校にあそびに来てね、

それと、・・・お手紙ください！
住所は　〇〇村△△5213です。
では、Good-by　from　水田桜子」

欄外には〈やさしい×2〉が丸く括られて〈田中先生〉に結ばれている。

わずか一学期の間、臨時に担当した国語の授業に寄せられた子どもたちの文には、殆どの子どもたちが国語が不得意で好きな科目ではないけれども尚子の授業は「おもしろくて、楽しかった」と言い、「成績が上がった」、「これからも頑張る」と言っている。そして、「先生のことは忘れません。私のことも忘れないで！」と言う。「私のことを忘れないで」という言葉は、人間と人間の触れ合いの中で心を通わす最も素直な心情の吐露だと須田は思う。最も深い悲しみに遭ってまだ半年、こうして子どもたちに慕われるまでに打ち込んでいた尚子の心情を思うと須田は心が痛む。その悲しみに耐えて、楽しい授業で子どもたちの眼を輝かせ、子どもたちに「私のことを忘れないで」とまで心を通わす尚子。子どもたちの文字の間から尚子を偲び、須田は「すばらしいよ。尚子！」と声をかける。そして、そうした情感を病床の須田に伝えたいという尚子の気持ちをありがたいものと思う。

経皮薬剤注入の処置を受けた日は、左腕に点滴注射の針を刺し、処置部からの出血予防のため腹帯にアイスノンを固定し三時間の安静を保つ。ときには注入した薬剤が腹膜を刺激し、灼熱の鉄を差し込まれているような苦痛が残る。眼にハンカチーフを乗せ、苦痛の表情を隠して耐えながら須田は、動かせる右手で枕元の子どもたちの文集に触れ、掌を尚子の掌に重ねているように思った。

文集をぽつり、ぽつりと楽しみながら、須田はそれぞれの子どもたちの文の感想を書き留めたいと思った。手元に適当な用紙がないので、ノートを三センチ程の幅に折って、手で切り裂いて短冊を作り、感想を書き留め、それぞれのページに挿んだ。これは、病床での楽しい作業であった。

天真爛漫の子どもたちは須田の心も明るくした。

（六）

予定されていた処置を終え、五月中旬ＣＴスキャン撮影をしてその結果を医師がみて、即日須田は退院した。

入院の日にはまだ辛うじて芽が白く膨らむかと思われた庭の夏椿もすっかり緑の蔭を濃くしている。

処置によるダメージが残っていて、体調は元には復していないが、自宅には自分のリズムに合った型がある。

翌日には専門学校の講義がある。遠隔の土地から通ってくる学生のことを考えると休講は避けたいのである。

翌日、須田は尚子に退院したことを告げた。

「よかった。・・・えっ、午後は講義？大丈夫なの？しんぱい。無理しないでね」

講義を終えて、自宅に戻り、ソファに横になって休んでいると尚子の来訪を受けた。須田のやゝやつれた顔を見ると尚子は、急に胸にこみ上げるものがあって涙がどっと溢れた。須田の胸に縋り

「死んじゃいや！」

と、背を波打たせた。

「大丈夫だよ。ほら、今日だって分かりやすい講義をするように努めてきたよ」

「ほんとう？だいじょうぶ？無理しないで長生きしてね。折角、お会いできたんですもの。・・・・・子どもたちの文集はどうだったかしら」

「よかったよ。慰められたし、励まされた。感想を書いておいたよ。ショパンも聴いた。ありがとう」

面やつれしたように見える須田は、治療が効いたものか顔色はいいようにも思われる。

須田から返された文集のページに感想を記したノートの端切れ短冊があった。

「まぁ、こんなにして・・・須田さんは凝り性だからそこも心配ね。この間、ショパンのお話したでしょ。楽譜をもってきたけど、須田さん、また凝るのじゃないかしら」

尚子はショパンの練習用の楽譜を差し出す。

そして、生徒の文集を開いて眼を通しながら、尚子は思い出を語る。社会的な責任を負うことで緊張して立直れるかと思って引き受けた産休補助教員だったが、この子たちがいなかったら或いは途中で挫折していたかもしれない。回想は文集を離れて、手に終えない悪ガキ・腕白たちのことに及ぶ。そのような子どもの中に、はっとする人間味があって胸を打たれることがあった。子どもたちの純真な心が尚子を立直らせたと言う。

そして、小学校三年生の孫娘のために生きようと思うと言う。

「孫がパパより好きな人が見つかるまでは死ねないわ。そのときは私も自由になれる。そしたら、須田さん一緒に暮らしましょう。それまで、二十年か三十年、待っていてね」

いたずらっぽく言う尚子。

「二十年か三十年？は、は、はっ、それはいい」

須田は、子どもの文集の中に「田中先生は時には子どもみたいに・・・」と書いてあるのを思い出した。そして、尚子の心に童心が還ったのを何よりうれしく思った。

須田は、今、自分は河口に立っていると思った。

山に産まれ、崖に当たり、淵に注ぎ、岩を砕き、瀬をなして、曲がり、長い流れの旅路の果て、川は河口でフィナーレを奏でて海に注ぐ。川の終末は海に続く。
耳を澄ますと合唱組曲『筑後川』の壮大なフィナーレ「河口」の旋律が力強く聞こえてくる。

フィナーレを　こんなにはっきり予想して
川は　大きくなる
フィナーレを　華やかに飾りながら
川は　大きくなる
水底の　さかなたち
ああ　可愛いさかなたち
岸辺の虫たち　ああ　おどけた虫たち
中州の　かれんな小鳥たち
さよなら　さよなら
川は歌う　さよなら　さよなら
紅の　紅の　はぜの葉
ああ　楠の木陰
白い工場の群れよ
さよなら　さよなら
川は歌う　さよなら
筑後平野の　百万の生活の幸を
祈りながら　川は下る　有明の海へ
筑後川　筑後川
　そのフィナーレ　ああ
天の彼方から力強く響くピアノの音に導かれてゆったりと流れる混声合唱のフィナーレの曲が、静かではあるが高い、低い波となって須田の心に押し寄せる。
「二十年だって?三十年だって?そんなに待たされてたまるか」
須田は、尚子を掻っ攫って、広々とした自由な海へ漕ぎ出したいと思った。

（子どもたちの文集の英語のスペルや用語については、原文のまま記載した。）

（平成六・六・二五）



近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（三）

第一章　重蔵大空に羽搏く

一、長崎出向・世界に目を開く

金子正義

（八）

其の後重蔵は、オランダの文字や会話を正しく学ぼうとしたが、オランダ語の完全な辞書などは異国本を売っている長崎市中の書肆にも見当らなかった。
奉行所のオランダ通詞は、唐通詞と同じように代々家督を伝承するので通詞手書きの言葉書きがあるが門外不出であった。
重蔵は奉行所書庫にあった青木昆陽の『和蘭和訳』や『和蘭文訳』を手掛りにして学び出したが、此れは青木昆陽が将軍吉宗の内旨を受けて幕医野呂元丈と共に蘭語を学び出した元文五年（一七四〇）より、宝暦七年（一七五七）に至る十七年間、毎年江戸参府の蘭人と対談して学んだ記録を書き綴ったもので、『和蘭和訳』はオランダ語の会話文にカタカナ発音と訳語、訳文をつけ注記をつけている。
『和蘭文訳』はアルファベット順に語を集めてカタカナで読みと訳をつけてあるが体系的な事典としては整備されてない。
長崎通詞同志は鎖国の枠内で、専門職として相互に研究し合っていた。中でも長崎通詞本木家の第四代の本木良永（享保二十年生一七三五～寛政六年没）は優れた蘭学者で、多くの訳書を出し、同じ長崎通詞の松村元綱・吉雄幸作等とケンプェルの日本誌をも翻訳し、天文・地理・暦法等の訳をなし、大槻玄沢等の長崎留学の蘭医にオランダ語を教えていたが惜しくも重蔵が長崎に出向する前年に五九歳で病没した。
だが幸い、オランダ文典を深め天文・暦学にも精通していた長崎通詞の中野柳圃（宝暦十年生・文化三年没）より大槻玄沢が天明八年に蘭学初学者の為に書いたオランダ語手引書『蘭学階梯』を譲り受けて、柳圃よりオランダ文法の解説を受け、併せてオランダの天文・地理・

測量の基礎を学んだ。此れは後に重蔵が蝦夷地見分・千島択捉島探検開拓に大いに役立った。

斯うして僅か二年程の長崎在任中であったが、江戸に戻る迄には或る程度の蘭語の読み書きが出来るようになった。

『蘭学階梯』を柳圃より譲られるとき大槻玄沢は宝暦七年（一七五七）に仙台藩医の家に生まれ天明五年（一七五八）より一年間の長崎遊学中に中野柳圃と交友を結び、江戸に戻って江戸詰藩医となった傍ら、藩邸外居住を許されて京橋本材木町の居住にオランダ語塾『芝蘭堂』を開き門人達の入門書として『蘭学階梯』を天明八年に刊行したものと訊いた。

重蔵は同じ頃、白山義学塾を開いていたのであったが、近くに蘭学者の塾があるとは聞いていたが、未だ其の重要性を知らず学ばなかったことを惜しく思った。

重蔵が後に江戸に帰任すると、大槻玄沢の弟子稲村三伯等が蘭仏辞典を本にして、本格的な蘭日辞書『ハルマ（波留麻）和解』を寛政八年に完成し重蔵も手に入れることが出来た。

尚、大槻玄沢は師の杉田玄白の『解体新書』の重訂や多くの蘭書医書を訳述し、文化八年（一八一一）には幕府の天文方蛮書和解御用に出任し、通詞の馬場貞由と仏のシヨメル（仏の宣教師 Noel chomel）の百科事典の蘭訳辞典を翻訳して『厚生新編』を刊行し、蘭学の先駆者杉田玄白・前野良沢等の後を継ぐ蘭学の重鎮となったが文政十年（一八二七）七十歳で没している。

（九）

好奇心旺盛な学者である重蔵とてやはり幕府役人である。他の長崎留学の漢学者は漢文学や唐言葉を、蘭学者や蘭医は洋学蘭語を専一に学んで帰るが、重蔵は唐言葉や蘭語を通して長崎貿易の仕組や海外事情を把握したかった。

南蛮紅毛の船が天竺よりも更に遠い遙か西の果ての国より、万里の波濤を蹴って南瞑の島々や東海の果て迄何にを求めて生命を賭けて渡り来るのか不思議であった。

南蛮船のようにキリシタンバテレンの布教と銃砲による領土の拡張を企てるばかりでなく、紅毛人は本国より珍奇な物品を運び、唐や天竺等から獲得した白絹や絹織物、銅銭等を合わせて我が国と貿易し、金・銀・陶磁器等を得て本国に送り、欧羅巴の国々にも売り分けて莫大な富を得るとか、東洋への一航海だけで巨万の富を為すとか云う貿易の不思議な仕組を知り度かった。

其れは、銭勘定を卑しむ武骨な儒学者でなく、師山本北山の考証学を生かして学問は世の為人の為と、実用実践の学とした近藤重蔵の当然の課題であった。

長崎貿易を取り仕切るのは長崎会所であるので、重蔵は奉行所吟味役としても屢々長崎会所に出向くのであった。

長崎会所は、長崎奉行西役所裏側の直ぐ東側の東上町と中町の一角に在って五百五拾坪程の構内には、異国商売吟味役所を始め、輸入品展示広間や元値取決の広間のある取引所や、長崎御用銅座俵物役所、大坂の銅座御用胴会所・俵物役所等の建物が並び建ち、箱館の俵物役所の長崎常駐所もあった。

其等の会所建物に沿って長崎会所各係役人や実務者の控所や宿舎の棟もあり、数棟の倉庫も並び建って何時も活気を呈していた。

長崎会所は長崎の貿易、財政及び運上に関する総勘定所であるが、幕府勘定奉行支配下にあって保護統制を受け、其の運営は長崎奉行の統括下で町方の自治に任せられている。八十俵を給される町方年寄役筆頭以下勘定役、調役、異国商売吟味役、御運上銀納め方役等の重役十二人と下役四十数人で業務を執行し其れ其れの役所、詰所には金見・銀見・蔵番・札差等の小役人以下、書記日傭の役職実務者が三百数人程勤めていた。

幸い重蔵は、長崎会所の勘定役高木彦右衛門とはオランダ商館訪問以来心安くなっているので、奉行所の表向きの監督のように型通りの会所見分でなく、自由に異国取引の現状を視察したり、諸役人より貿易の実情を訊くことが出来た。

異国貿易で唐船が長崎に運んでくる物は、白絹・絹織物・薬草・書籍等で、蘭船は唐物の白糸（生糸）絹織物毛織物・薬品・砂糖等で、貿易品の取引は唐物とオランダ物とは日を別にして行なっていた。

輸入の場合は、異国商売吟味所の輸入品展示広場に輸入商品の見本が展示され、会所の商品吟味役、会所出入許可商人等が吟味の上、それぞれに最低値を付け、更に広間で談合して輸入品の元値を定める、勿論其の商品の市場売値で益差が十割確保できる最低値である。

輸入品元値が組まれると、会所役人より唐・蘭の商館に連絡され日時を決めて出島の商館倉庫に陸上げされている輸入品が長崎会所へ運び込まれる。

其の価格は値組で決められた通りの一方的な独占取引であり、其の支払は唐銭・銅・銀等の現物で支払れる立前であるが、唐・蘭が日本より買う輸出物の俵物・銀・銅等の代価と相殺され銀本位で換算決済される。

一方、全国の物産品目ごとの座組・株元の代表で長崎会所へ出入許可されている商人代表が、長崎会所の輸入品見本展示に臨んで購入価格を入札するが、其の落札値は、会所の益差が平均十割で年間銀七千七百貫目、小判で十二万両程が確保できるように値組され、其の最高値で落札させる。従って其の価格は最初の貿易取引の値組価格より高い。

落札した商人が一般の市場で販売する市場価格は更に

商人の販売利益を加えたものとなる仕組であった。
日本よりの輸出についても唐国向け、蘭国向けそれぞれ日を定めて取引される。
唐人商館が求める輸出品は、煎海鼠等の俵物、銅が主で、蘭人商館は同じように俵物や銀・銅・美術品としての陶磁器や漆器具・樟脳・米・麦等であった。
取引の代価は輸出時の市場価格で唐商館は銅貨、蘭商館は毛織物等の現物で支払う物々交換の形となるが、輸出入全体の決済は銀本位で行なう訳である。

重蔵が日を重ねて熱心に尋ね歩いたので長崎貿易の概要は分ったが、未だ充分理解できないのは、オランダは広東等から白糸・絹織物等の唐物を買い入れて唐船と競争するように長崎に運んで来るのは、オランダは自国の必需品を他国より輸入する為でなく中継貿易の利を得る為なのか、亦、日本から買う物も優れた美術工芸品や農作物よりも銀や銅が主であるのはオランダ本国や欧羅巴では銀・銅等は産出しないのであろうか、と疑問を抱き彦右衛門に尋ねると、
彦右衛門は子供から分り切ったことを問われたような顔をしたが微笑を浮べて、
「近藤様もお人が悪い、充分ご存知の上でのお尋ねとは、」
と一寸と戸惑ったように頷き考えるようにしてから、
「其れは昔の南蛮船貿易の頃より異国と我が国の貿易は、唐国を中継にして行なってきたからです。亦、日本から主に銀・銅を買い取るのは、今は清国前は明国の時代より唐国の通貨は日本と異なって金より銀を元本としているからです。それに日本の銀や銅の値が異国と比較して安いので、唐船も蘭船も銀や銅を日本から安く買って唐国に運んだだけで益差が多く大儲となります。

従って南蛮人は澳門や広東で日本では産出の少ない白糸や絹織物を集め、天竺や暹羅等から麝香・白粉・水鉛鉛・砂糖等を安く買い、欧羅巴の本国よりギヤマン器具鉄砲・火薬等を運んで、東南各地で集めた物品と共に日本に売り込み、銀・銅を得て唐国に運び二重の利を得て、更に金に替えて本国に運び大儲をしていました。
今の紅毛人の蘭船も同じように清国の広東で白糸・絹織物を買い、根拠地のバタビヤを中心に東南の島々から香木・薬草等を集めて日本に運び、長崎から銀・銅を得て清国に売り込んで大儲の上で此れを金に替えて本国に送る訳です。
斯のように貿易の益差は異国間の産物の相違、物品の有無、欲求に応じての取引によって生じますが、それよりも、異国取引の仲立をする金・銀・銅の国々の値打ちの相違によって莫大な益差があるのです」
と説明し、重蔵が何故日本も大いに貿易をしないのかと云うであろうと推察して、
「ですから、我が国でも大昔の遣唐使船の頃は兎も角として、室町時代の勘合貿易や、戦国の世でも西国大名や堺の商人衆は異国貿易で莫大な利を得て味を占めておりました。
信長様も太閤殿下も海外貿易に意欲をお持ちでしたが、畏れ乍ら家康公も其れ以上で、慶長八年（一六〇三）二月征夷大将軍になられると、其の頃の広東からの白糸貿易がポルトガル船の独占となっていることを知り、翌年の九月、堺・京都・長崎の豪商に（糸割符商）の特権を与えてポルトガルの独占を奪い、爾来鎖国までの三十二年間、朱印船貿易の制度によって長崎港より東南アジアへ海外貿易に出かけさせ大いに利を得ました。然かも其の利益は幕府や富商ばかりが独占するのでなく、全国の商人、長崎の各町住民にもその利益を分配されました。
残念乍ら鎖国後は日本船の海外渡航が禁止され、唐船と蘭船のみの長崎貿易となって利益は減少し、更にその上、先程申し上げましたように、唐国と欧羅巴と我が国の金や銀・銅の交換価値の相違による交換益差が益々顕著となり、我が国の金や銀が大量に海外へ流出して、儲けている様に見えても結果的には日本の富の減少となることに気付いて、其れを防ぐ為に幕府は度々唐・蘭貿易を制限し、遂には正徳五年（一七一五）新井白石が中心となって改革し、唐船は年三十隻で銅輸出額は三百万斤蘭船は二隻で百五十万斤としました。
此の為に長崎貿易は衰退して人口も元禄九年（一六九六）の六万四千五百余を最高として次第に減少しました。
其の後も何度か貿易定高の変更がありましたが、寛政二年（一七九〇）には唐船十隻、銀二千七百四十貫目、銅百万斤、蘭船一隻、銀七百貫目、銅六十万斤に低下しました。
尤も、今欧羅巴の動乱でオランダの海運が危険のこともありますが、平穏になればオランダ船も多少は増加しましょう。此れ迄の長い歳月の間に色々変化もあり、此れからも貿易景気の上下がありましょうが、いくら貿易益差が莫大でも貿易を制限なく多くすれば日本の金銀、銅が海外へ流出しますので、長崎会所の売買の利益と、金銀・銅の交換益差の釣合いを勘案して幕府への運上銀を確保しますのが私共、長崎会所の勤めと存じ居ります」
と平素は柔和で莞爾洒脱としている彦右衛門も、幕府財政を支える貿易の担当者としての誇りと自信に満ちた顔であった。
更に彦右衛門は続けて、
「特に異国商売吟味方や御運上銀納め方が長崎貿易の中心で、唐・蘭両国の船が入港の都度、貿易取引で最低限度の貿易益差は確保し、更に此れ以上利のある取引としようと心を痛めて商売吟味に努めております」
と、長崎会所の商売吟味の重要性を強く訴え、わざわ

ざ、書記録所から長崎会所設立以来の記録文書の中から『貿易収支明細』や『銅相場の変動と貿易益差の変化』等の記録を取り出し、唐・蘭両国との通商取扱いの年間の銀高額と、其の利益の大要を説明して、

「斯のように貿易取引は年により相違がありますので、享保八年（一七二三）に献上金は毎年五万両と定められましたが、損益もあって、年によっては逆に貿易振興の為の貸出となることもありましたので、明和元年（一七六四）より出来高運上で平均毎年三万両程の上納となりました。

然し貿易取引の支払勘定、受取勘定は銀本位で決済されますので、其の時の銀相場によっての差益が出ます。長崎貿易では平均利益銀は貿易額銀約四千貫目から五千貫目の取引で、其の十八・五割から二十・一割程の差益が得られますので、其れから唐船、蘭船の滞在中の諸費や、会所役人中の乙名・組頭・下役・傭員を含む実務者への給与や諸経費に約七万両を取り、更に『長崎箇所銀』として長崎の内町二十四町、外町五十六町の町番役所と其の住民や地主へ、長崎港の公務負担の代償として益差金十一万両を配当し、更に長崎の社寺への寄進銀迄応分に配当し、残りは全て幕府勘定奉行へ献上いたします」

と説明した。

重蔵は今更の如く長崎貿易の幕府財源としての重要性と、其の仕組が複雑巧緻なのに驚き、白分ばかりでなく殆どの武士階級の者が、商売吟味、銀本位制支払勘定、貿易交換益差などは知らず、其うした商人の銭勘定は、文武両道を以って身を立てる者の関知する処に非らずと意に留めなかったが、長崎会所の視察を重ね彦右衛門等の説明を聞くにつれて、商売吟味の掛引算段や、各国貨幣制度の相違と其の交換価値の益差の獲得などは、並々ならぬ専門の知識と長年の経験とによって得られることを知った。蘭通詞によれば、欧羅巴では既に貿易や貨幣の学問があり専門の学者もいるとか、重蔵の学友狩谷棭斎もそれに触れていたことを思い出した。

重蔵は幕府財形の事など全く知らなかったが、武家政権を支える金の力を考えざるを得なかった。農は国の本と云うが商は国を支えるもの、軈て権力を握る武士階級より身分最下位の町方商人の世になるであろうとすら思った。

彦右衛門が、家康公が朱印船貿易の利を幕府や富商ばかりで独占せず、全国の商人特に長崎市中の住民にまで分配したと言ったが、幕府創業の家康は当初から国利民福が天下泰平の源と考えたのであろうと其の深慮遠望に感じたが、長崎貿易でも長崎会所の諸経費ばかりか長崎市内外八十ヶ町の住民に迄其の利を分配するとも言ったので驚き、更に其の説明を求めると彦右衛門は、

「其れは老人の長話となって少々昔まで遡りますので、如何でしょうか、明後日は手前は非番日なので拙宅で一

献差し上げ乍ら緩っくりとお話致しましょう、宜しけれ未の刻四っ半頃にでもお越し下されば……」

と後日を約すことになった。

（十）

近藤重蔵は、寛政八年の晩秋未だ紅葉の残る浦上上淵の高木彦右衛門邸に、酒屋より角樽を届けさせて約束の刻限に訪ねた。

高木家は長崎が鎌倉時代の漁村に過ぎなかった頃よりの旧家で、代々守護の大村領内の村役を務め、戦国の興亡、南蛮人の渡来、キリシタン禁制、島原の乱等の激動変貌の中で二度三度の火災に遭い乍ら今に至った。

その家柄にも拘わらず外から見る家構えは普通の農家と変らなかった。杠樹の生垣に竹裡垣の茅葺屋根の平屋門を潜ると左に、紅葉の濃淡鮮やかな樹木の中に緑映える丁香樹が高く繁り立っていた。

態々出迎えた彦右衛に続いて玄関より中廊下を通って西向いの離れに入った。主殿の方は家を継いだ長子の作右衛門夫婦の居室となっている。

離れは八帖の居間を中心に手前に六帖の控えの間、奥は畳三帖と書棚となっている床と、台目切りとなっている書斉であった。

八帖の間の広縁より築山を背にした心形の池が見え、池畔に身の丈程もある三本の蘇鉄樹が奇観を呈している。築山の西南は稲佐山が借景となっていた。

庭の景観より室内に目を向けると、八帖居室の本床に〝白雲自去来〟と読める掛物が見え、奥三帖の間の床の書棚や段差のある違い棚の上に積み上げられた和漢洋の書籍が見え、台目切の床にも書籍箱が林立している。

ねむり燈台が置いてある毛織の方形茵が敷かれてある文机、硯箱や古竹筒の筆立の置かれた文台の横に今方迄主の彦右衛門が書見していたらしい二、三冊の綴本も見える。

十徳指貫の寛いだ姿の彦右衛門は、挨拶に顔を見せた夫人と、薄茶の点前をした嫁女にも勝手に過すからと席を外させ早速長崎貿易の今昔談に入った。

話が次第に深まり刻を忘れる裡に、夕映の美しい豊旗雲も消え、秋の短日は急に夕闇となった。

夕食を挟んで酒も入ると一層話は佳境に入ったが、重蔵は家人の迷惑を慮って未だ宵の口だと彦右衛門が引き留めたが、後日を約して戌の五ッ半に辞去した。

重蔵は鎌形の新月の夜空を仰ぎ見乍ら、懇談の内容を思い出して歩き続けた。

彦右衛門は語っていた。

「長崎は戦国の末期大村領でありましたが、長崎開港後キリシタン、イエズス会に協会領を寄贈され、後に九州平定の秀吉公によって公収されて天領となり、佐賀の

鍋島直茂が代官となって納められましたが、文禄元年（一五九二）唐津藩主寺沢広高が長崎奉行となり、貿易や外交の実務や、長崎町の住民生活等の実務は、長崎町人の筆頭格村山等安が代官となって担当することになり、町内行政は長崎内の町年寄を頭人として、各町の乙名を組頭にして支配するようになり、更に長崎の外町や天領の郷村迄も村山等安が代官となって、長崎内と同じように支配しました。

其の後も長崎の代官は長崎の古参町人が務めるようになって、元和二年（一六一六）末次平蔵が後を継いで四代の後、私共の祖父高木作右衛の代より筆頭町年寄となり、町役人を統括して長崎市政とキリシタン禁制の宗門改めと、貿易外交の実務を担当して参りました。

特に貿易外交の実務は長崎会所で行ないますので、南蛮船の長崎開港以来船舶の湾入より船荷の積上げ一切の夫役は長崎内外の町民への割当となり、町ごとに交替で勤めて参りました。其の夫役分担への手当は大変な額となります。其処で、此れを貿易益差より充当しまして、町方役人を通して町住民戸割で分配する『長崎箇所銀』と致しました。

此れは長崎町民の生活の支えともなり、長崎住民が異国人に差別や偏見を持たず、心良く異国船を迎える訳ともなります。処が鎖国以後は唐・蘭船のみの貿易となり其の後の貿易制限で分配も減少し住民も少なくなりました。

尤も此れは前に述べましたように日本銀の海外流出防止の為の已む無いことです」

との彦右衛門の言に重蔵は、貿易を制限しても尚取引国相互に巨額の益差を齎らすものを、唐国蘭国のみに通商を許すのは愚の骨頂では無いかと思い、

「外国との貿易は南蛮船のポルトガルやイスパニアは早くから平戸へ来たが、キリシタン禁制で日本追放となり、今は全く通商して無いことは分かるが、唐国やオランダの他にもキリシタン布教とは関係の無い他の国、假令ば、今オランダと戦っている伊祇利須や仏蘭西はどうして日本と通商しなくなったのか、昔は平戸での貿易には多くの異国船が来航したのでは無いか」

と訊くと、彦右衛門は大笑いし乍ら、

「幕府のお役人様でそれを言うのは近藤様が始めてです。愉快なお人ですな……仰せの通り、鎖国などせず何処の国とも自由貿易をすれば、まだまだ我が国は莫大な富を得られましょう。現に鎖国と言っても、半ば公然と薩摩藩は琉球貿易で砂糖を輸入し、対馬藩は朝鮮貿易で銀・銅・朝鮮人参・絹織物・香料まで手に入れ、北方の松前藩は蝦夷地の交易で昆布・俵物を得て本土の需要に応じる外に長崎に運び唐貿易で大儲しています。其の他様々の抜荷貿易が行なわれている有様です。

ですが、長崎貿易の独占だった砂糖・綿織物・薬種等

も今は国内産も出廻るようになって、貿易の旨味も減りました。然し、貿易は儲けだけでなく、異国の珍しい物品、文物等を交換して生きる楽しみを拡げます。此れは我が国だけでなく、異国の人々も同じで多くの国々が有無相通じてお互いの生活を豊かにするのではないでしょうか、処が、唐国、オランダのみと貿易をするようになったのは、手前などより近藤様の方が良くご存知のことと思いますが、

天文十二年（一五四三）ポルトガル船の種子島漂着以来南蛮人は、鉄砲火薬や珍しい品々と共にキリシタンバテレンの教を日本に持ち込みました。戦国時代なので西国大名の中には鉄砲に目が眩んで南蛮人の来航を歓迎し、自分の領地に協会を建てたり協会領を与えたりしました。

キリシタンバテレンも鉄砲火薬を餌に異国の教の布教を盛にし、洗礼を受けた大名にはキリスト教の神のみを絶対なものとし、自領の社寺を破壊し神官僧侶を追放させました。

恰度、島津氏を討ちに九州統一に来た豊臣秀吉公が此れを知って大いに驚き、天正十五年（一五八七）六月十九日伴天連追放令を出したのです。

然し西国大名の中には高山右近や小西行長等の多くの洗礼を受けた大名も居り、多くの九州の住民の信徒も居りますので、信仰のことは本人の自覚に任せ処分は致しませんし、国外追放は宣教師の伴天連のみで南蛮貿易を禁止した訳でなく、太閤秀吉様御自身も海外発展の望む上から盛んに呂宋などに来貢を求めた訳で、朝鮮出兵の最中でも盛んに朱印船を出して安南・暹羅（シャム）まで堺や平戸の豪商が異国取引をしていました。

処が慶長元年（一五九六）土佐に漂着したイスパニアのサンフェリペ号の船長がイスパニアは南米や呂宋島等の領土の占領は、宣教師を上陸させて住民、島民に珍しい物を与えて手懐けて入信させた上で鉄砲によって国土を次々と奪って来たと自慢していたとの報告を聞いた太閤秀吉は激昂して、キリシタン信徒や宣教師を捕らえ長崎に送り、翌年慶長二年十一月キリスト教徒二十名を処刑し、其の後のキリシタンの弾圧バテレン追放が始ったのですが、其れでも貿易はキリシタン布教とは切り離して海外貿易は禁止した訳でなく、次に征夷大将軍となんて江戸幕府を開いた家康公も朱印貿易を盛んにして、慶長十五年（一六一〇）にはイスパニア人にも通商を許す程でしたが、二代秀忠公以降はキリスト教禁制貿易制限は益々進み元和七年（一六二一）に南蛮船による日本人の奴隷売買が発覚して、イスパニア貿易は寛永元年（一六二四）には禁止となり、日本人のキリスト教徒も呂宋に追放され、寛永十二年（一六三五）には長崎以外の港に外国船の入るのも禁止され、寛永十四・十五年の島原の大乱以後はポルトガル人の来航も禁止され、日本人の海外渡航は厳禁され大船の建造も禁止され、寛永十七年

（一六四〇）オランダ商館が長崎に移ってからは、唐国とオランダのみが通商を許されるようになった訳です。

伊祇利須（イギリス）との通商はオランダ船で来たウィリアム・アダムスが家康公に仕えて帰化し、三浦按針として外交顧問でしたので、慶長十八年（一六一三）に平戸に商館を開いて通商しましたが、オランダとの競争で利が薄く、明国の香港の方が利が多いので元和九年（一六二三）平戸の商館は閉鎖しました。

元々イギリスは北亜墨利加（アメリカ）の方に広い範囲に勢力を拡げているので日本など眼中に無いようです。

仏蘭西も同じく本国に近い阿富利加（アフリカ）や東南アジアの西貢（サイゴン）、安南、虎樋（ラオス）、塞蒲東（カンボチャ）等を持っているので余り日本には手を出さないようです。

今、最も日本と通商したいのは露西亜でしょう。露西亜はチンギス汗の侵入以来長く蒙古人の支配下にありましたが、我が国の戦国時代にイワン雷帝が出て蒙古人を追い払って、欧羅巴人が海洋へ進出して島々を探索して植民地にしているに対して、我が国の永禄二年（一五二九）ウラルを越えてシベリアの原野を東へ東へと多くの種族を従えて領土を拡げ、カムチャッカ、ベーリングの海に達して、我が国の正保年間には千島列島を南下し、先の寛政四年（一七九二）には難破漂流の日本人の大黒屋光太夫等を送って通商を求めにエカテリーナ二世号が、蝦夷地根室にやって来た訳です。

露西亜が日本と通商したいのは、広いシベリアに住む露西亜人の食料、日用品等を遠い本国から運ぶより近くの日本から買い度いのです。

鎖国を崩し度く無い松平定信公の謀いで来航したラックスマンは旨く追い帰したようですが、長崎廻航の信牌を与えているので必ずやって来るでしょう。

だが、露西亜との通商では日本が欲しい物は余り有りません。露西亜人の持って来る海獣の毛皮類は日本人には必要ない物です。魚介、海藻類は松前を通して蝦夷地の産物で充分です。

先程も申しました通り、俵物の煎海鼠や干鮑、鱶鰭、昆布、鯣等は蝦夷地より回船問屋、場所請負商人を通して長崎に運ばれ、唐船やオランダ船に売られますが、松前藩の場所制運上の莫大な収益となって、長崎貿易は長崎住民にも貿易益差が分配されるのと違って、蝦夷地千島の住民やアイヌの人々にはその交易の恩恵を少しも与えていないのです。

江戸には立派な蝦夷地や千島のことに明るい学者や、近藤様のような幕府のお役人も居られることです。いずれ蝦夷地は幕府直轄としてアイヌとの交易も場所請負商人の介在を廃して幕府直轄として、蝦夷地、千島の住民、アイヌの人々を豊かにする事が肝要かと存じます。」

高木彦右衛門が重蔵を信頼して日頃の思いを腹蔵なく

言って呉れたことを嬉しく思い乍ら、江戸で小石川音羽熟の北夷斎本多利明より、蝦夷地・千島問題に啓蒙され、天明年間の蝦夷地見分隊の最上徳内や、青島俊蔵の探検に感動し、本多利明の著『蝦夷拾遺』や工藤平助の『赤蝦夷風説考』等を読ませて貰っていたので、高木彦右衛門の蝦夷地直轄制や場所請負制の廃止説等は、本多利明や田沼時代の北方貿易論、蝦夷地開発の計画と同じものであると理解した。

重蔵は長崎在任中異国貿易や、キリシタン禁制弾圧、鎖国政策等に好奇心を燃やして奉行所記録や『和蘭陀風説書』を始めとする多くの記録文書を閲したり、新井白石の『西洋紀聞』とか『采覧異言』等も読み返したが、高木彦右衛門より長崎貿易の仕組の大要ばかりか、海外の事情国際貿易の大要を啓発され、北辺を騒がす露西亜の南下や蝦夷地の反乱等も大きな世界の動きの中にあることを知った。

そして、狭い西の果ての国より海洋探検、新航路の開発を成し遂げ、未知未聞の大陸や島々を領土とした南蛮紅毛人が、其の土地の人々を支配し、その地の富を本国に運ぶと共に、南蛮、紅毛の欧羅巴の国々が海洋航路の覇権争いや、植民地獲得競争に奔走していることも知った。

重蔵は鎖国泰平の安眠を貪っている人々に世界の大勢を知らせなければならぬと思い、尚一層知識を吸収し認識を裏付け実証することが自分の役目であると考え、幸い志を同じくする同僚の林貞裕と共に、長崎入港の清国船員よりの聞き取りや、唐通詞より得た知識・情報を克明に記録し編纂した清国風俗史『清俗紀聞』八巻を、奉行中川忠英に提出し、更にオランダ通詞よりの聞き取りを元にして、『安南紀藁』八巻、『亜媽港紀略稿』一巻伊祇利須紀略提要』八巻等の著述を成し遂げた。

奉行所や長崎会所の役人の中には重蔵が熱心に異国取引の調査や、唐人やオランダ人より海外事情を聴き取って収録するのを危ぶんで、幕府の隠密か隠れキリシタンの探索かと警戒する者もいたが、奉行中川忠英の信任と保護が有るので役目は事なく果していた。

処が、中川忠英は寛政九年新年早々長崎奉行交代の内示を受けて江戸へ帰府し、二月九日若君家慶の御着袴の祝の席に、養子中川勘三郎忠宣を伴って参列し、将軍家齋に謁し中川勘三郎忠宣は幼君付三の丸詰となり、父飛驒守忠英は二月十三日勘定奉行を拝命した。

中川忠英は江戸へ戻る時秘かに近藤重蔵を呼んで、

「長崎奉行の任期は一、二年の交代制なので今度の帰府で他へ転んずる事となろうが、寛政五年露国の使節ラックスマンの修好通商の申し入れを拒んで去らしめてから暫くは平穏であったかに見えた北辺事情も怪しくなり寛政七年得撫島（ウルップ）へ露国植民隊が大挙上陸したとの報告が漸く翌八年の春に江戸に入り、同年八月には蝦夷地の絵

鞆室蘭に伊祇利須船プロヴィデン号が入港し、碇泊十日余に付近の海域を測量して去ったとの報もあって、蝦夷地方面の不穏に幕閣は、多少異国事情を知る予を江戸に呼び寄せてて置き度いであろう。近藤も異国事情を良く調査したので必ずや、今後の政情に大いに役立つことになろう。予の後から江戸へ戻ることになろうが、心しておくように」

と密命した。

三月十四日大坂町奉行の松平石見守貴強が長崎奉行となると、近藤重蔵も職を解かれ江戸へ戻り再び勘定奉行中川忠英の推輓に依って関東郡代付出役の内示を受け、江戸へ戻って鶏声ヶ窪の屋敷で待命していた。

重蔵は唯漫然と日を過さず、長崎より持ち帰った書籍や蘭学者志筑忠雄の著書『魯西亜志附録』や吉雄幸作訳の「魯使北京紀行』等を読み返し、自分も長崎会所で得た蝦夷地や千島の北方事情を基礎にして北方経倫の論『蝦夷記事』や『蝦夷奏議』等の論策を書き、後に中川忠英を経て幕府に献上して北辺の地の重要性を上申した。

勘定奉行中川忠英が六月六日関東郡代を兼ねる事になって近藤重蔵も支配勘定となり関東郡代手付を命ぜられ、馬喰町の関東郡代屋敷に詰めることになった。

続く

社　出口（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出があり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　東京二一九〇八一五

加入者名　作家群編集部

幻妖城異聞（二）

三戸岡道夫

（六）

さて、戦国の乱世。

天下統一をめざす戦が、各地でくりひろげられ、世は動乱のまっただ中であった。隣国同士が戦って領土を奪いあい、肉親が血で血を洗う争いを起こし、いささかも油断のできない世の中であった。

天下の形勢は混沌として、不透明で、風雲急を告げている。どの国でも合戦にそなえて、軍備の強化を怠りなかった。

深山の国でも、隣国との小ぜりあいは、たえずあり、また、京を目ざす信長の強引な戦争の余波に、たえずおびえていた。

だから、つぎの国主となるべき晃長が、軍備、武術に無関心で、持仏堂作りと、能楽に、うつつをぬかしていたのでは、困るのである。家臣のなかには、深山の国の行く末を案じて、こうした晃長をひそかに憂うものもいた。

晃長はすでに十九歳になり、父の頼之に万が一のことがあれば、国主の座につき、領国を治め、家臣団を掌握し、外敵と戦わなければならない立場にある。

そのための準備は、できているのか。

晃長は、そのための用意など、なにもしていないといってよかった。

心配した家臣たちが、国主としての心構えを説き、深山の国の国状を説明し、また、周辺隣国の様子や、油断のならない天下の形勢などを説き、軍事、政治、外交に、眼を開かせようとしたが、無駄だった。

武術をすすめ、最新の武器の扱いかたなどを教えようとしても、興味を示さなかった。あまり執拗に押しつけると、すぐ馬に乗って森へ駆けだし、椿館へ立てこもって、深山城へもどってこなかった。

時には、公式の行事の場へ、父の頼之といっしょに同席したり、父に代わって、家臣に謁見するようなことも

あったが、そのような場合でも、晃長は落着きがなく、心ここにあらざる、といった工合であった。晃長は人混みをきらい、人に逢うのをきらい、公式の行事は、牢獄のなかへ据えられるのと同じであった。きびしい武家生活は、退屈で、窒息する思いだったのである。

だから家臣たちのあいだに、将来の国主にたいする心配がひろがったとしても、無理もないことだった。

だが、晃長はそんなことには無頓着に、毎日、毎日を、振舞っていた。それを表だって、いさめようとする者は誰もいなかった。

もし、晃長をいさめる者があるとすれば、それは家老の定国の役目だった。定国は忠実な家老であるとともに、国王頼之の弟であり、晃長の叔父にあたる人間であるからであった。

しかし、定国はどうしたわけか、いっこうにそうした動きをしないのだった。家臣たちのあいだには、

（ご家老は、もっと若君が、政務、軍務のほうへ関心がむくよう、おいさめすべきだ）

（ところが、おいさめするどころか、持仏堂建立の資金を惜しまずに支出したりして、まるで若君の城作りを奨励しているようなものじゃないか。まったくもって、けしからん）

（そんな金があるのなら、もっと、馬や鉄砲を買うべきだ）

と、定国への批判も高まっていた。だが、定国は、

「若君の御意にそうのが、家臣のつとめじゃ」

と、そうした批判にはいっさい耳を貸さなかった。

すると、その事件を待っていたかのように、とつぜん、ある事件が、深山城内に持ちあがったのである。

磯貝小十郎という若い家臣がいた。若いといっても、もちろん三十歳をこしているが、晃長の教育係を担当している男であった。

ある日、その磯貝小十郎が、家老の定国にあてて一通の報告書を提出したのである。報告書というよりも、ある意味での建白書といったほうが、よかったかもしれない。

それには、小十郎が教育係に命ぜられてからの、晃長に対する教育の実績が、ことこまかに記載されていた。言ってみれば、晃長の教育に関する総決算書といえばよかった。そのなかで、小十郎は、とくに晃長の夢想癖を強調し、

（若君の途方もない想像力は、普通の青年がもつ水準をはるかに越えており、それは巨大な力を持っている）

と記述し、それにつづいて、

（執拗なほどの固執癖が、あらゆる物事について認められる）

と結んでいた。この報告書は、表現が慎重で、それほどあからさまには書いてなかったが、これを綜合すると、

（このままでは、晃長は深山の国主として適当な人物ではない。晃長をこのような夢想家、軟弱な青年に育てたのは、側に仕える老女笛川のせいである）

ざっとそういう内容に、読みとれるのであった。言ってみれば、（晃長は国主としての適性を欠く）、という、大胆な建白書であった。深山の国の将来を憂える、まじめ一筋、忠義一筋の、磯貝小十郎の必死の上訴であった。

小十郎の指摘する、晃長の夢想癖については、家老の定国も深くうなずくところがあった。

だが、これが笛川の耳に入ると、彼女は自分にたいする誹謗（ひぼう）だと受取った。

「なんという、たわけたことを言うのじゃ。若君のほんとうの心を知っているのは、わらわのほかは、誰もない。こんなことまで言われては、若君がおかわいそうじゃ。わらわが若君をお護りせねば、だれが護るのじゃ。若君の教育は、この笛川が命にかけてもお引受けいたす。だれの指図も受けはいたしませぬ」

建白書への怒りと、晃長への忠誠心と、母性本能とが混合してしまった笛川は、家臣たちの前に、厳のように立ちはだかってしまったのであった。

定国は、建白書に基いて、晃長の再教育計画書とでもいうべきものを作らせた。それを小十郎に持たせて、

「若君の教育は、今後、この計画にしたがってお進め下され」

と言上させたが、笛川はちらっとそれに眼を走らせただけで、

「こんなものは不要じゃ」

受付けようとはしなかった。小十郎はしかたなく、

「でも、わたしくはこの内容にしたがって、今後ご教育申しあげますから……」

と、計画書を、笛川の手許に置いて帰った。

さて、その再教育の初日。小十郎が講師をつれて参上すると、晃長の姿が奥御殿には見えなかった。

「どこへ参られましたか」

「馬に乗って出掛けられました」

笛川の返事はそっけない。晃長は、今日の講義のあることを承知の上で、馬で椿館へ行ってしまったのである。

「笛川さま、これは大殿（おおとの）じきじきのご指示でもございます。どうか、笛川さまのご協力もいただきとうございます」

と小十郎がつめ寄ると、

「たとえ大殿のご命令でも、若君がいやがることを、押しつけるわけにはまいりません。もし、どうしてもと強制なさるのなら、わらわのほうから、直接、大殿へ申しあげましょう」

笛川もつよく言い張るのだった。

笛川がそれほどつよく言い張るのには、理由があった。

それは、磯貝小十郎の背後に、ある人間の影を、笛川は感知していたからであった。

（陰で誰かが、磯貝小十郎をあやつっているのだ）

小十郎の背後の人間とは、

（家老の定国である）

これは笛川の直感である。が、ほぼ、まちがいはないといってよかった。

建白書事件は、小十郎の単純な忠誠心ではない。実は、陰で家老の定国が仕組んでいるのだ。

（なんのために？）

その真相は、いまの段階では笛川にもわからなかったが、母性本能にもえた笛川の女の直感が、定国の陰謀めいた臭いを、敏感にかぎとっているのだった。その陰謀から晃長を護るためには、

（わらわが必要以上に強い態度で、若君の砦とならねばならぬ）

と、笛川の決意を、必要以上に固くしているのだった。笛川は晃長の楯となることのよろこびに、全身を燃えあがらせていた。

（七）

老女笛川は、女の直感で、家老定国の陰謀の臭いをかぎとっていたが、事実、その陰謀が進んでいたのであった。

定国は、水清寺家兄弟三人のうちで、もっとも武力、胆力にすぐれていたから、その家老ぶりには、定評があった。

しかし、それだけに定国は、一筋縄ではいかぬところを持っていた。定国は若いころから、

（兄の頼之は、ただ長男というだけで、なぜ家を継ぐのか。家は、兄弟のなかで、もっとも力のある者が、継ぐべきだ。それでなくては、この戦乱の世の中を、生き抜いてゆくことはできない。わしは、三男に生まれたというだけで、生涯、日の目を見ることなく終わるなんて、ゆるせない）

そう、つねづね、思っていた。

だから心のなかでは、いまでも国主の座への野心を、すてていない。いや、すてていないどころか、ひそかに国主の座を狙っているのであった。

だが、用心深い定国は、そんな素振りをおくびにも見せなかった。表面は神妙に、頼之や、晃長に、忠誠をつくしていた。

定国が用心深くしているのは、

（国主の座を奪うなどという、大それた野望は、容易なことでは達成できない）

ことを、よく知っているからだった。牙をむき出しにして、頼之と争うようなことは、決して有利な作戦でな

いことを知っていた。いま争えば、定国が負けるにきまっている。負けて、反逆者の汚名を着せられ、首を斬られて、終わりである。あせって、自滅の道を選ぶ必要はない。

（もっと大きな作戦をたてて、時の熟すのを待つのだ）

定国はいつも自分にそう言いきかせ、表面、忠誠をよそおいながら、ひそかに雄大な陰謀を進めているのだった。

それと同時に定国は、家老のほかに、勝手奉行をも兼ねていた。深山の国の財政が破綻なく運営されているのは、勝手奉行としての、定国の力量によるものといってよかった。現に、晃長が三年越しで取り組んでいる持仏堂の工事の費用が、順調に調達できるのも、定国が勝手奉行をつとめていればこそであった。何事も最後のところは金だと、金の威力をよく知っている定国は、深山の国の財政を一手に握りながら、己れの力を蓄えて、その日の来るのに備えているのであった。

だが、その定国以上に、お家乗っ取りに野心を燃やしている人間がいた。妻の染の井であった。

染の井は気丈な女で、ときに弱気になる定国を叱咤激励して、たえず定国を国主の野望にかりたてていた。それには理由があった。

染の井は深山の国の郷士の娘で、その美貌はつとに国内に知れわたっていた。だから、年頃になると、縁談は降るほどあったが、どれにも染の井は耳を貸さなかった。気ぐらいの高い彼女が狙っているのは、国主の妻の座であった。すなわち、現在の国主、頼之との縁談を、最初からつよく望んでいたのであった。

その頼之との縁談は、郷士である父親の豊かな財力によって、一度は実現寸前にまでこぎつけた。だが、土壇場になってこわれてしまった。京都の公卿の娘と、頼之との縁談が、急にきまったからである。それが萩の方であった。それは頼之のなかに棲む、京のみやびへのあこがれが、そうさせたといってよかった。

だが、染の井はあきらめなかった。長男がだめなら、三男でもと、定国のところへ嫁いだのである。染の井が望みを達成するには、まず、水清寺一族へ足がかりをもつのが、必要だった。足がかりさえ摑めれば、その後の作戦はなんとでもなる。

だが、定国の妻となってから、しばらくは、染の井はおとなしくしていた。そのあいだに、夫の心中に、国主への野望があるか、どうか、それを慎重にさぐったのである。

（夫を国主の座にまつりあげれば、黙っていても自分が国主の妻の座にすわれる）

それが、染の井が胸に秘めている作戦であった。そして、夫の胸にも、国主への野望が青白く燃えあがっているのを知ると、ゆっくりと行動を開始したのである。

しかし、定国が国主になるのには、障害が多すぎた。定国が乗りこえなくてはならない人間が、三人いた。国主の頼之と、その子供たちである。

頼之には、二人の子供がいた。晃長と、寿丸である。二人の母親は同じではない。兄の晃長は、正室萩の方から生れ、弟の寿丸は、側室亀の前から生れている。

この三人を、どうやって料理するか、その成功如何が、定国の国主実現の鍵を握っているといってよかった。

最初、定国と染の井が考えたのは、三人を毒殺するという、手荒な方法であった。

そのために染の井は、ひそかに毒草の栽培をしていた。邸の秘密の場所に、毒草園をつくり、そこでさまざまな毒草、毒きのこなどを、育てていた。

それと、毒蛇の飼育である。そのために染の井は、毒蛇をなん匹も、暗い部屋の檻のなかで飼っていた。とりわけ猛毒をもっているのは、サソリヘビであった。サソリヘビは、深山の国だけに棲む蝮の一種で、噛まれただけで、人はまちがいなく死ぬという、おそろしい蛇であった。

どんな殺しかたをするかによって、使う毒の種類が異るのである。一瞬にして命を断つ毒、じわじわと人に気ずかれぬように殺す毒、また、人を発狂させる毒、痴呆を促進して廃人にしてしまう毒…、毒の種類はさまざまである。

使用方法も、飲ませる毒薬、外傷用の毒薬、匂いをかがせる毒など、いろいろである。毒草や毒きのこの毒は主として飲用であり、蛇の毒は外傷用ということになろう。

飲ませる毒は、飲めば効果が確実であるが、誰かが飲ませなくてはならないという、人の問題がある。その点、蛇毒のほうは、蛇が犯人として表に出るので、人間は陰にかくれていられる。しかし反面、狙った人間を、蛇が確実に噛むかどうかという、不確実さが残る。いずれにしても一長一短で、どれを使うかは、そのときどきの情勢判断によるしかないであろう。

定国と染の井は、人が寝しずまった夜、二人でのめりこむようにして、毒の話をするのが、たのしみだった。

「けさ、蛇捕りの弥次が、サソリヘビを持ってきてくれましてね」

染の井は、描いたようなくっきりと鋭い眉を、上下に動かしながら、唇を動かした。

「よい蛇か」

「しなやかで、いい胴をしています。顎もみごとに張って、たっぷり毒を貯えているように見えますよ。鬼姫連山の麓までいって、捕えてきたということです」

「うむ」

「それに、昨日は、ハブを売りこみにきた者もありました。それもいい蛇でしたが、ことわりました。ハブはよ。もともと晃長には狂気のところがありますし、その母も発狂して自殺しています。発狂ならば、誰もが納得するでしょう」

「うむ、それはいい考えかれしれぬ」

「ちょうど、人を狂わす、気ちがい茸という、恰好の紅きのこがあります。それを使えば、かんたんです。最後の寿丸は、生かしておいて、わたしたちの手先に使ったらどうでしょうか」

「むう、わしも、だいたいそれと同じようなことを、考えていたところだ」

つぎの国主となる晃長は、持仏堂の建立に熱中し、能楽にあけくれるという狂気の態で、どう見ても、国主の資格があるとは思われなかった。それに反して、弟の寿丸のほうは、資質英邁で、武芸、学問にも秀で、はるかに国主に適していることは、誰の眼にもはっきりしていた。

だが、現実には、つぎの国主になるのは寿丸ではなくて、晃長である。理由は、晃長が長男だからというにすぎない。定国は、寿丸の上に、かっての自分の姿を見る思いがするのだった。その義憤と、国主への野望が、ひとつになり、定国の陰謀の形が、徐々に明確になっていった。

それは、娘の朱葉と、寿丸とをからませた、あるたくらみであった。朱葉は女らしいことにはなんの関心も示

他国の毒蛇ですからね。他国の蛇が噛んだということになりますと、誰かが仕組んだということが、わかってしまいますから。深山の国の毒蛇が噛んだほうが、自然です」

「うむ、用心するに、こしたことはない」

だが、計画が進むにつれて、二人の考えはすこしずつ変っていった。

「ねえ、お前さま、頼之、晃長の二人を殺すのは、しかたがないとしても、寿丸まで殺したのでは、人々から怪しまれないでしょうかねえ」

国主の親子を三人も毒殺するという不自然さに、気ずきはじめたのである。下手にさわがれて、陰謀が露見するようなことが、あってはならない。

「そこが、わしも問題だと思っていた。国主親子を毒殺して、国主になったということが露見したのでは、あとの治政がうまくいかぬ。とすると、三人とも毒殺するのは、考え直す必要があるな」

「では、こう考えたら、いかがでしょう」

染の井の頭のなかには、すでにつぎの作戦が練られているらしかった。

「頼之は、やはり毒殺してしまうよりほかはないでしょう。とにかく、はやくこの世から消えてくれなくては、舞台の幕が上りませんからね。つぎは晃長です。晃長は発狂させて、幽閉してしまったら、どうかと思うのです

さず、いつも馬に乗って野山を駆けまわっている、おてんば娘であったが、

（その朱葉を寿丸に娶わせて、それを、定国が国主になる足がかりとする）

という構想であった。すなわち、頼之を毒殺し、晃長を狂人にしてしまった後、朱葉と寿丸を夫婦にさせ、寿丸を国主の座に据えるのである。そうすれば、定国は、国主の妻の親ということで、寿丸を背後からあやつって、実質上の国主になれるというわけであった。

家老の職にあり、権勢並びなき定国のことであるから、やろうと思えば、そのぐらいのことは、できないはずがない。

定国の説明を聞くと、染の井は、

「夫婦は一心同体とはよく言ったもので、お互いに、似たようなことを考えるものですね、お、ほ、ほ……」

と満足げに笑い、

「そうなれば、国主の座はわたしたちの手のなかにあるようなもので、権勢は思いのままになりましょう」

「うむ、そうじゃ」

定国は、若いころから胸の底に秘めていた野望が、いよいよ娘の朱葉を通して実現するのかと思うと、身体のうちが、火のように燃えあがってくるのだった。

「でも、寿丸めが、われらの要求通りにうまく動くかな。心配といえば、それがちょっと心配だ」

定国はあくまで慎重だった。

「大丈夫ですよ。寿丸だって、国主になりたがっているのですもの。晃長が、ただ長男というだけで国主になることに、大いに不満を持っています。ちょうど、お前さまの若いころとおなじですよ、ほ、ほ、ほ……」

「これ、めったなことを言うでない」

「寿丸が話に乗ってこないはずはありません」

染の井も強気であった。もし、染の井が男あったなら、定国以上の知将になっていたことはまちがいない。

「だが、寿丸のやつめ、いったん国主の座についてしまうと、われわれを、ないがしろにするようなことはあるまいな」

定国は、慎重に、先の先まで読もうとする。

「まあ、お前さまは心配性ですこと。もし、そうなれば、そうなった時のこと。そうなったら、また、こうすればいいじゃありませんか」

染の井は右手を空中に泳がせて、毒蛇が人の首に嚙みつくまねをした。

（恐ろしい女だ）

と定国は思った。だが、いまはこの女の謀略に歩調をあわせておくのが、得策なのだ。

「だが、お前さま、困ったことがひとつありましてね」

染の井は眉根を寄せて、定国の顔を見た。この恐ろしい女にも、困るようなことがあったのか。

「なんだ」

「実は、朱葉が好きなのは、寿丸ではなくて、晃長のほうなんですよ」

「なんだと…？　寿丸は武芸に秀で、野山を駆けまわっている。じゃじゃ馬の朱葉には、似合いではないか」

「それが、ちがうのですよ。朱葉が追っかけているのは、寿丸ではなくて、晃長のほう……」

「あの軟弱な男のどこがいいのか」

「それが、わたしにもわかりません」

「だが、男と女のこととなると、親のほうから強制するわけにもいくまいしな」

「お前さま、そんなのんきなことを言っている場合ではありませんよ。お前さまが、国主になるか、どうかの、瀬戸際です。いちど、お前さまから、朱葉へ、よく話してみてはくれませぬか」

「うむ。だが、男女のことは、男の口からでは話しにくい。なあに、大丈夫だ。いずれ晃長が、おまえのもくろみ通り、狂人になってしまえば、朱葉もあきらめるだろう」

「まあ、そう言えば、そういうことにもなりましょうか」

「そんなことより、早く、晃長を狂人にしてしまうことだ」

「お前さまも、案外な悪……」

「いや、そうでもない。おまえには、とてもかなわぬわ。は、は、は……」

「お、ほ、ほ……」

こうして二人の陰謀は、徐々に積み上げられていくのであった。

こうして、まず、晃長を狂人に仕立てる作戦の第一弾として、先日の建白書事件が起きたといっていいのだった。

晃長の教育係である磯貝小十郎は、巧みな定国の手によって買収され、いつのまにか定国の傀儡になっていたのである。

（晃長のなかには狂気があって、とても国主の器ではない）

と、小十郎の手でまずあばかせて、晃長の顔に、狂気という化粧をどっぷりと塗りつけたのであった。

（八）

一方、当の晃長は、そうした騒ぎをよそに、椿館にこもったきりで、出てこようとはしなかった。

晃長は、軍備を目的とした深山城よりも、風雅な椿館を好んだ。だから、なにか嫌なことがあると、すぐ椿館へ逃れて、たてこもってしまうのだった。椿館には、晃長が求める安らぎと、晃長の心を夢中にさせてくれる夢

幻の空間が、ひろがっていたからである。
椿館は、椿の森にかこまれた、山頂に建っている。
山頂から見下す谷はけわしく、森は深く、風光明媚な秘境で、晃長の祖父がここに別城を築いたのも、うなずけた。
椿館は最初は砦として築かれたものであるが、まわりの風光を賞でて、頼之が大規模な改築を行い、夏の避暑とか、秋の紅葉狩りとか、四季折々の行楽用の別邸として、使う習慣になった。
だから、城の内部も、城というよりも、館か、御殿のように美麗に作られていて、いつのまにか椿館と呼ばれるようになったのである。
城門を入るとすぐ右手に、椿の巨木がそびえていて、春になると、天にむかって魔のようにのびた緑の枝々に、真紅の椿が無数に咲いた。それは、この優雅な館の花簪(かんざし)のようであり、また、来客を迎えに城門まで這い出してきた。城の正体の化身とかも見まごうた。
樹が巨大なので、落椿の数もおびただしく、花の盛りには、樹の下陰は、無数の落花で血の海のように染った。が、椿館を偏愛している晃長は、その血の海を見ると、自分の体内から流れ出た血が、そこにひろがっているかのように、いとおしいような、狂おしいような気分になるのだった。
館のなかに入ると、中央の大広間には、水清寺家歴代の国主の肖像画が飾られていた。部屋や廊下のあたまの襖絵や屏風絵は、花鳥風月ではなくて、すべて絵物語で統一されているのが、晃長の気に入っていた。源氏物語絵巻の襖絵とか、平家物語絵巻、源平合戦絵巻、太平記絵巻といった工合で、だから、椿館に入ると晃長は、たちまち絵巻の世界へ融合してしまって、ときに自分が絵巻のなかの人物になり代ってしまうような、気分になるのだった。
晃長は幼いころから、しばしば椿館を訪れていたが、とくに晃長が好んだのは、源平合戦絵巻の襖絵だった。そこに展開される平家物語や、義経伝説の世界は晃長を魅了し、鎧兜に身をかためた美々しい絵巻物の主人公に、晃長は変身したいと願うのだった。
端午の節句に、義経の若武者姿の絵をもらったときなど、晃長は驚喜した。
絹地に描かれたその絵を持って、
「わしは義経じゃ、義経じゃ」
と叫んで、館のなかを走りまわったことがあった。
だから、晃長にとって、合戦絵巻の襖絵の部屋へ入っていくことは、時が数百年さかのぼり、自分が源平合戦へ参加することだった。その部屋へ入れば、晃長は瞬時にして英雄になり、悲運の平家の公達に変身できるのだった。

萩の方が死んでからというもの、病身の頼之は急速に衰えをみせていたが、最近では、
(国主の座をはやく晃長にゆずって、そろそろ隠居したい)
と洩らすようになっていた。
そんなある日、頼之は、自分の死が近いと予感したのか、ひそかに家老の定国を枕許によんで、
「わしに万が一のことがあったら、晃長のことをよろしく頼む。晃長は軟弱で、国主にはむいていない、不幸な子だ。わしはいつも、そのことが気がかりなのじゃ。そちに頼むしかない。晃長が国主になったら、よろしく晃長を助けて、深山の国を護ってくれ」
と、頭を下げるという一幕があった。それに対して定国は、胸のうちの陰謀などおくびにも出さず、
「ご安心くだされ、兄上殿、それは十分心得ております。兄上にたいする忠誠を、そのまま晃長どのにたいする忠誠として、心からお仕えいたします。そんなことよりも、兄上は大切なお身体、じゅうぶん静養して、一日もはやく元気になってくださりませ」
腹のなかでは、ぺろりと赤い舌を出しながら、そう答えた。
そんなことがあったためか、晃長への、国主になるための教育が、一段ときびしくなり、国主の座にすわる日が、一日一日と、近づいているのを、晃長は肌に感じた。
だが、晃長にはまったく国主になる気がないのだった。
晃長の心のうちを、はっきり言えば、
(わしは国主などに、なりたくない)
というのが本心であった。
晃長は幼少のころから、萩の方から、
「そなたは大きくなったらお父上のあとを継いで、この深山の国を治めるのですよ」
と言われつづけて、育ってきた。萩の方が死に、笛川が晃長の面倒をみるようになってからも、笛川から、
「若君は、つぎの国主になられる、大切なお方です」
と言われてきた。そのたびに晃長は、
(長男に生れたというだけで、なぜ、父のあとを継いで、国主にならなければならないのか)
と悩むのだった。
晃長の眼に映る国主としての父の仕事は、形式的で、退屈で、晃長には面白いとは思えなかった。毎日毎日が無味乾燥で、気がつまりそうだった。国主になって、あんな仕事を一生涯つづけていかなくてはならないのだと思うと、晃長の繊細な神経は、恐怖におののくのだった。
しかし、それなら、
(何に、なりたいのだ)
と、言われても、それは、はっきりとはわからなかった。強いて言えば、
(国主でない、なにかだ)

とでも言うほかは、言いようがなかった。
しかし、晃長が青年になるにつれて、その何かが、築城と、能楽だということが、はっきりしてきたのだった。それなら、国主の座を捨てて、築城と、能楽に没頭すればいいではないか。
（だが、それが出来ない）
そこに晃長の悩みがあるのだった。
（自分がもし国主にならなければ、代わって、弟の寿丸が国主になるだろう）
それが晃長には許せないのだった。晃長の自尊心が許さないのである。とすれば、自分が国主になるしかない。だが、国主になれば、築城や能楽にうつつを抜かしているわけにはいかなくなる。その矛盾のはざまで、晃長の心は、ゆれ動くのである。
そんな晃長の耳に、ある日、笛川がささやいた。
「城を造るには、金がかかります」
女の現実的な言葉に晃長はおどろいたが、事実はその通りだった。金がなくては、何もできない。
「権力の座につかなければ、金は握れません。若君がいくら城づくりを熱望しても、権力がなくては、できません。城をつくりたいと思ったら、国主になることです」
笛川はそう言うのだった。それは、たしかにもっともである。
それ動く晃長の心のうちを、あからさまに分析してみれば、
（国主になって、権力と金は握りたいが、国主としての任務はやりたくない）
ということである。
そんな矛盾に悩む晃長を、時は押し流していった。

（九）

その年の秋にあると、水清寺頼之の容態が急変した。
とつぜん高熱が起り、食事も、水さえも喉を通らず、頼之はほとんど脱水症状を呈して、死亡したのである。異常な死にかたであった。
医師がかけつけて、あらゆる手を打ったが、効果はなかった。原因は不明であった。
あまりにその症状が、とつぜんで、異常であったので、これはなにかの祟りか、何者かの手による毒殺ではあるまいかという、うわさが流れた。しかし、毒殺といっても、死体にそのような反応はなく、また、頼之の身辺に怪しい人影を見た者は、誰もいなかった。
ただ、頼之が倒れたとき、その寝床から、一匹のサソリヘビがくねくねと長い胴体を動かしながら、庭のほうへ逃れていくのを、一人の腰元が見たということであった。
こうして晃長は、半ばおそれ、半ば期待していた国主

の座に、十九歳という若さで就いたのであった。
そのときの記念に、晃長は絵師に命じて、肖像画を描かせた。浮御堂のなかに現存する肖像画のなかの、二枚目がそうである。
晃長は国主になると、ただちに、頼之の二人の側室を追放した。鶴の前と、寿丸の母である亀の前である。生前の萩の方を、
（わらわを苦しめる、二人の女狐）
と、萩の方を自殺に追いやった側室たちである。
軟弱で、政治力、決断力に劣るといわれていた晃長の電光石火の処分に、人々はおどろいた。晃長は表面は軟弱にみるえが、ほんとうは、そうではないのではないかと、人々ははじめて晃長を恐れた。が、それは晃長の背後で、笛川が動いていたからであった。
（二匹の女狐を、ただちに追放なされませ。そうでなくては、深山城に禍を残します）
笛川が晃長の耳にささやいた。晃長はその忠告にしたがっただけである。
笛川が晃長の耳に吹きこんだ忠告が、もうひとつあった。それは、
（あの磯貝小十郎めも、早急に処罰なされませ。そうでなくては、示しがつきませぬ）
これは笛川の言をまつまでもなく、とうぜん、晃長も考えていたことだった。磯貝小十郎は、晃長の教育係という地位にありながら、
（若君は、深山の国主としては落第だ）
と、建白書で晃長を糾弾した人物である。生かしておくわけにはいかなかった。小十郎の背後で定国の黒い手が動いていることなど、もちろん晃長は知りはしない。
国主になるための、わずらわしい儀式や、手続きが終わると、晃長はただちに、
（磯貝小十郎に切腹を命ず）
という指令を出した。切腹というきびしい指示に、家臣たちは、新しい国主に、ひやりと肌寒いものを感じた。
切腹の理由は、
（磯貝小十郎、不届きの行いこれにあるにつき……）
とあるだけで、具体的な内容はなかったが、小十郎は従容として死についた。
さて、問題の人物が一人残っていた。それは、弟の寿丸であった。
寿丸の母である亀の前は追放することができたけれども、寿丸までは追放することができなかった。
すると、ある日、笛川がふたたび晃長の耳にあることをささやいた。それは、晃長が考えてみたこともない、恐ろしい、寿丸への罠だった。
晃長が国主になったのを機会に、笛川は古鏡に、晃長の将来を占ったのである。笛川は身をきよめ、白装束に着がえて、

かけまくもかしこし大神の
大神のみ前に……
古鏡に祈ると、いつものように霧にかすんだなかから、白い形が現われた。白い影はやがて城の形に結晶し、その上に晃長の顔が重なってきた。これは晃長が国主になったのだから、当然の像である。
だが、とつぜん、晃長の像がくずれて、暗転したかと思うと、寿丸の顔に変った。そして、その上に、なんと染の井の顔が重なって映ったではないか。これは由々しき一大事である。
（許しがたき予兆）
といわねばならぬ。寿丸を国主にしようとする陰謀が、家老の妻、染の井の手によって進められていることを古鏡は告げている。
（あの、女狐め！）
笛川は、驚愕と、怒りにかられた。笛川はただちに晃長の耳へ、
「古鏡のお告げによりますと、寿丸さまは、将来、深山城のわざわいとなりましょう。ただちに幽閉してしわねばなりませぬ」
と吹きこんだのである。
古鏡のお告げということで、晃長はただちにそれを信じた。だが、同時にそれは、晃長自身も、警戒していたことであった。
晃長よりも寿丸の方が、利発で、武術にもすぐれ、国主としての資質を持っていることは、晃長自身も知っていた。晃長よりも、寿丸のほうが、父頼之のお気に入りだった。
（わしは愛されていない。愛されているのは弟だ）
晃長はいつも劣等感を持っていた。
（父が死んだら、ひょっとして、国主になるのは、弟なのではあるまいか）
という妄想に、晃長はたえず悩まされつづけたのである。だから、寿丸にたいしては、弟というよりも、敵という意識のほうが強いのだった。
そうした悩みの蓄積があるだけに、古鏡のお告げは、晃長の心をすぐに反応させた。
しばらくすると、深山城内に、寿丸がとつぜん発狂したという噂が流れた。そして、発狂を理由に、寿丸は地下の石牢へ幽閉されてしまったのである。
（つづく）

編集室のメモ

◆中華航空機事故の報道の際、解説者によってクリティカルイレブンという言葉を教えられた。離陸三分、着陸八分のもっとも危険を伴う時間が合わせて十一分であるという意味のものだ。そして離陸より着陸が難しいという説明であった。これはまさにわれわれ小説書きの場合にもそのまま当てはまるように思う。エピローグがあってプロローグに到達する過程はこれによく似ている。文章を綴る苦験の中で、もっとも心砕くのはその首尾である。着想起筆を離陸とすれば擱筆は着陸に相当する。そして離陸よりも着陸が難しいとするいわれは小説の場合にピッタリ当てはまる。作品の成功か否かは、大方のところ着陸の巧拙により決まると言ってよいであろう。

◆新潮社の「波」五月号の記事だったが、小田富弥という挿絵画家が「白に黒襟の紋付の下に赤い長襦袢を着せる」という独創的な着流し姿を創作し丹下左膳を凄味ただよう怪剣士に描き、読者の圧倒的支持を得るにいたり、脇役に過ぎなかった左膳がいつの間にか林不忘作品「新版大岡政談」の表看板になったというエピソードが伝えられているのに興味をひかれた。そしてまた、「縞の合羽に三度笠」という渡世人の姿を定着させたのも小田の功績だというのだ。挿絵画家なるものがあって、大衆文学とあいまつ黄金時代を現出した頃の話だ。（お）

「まんじ」　第五十三号
平成六年八月一日発行（非売）
編集　大和禎人
発行　柴田富佐子
〒一〇一　東京・千代田区神田駿河台二―九　柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」
印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一―六―四
☎　〇三（三二六一）一六一〇

目次

きもないさん……鈴木昭三　1
かまぼこ……柴田富佐子　8
患者輸送……井上二三男　12
漢詩　潮哮録（三）……鯨遊海　18
詩　「吊り革」をめぐる詩……青木昭成　23
流転……伊澤敏久　27
ミニ・カツラクロウ伝……大和禎人　36
【連載】
幻妖城異聞（三）……三戸岡道夫　52
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代（四）……金子正義　70
佐々木一郎追悼特集……80
「人と作品に寄せて」
青木昭成・井上二三男・入田昭一・
大和禎人・金子正義・柴田富佐子・
三戸岡道夫・山根三枝子
編集子のメモ……94
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

きもないさん

鈴木昭三

小田郷村亀島地区の婦人会は、他地区の希望者を募って、やっとバス一台を仕立て、二泊三日の関西旅行に今朝でかけました。

川村平三の妻、智代子は、昨夜床についたのは十二時を廻わっていた筈なのに、四時には起きだし、新調の服で、鏡の前に立つと、短い首を無理にひねって、後姿を確めたり、マフラーを横で結び前でほどき、そうかと思うと、狭い室内でしなを作り歩く姿を映したりしているさまは、まるでパントマイムだと、平三は、掛布団の襟越しに盗み見していました。意外な妻の側面を知って、笑いがこみ上げましたが、声にはならない別の不安が心をよぎりました。

平三は、ここ一か月ばかり、咽に痛みを感じ、思い切って隣り町の開業医の診察を受けてみました。内心恐れていたがんではなくて、奈良の石ノ上神宮の七支刀を、小さくしたような魚の小骨がささっていました。ほっとした安堵に、遂いじょう舌になってしまい、前の夜も酔ったまま寝てしまい、今朝も二日酔いで、食事をしてない事までしゃべってしまいました。医師は表情をこわばらせました。

「胃カメラの経験は」

「ありません」

「じゃあ、丁度いい。胃はからっぽだし、やりましょう」

医師の強引さにつられて、なんとなく納得して、げいげい、苦しみながら検診を受けました。米粒程の胃潰瘍がみつかり、摘出したピースを念の為、精密検査に出しておくから二週間後に、もう一度くる様にと言われているのです。その結果を聞きに行くことが、目下の心の重荷です。

出発を前にして、子供のように浮かれてる妻に、内心の臆病を悟られまいと、布團を引っぱって顔をうめまし

た。

「呑んでもええけど、火だけは気をつけておくんなよ」

狸寝入りを承知のように、平三に一声のこして、妻は裏の勝手口の外に屯していた仲間と合流したらしく、その賑やかさは、夜明けのしじまを破る小鳥の群の囀りに似ています。そのざわめきも、次第に遠ざかり、不安に交錯して又、妻からの開放感も心地よく、眠ってしまいました。

玄関のガラス戸をたたく音にまじって、男の声が聞えます。枕もとをまさぐると、時計は十時を過ぎていました。窓のカーテンの合はさりめが、隙間風に逆V字にひろがり、ガラス越しの隣りの柿の若葉の、一枚、一枚がゆらいで気ままに小さな鏡となって、日光を反射し、寝おきまなこの平三には、痛い程のまぶしさです。男の声は、平三の名を呼んでいます。

「平ちゃ、平ちゃ、書留、書留、はんこ、はんこ」

郵便配達の声は、山ノ下です。カーテンがしめてあり、鍵のかかった表戸を、たたきつづけているところをみると、どうやら、平三は最初の呼び声か、たたく音で、無意識の中に返事をしてしまったようです。Tシャツとステテコ姿で、山ノ下のくり返す声に合はせて、小声で返事をしながら、土間におり、カーテンを拂いのけて、鍵棒を抜きました。山ノ下の白いヘルメットと、同時に、飯のすえた口臭が、平三の胸のあたりに飛び込んできました。とたんに収縮した胃袋からの吐息が、唇をふるわせました。

「はんこ、はんこ」

山ノ下は印鑑をもぎとると、その臭い息を、「はああ」と声にして吹きかけ附箋に捺印しました。封筒を手渡すと、ヘルメットを片手でのけぞらすと、いたずらっぽい笑顔があらわれました。

「臭いなあ、二日酔いづら」

自分の臭いのも気づかずに、続けました。

「今朝は、静かなもんだぜ、亀島のばばあ共は、一人もいやへんで」

笑顔のまま、バイクは走り去りました。山ノ下のばばあも、バスで行きました。山ノ下は、平三とは小学校が同級で、少年戦車兵が夢でしたが、身長が足りず、村の郵便局に勤め、最近停年を迎えましたが、今も臨時職員で配達業務にたずさわっているのです。晩婚で恋愛の相手の春枝さんは、中学校の元教員で、平三の妻の智代子と女学校迄同級生でしたから、この夫婦とは、村でも特別平三達とは昵懇の間がらです。

何やら含らんだ封筒を片手に握って、眠りすぎのにごった頭に活を入れるように、両手をあげて大あくびをしながら、戸外に出てみました。日向臭い季節風の出るには未だ間があるらしくて、地上一米程の所に浮かんだまま、バイクが残していった青い縞模様の排気の香りが、

快い口直しになりました。

往還に面した庭石に腰をおろしました。日射しがあれば、平三は相当こまかい文字も讀めます。朝露の名残りの冷気と湿気は、ステテコ越しの肌の温くもりを奪い、その上、石の凹凸が、ちくちくと尻を突き、まるで素裸で石に接している感覚です。それを我慢させたのは、封筒の差出人の女名前でした。淡黄色の和紙の封筒は、下端にマッチ箱でも入っていそうな含らみで、宛名も差出人の東京深川の甲賀まゆみの文字も、うす墨の柔わらかな書体でした。

深川の甲賀と言えば、昔の海軍航空隊の分隊士で、戦後、木場で家業の木材会社の社長をしている甲賀武のゆかりの婦人だろうと考えました。鋏みをとりに家に戻るのが億劫で、指先でちぎろうとしましたが紙質がよくて、仲々力が要り、思わず巾広く破って便箋まで傷つけてしまいました。封筒を掌の上で逆にして振ると、淡茶に白抜きの卦線の便箋八枚と、多岐利神社とかろうじて判讀出来るお守り袋があらわれました。驚きました。多岐利神社とは、通称、おたぎりさんで、平三達の村の氏神です。便箋を石に置き、不気味さと不審さで、恐る恐る手にすると、矩形の袋の四隅は擦り切れ、中身のお札の木の角が出ています。恐らく袋の素地の色であったろう紫色が、織りの重なった部分にだけ、かすかに残っていましたが、全体的には、処々茶色のしみのついた汚れたう

す黄色で、織りの荒い綾錦の袋です。裏返すと、縦に走る縫い目もほつれて、やっと袋の態をなしている状態でした。

広げた便箋には、時候の挨拶の後、夫甲賀武が、昨秋兼ねてより恐れていた白血病で亡くなったとありました。この事は、予科練甲十四期の分隊会から知らせがありました。平三がいた予科練での分隊士は、殆どが、大学出身の予備学生の士官でした。大相撲の出羽の海親方の息子さんの、山野辺行也少尉、戦後、筑波大学教授になられて、芭蕉、蕉村研究でY文学賞をおとりになった尾形仂中尉等。予科練最後の分隊士が、拓大出身の甲賀武少尉でした。甲賀分隊士は、昭和二十年五月、福知山の由良川沿いにあった紫電基地から、突然の命令で本隊の大津の滋賀空へ、十余人の予科練習生を率いて、特攻切込要員として転勤して平三達とわかれました。

本日、突然お送りさせて頂きましたお守袋は、夫、武の海軍関係の遺品の中からみつかった三つの中の一つでございます。富岡八幡宮は武の氏神様でございます。又明治神宮は、娘時代の私が彼に贈った記憶がございます。

さて、多岐利神社、初めて目にした変わったお名前のお守りで、親戚や知人にそれとなく尋ねても知らない方ばかりでございました。思い余って氏神様の富岡八幡宮の神官にお教えを乞いましたが、御本でお調べ下さって、

九州の宗像神社の御関係の姫神様とはわかりましたが神社の存在は皆目見当がつかずじまいでございました。わからないと余けいに気になるものでございます。三つのお守りの中では特別に袋の痛みがひどい様子でしたのでそれなりに意味がありはしないかと、もったいない事でございますが、袋の紐を抜いて中を改めさせて頂きました。焼印の木のお札の他に、とんでもない、恐ろしいものが現れたのでございます。油桐紙と思はれます六糎位いの筒状の物を、何気なく日本鋏の先で切り開きました。中から、丈夫な和紙の妻楊枝位の小よりが現はれ、かすかに墨の文字らしいものが透けていました。恐る恐る、ゆっくりと、巻きを戻すと、三糎から二糎位いの、かなりの量の縮れ毛が互いにからみ合ってこよりに板状にはりついて、私の吐く息に、生き物のように、うちふるえるではございませんか。私は悲鳴をあげてしまいました。暫くして気をとり直して、こよりの細い文字を讀みました。

州地郡　小田郷村　宮本智代子　昭和三年八月二十六生

私は、呪いにかかったような恐怖と気味悪さに、体の震えがとまりませんでした。

捨ててしまおうと思いましたが、とっさに捨てる場所が思いつきません。物が物だけにあとのたたりが怖くなりました。信じていた武がかような物を所持していた事に、嫉妬以上に不潔な感じもいたしました。暫くして又、当時のあの過酷な時代背景の中で、これが武の身辺に存在した理由とか、必然性等があったのかも知れないと考え直したりしました。

若い十六、七才の予科練達で編成された切込特攻隊が、徴発した漁船に乗り込み、日本海で米機に撃沈され、多くの戦死者の中で、武は幸運にも負傷漂流中を、陸軍暁部隊に救助され、陸軍のトラックで、中国山地を横断し、原爆二日後の八月八日の広島市内を、本部を探し廻った陸軍のトラックで、二次放射能をあび、終戦を岡山の假病院で迎えたわけですがこの数奇な運命を共にしたのだと考えますと、多岐利神社のお守りだけを差別するのはよくないと感じ、私と同じ昭和三年生れの宮本智代子さんを、極力、探し出そうときめました。毛髪も再びこよりに巻き込み油桐紙に包み、セロテープで元の形にしてお守り袋に納めました。

夫は生前、タプロイド版の月刊新聞、「海朋」を講読いたしておりました。一週間前、偶然古新聞の整理中、本年の新年号の各県別の海朋会員の賀正の挨拶欄にあのお守りの宮本智代子さんと同じ州地郡の川村様の御尊名を発見し、而も軍歴の項に、甲飛十四滋賀空となっておりまして、びっくりいたしました。夫の遺品の中から滋賀空の分隊員名簿を持ち出して調べましたら、宮本さんと川村様は同じ村でした。早速川村様に御連絡させて頂く事にいたしました。宮本智代子さんの御消息お分りでしたら例のお守り、御迷惑は重々の覚悟の上、よしなに御処分願いたく存じます。おついでの御折りがございましたらば、宮本さんと武との関係をお知らせ下されば私の心の重荷も晴れると存じます。

驚いたのは、甲賀あゆみどころか、この川村平三であります。全然知らなかった妻の毛髪が、五十年ぶりに、亭主のもとに送り返されきたのです。平三は甲賀まゆみの手紙の文面の、「かなりの量の縮れ毛が互いにからみ合って」の部分に妙に素直に受けとれない、納得のいかないものが、残りました。

家に戻ると平三は、倉の二階にある長持ちの蓋をとりました。この箱の中には、昭和三十五年まで生きた平三の母親が律気な人柄で、古い手紙類、学用品等が、使用した人の名の絵符をつけて、うこん木綿の風呂敷に、誰が見てもわかる様に納めてありました。例えば、平三の父親、正平は生来の筆まめで、思いつくままに書き留めてあった日記や感想文等の雑文を、こよりでとじて、五六冊にまとめて、母親の筆で、村内一目瞭然帳、其の一、等と表紙を作ってありました。平三はそれらの包みの中から、「海軍、（平三）」の絵符のついたのを探し出して、母家の明るい廊下に坐りこみました。風呂敷包みをほどくと、東郷元帥や、乃木大将の肖像切手のついたハガキや、封書や、朱文字の軍事郵便等の判のあるものなどが数十通出てきました。それらの下の底の方に目ざす、黒ずんだ朱色の絹布の巾着が、何十年ぶりかで平三の手にふれました。

「そうだ、これが、おたぎりさんのお守りだ」

平三は掌でそれをはさんで目をとじました。

昭和十九年三月二十九日の朝、東海道線の通る町まで平三を送ってくれる村の材木店のオート三輪車を待たせて、平三の母と、おたぎりさんの神官の妻君で産婆の山向井若女が、口々に叫びました。

「間にあって、よかった、よかった」

学生服の上に日の丸のたすきをかけて、オート三輪車の荷台に立っていた平三を二人の女は、無理に地上におろすと、勝手に上衣のボタンを三つ程はずしました。衆目にさらされてはずかしがる平三の首から、この朱色の巾着を、二人のざらざらに荒れた掌が、代わる代わる、シャツと膚の間に押し込みました。

「ええか、平三、どんなことがあっても、これを身から離すなよ。絶対にだぞ」

「わかった、わかった、人が見てるじゃんか」

若女と母は大仰に手をとりあって涙を流していました。

入隊してから、この巾着の中には、おたぎりさんのお守りが、三つ入っている事を知っていましたが、中身は全く知りませんでした。

昭和二十年五月のある朝、その一粒、一粒が、縦に降り、横に流れる丹波特有の濃い霧の中、山陰線の石原駅の、土のぬかるむホームで、平三は、胸の巾着の中から、お守りの一つを甲賀分隊士に贈りました。

「餞別です」

「靖国神社で会おう」

甲賀少尉は当時の流行語で、飛行兵長の平三に挙手の礼をしました。

平三は、その時のお守りが、宮本智代子のだったと、今はじめて、理解できました。

日がさし込み、風もでてきましたので、庭に面した廊下のガラス戸をしめました。白カバーの座布団の上に、宮本智代子の油桐紙を置き、暫く眺めていると、不思議なことに、ふとした不注意で親が子に苦労をかけてしまった様な慙愧の念にかられて、思わず合掌してしまいました。甲賀まゆみの手紙の通りの苦痛を味わって帰ってきたのです。日本帝国の末路を而も原爆の洗礼迄受けて体験してきたのです。平三は甲賀まゆみのしたセロテープを鋏みで切り開き、手紙通りの和紙のこよりを広げました。眞黒とは言えぬ、茶がかった太い縮れ毛が、互いにからみ合って、一つのコロニーをなして、平三の吐息に、一斉におののきます。

「これは違う。智代子のじゃあない。言うなれば、迷い子、いや、それは酷だ、もっとやさしく、養女のお帰りだ」

巾着からとりだした他のお守りにも、矢張り夫々に油桐紙が入っていました。

州地郡春桐村、染葉良子、昭和二年四月五日生、毛髪五本、黒く光沢あり、縮れと言うより大きく湾曲す。

州地郡駒野村　山上秋代、昭和二年十月十二日生、毛髪約十本、直毛、光沢なし

染葉良子、山上秋代の二人は平三にとっては全く未知の女性です。

平三は茶目気を出して虫眼鏡で、丁寧に観察してみました。染葉と山上のは、毛の片端に、かすかに固りに似た白い点が附着しています。無理に抜いた証拠の毛根でしょうか。数の少なさもそれを物語っているようです。宮本のそれは、毛根らしき所はなく鋭利な、かみそりか鋏の切口のせいか、片端の太さも一定していません。

その夜、晩酌をやりながら、宮本智代子は甲賀武を守りましたが、染葉と山上はいつ平三を守ってくれたのだろうかと、海軍にいた一年四か月の歳月の中から見い出そうとつとめました。多分この時かなと思はれる事が、二回ありました。

其の一。

昭和二十年五月某日、滋賀空の病舎から回復して福知山基地に転勤して来た兵員のトラック輸送に、要員としてかり出された平三は、トラックの荷台の最後尾の縁にしがみついておりました。山陰線の石原駅を北上して、由良川の作った段丘を東に折れて、竣工したばかりの、マカダム式の滑走路を横断し、由良川の橋を渡って、殆んど直角に右に曲がったトラックの右前輪が、道路からはずれ、車体が路面に激突しました。平三達五人は、その反動で道路へ宙を舞って、たたきつけられました。トラックは、三十米下の由良川に横転しながら、渕に沈み、乗車していた者の大半の十数名の死傷者が出ました。運転台の助手席にいた引率者の鴨頭少尉は意識不明の重態でした。平三達五人は、かすり傷程度ですみました。

其の二

同じく二十年六月の末、この日台風がやってきて、雨雲が低くたれ込めていましたが、朝から空襲警報が発令されていました。昼の課業整列で、分隊長が訓示をしている最中、突如雲間から、超低空のグラマンが一機、平三達の隊列をめがけて機銃掃射をしました。グラマンの操縦士は、風防ガラスをあけ、サングラスの顔は、笑って開いた口から白い歯がのぞいて見えました。隊列は乱れ、グラマンの反転して又襲撃してくる数秒間の中に、五十米離れた桑畑に全力でかけ込みました。再び爆音が、物体の様に平三の全身をたたきつけ、炸裂する銃弾の列が、老木の桑をさきました。泥まみれの平三の顔を見て、並んで伏せていた中年の整備兵が笑ったまま、声がとまりました。背後から撃ち抜かれて、内臓が黒土を朱に染めて流れ出ました。平三のいた畝の中で無傷だったのは、平三・一人だけでした。

こじつければ、二回の死地を、染葉良子と、山上秋代が夫々守ってくれたのかも知れません。

平三はその夜、父の書いた村内一目瞭然帳を倉から持ち出しました。

（未完）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切）

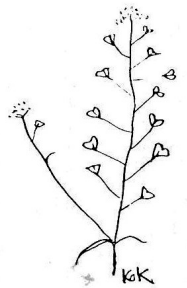
春季号……二月一日　十二月三十一日

夏季号……五月一日　三月三十一日

秋季号……八月一日　六月　三十日

冬季号……十一月一日　九月　三十日

季刊発行を確守するため、右のように定めております。



かまぼこ

柴田富佐子

その一寸した騒動は、夕方にかかって来た松井の電話から始った。

「しげちゃんいない。おかしいなあ、まだ来ないんだ。何か連絡なかった」

電話のバックには、あの駅独特の案内アナウンスが流れていた。

松井は夫のごく親しい同僚である。

「今、どこ、東京駅ですか」

私はわざとそう聞いた。

「そう、もうみんな揃っているのに、しげちゃんだけ来ないんだよ」

ほんの三十分ほど前に、夫から、急に宿直を代らなきゃならなくなった、という電話を受けたばかりである。

この時間から東京駅を出るのでは、行先はせいぜい熱海か箱根あたりだろう。松井の話の様子では、夫は女と二人連れというのでもないのに、どうして、宿直だ、などと嘘をついたのだろう。松井達と急に温泉に行く事になった、と言われても、私は、あ、そう、としか言いはしない。却って夕飯の手抜きが出来て、助かった、と思う位の事が、どうして夫には判らないのだろう。わざわざ嘘の電話をして来た夫の行為が、私にはどうにも許せなかった。

結婚以来ずっと、仕事と、少しばかりの父親の役目を果たしてくれさえすれば、私は夫の行動に一切口を挟まずに来た。その代り、家事と育児さえきちんと果たしていれば、後の時間はどう使おうと、私は勝手にやって来た。話し合って決めた事ではないが、それでずっと支障なくやって来た積りだったが、それは私の一人合点に過ぎなかったのだろうか。

東京駅で松井に会えば、夫は私についた嘘がバレたのを知るだろう。温泉に入っていても、酒を飲んでいても、多少は心にひっかかるものがあるだろう。その位の良心は、まだ夫にも残っている筈だと思った。

何であんな、つかなくてもいい嘘をついたのか、私の考え及ばない何があるというのだろう。

子供達を寝かしつけ、片付けも終わった深夜の茶の間で、私は永い間頬杖をついていた。

翌日は日曜だったので、小学生の娘達も家にいた。遅い昼食を食べている時、門の戸が開く音がし、居間のガラス戸越しに門の戸を閉める夫の後姿が見えた。咄嗟に私は走って玄関に行き、ドアの鍵をかけ チェーンをかけ、居間のガラス戸に鍵がかかっているのを確かめた。夫は玄関のドアを何度か引いたり押したりしていたが、鍵を出して開けた。勢いよく引いたドアの上で、チェーンの引張られる激しい音がした。

「開けてよ」

僅かに開いた空間に顔を寄せて夫が言った。

私は無視して食事を続けた。

又、夫の声がした。上の娘が腰を浮かした。私は娘に首を横に振ってみせた。娘は落着かない様子で立ったまま私を見、ドアの陰の夫を見た。いいから座っていなさい、と私は目で娘を押えつけた。俯向いて娘は腰を下した。夫は居間のガラス戸の前に移って来て、指先でコツコツとガラス戸を叩き続けた。

下の娘が椅子を引いた。又私は首を横に振った。今にも泣き出しそうな表情で娘は私を見、夫を見た。

「マアチャン、マアチャン」

夫は二才を過ぎたばかりの息子の名を呼んだ。それまでガラス戸に背を向けた椅子の上で、好物の梨を両手に挟んで食べていた息子が、「パパ」と呼ぶや、梨をテーブルに放り投げ、椅子から滑り下りてガラス戸の方へもたついた足取りで駆けて行った。息子はガラス戸の向こうの夫に、「パパ、パパ、パパ」と呼びかけながら、小さな両の手でガラス戸を叩いた。その息子の姿に、私は一瞬鍵を開けようか、と迷ったが、初めてつかれた嘘をそう簡単に許してはいけない、と思い直した。娘達は、自分が叱られたように、顔も挙げずに箸を動かしていたが、私にとっても、それは辛い時間だった。

この後の処置を、どうとっていいのか判らなかった。子供達の手前、渋々ながらドアを開けるしかないか、そう決めかけて顔を挙げたら、ガラス戸の向うに夫の姿はなかった。

「パパ、パパ」と言いながらまだガラス戸を叩いている息子を抱きあげて、梨を持たせ椅子に座らせた。

「さあ、早く食べて片付けましょ」

娘達をせかせて食器を片付け終っても、夫は戻って来なかった。娘達は二階の子供部屋へ上り、私は息子を床に座らせて玩具で遊ばせながら夫の行先をあれこれ考え

た。

チェーンまでかける事はなかった。ドアの鍵をかけた事で、一応私は嘘に対する怒りを表明したのだから、後は二人きりになった時に嘘の根拠を問い正せば済む事だったのではないか。私の膝に寄りかかって、いつか寝入ってしまった息子の髪を撫ぜながら、しきりに起ってくる後悔を私は持て余していた。

門の戸が開いた。

入って来たのは、私の母であった。その後ろに夫がいる。

「こんにちは、開けて」

母の場違いに明るい声が、玄関のドアを打った。私は息子をソファに寝かせ、急いで玄関に出た。母は入って来るなり、

「いい年して、何やってんの」

と私の肩を叩いた。

「だって、嘘つくんだもの」

母の後ろから神妙な顔で入って来る夫に聞こえるように私は言った。

「まあ、まあ、とく角、お茶一杯頂戴」

さっきまで娘達が座っていた椅子の一つを引いて母は腰を下し、もう一つを夫に勧めた。仏頂面で私は茶をいれ、母と夫の前に置いた。

「嘘、嘘って言うけど、茂夫さんはあんたに言いにくかっただけなのよ」

「松井さん達と熱海へ行くのが、どうしてそんなに言いにくいの、行っちゃいけないなんて、私は絶対に言わないわよ」

母は、又まあ、まあ、と右手で私の言葉を押し戻した。

「ここ一週間ほど、何とかさんていう人を泊めてたんでしょ。それで余分な世話をかけた上に、熱海でストリップを見る会に誘われたから行くなんて、言えなかったんだって、ね、茂夫さん」

「ストリップ」

私は思わず大きな声を出した。

「それこそいい年をして、あきれた」

「ほら、そう言うだろう。だから言いにくくなっちゃうのよ、ねえ茂夫さん」

夫は二日前までの一週間、戸田というライターを家に泊めていた。彼は結構いい腕はもっていたが、生来ののんびり屋というか、怠け者というか、期限に間に合わない事が度重って、仕事が段々来なくなった。

噂では、生活のために、近所の町工場で慣れない機械仕事をしているという。そんな戸田を憐れんで、夫は丁度彼向きの仕事を抱えたのをいい機会に、彼を呼び、自宅に泊めて仕事をさせた。

「悪いけど、朝晩だけ食事を出してやってよ。昼は外で食うそうだから」

姑用に空けてある六帖に缶詰になって、彼はラジオドラマを一本書き上げた。私にとって、彼は以前から知っている人だったし、穏やかな人柄なので、特に世話をかけられた、という気はしなかったが、それでも三人の子供の世話の他に、他人の食事を用意し、それなりの気遣いをしなければならないのは、大変といえば大変な事であった。

「やさしい旦那さんを持って、倖せだと思わなきゃ、罰が当たるよ。あんたの父さんなんて、思いやりの一かけらもなかったんだから」

ご馳走さん、と湯呑みを置くと母は立上り、ソファに寝てる息子の頬を二、三度突ついて帰って行った。

夫は母を追いかけて、玄関で何か渡そうとしていた。

「いいのよ。往復タクシーなんて、勿体ない。電車で帰るから」

「ありがとうございました」

夫の声に被せて、私も、ありがとう、と口の中で言った。

母でよかった、と心底思った。一番恐れていた姑の出現でなく、私の母でよかった。すぐ近くに住んでいる姑の所へ行かず、わざわざタクシーで渋谷の母の所まで駆けつけてくれた夫のやさしさが、素直に胸に滲みた。

私の表情から険しさが消えたのだろう。

「参った、参った」

照れ笑いしながら、夫は空の湯呑みを差出した。

「お土産は」

茶を満した湯呑みを手渡しながら私は言った。

「罪滅しに飛び切り上等のかまぼこを二本買って来たんだけど」

「わぁ、凄い、頂戴」

私は右手を出した。その手を夫はピシャリと叩いて言った。

「ない」

「ないって」

「あんなに怒ってるんじゃ、どうせ受取らないだろうと思って、ゴミ箱へ捨てちゃった」

「え、どこのゴミ箱」

「どうすんの」

「拾ってくるわよ」

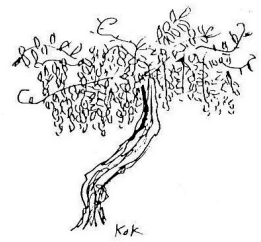
「駄目だよ。渋谷の方のゴミ箱だから」

「バカね、そんないいかまぼこ、勿体ないじゃないの」

「怒るから悪いんだ」

怒らせるから悪いんじゃない、と口から出かかった言葉を私は慌てて飲みこんだ。

よかれと思ってついた嘘が裏目に出て、妻に閉め出され、その母にストリップ見物の経緯を白状しなければならなくなった忌々しさをかまぼこにぶつけたのではないか、とその時気付いたからである。



患者輸送

井上二三男

九月の半ばはその日の気候によって朝などは冷えを感じることがあるのに、日中は、真夏と変わらぬ程暑くて、汗がシャツににじみ出る。

全国的な組織になっている福祉・医療の特殊法人の県支部の事務局長を務める桑原は、支部の創設百年の記念行事の資金獲得のため県内の主要役員を訪問して廻って、暑さと緊張でがっくりと疲労感がしみ出てくるようであった。事務所に帰ると既に終業時刻を回っていた。

桑原が車を降りるのを待ち兼ねていたように、事業課長の金子が玄関に走り出て、桑原と歩みを合わせながら

「局長、大学病院から・・・」

と、囁くように言う。いつも自信がないようにぼそぼそと喋る金子なので、桑原は聞きながら歩みを止めず、そのまま局長室に入り、上着を脱いで、デスクに座り、扇風機の風を受ける。建物は大正十四年建築の鉄筋コンクリート造りで、著名大学教授の設計による当時としては最先端を行く建物であったろう。局長室にはマントルピースが組み込まれているが、冷暖房の設備がない。

「で、大学病院から誰が、・・・」

金子が差し出した二枚の名刺には大学病院の総務課長と職員係長の肩書きがある。大学病院というところはいつも高いところにいて、平素は全く関係がないところだ。何の用か見当もつかない。

身体が蒸されるように暑いが、来客があるのではネクタイをはずす訳にもいかない。

「用件は？」

「それが・・・はっきり言わないので・・・救急車を貸して貰いたいような・・・何か言いずらいことのようで・・・局長が帰るまでといって・・・そう、一時間は待っています」

「じゃあ、こちらへお通しして・・・」

金子が案内してきた二人を応接のコーナーに迎えた桑原は、二人がスーツの内ポケットから名刺入れを出そうとする手を押し止め

「戴いてありますから、どうぞ・・・」

自分の名刺をそれぞれに差出し、ソファを勧める。

「ご用件は・・何か救急車とか？・・・」

「実は・・・」

総務課長の説明では、S市の開業医から回されたアメリカ人が肺炎で、本国に送還することになった。患者を成田空港まで輸送しなければならないが、大学病院には、救急車がないので、市の車を借りようと依頼したところ、市の区域以外への出動はうまくないと断られた。こちらにあると聞いたので救急車をお借りしたい、というのである。

桑原は、おかしい、と直感した。大学病院は総合病院であり、法規の上でも、必要な設備として救急用または患者輸送用の自動車はなくてはならないものとされている。それがないというのはおかしい。単なる肺炎の患者を病院が成田空港まで送るというのも、普通ではない。自動車を貸してくれという話として総務課長がきたのは病院の設備などを総括する責任者として分からないではないが、車を貸してくれという程度の話なら、普通なら係長クラスか担当者の事務的な話だ。何か課長職の者がくる事情があるに違いない。それに、設備などと関係のない職員係長が同行していることも腑に落ちない。

桑原のいる事務所は、医療機関ではないけれども、火山の噴火や地震などの災害には緊急出動することがあるので救急車が配置されている。現に、G県の御巣鷹の尾根の日航機墜落事故の際も率先して出勤している。

総務課長の話を聞きながら、隠された事情があるに相違ないと思った桑原の脳裏に閃いたのは、先年（一九八五年）日本でも患者が認定されたＡＩＤＳのことである。桑原の所属する団体はこの県下に二つの病院を持っているので、桑原の業務も医療に全く無関係というものではなかった。しかし、東京の本部からもそれに関する情報は流されていなかった。桑原のＡＩＤＳに関する知識は、新聞で知る程度のものでしかなかったが、「カリニ原虫による肺炎」という言葉が桑原の記憶の片隅に残っていた。

「肺炎というと・・・カリニ肺炎とか？」

桑原は何気ないように、口に出してみた。

総務課長は一瞬どきっとしたように見えた。そして、言った。

「疑いです」

桑原は、一切が呑み込めた。ＡＩＤＳは一昨年日本で最初の患者が認定されて、新聞に報道されていたが、桑原は、それは都会に住む特定の人間のことで、都会から離れたこの土地で、そのことについて直接自分が見、聞きするなどとは全く考えもしなかったことである。恐ら

く全国的にもその対策はまだ立てられていないのではないかと思う。医療機関としては、治療に最善を尽くすのは当然であるけれども、いかに医療従事者でも、情報不足の状況の下では実際の患者を眼の前にしては、困却するであろうと思う。こんな田舎のどこに誰が住んでいる、誰がどうしたということが知れ渡るような小都市で、ＡＩＤＳ患者発生ということが知れれば、パニックになることは想像に固くない。これは、厳重に隠さなければならないのだろう。大学病院としても、本国送還ということは、当面の対策としては第一順位になるだろう。総務課長という者が出向いてきたのは、そうした事情があって取り扱いを誤らないためのことだと考えられる。「疑いだ」と言うのであるから、疑いの患者として聞いておくよりしようがないだろう。

「で、いつです」

「二十八日です。本人の両親も見えて、航空機はチャーター済みなのです」

「二十八日、五日あとですね」

救急車を貸すについても、背景の事情を考えると、救急業務担当職員に話をつけて後々問題を起こすことがないようにしておかなければならないだろう、と桑原は考えた。事情を知らせることは隠れた事情を知る者の範囲を広げることになり、リスクが大きくなるが、桑原の前任局長の独断専行に職員の強い抵抗があって、桑原の着任時にも強い申し入れがあったのである。職員を信用して納得させておくことが大事だ。

「ご返事は、明日、電話ででも・・・」

桑原の回答に総務課長はまだ硬い表情で

「運転手もつけてお借りしたいのです」

「えっ、運転手も一緒にですか」

「特殊な車だろうと思いますので、私どもの運転手では操作が不慣れで、却って事故でも起こすと・・・」

なるほど、職員係長が同行してきた理由はこれだなと桑原は思った。

医療従事者なら、ともかく、自動車運転を職とする者にとっては、ＡＩＤＳには怖れを抱かざるをえないであろう。大学病院は職員組合の勢力が強いと聞いている。このような特定な疾病の患者輸送については、急なことであるし、恐らく組合側との話し合いがついていないのであろう。患者輸送車がない筈はないし、運転者がいない筈もない。患者輸送に欠けているもの、それは、職員組合の同意なのだ。これが最大の問題だなと、桑原は直感した。

そのような事情は、こちらも同じである。殊に血液による感染が心配される疾病については、全国的に院内感染のひとつとして大きくクローズアップされている。病院側もその緊急な対策が必要とされている現今である。

現に、この夏の始め、梅雨に伴う豪雨によって県内を

南北に走る山間の県道に山崩れがあって、通行中の車が巻き込まれ何人かの死傷者が出たことがあった。たまたま、その車の列の直後に桑原の団体の車があり、救急業務のベテラン看護婦が乗っていた。看護婦はとっさに応急処置に当たったのだが、その際、看護婦は破損した自動車のガラスの破片で手を切り、その切り口に負傷者の血を浴びてしまった。知識があるだけに本人の不安が強く、劇性肝炎などに汚染していたらと、本人は真剣に心配して感染防止の対策を求めてきた。桑原は、病院と連絡を取って、早急な感染防止の手立てをとらせたが、こうした場合の対策はどうあるべきか、費用の負担の問題も含めて、検討したことがある。救護業務に当たることがある職員全体が血液による感染に敏感になっているように見えた。

「局長、二十八日は、総会と表彰式の日ですが・・」

金子が、言う。当日は、県支部の総会と団体への協力功労者の表彰式が文化会館の小ホールを使って行なわれることになっていた。数少ない職員は全員がそれぞれの部署を受け持って、式をこなさなければならないのであった。

「そうか、それは、難しいな」

いずれにしても、明日回答をする、と桑原は答えた。

「では、・・・何分事情が事情ですので、外には・・・」

漏れないようにと言うのであろう。

「分かりました。私どもは、単に、患者輸送の自動車を都合つけられるかどうか、それだけにお聞きしておきます。ただ、関係の役所との連絡については、そちらの責任でしっかりとお願いします」

役所との連絡云々については、「疑い」でなく「真性」であった場合を考えて、蛇足を承知で、付け加えた。

二人は、暗くなりかけた中を帰っていった。

依頼の中身はただ一台の救急自動車を貸して欲しいという単純なものである。本来ならば、大学病院の内部で処理できる些細なことなのに、組合と話がつかないという内部の事情から、平素は全く関係のない他の団体にわざわざ出向いてきて頭を下げる大学病院の総務課長の苦衷を察して桑原は多少の同情を感じていた。そして、大学病院側の要望に応えざるを得ないか、と考えていた。ただ、まかり間違うと桑原の足元から大学病院側が恐れている騒動の種を撒き散らす可能性があるのだ。

翌日、出勤すると早々に、桑原は庶務課長と事業課長を局長室に呼び、昨日の大学病院からの申し入れについて協議した。

庶務課長の斎田は、

「大学病院で車の都合がつかないなんてありっこないですよ。運転手つきで車を貸せ、なんてとんでもない。

第一、二十八日は、総会と表彰式ですよ。知事も出席する重要な行事で絶対人手は欠かせません」

と、強く反対した。このような団体の庶務課長にとってみれば知事が出席するということは重大なことで、会議の進行などに間違いは許されないのである。

「病院の救急車は都合つかないでしょうかね」

金子事業課長の発案で、M市とT市にある傘下の病院に都合つかないか聞いてみることになった。

「ただ、救急車が貸せるかどうか、それだけを聞いてください。問題が広がるとうまくないからね」

しかし、両病院とも救急車は業務の上で放せないという回答であった。

桑原の所で救急自動車が必要になるのは、災害発生時のことなので、災害に関する最近の情報を調べて、災害の予兆がないことを確認した上で、自動車だけを貸すことにした。地元の気象台や県の防災部局から台風や火山に関する情報を聞いて、結局、当日は災害発生の可能性はないと判断した。後に職員の不安を残さないよう、貸与後は徹底した消毒をすることを申し合わせた。

大学病院へは、桑原が直接連絡することになった。

大学病院の総務課長も職員係長も会議室で会議中ということであった。その他の職員ではどの程度、このことを知っているのか分からない。やはり、直接伝えないとならないだろう。

「総務課長さんは手が離せないのですか?」

始めの職員から上席者に電話が渡った。桑原が再度職を名乗り、総務課長に繋げないかと問うと

「あ、それではちょっとお待ちください」

慌てて会議室へ連絡を取る様子が、受話器を通して感じられた。

会議の席から呼び出された総務課長に、運転手は都合がつかないが、救急車はお貸しできる旨を告げた。

「そうですか。今、その件で会議中なので後程また」

会議というのは、恐らく、関係職員団体と話し合いの会議であろう、桑原は、総務課長の声の様子からは、問題は解決に遠いという印象を持った。

「ご連絡をお待ちしています」

相手の希望を百パーセント叶えたわけではないけれども、誠意は尽くした、運転者がいない筈はないのだから後は向こう様の取り組み次第だ、と考えた。

その日は夕刻まで支部の総会と表彰式の会場設営や進行について打ち合わせと確認に追われていた。

終業時刻近くになって、桑原は未決書類の箱に溜まっていた書類を決済していると、予告もなく一人の男が局長室に入ってきた。県の予防保健課長である。桑原が県の職員だったとき顔を合わせているので名乗ることもなかった。退庁時刻にふらりと寄ったという形である。うっかりして、新聞記者にこんな所で顔を合わせて、予防保健課長が何の用でここに?と不審を与えてはならないのだ。新聞記者は人の職と場所から事件性を嗅ぎつける能力を持っている。

「やあ、お掛けください」

桑原は、デスクを離れてソファに腰を埋める。大学病院の総務課長は「疑い」だと言っていたが、予防保健課長がきたということは、「真性」だと考えて間違いないなと考える。大学病院から県には届けが出されており、患者輸送のことについても事情が伝えられているのだろう。予防保健課長は、救急自動車のことがどうなるのか確認にきたに違いない。

「大学病院が、お世話になります」

ソファに掛けながら、ただ一言。予防保健課長は、その大学出身の医者である。

「自動車を、お貸しすると返事してあります」

それ以外、患者のことや病名については二人の間で口にすることはなかった。口にすべきでもなかった。三十分程度世間話をして予防保健課長は帰っていった。

慌ただしい仕事をしていると二、三日は束の間に経過する。桑原は外に出ての折衝も多かった。

明日は二十八日、患者輸送の日の筈だ。今日の終業時刻も迫っている。桑原は大学病院からまだ何の連絡も返事も聞いていない。庶務課長を呼んで、桑原の留守中に大学病院から何か連絡があったか聞いてみた。

「いえ、何も。事業課長の方にもないようです。ことがことだけに局長に直接でないと話せないのかも知れません」

それもあるかな、或いは組合との話し合いが一件落着して安心しきってしまったか、と考えた。桑原は大学病院へのダイヤルを回した。大学病院の交換台から総務課へ、課員から課長にと取り次がれる。

「あ、ご連絡が遅れました。結局、業者の患者輸送車を頼みました」

総務課長のあっけらかんとした返事に、なんだ、そういう業者があったのか、力んで押し込んでいたものが突然外されたようだ。簡単な結末と官僚的な大学病院側の依頼のときの態度と結末報告の態度の落差の大きさに桑原は呆気にとられて、電話機を置いた。

肌は冷たいのに汗がどっと吹き出した。

漢詩

潮哢録（三）

鯨遊海

椿山荘祝宴歓迎菊地幸男新社長　平成六年七月

椿山玉閣幾巡杯
亂舞群螢月下廻
澎湃歡呼搖苑地
待望近日菊花開

韻字・杯廻開

〈椿山荘にて菊地幸男新社長歓迎の祝宴〉

椿山の玉閣いく巡るさかずき
乱舞の群蛍月下をめぐる
ほうはい(注)たる歓呼は苑地をゆるがせ
待望す近日菊花開くを

〔口語訳〕

椿山荘の玉閣に、杯は幾巡りしたことであろうか。
乱れ舞う蛍の群も、月光を浴びて廻っている。
澎湃と湧き上る歓呼の声は御苑をゆるがせて、
待ち望む近いうちに菊が大輪の花を咲かせることを

〔補　足〕

(注)波が湧き上り激しくぶつかり合うさま。

☆椿山に巡るさかずき舞う蛍
　円舞はつきず菊待ち兼ねっ

送別山中淳大兄　平成六年六月

山嶮谷幽風撲衣
天凄地凍雁孤飛
闇中雖望一縷燭
淳朴其燈焉欲微

韻字・衣飛微

〈山中淳大先輩を送別す〉

山けわしく谷くらく風ころもをうつ
天さむく地凍りて雁ひとり飛ぶ
暗中いちるの燭を望むといえど
淳朴(注1)なるその燈　焉んぞ(注2)かすかならんと欲するや

〔口語訳〕

山はけわしくそそり立ち、谷はくらく、風は私のころもを容赦なくうつ。
天は寒く、地は凍って、雁が一羽寂しげに飛んでいる。
暗闇に一筋のあかりが遙かに望えていたけれども、
実のこもった暖かいそのともしびは、どうして遠くかすんで消えようとしているのか。

〔補　足〕

(注1)実のこもった。人情の厚い。飾り気のない。
(注2)疑問・反語。「どうして…であろうか（や）」ここでは疑問。なお音は「えん」で炎＝火の意味。

☆山けわし凍れる闇を往く雁の
　一縷の炎　何処にか消ゆ

送別小川卓三大兄　平成六年六月

管仲交杯鮑叔親
卓論風發幾回春
捧兄今夕一枝柳
明日誰存叱我人

韻字・親春人

〈小川卓三大先輩を送別す〉

管仲(注1)杯を交わして鮑叔(注2)と親しむ
卓(注3)論風発すること幾回の春ぞ
兄に捧ぐ今夕一枝の柳(注4)
明日誰かある（反語＝誰もいない）我を叱する人

〔口語訳〕

管鮑の交わりの如く、貴兄とは親しく杯を交わさせて戴きました。
見識豊かな貴兄の談論は、風の如く発して私を啓蒙し楽しませて下さいましたが、それは一体何年間続いたことでしょう。
今夕、貴兄に柳の一枝を捧げます。
明日から私を叱咤激励して下さる方はもう誰もいないのです。

〔補　足〕

(注1)春秋時代の斉国の宰相。桓公を授け親友の鮑叔と協力して四囲の国を亡ぼし斉と桓公を覇者とした

(注2)前注の管仲とは書生の頃からの親友。互いに理解し許し合って深い信頼と友情で結ばれ、遂に後年大事を成した。ここから極めて仲の良い友人との交際を「管鮑の交わり」と云う。史記・管仲傳。

※杜甫・貧交行「翻手作雲覆手雨　紛紛輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土」

(注3)他に抜きん出て優れていること。

(注4)留と音が同じところから「いつ迄も留まっていて欲しい」の寓意となり、送別に欠かせない植物。別れに際し一枝を折って餞にする風習となった。

当然送別の詩には度々登場する。王維・送元二使安西「渭城朝雨浥輕塵　客舍青青柳色新　勸君更盡一杯酒　西出陽關無故人」

※漢字は一字一音節の言語なのでこの様に寓意する例は多い。仁と人、義と宜、悠と憂等。

(注5)柿本人麻呂・萬葉集「日並しの皇子の命（草壁皇子）の馬並めてみ猟（実は皇位継承の戦争）立たしき　時は來向かう＝遂にその時が來て了った」

☆管鮑の杯交わしつつ幾春秋
　柳枝手向ける　時は來向かう(注5)

〔補　足〕

(注1)赤煉瓦の壁面は東京駅の象徴。白壁の宮城と対峙している。

(注2)旅立つ人にとって柳は欠かせない添景。前句(注2)参照。なお楊は川柳、柳はしだれ柳。

(注3)龍と雲は一体である。韓愈・雑説(一)「龍は氣を吐いて雲を成す。雲は固より靈ならず。然れども龍はこの氣に乘じて靈を為す。…茫洋として玄間を窮め、日月に薄り、光景を伏し、震電を感ぜしめ変化を神にし……龍は雲を得ざれば靈する不能」

(注4)統卒する。指揮する。ひきいる。

☆赤壁の高楼上に龍送る
　皇居の白雲旭日に映ゆ

奉祝人見實徳氏茨城縣副知事就任
　平成六年四月

卿見一隅千里思
徳周所以矣人知
彌登縣令欲揚實
應唄南風之雅詩

韻字・思知詩

祝東海旅客鐵道青柳貞夫部長昇進取締役
東京驛長
　平成六年六月

西望皇宮赤壁城
搖搖楊柳送人迎
雲間樓上青龍列
萬里航行帥一聲

韻字・城迎聲

〈東海旅客鉄道青柳貞夫部長の取締役東京駅長への昇進を祝す〉

西に皇宮を望む　赤壁(注1)の城
ようようたる楊柳は人を送り(注2)且つ迎う
雲間の楼上に青龍(注3)列して
萬里の航行　帥(注4)一声

〔口語訳〕

西方に皇居の宮殿を望む赤煉瓦の城、東京駅。
ゆらゆらと揺れる柳の垂れ下った枝は「さようなら」と人々を見送り、また「ようこそ」と人々を迎えるかのよう。
雲間にあるかと思える高楼の台上には、新幹線のブルーラインも鮮やかな「のぞみ号」が龍のように列をなして、
萬里を航行するのを貴方は、唯一声で指揮しておられる。

〈人見實徳氏の茨城県副知事就任を奉祝す〉

卿　一隅を見て千里を思う(注)
徳あまねくして人々に知らるるゆえんならん
いよいよ県令に登りて實あげんと欲す
まさに「南風の雅詩」(注2)を唄うべし

〔口語訳〕

閣下はあの道元禅師の如く、一隅を見て千里に思いを馳せる方、
徳望が高く広いので、県内の多くの人々は閣下を存じ上げている。
いよいよ副知事に就任され、良い政治の実現を期しておられる。
あの古代、舜帝の時がそうであったように「南風の雅詩」が自ずから唄われるような素晴らしい政治をなさって戴きたい。

〔補　足〕

(注1)曹洞宗の開祖、道元禅師「照一隅思千里」

(注2)十八史略「彈五弦之琴　歌南風之詩」善政の喩え

☆県政の重きを担い歩む背に
　はや湧き出づる南風の雅詩

送別沓澤孟先賢　　平成五年八月

巨星四海久君臨
日拝温顔義欲尋
博學多才非所以
經綸識見之爲深
誰知孟子棲何處
余意詩仙流水心
不問碧山閑居地
願邀明月永杯斟

韻字・臨尋深心斟

〈沓澤孟先賢を送別す〉

巨星四海に君臨すること久しく
日日温顔を拝して義を尋ねんと欲す
博学多才のゆえんにあらず
經綸識見のこれ深きが為なり
誰か知る孟子何処に棲むや(注1)
余おもう詩仙流水の心(注2)
問わず碧山閑居の地(注3)
ねがわくは明月を邀え永しえに杯斟まれんことを

〔口語訳〕

巨星の如き大人物の先生は斯界に久しく君臨され、毎日温顔を拝し道義についてお尋ねしたものです。これは先生が博学多才だからではありません。経綸識見がお深い為であります。誰か孟先生が今何処にお棲いか知っていますか。先生は詩仙李白の流水の如き心境ではと思うのです問いますまい。せっかくの碧山閑居の地を。願わくは、明月をむかえて杯を挙げ酒を斟んで永久に楽しまれんことを。

〔補　足〕

(注1)～(注3)李白・山中問答「問余何意棲碧山　笑而不答　心自閑　桃花流水窅然去　別有天地非人間」

※詩仙は李白の尊称。因に杜甫は詩聖と称される。

☆義を尋ね經綸問わん孟子孟子
何処の山に明月と斟む

《漢詩の常識1》　韻について㈠

漢詩は韻を踏む。韻とは語の響きで、同じ響きの語を句の終りに規則正しく並べること。押韻、脚韻とも云う。近体詩（形式が整ってからの詩。それ以前は古体詩として区別する）の場合五言句では各偶数句に、七言句では起句と各偶数句に踏む。例外として五言でも起句に踏み、七言でも起句に踏まないこともある。この規則は絶句に限らず律詩（八行句）や俳律（十二行句）も同じ。

「吊り革」をめぐる詩

青木昭成

満員

洋服の群　その季節のいろを掻き分けて
やっと　吊り革に手をとおす
わたしは洋服の並びかたに　わたしを合わせ
車両のゆれに　わたしの体位を合わせる
前へかたむくときは　うなじで頭を支え
後ろによろめくときは　のどもとで頭を支える
その制動の拙さをなじる前に　わたしは
はなやかな車内広告に目を移している
かくて　わたしは束の間の「処」を得ているのか
鎮めねばならぬ気分を持ったまま

座席

わたしの見下ろす座席の顔は　すこし
天井を向いたまま目をつむっている
車内のどこにも夢見るようなスペースはない
だがこの顔は夢見ている
車内のだれもが唇を開かねばならぬ理由はない
だがこの顔は開いている
にぶいブレーキの音を鳴らして電車の窓が
駅のホームにならぶ人々の　立ち姿を映し
まだ速いスピードで滑走している
わたしは交代のない座席の　前にまだいる

遮光

高架線は郊外をながれる
家々のふぞろいな屋根の高さを
夕陽が音もなく　射とおすので
わたしは電車のシェードに手をかけ　下ろす
そして　誰にも知られたくない疲労が
自分の背後に　色濃くにじんでいるだろうと
そっと想像し　あたりが暗くなる

駅ごとに

駅ごとに何か　ふるい匂いがする
駅ごとに何か　あたらしい匂いもする
人々はすばやく外気をかき分けて
ドアーから流れでて別れる
わが家の方角をふと確かめる
わたしにもその感覚が　いつのまにか
犬のように宿ってしまっている

踏切

遮断機は　いつでも　ふいに
降りてくる用意をしたまま
あかるい空にある
晴天の日にも　曇天の日にも

駅は　昨日とおなじ広場の前
道路は　去年とおなじ曲がり方をして
だれが理不尽に　いつ決めてしまった
と言うのか

それで　警報機のチャイムは
「どきっ」とする素早さで
ぼくの予感をはるかに先回りして
思わず「遅かった」と判断させる

いく筋もの鎖と　なん枚もの小板と
ワイヤーロープはくぐり抜けたくなる鈍さで
頭上から　ゆっくり　降りてくる

人々はおなじ町に住みながら　この時
まるで他人の顔をして　佇むしかない

渡りおえた人の後ろ姿を
いたしかたなく　羨むしかない

ぼくもやっはり「損をした」と考える
電車は右から　ゆっくり心の縁を通過し
間をおいて左から　ゆっくりぼくの心の
縁を通過してゆく

それで　ぼくの時間はこま切れる
レールの軋みが　ぼくの肌をあわだたせ
車輪がむりやり空気をかき回すので
ぼくのリズムは　蒸発してしまう

こんな時人は　あらぬ方を見るしかない
林立する電柱　錆びた線路　何もかも
幻のハンマーで打ちすえて
地中ふかく埋めつくして　そうすれば
と　あぬ方を眺めるしかない

線路ぎわの　薬局はひかえめに幟を立て
スーパーは屋上に大看板を貼りめぐらし
もっと彼方　午後になれば　窓ガラスが
西日を弾いて病院が赤い

それでも　この一本のワイヤーの上下を
日ごと待ち　人々がここで失うものを
ぼくも町の住人らしくここで失う
ぼくはこれ以上　足をとられまいと
俯きかげんに　軌条をたしかめ　渡りはじめる

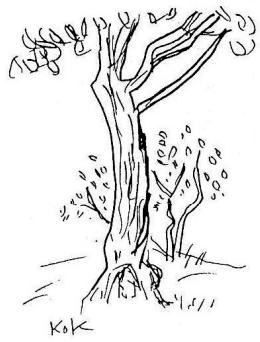
一枚

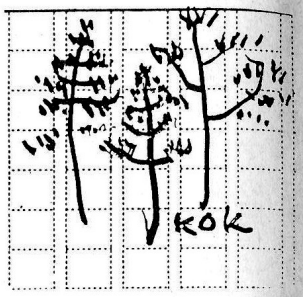
そして帰路　発車のベルが止まぬうち
ぼくは人々のあわいをすり抜ける
空いている吊り革にたどりつく
肩と肩とがふれあわないよう
肘で誰かをぶたないよう
たぶん　まだ　ぼくは昼間の習性を
上っぱりのように身に着けているのだ
そしらぬふりして車内広告に目をはしらせ
あれこれ派手なフレーズを反芻して読む
たしかに
　「あなたのイベントに
　　駅を使ってみませんか」
とある
あのモノトーンの一枚は
宣伝なのか　それとも社告なのか

ぼくは駅をめぐって　考えはじめる

癖

吊り革にすがると
ぼくは人々がする顔で眺める
それは決して　はしたなくない素振りで
窓ガラスの縁に投射した夕陽を
肩いっぱいにあびている座席の人のゆき先を模索する
ぼくは疲労を訴えるほど疲れてはいない
ぼくは空腹に耐えられないほど飢えてはいない
だが　郊外の高架鉄道は家々の
ふぞろいな高さを走りぬけるから
斜光が矢つぎばやにぼくの内側を射すくめる
やがて駅ごと　人々が扉から押しだして
人々が扉から押しいれる空気が
すばやく車内を駈けめぐる
そして　いつのまに傾斜角がつくのか
ぼくは昨日とおなじみょうな癖で躰を支え
光りの矢に射ぬかれた恰好のまま
電車は　すばやく速度をあげる





流転

伊澤敏久

今年も暑い夏を忘れたかのように、秋がきた。山頂から流れてくる水は、美しい山合いをぬって、麓へと流れていた。

山口雅代は流れに沿って、山道を昇っていた。彼女は山の麓の小高い岡にある小さな小学校の教師で、秋の日の夕方、家に向っていたのである。今年がちょうど村の教師になって五年目で、二十一歳になっていた。

彼女の家は麓から五百メートルばかりの山道を昇った所に点在する、数軒の中の一つだった。部落は日あたりはよく、野菜等を作って生計を立てていた。

村の単調な生活に満足できない彼女の行動は、いつも周囲から注視され、よく話題になった。数年前までは東京で生活していたのに、疎開してこの村に移ってきたことが、一段と生活に単調さを覚え、空しさを感じさせるのだった。

彼女は明るい上に、自分の個性を自然に表わすことの出来る性格だったので、受持の子供等とうちとけることが出来、村人と逢えば挨拶を丁寧にするので、純朴な人々には好感を与えていた。彼女の五年間の山の生活は、平凡な中にも、常に教師であり、人間でいたい気持ちを、いつも持っていた。今日も学校の勤めを終わり、いつもの細い曲がりくねった山道を、数年前からの生活に思いをはせながら、昇っていたのである。

山口雅代は東京の下町生れで、父は近くの軍需工場の係長、母と弟の四人家族で、古い家並のある町に住んでいた。彼女が高等女学校に入学した年に、太平洋戦争が始まった。

彼女の家の近くに、小学校の同級生である三浦健司という生徒がいた。二人は小学校で、一、二番を争う間柄であった。彼は東山中学校に進み、中学三年生の時、海

軍兵学校を受験したが、不合格だった。が、雅代は彼を意識し、魅力を感じていた。

雅代は毎日学校の帰りに、四つ角の栄屋という本屋の前で、彼を待っていた。戦争が次第に激しくなるに従い、学校では学習指導に教師は集中せず、画一的な軍事教練に熱中していく様な毎日であったため、下校時間が一定せず、待っているのが、いつもいらただしかった。

三年生であった冬の或る日の午後、二人で昭和大学の前を歩いていた時、後から健司の同級生で、俗に巾がきいている、ニキビ顔の二、三人が、歩いてくるのに気がついた。健司は彼等の目から逃れようとした。当時は、生活態度が国策にそわないようなことがあれば、

「ニヤケタ奴」

として、学校でボス的な存在の者から、制裁が加えられたからである。

女学生と歩いていた制裁がどんなものであるか、瞬間、健司の脳裏にひらめいた。

「雅代さんまずいところを見つかってしまった」

だが雅代は、

「かまわないわ」

と答えて平気だった。暫らく行くと、健司は右へ曲り、彼女はそのまま真すぐに、人波にまぎれて歩いて行ってしまった。二人の関係は、ただ、このようなことだけで満足していて、これ以上は進展しなかった。

四年生になった時に、二人は別れなければならなくなった。新聞やラジオは、益々激戦が広まってきたと知らせていた。学生は軍需工場に動員され、武器の製造のため授業を続けることが不可能になった。さらに、中学生は一年短縮され、生活が一変してしまい、将来の進路等は思いもよらなくなってしまった。

昭和十九年八月、雅代は名古屋の三菱重工業機械工場へ、学徒動員に、三浦健司は静岡の連隊へ早期の軍人となる基礎教育を受けるために入隊を、学校から通知された。

工場で、雅代に与えられた仕事は、部品の研磨であった。朝六時の起床は非常に苦痛に感じられ、学校の生活を思い出しては心を痛める毎日となり、寮に帰れば、東に流れる雲を一人でぼんやりと眺める日がよくあった。そんな時に同じ班にいる者から、

「どうにもならないんだから、皆んなと話をしたり、楽しくやりましょうよ」

とよくうながされたが、なぜか雅代の心はくもり、孤独になってしまうのだった。

家から送られて来る手紙は、教師の点検後に、本人に渡され、中には発送した人を追求される者もいて「ほんとうにいやになっちゃうわ」など、班内の者のくちぐせになっていた。

雅代は工場での生活を最悪に思い、常に日記の後に、

「東京に帰って家のにおいを吸いたい」などと、女の感覚的な文章をつけ加えた。もう一つの悩みは空腹であった。自由外出の時だけが、わずかな食べ物が見つけられ、生きている幸せを感ずる時であった。

三浦健司からは一通の手紙も来なかった。又雅代のほうから出そうとしても、とても出来なかった。

雅代の職場に、名古屋の市立第一女学校の生徒と、女子商業学校の生徒が一緒にいて、第二機械工場で作られる蒸気タービンの組立品を検査したり、ゲージで寸法の一致を調べたりした。時に不良品（オシャカ）が見つかれば、部品製作者は係長に呼ばれて、説教されることもあった。

工場には同じ職場に、大勢の工員達がいた。女学生の仕事の指導のために、生徒五人に工員一人の割で、配属されていたのである。

雅代もその工員達と一しょになって仕事をしていたが、雅代は他の生徒より美しい顔立ちで、目立った存在だったので、工員達からは、ちやほやされ、監督官が視察にきた時などでも、他の生徒にくらべ、注意を受けることが殆んどなかったので、友人達からねたまれていた。

雅代の仕事場に、西沢春雄という名古屋市中区に住んでいる工員がいた。西沢は背が彼女より少し高い位で、角ばった顔をして、名古屋弁の「そうだなも」という表現をよく使い、彼女にバイトの磨き方、グラインダーの掛け方などを、やさしく、ていねいに教えてくれた。西沢は雅代より早くきて、職場を掃除したり、工具の片付けをしたりしたので、職場はよく整理されていた。午前七時から、工場の機械がいっせいに回転を始めると、騒音で話が出来ない程であった。

或る日西沢は、

「今日ね、雅代さんがお腹が空くと思って、アンズを持ってきたましたよ。」

と云って、小さな包みを雅代に渡した。雅代はもらってよいのか悪いのか、たじろんだが、受け取った。最悪な生活の中に、ふと何か心にほのぼのとしたものを感じたが、それは健司の時とは違う心のときめきであった。

夜の自由時間に、友人と笑いに打ち興じながら、西沢がくれたアンズを食べながら、味けない寮生活よりも、西沢と同じ所で、町の話を聞きながら仕事をしている時の方が、どんなに楽しいかと思った。

毎月二十四日が電休日で、午前九時より午後五時まで、自由外出が許された。雅代たちは、五・六人ずつ一組になって、市内を見学したりした。この時は、五体に、自分だけの世界に生きているという、爽快な気持がみちあふれていた。

市内は一定の高さにどの家も白線がぬられ、町を行く人は鉄かぶとを背にして、口を結び、何か急いで歩く様子がみられ、非常時は如実に表れていた。雅代たちは、

次の外出日は何時になるのか、今日は何処に行こうか、一日じゅう楽しく過ごそうなどと、工場の近くをながれる春日川の堤防に寝そべって、語る時間が多かった。

三回目の外出の日、雅代は友達には、一人で親戚に行くと云って別れ、市電に乗り、初めて西沢の家を尋ねた。

「今日は」

奥から声がして、四十才位の小柄な、鼻の低い西沢に似た母親らしい女が出てきた。

「西沢さんおりますか」

「えゝ、二階で本を読んでいます、どうぞ」

雅代は二階へ案内された。西沢は突然の雅代の訪問で、くずしていた体を起こし、急いで座布団を出した。雅代は、

「すみません」

と云って遠慮ぎみに座布団を敷きながら、

「今日は外出日でしたので、前に西沢さんに教わった住所を地図で調べ、遊びにきましたの。びっくりしたでしょう」

「そうですか、よく来てくれましたね」

と西沢は一面当惑した様にもみられたが、すかさず、

「殆んど何時も一人でいるので、退屈なところだったんです。ご馳走しましょうか」

と云って下におりて行った。

雅代が、西沢の読んでいた机の上の本を手に取って、裏表紙に内側を見ると、

名古屋第二商業学校四年、西沢春雄

と書かれてあり、初めて彼の名前と卒業学校を知ったのである。「春雄さん」と小声で云ってみた。呼び易い名前だと思った。

少したって西沢がおぼんの上に何か乗せて上ってきて、雅代の前にゆっくりおきながら、

「ちょうどお昼頃になりましたから食べて下さい」

と云って、雅代の前に出した。みると、茶椀に米飯と、焼魚と大根の煮たものが皿に乗っていたので、驚いた。

工場に来てからは、一パイの米飯を見たことがなかった。食堂ではいつも、パンと、さつまいもだったから、

「すごい」

と思わず叫んだ。まさか、米飯が目の前に出るとは想像していなかった。

雅代は思いがけない昼食を食べ始めると、西沢はそばにいて、

「工場はどうですか」

「私、全々いやなんです。逃げて家に帰りたいと思った時が何度かあったか知れません。でも逃げて帰れば、殺されるかもしれないと思ったりして……」

「殺される？　そんな馬鹿な……」

と西沢は笑った。

西沢はトルストイの「戦争と平和」を雅代との間には夜食の時間である。老若男女の工員たちは仕事を中止して食堂へと急ぎ、食堂までの廊下はトイレのようで悪臭を放っていたとか、若い男女が仕事をさぼって、本能的な行為で夜勤の時間を過す姿態等を、西沢は身ぶり手ぶりで話すので、雅代は自分の知らない学生生活以外の社会に触れて驚いた。

「つまらない話をしましたね……」

「いいえ、面白かったわ、私なんだか、自分がわからなくなってしまったの」

「僕もわからないんだ」

真面目に仕事をすることと、生活の楽しみとは何なのか、将来はどうなるのか、灰色の社会が二人をつつんでいた。

午前十一時四十五分、警報は解除された。

その時下から西沢の母が「春雄」と呼ぶ声がした。西沢は急いで下に降りて行き、お茶と菓子を持って上ってきた。雅代は久しぶりに疊の上でくつろげたことがうれしく、何度もこんなことがあればいいなと思った。

西沢は食後、レコードを掛けた。ベートーベンであった。雅代は暫く耳にしない曲だったので、耳を澄ませた。窓に腰を掛け、市内を見ると、満員電車が眼につき、電車の中の人々は、みな防空頭巾をかぶっているのがいやに眼についた。

そろそろ帰らなければと思っていると、ふたたび警報

いて、

「僕は学校を卒業して、或る会社に勤めていたのですが、徴用されて工場にきたのです」

西沢の話を聞きながら、雅代は昼食を腹一パイ食べた満足感にひたっていた。

「僕が一番いやだと思っていることは、工場における幹部の者との関係です。彼等は抑圧的で、自己主張が強く、工員たちの意見を聞いてくれません。もし、戦争のことなど批判すれば、大変なことになりますよ」

と何か不満がある様な話し方で、さらに西沢は、

「学校は工場と同じこと、工場が学校……、学校と云う言葉は無くなったと思ってもさしつかえないね」

とつづけた。雅代はなにも答えなかった。今迄この戦争は必ず勝つと信じていたのが、西沢の話を聞いているうちに、動揺してきたのである。

この頃は警戒警報は一日に必ずあり、空襲警報も一週間に平均三回位、サイレンが鳴った。話の最中に警報が聞こえだしたが、二人は気にもとめず話をつづけた。

「明日からでも工場がつぶれてしまえばいいわね」

と雅代は云った。

そうすれば家に帰れて、少しでも自由な時間が過ごせるのではと、乙女の感傷にひたった。二人は、仕事のこと、工場のこと、夜勤のこと等、話は盡きなかった。

特に雅代には夜勤について好奇心があった。午前二時

が鳴り始め、その中にサイレンが耳をついた。西沢は
「暫く待って、解除になってからの方が安全でしょう」
と雅代の帰寮を制したが、
「御厄介をお掛け致しました。ほんとに楽しい一日でしたわ、また遊びに来ます」
と答えて帰りかけた。するとその時、空襲を告げるサイレンが鳴り響いた。
雅代はどうしようかと迷ったが、途中で爆弾でも落ちたらと心配になり、空襲だけが解除になるまでを待つことにした。
「家には、隣組で作った大きな防空壕があるから、大丈夫です」
と西沢が雅代に安心感を与えた直後、金属性の音がかすかに東の方から聞こえてきた。が、この辺は軍需工場が無いから狙われる心配はないと、西沢は云った。
だが雅代は心配で、防空頭巾をかぶり、眼だけが天井のふし穴をみつめていた。下から西沢の母が、
「防空壕に入った方がよいかも知れない」
とうながした。
ブルーン・ブルーンと、無気味な音が生死を分ける致命的なもののように思われた。二人は眼と眼を合わせて黙っていた。その中、
ガラ、ガラ、ガラと
云う音が聞こえたと思うと、
ヒュー、ヒュー、ヒュー
と頭の上から金属がさける様な音がした。西沢はとっさに下に行こうとしたが、雅代が小さくなり、ふるえているのをみると、彼は急いで押入れから布団を三枚だして、その中へ二人はもぐり込んだ。そして、二人は無意識のうちに抱き合っていた。
一秒、二秒、三秒…「どどん、ずしん」と家が倒れそうな音が響いて、生きた心地がしなく、意識さえ失ってしまいそうであったが、長い時間のあと爆音も去り、初めて自分に気がついた雅代は、急いで西沢から離れようとした。
しかし、西沢は手をゆるめないで、より強く雅代を引き寄せ、唇で雅代の唇をふさいでしまった。大きな声を出したくても出せず、
「うん、うん」
と云える位で、雅代は、始めて身近に受けた空襲と、異性との衝動で、精神が錯乱し、失神状態に陥ってしまった。
どのくらいの時間だったのか、ふっと雅代が我れにかえった時、もう西沢は傍には居なかった。雅代は余りにも情ない状態におかれていることを感じ、
「あ、恥かしい。」
と叫んだ。
雅代は何もかも信じることが出来なくなった。雅代は

急いで西沢の家を出た。時計は、午後四時五分を指していた。急いで市電に跳び乗り、栄町へと急ぐことしか頭になかった。なぜ西沢の家を尋ねたのかと、自問自答をくりかえした。帰寮後一言もしゃべることなく、友達のはしゃぐ声を耳にするのみで、泣けて泣けて仕方がなかった。
就寝前に書いた日記の終りに、「信じられるものは自分だけ。雲だけが友人」と書き、再び涙が頬を流れた。
彼女は次の日、先生に引率されて職場に行ったが、今朝は西沢と顔を合わせることが躊躇された。
「今日は会いたくない。」
と思った。何時もは出勤の早い彼が今朝はまだ来ていなかった。七時三十分になり、今朝は特別係長の話があるというので、皆んな空地に集まった。
係長は、
「昨日、昼間と夜の二回、名古屋市に空襲がありました。実は昨夜の空襲で犠牲者が出ました。犠牲者を申し上げます。岡村雪枝さん、杉山幸治さん、高橋康二さん、福田重男さん、河口鉄治さん、大橋憲征さん……」
と呼び上げていく中、そこここからすゝり泣く声が聞こえ悲しみがこみ上げてきた。そして最後に、
「西沢春雄さん」
と云い終わると、
「黙禱」
と掛長の悲しみの声がひびいた。
雅代は西沢の名前を聞いた時、「はっ」と思い、異様な感に打たれた。
雅代はこの日、複雑な気で仕事に向かった。昨日の出来事が夢のように思われ、人生のはかなさをつくづく感じた。
その後、戦争も、アッツ島、サイパン島の玉砕から、戦局は次第に不利となっていった。学校では工場の危険を感じとり、先生と生徒間で個々の進路が次第に話し合われて、自宅に帰る者がふえていった。
雅代も卒業後、父と連絡をとり、親戚の田舎の村で、代用教員をすることで、名古屋を後にした。
父につれられて行った村は、戦争などと無縁な、山合いの静かな小さな村の小学校であった。門には〇〇国民学校と書かれていた。
翌日雅代は一人で校長と会い、五年六年の受持ちを命ぜられた。それは全校生徒十三名中の、五人だった。
子供の前に立って、
「今日から私が皆さんの受持です。」
と云った時、子供たちは、雅代の顔を真剣な顔をして見上げ、雅代は思わず恥ずかしくなった。
復式の授業など始めてであったが、教師は全部で四人で、まがりなりにも教壇に立っていたのである。
戦争も終わり、雅代の村の生活や学校の生活も、若干

た。

しかし、校長は雅代の弁解を認めることをこばんだ。そしてその日から、彼女に対する校長の見方が、変った様に思った。

雅代と村人の考え方とが、食ちがいはじめたのである。しかし、雅代は、その後も田中先生宅へよく伺った。

初夏の或る日、同僚の一人である三上先生が雅代へ、

「山口先生、ぼくは山口先生がすきなんです」

そう告白した。放課後の二人だけ残った職員室の中に居た時であった。彼女はびっくりした。まさか無口な三上先生から声を掛けられるとは―。

三上先生との関係は周囲からの批判が多く、話題の少ない地域なので、二人の日常生活への干渉などにもそれが発展することがあった。

雅代は村の青年団に入団したが、私生活の面ではすぐ非難された。しかし雅代は相変わらず、田中先生宅を訪問したり、三上先生との関係をつづけ、生活態度を変えようとしなかった。

PTAの総会、役員会等でも、彼女の生活が取り上げられ、反省をうながされた。雅代は都会の生活と、山合いの生活の差を感じた。名古屋の生活は、戦争中で異常なものに思えた。社会性は場所より、人間性をも無視するものだろうかと、常に疑問に思ったりした。雅代自身は私生活を、「正当化された堕落論」として捉えていた

落ち着いた或る日、田中先生から「山口先生は今の生活はどう思いますか」と聞かれ、雅代は、

「画一的な教育は否定しますの、人間らしく指導することを考えています。教師がヒューマニズムを持っていれば、生徒に自律性を持たせることが出来ると思います」

田中先生は、うなずく様に首を前後にして

「今日の帰りに僕の家に寄りませんか」

と云った。彼女も同僚との会話も望んでいたので、伺うことを約束した。

雅代は明るく活発で、子供の教育に情熱を燃やし、村でも評判がよく、教師として適任であった。

田中先生は学校の近くに住んでいて、二人の小さな子供がいた。二人は、村が保守的なこと、PTAのボス的な役員のことなどを話しあったが、雅代にはどれも始めて聞くことばかりであった。話に夢中になっているうちに、夜の十一時を過ぎてしまった。雅代は夜の山道を歩いて帰るのがこわかったので、田中先生の家に泊めてもらった。この村に来て始めての外泊であった。

翌日、田中先生の宅から直接出勤すると、職員室に入ると同時に校長に呼ばれ、昨夜の宿泊のことについて注告を受けた。雅代は、

(何故こんなに早く…)

と思い、気おくれもせず、昨夜のことを話した。田中先生と奥さんが、心よく招待してくれたこともつけ加えのである。

五年の間、校長、同僚、PTA等の批判は、いつも雅代に集中していた。

しかし雅代は平然としていた。時折、西沢のことを思い出してみたりした。

学校では、休み時間がくると、子供たちが雅代の所にきて、

「先生、なわとびしようね」とか、「先生何を考えているの」

そんな時に、ふと我れにかえり、子供の中に入っていった。子供たちにしたわれることで、生きがいを感じる様になっていった。

職員室の机の上には時折友人からの手紙が置かれていたが、三浦健司からの消息はなく、西沢春雄のことが、思い出されては消えていった。

遠くの山は、秋の色が一段と美しい。その中を、二十一歳になった山口雅代は、山合いの道を歩きながら、昔のことを思い出していた。

その後、山口雅代は三上正男と結婚した。しかし、子供はなく、二十数年後に病死し、山合いの墓地に葬られた。墓には、四季折々の花がいつも飾られているという。

三上先生の消息はわからない。

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出があり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇-四-九〇八一五

加入者名　作家群結編集部



ミニ・カツラタロウ伝

大和禎人

「君は反乱軍だったのか」

埼玉の加須から上京し、出席していた広瀬くんがヅバリと言ってくれた。いま思えばたしかにその出来事に組したものは一種の反乱軍に相違ないかも知れない。そう呼ばれることを諾うとしても、それは遙かなる昔、小学四年生の少年たちの引き起こした出来事なのである。

二・二六事件はわたしたちの多感な青年期に遭遇した稀有の事件であった。「反乱軍」というイメージは雪の朝の皇居前のバリケードと、鎮圧のため急遽上京した部隊の兵が銃をかまえて立つシルエットに象徴され、鮮明な記憶をいまにとどめている。わたしたちはそういう世代に属している。

その頃、丸の内に勤めていたわたしは、

「この先に喧嘩があったらしい」

ということで、錦町河岸の停留所まで行ったところで市電（当時はまだ都電ではない）から降ろされた。ポイントの切り替えが可能の場所だから、臨機の折返し運転を行なったのだ。車掌が架線からポールを引き離し、引き紐を担ぐようにして反対に回転する、あの操作を終るとともに、客を残して走り去った。

（喧嘩）とはよく言ったものだ。まだ事態を市民は知らされていなかった。報道が瞬時に世界をかけめぐる時代ではなかった。幸い、わたしの利用する停留所は次の和田倉門であったから、そう遠くではない。深雪を踏みわけ、歩いて勤め先のビルに達したのであった。バリケードや銃剣を持った兵士を目撃したのはいわゆる「凱旋通り」の堀端であった。

はじめ決起部隊という表現があり、国会議事堂その他が占拠され、戒厳令が布かれたという事実がラジオを通して流れたのは出社後、しばらく経ってからであった。戒厳司令官、中将香椎浩平の名は、

あの、

（兵に告ぐ）

という論告とともに市民の脳裏に刻まれた。

（ことによると流れ弾が当たるかも知れません）

という報道が流れたのは翌朝のことだ。騒擾いよいよただならず、決起部隊はいまや反乱軍として掃討されようとしていた。あらゆる交通機関が動かない朝を迎えていた。市民生活は鼓動を止め、なりゆきにただただ息を潜めたのだった。

いま広瀬くんの口から洩れた「反乱軍」という言葉はもちろん冗談として聞かなければならないし、深い意味はないにしても、まさになぞらえて、少なくとも同時代を生きたものにとって、時代をさかのぼるあの事件を想起させるに十分な響きがあった。

小学四年生の「決起部隊」、ないしは「反乱軍」とは次のような他愛ないいきさつなのである。

すでにわたしは「大正っ子」少年編に書いていることなので、ここでそのまま大要を写そうと思うが、その素地となる大正期の尋常小学校のクラス編成という土壌について触れておかなければならないだろう。

その往時、男女別学の学級編成が原則だったが、わたしたちは満十歳の四年生まで児童数の関係上、男二組、女二組、それに男女組と呼ばれた混成学級があった。

「やーい、男女組」

「男女組のくせに」

と混成クラスの男子は謂れなき蔑みをうけたものだった。五年生でこれを解消し、男三、女三の截然とした別学編成に変えられた。満十一歳に区切りをおいた根拠はなにか、およそ察しのつくことだが、わたしは元男女組の男子を基幹とする新しいクラスに入れられて、男女組と蔑まれたかれら男子の鼻持ちならぬ軟弱な空気に辟易するのである。

だが、いまここに物語ろうとし、以下に写す事件の真相は四年生の純然たる男子組のものであることを前置きしておかねばならない。かれら男の子の意気の燃焼であり、爆発であったことを言っておきたい。

さて、事件は四年生男子二組の級長選挙に端を発して起こった。

（略）

同じ組に中島章君がいる。医者の息子で私とは中学も一緒であり、たしか二浪ぐらいして一高に合格したのだから凡才ではない。しかし、鈴木桂太郎君（本編の主人公カツラタロウ）とは対照的にあまり人気の

ない秀才であった。だから、級長選挙となるといつもかれは次点であった。勉強が出来るのでそれなりの票が入る。しかし、つねに鈴木桂太郎君には及ばない。そして次点者は副級長に推されるのだ。かれは桂太郎君の下風に立たされつづけていた。それは当然のこととして、衆目もみなそう見ていたのだが、この学期の選挙でも同じ結果が出た時、

「ボクは副級長を辞退します」

と中島君は叫んだのだった。

票を読み上げて、（正）の字が一画ずつ積み重ねられて票決する、ありふれた開票方法だが、固唾を呑んで見守る級友の誰にもまして当の中島君にとっては屈辱に耐えられない時間だったに相違ない。しかし、開票の結果は級友の総意であるはずだった。それが拒否されるというなりゆきは重大と言わなければならない。

瞬間、私たちは一斉にことのなりゆきに驚き、担任の徳田安貞先生の方に視線をあつめた。温厚な先生がさすがに激しい怒りを覚えられたようである。その顔がひきつるように赤黒くなり、唇を震わされて、

「中島君、君にはあとでよく話をしましょう、副級長をやりなさい」

と命令された。

「いやです、ボクは帰ります」

かれは机に掛けてある肩掛け鞄をとると入り口へ突進して、扉をピシャリと閉めてそのまま帰ってしまった。

私たちは徳田先生がもはや顔色も青ざめられ、怒りを押し殺しておられる姿に同情した。

「よし、中島君には明日よく言って聞かせることにする、今日はこれで終りにしよう」

と呟くように言われ、職員室の方へもどられた。

ここで気づくことは選挙はその日の最終時間、課業をすべて終ったところで行なわれたということだ。そうでなければ、中島君は授業を放棄して帰ってしまったことになりかねない。いっそう重大なことになる。

それにしても、四年生、十歳の少年の抵抗としては激しすぎる行動だった。後に一高から東大に進んで医学博士となり、血液学の権威と謳われた同君だが、負けじ魂のすさまじさにクラスのみなが啞然としたとして、無理からぬことであった。そして、なによりも重大なことは

投票結果という級友の総意が踏み躙られたことだった。

「富士神社へ四時半に集まれ」

誰が言いだしたのか、中島君をこのままにしておいてはいけない。かれのわがままを許してはいけない。誰の胸にも同じ思いがあった。大部分のものがこれに応じる構えを見せた。誰かが中島君を誘い出す、神社へおびき出しておいて、制裁を加えようということに一決したのだ。私もその仲間の一人であった。いったんめいめいは帰宅して、その時間に間に合わせる盟約であった。

家のものにはなにも告げず、

「ちょっと、行ってくるから」

「どこへ」

「うん、ちょっとだけ」

家を出るためには少しばかりごまかしが必要であった。

一挙に参加しようとするわたしは興奮を押え、時計の針が決行の時間に近づくのを待ちかねた。異常なまでの胸の高鳴りを経験していた。そして、これから起ころうとしている事態を家族に知られてはならないという判断がなぜか働いたようである。さすがに咎める気持がそうさせたのだった。

義に勇む気持が少年の心にみなぎっていたことはたしかである。

しかし、四時半から薄暮にかけて、息を殺して待っていたのだが、計画は徒労に終った。

誘いだし役は誰であったかも、まったく覚えていないが、計画は画餅に終った。

裏切りがあって内通され駄目になったという伝令があり、渋々私たちは解散した。

まことにあっけない結末である。だが、わがカツラタロウ君のことを、ひいては中島章君、それにわたしの交差するその後をさらに物語るにあたって、その舞台についても、書き割りていどの紹介は必要であろう。

ここに言う富士神社は文京区の駒込富士である。「江戸名所図絵」にも明らかで、都内数ある富士講信仰にゆかりの木花開耶媛を祭神とする浅間社の一つである。本郷加州侯の後園にあったものを寛永年間に移してこの地に定められたというのが由緒だ。境内に加賀鳶の碑が平成の世に現存している。

わたしたちの学んだ「東京市富士前尋常小学校」の校名はこの社の真ん前に学校が発祥したことから命名されたものだ。その周辺一帯の町名もまた富士前町であり、

学校はその十番地に位置し、わたしたちの入学した大正十一年頃はこれを分校と呼んで、老朽の教室に低学年だけを収容し、別に本校として駒込神明宮（天祖神社）に近く大正五年に新築された校舎のほうに上級生は通学していた。そもそもの校名由来の発祥地の方はいま文京区本駒込五丁目三十二番地五号と地番改正されて、

（富士前小学校ここにありき）

とする標識プレートが民家の壁に添って建てられている。文京区教育委員会が昭和五十九年三月に設置したものである。わたしたちの母校は廃校になってもはや存在していないのだ。標識は昭和二十一年三月廃校の事実を三十八年を経てようやく明らかにしたものになっているのである。

戦災による校舎焼失という事情が廃校をもたらしたのであった。

分校と呼び富士神社を前にする旧校舎はわたしたちの在学中、火災があったりしたが、尋常夜学校、実業女学校などの教室が置かれた歴史があり、やがて昭和三年にはこの校舎を仮校舎とする昭和小学校が開校し、現在地（上富士前交差点角）に鉄筋校舎が出来て分離独立するなどの変遷の後、やがて取り壊されている。

本校と呼んだ木造校舎の富士前小学校は昭和二十年二月二十五日の空襲で本郷区内最初の被災校となり、焼失してしまった。翌二十一年三月三十一日をもって廃校という運命をたどったのであった。つまり、わたしたち母校は幻となって永遠に消えてしまったのである。

それぱかりか、町名地番改正しきりな趨勢の中、富士前町、わたしの生誕地である上富士前町などの町名もいまは本駒込なぞと呼名を変えてしまっている。わずかに本郷通りと不忍通りの交差点に上富士前の呼び名が残り、そう呼ぶバス停があるのみである。旧富士前小学校本校の跡地はそっくり文京区立第九中学校に生れ変わってしまっている。懐旧のよすがなくいまやすべてのものがその姿を変えてしまった。前記の標識には乙なことに校歌の一節が添えられている。

富士の高嶺の名も清き
学びの庭の朝夕に
仰ぐ雲井のすがたこそ
やがて我等が　かがみなり

曲譜を読めない世代に属し、口伝えの歌唱しかしていないので、メロディーを明らかに思い出せないが、涙を催すほど懐かしい歌詞である。

さて、大正の少年「反乱軍」騒動は夢のまた夢、五十有余年を経て、昭和五十五年九月三日の消印のある郵便物をわたしは受け取った。発信は文京区本駒込三丁目×番×号、鈴木桂太郎とあるものだ。わたしとしてはある予期をもって、待っていたものであった。と、いうのは電話帳から探し当て、まずわたしが「大正っ子」少年編の一本を贈呈におよんでいて、電話を通してご本人の声を聞き

「ああ、懐かしい、覚えていますとも、わたしのところをどうやって……？、そう電話帳でしたか、よくもまぁ、ありがとう、ご本はぜひ拝見したいものです、そう、送ってくださいますか、」

わたしは久闊の情に突き上げられる会話を交わすことができたのだ。桂太郎氏は記憶にわたしのことをはっきりとどめていてくれたのだった。もしやと昔に同じ文京区にと、分厚な電話帳を繰った甲斐があった。かれが昔の富士前小の界隈にいまも住んでいそうな勘が当たったのだ。

拝啓

先日は全く思いがけないお電話をいただき、五十数年前の少年時代が次々と思い出され、ご恵贈くださるという貴著の到着を今か今かと待っておりましたところ、本日先刻配達されました。

包装を解くのももどかしく、早速頁を繰りました。いずれゆっくり拝読させていただきますが、いたるところに古い級友の名が見つかり、富士前校周辺の町の様子など涙が出るほどなつかしく感じ入りました。

それにしてもよく私のことを思い出しくだされ、貴著のご恵贈にあずかるなど光栄の至りでございます。

先日のお電話の際にもちょっと触れましたが、私たち徳田安貞先生（昨年十月二十五日九十五歳でお亡くなりになりました）の二組～男二組は昭和三年の卒業時には四十六名でした。卒業後七年を経て結成した昭三会（クラス会）は戦中、戦後の混乱期一時中絶はしたものの、今日まで年一回程度の会合を続けております。

本日はこの手紙に添えて会員名簿を同封いたします。既に故人となり、あるいは消息不明者もあって、現会員は十八名となりましたが、貴著の中に名の出ている級友が何名かいることはなつかしい限りです。

五年前、私は貴兄とご同様、いわゆる還暦を迎えたわけですが、当時、私もその記念にと思い、タイプ印刷、製本の拙い文集を作り上げました。親戚、友人などに配って、今は一部しか手元にありませんので、たいへん失礼ながらコピー再製して、同封の上お届けいたします。貴著とはまさに月とスッポンほどの違い、拙文のうえに不体

裁なものですが、ご笑覧いただけたら幸いでございます。

（略）

私は富士前小学校卒業後、直ちに安田銀行（現在の富士銀行）に就職し、かたわら九年間、夜間通学をいたしました。銀行の方は四十三年九月、定年にはやや早かったのですが、銀行の要請で神田のネクタイの会社に移り、そこも一昨年末退職して現在に至っております。退職後もお陰様で元気で、悠々とはいかないまでも、まぁ自適の生活をしております。

現在の住いは元の富士前校（現区立第九中）の東隣にありますので、近くまでお越しの節はぜひお立寄りください。

敬具

昭和五十五年九月三日

鈴木桂太郎

少年の日、徒党を組み、あえて反乱に加わったものは何人であったか、覚えもおぼつかない遠い過去のことであるが、気勢をあげ雷同した数ほどではなかったように思う。しかし、正義にはやったわたしの気持ちは純粋であった。いまその出来事についてご当人は知ってか、知らずにか、当の渦中の人の手紙を読むうちに、この人の徳望は少年の昔からすでに備わっていたものに違いないことが、あらためて確かめられたように思う。ご当人からはついに聞くことはできなかったが、事件は恐らくあずかり知らぬところで起こっていたものであろう。

（卒業後、直ちに就職、かたわら九年間、夜間通学）

という、隠し立てのない、潔い文面に心をうたれる。三つ児の魂を見る思いなのだ。

副級長を不満として拒否し、教室を飛び出した中島君の方は医者の家に生れ、一応は恵まれた家庭環境にあって抑制のないわがままを発揮した。かれら二人の対比はいまあらためて歴然と浮かぶようだ。記憶が定かでないが、あの際は結局中島君が慰留され終ったように思う。

わざわざコピー再生の上、手作りで製本されたという氏の文集は赤い模造紙の表紙に、（還暦）、（真珠婚）の文字を冠した「記念文集」という文字とともに、

鈴木桂太郎

和子

という夫妻の名を連ねたものになっている。夫婦ともに来し方の思い出を綴られた内容なのである。表紙に赤を選ばれた理由はおのずから意図を知ることのできるもので、夫婦愛の美しさが滲み桂太郎氏の人柄をいよいよ

物語ってくれている。普通なら、かかる内容のものを余人に送るのは臆面もないこととされようが、桂太郎氏にはいささかもケレンもなく、率直淡白に自己を語られる姿勢が見られ、素直に読むものを捉える内容だった。

カツラタロウ伝はここでかれのケイタロウへの変身についてその人自身の文集に拠って明らかにしておこう。

近しい関係では「カッちゃん」という呼び方で通っているのに、そのカッちゃんがケイタロウになったのは担任の徳田安貞先生のお蔭だった。

「キミの名はカツラタロウでは名字が二つ重なっておかしい、ケイタロウのほうがいい、そうしなさい」

と言われ、はじめは不本意であったが、いつか慣れてしまったというのだ。六年間通して変わらなかった尊敬する恩師が親代りの名づけをしたようないきさつを物語っている。そもそもの命名にあたって、父徳太郎は宰相カツラタロウをあやかるつもりはなく、知り人の名前から桂の一字を借りたにすぎなというのだ。ところで、かれは（男二組だけ担任が六年間不変であった）としているが、これは少しく誤りがある。わたしは六年間の「通告表」－なんと通告の二字は恐れ入るばかりだが－を保存しているので、正して男二組の入学時の担任訓導は郡司信次先生であった正確な事実を記しておきたい。職名の「訓導」も「通告表」同様に歴史を物語るものだ。

郡司先生は千駄木小に転じられたのだが、わたしの家の前を通勤されていて、中学へ入ってからのある日、わたしをつかまえられて同級のだれ彼の進路を尋ねられたのには驚いたものだ。たった一年、しかも幼い一年生の担任であったのに、六年を隔ててわたしたちの氏名を覚えておられたのだ。詰襟服を着用され古風な訓導を絵に描いたような謹直そのものの先生であった。

昭和三年三月二十五日、私たちは東京市富士前小学校の第三十三回卒業生として、卒業式の日を迎えた。小倉郁之介先生の白い手袋をされた敬虔な姿を覚えている。

「大正っ子」少年編はこうした記述をもって、記憶をたどる一節を展開している。

年月めぐりて早や六年（むとせ）
卒業証書を受くる身と
なりぬる君らが嬉しさは
そもそも何にか例うべき

（在校生斉唱）

われらこれよりいや深き
学びの道や生業（なりわい）を
究め尽くしてみ恵みに
応えまつらん今日よりも

（卒業生斉唱）

朝夕親しく交わりし
嬉しき思いさながらに
別れて幾年（いくとせ）へだつとも
互いに忘れじ忘るまじ
（在校生・卒業生）

もちろん「蛍の光り」も歌われたのだが、在校生と歌い交わすこの「卒業の歌」もまた涙を誘い、在校同胞のきずなを自覚させ、巣立つものの覚悟を促す歌詞に満ちている。いま頃は自校創作の（呼びかけ）形式が一般だが、この場合も一種古典的（呼びかけ）と言える歌われ方であった。写しておこう。

この日、卒業証書を受け取る総代はわが鈴木桂太郎君であった。今にしてなお思うことは貧困ゆえに上級学校への進学は二年制の高等小学校すらあきらめ、就職を決定している同君を選んだ学校の選定の公平さである。名門中学校合格者のあまたをしりぞけた素晴らしい英断であった。もちろんかれがそれだけ群を抜いた英才であることは六学級の担任者の認めるところであったろうし、不遇の英才にはなむけし、励まそうとした意図を汲めるのである。一服の清涼を与え、清々しさを覚えさせる人選であった。

この卒業式にあたって、来賓祝辞を府立第五中学校の伊藤長七校長が述べられた。同校の初代で名校長の評判が高かった人である。

（涙が出そうになるほど感激した）

と桂太郎君は記しているのだが、わたしも同様の記憶があり、感銘を家人に伝えた覚えがある。

かれは就職のかたわら、その府立五中の夜間課程に入学しており、同校長が卒業式の祝辞の最後に朗詠され、感銘を卒業生児童に与えた短歌を、同校に進んだことで後日に歌詞を知り、それを文集で紹介している。

巣立ちするひいなの胸毛やわらかに
まだきに飛びていずち行くらむ
岡のべの花待ちかねて巣立ちする
ひいなの羽がい天津空遠し
制帽の徽章の色の青さびの
静かなる心来し方を思う

伊藤校長は朗詠しつつこれら歌詞の心を、平たく児童が理解できるような言葉で解説されたのであった。

桂太郎君と共有する感動をよみがえらせてくれる記事であった。

桂太郎君の入学した夜間中学は今日確立されている定時制課程のようなものではなく、旧制五年の中等学校にくらべ修業年限四年の乙種学校であった。当時の学制では高等学校、専門学校への入学資格は甲種学校に限られるというハンディがあった。

「ケイタロウはお兄ちゃんだから、わかっておくれだね、お前が学校へ上がった頃と違って、いまが一番たいへんなの」

育ち盛りの三子を抱え、母のヨシが切なげにそういうのを聞いた。カツラタロウはいつかケイタロウと母にまで呼ばれるようになっていた。

学校を通じての求人に応じて、安田銀行への就職は採用内定の通知書を前年の昭和二年十二月三十日付で受け取っていた。かれの決意はすでに固く決められていたのだが、母にすれば繰りごとを言わないではいられなかったのだ。

父徳太郎は黙々として、なにも言わなかったが、息子の目をそらすようにして、なぜか苛立ちを押えるかに手荒く母ヨシの作った大ぶりの弁当箱を受取り、勤めに出かけていった。

今の電電公社、往時の東京逓信局が徳太郎の勤め先であった。桂太郎君の物心のついた頃には半纏に腹かけどんぶり、制帽という身なりで、出かけていた。市内の局をしばしば変わって、通信工夫から通信工手、そして通信手など職階をのぼり、戦中、戦後を勤め上げ、昭和二十一年三月、六十八歳で身を退いている。

母ヨシは北多摩郡多磨村上染屋（現在の府中市白糸台）の出身で、かれはこの母方の里で産声をあげている。戸籍上は大正四年六月二十日、東京市本郷区駒込神明町三百六十一番地で出生したことになっているが、実際は六月八日であったことを母から聞いていた。かれの父母の婚姻届も同君が生れた前の月となっているという戸籍と実際が違うのはあえて異としない時代であった。

旧民法第一条は

「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」

とあり、真の出生時刻についての議論にはあまたあって、一部露出説、独立呼吸説、等々あっても、臍帯分離説（臍の緒を切ったとき）が通説となっているという知識から、かれは自分の三子については厳密にその時刻を確認したというエピソードが文集に語られている。かれの性格の一面を知る挿話として面白い。

かれはまた、「育った家」という一章をおき、見取り図まで添えている。大正八年まで存在し取り壊わされた最初の家は戸籍と同番地の棟割のスラムであったと偽らず、その後移った同町三百七十五番地の家は狭いながら庭付きの一軒家で、六帖に二帖の二間あったことを喜んでおり、また縁側があり日当たりがよかった。と記して間取りを図にあらわし、庭に立ち木のいちょう、うるしの位置を示している。富士神社の山裾、真北の位置である。以前の家とはほど遠からぬところで、

（あのへんが桂太郎君の家だ）

畏敬の念をもって神社の丘の上から望み、そこが百軒長屋と呼ばれる地帯であると誰からとなく教えられてい

たが、むしろ、そうしたことでいいよかれの偉大さが思われたものだ。往時、富士神社の丘の北側はいまのような崖ではなく、なだらかな斜面をなしており、子供らが辷り降りる恰好の遊び場所になっていた。時としてわたしも仲間入りをした、そんなある日に抱いた感想であった。

かれは手記の文章の中で、そうした環境を淡々と物語り、少しも隠蔽しようとせず事実を事実としてあからさまにしている。かれの器量がどんなものかを知ることができよう。自分史をサクセスストーリーとして綴るのが一般で、読むものが読まされるというのではご免蒙りたい気持になるのである。

昭和五十六年十二月二十一日、わたしはかれと実に五十三年ぶりの再会、対面をした。すでに触れたとおり、「大正っ子」少年編がとりもつ縁がひらけて一年以上経ってのことであった。

電話があって「訪ねたい」ということで、初めてでは順路を教えることに困難があったから、都営三田線の近い駅を指定して、多分、その頃はスターレットだったと思うが、車を運転して迎えに行った。駅の改札付近に立つかれをすぐに目聡く発見できた。巨額、巨頭のかれに幼い日の面影を見出すことは案外に容易であった。かれを招じ入れた我が家の事情はつい前月に母の帰幽を見送ったばかりで、この日のかれの訪問がもう少し以前であったなら、再会はいっそう劇的であったろう。母はもちろん桂太郎君を知っていたはずであった。息子のわたしの同級生として常々敬意を惜しまなかった話題からも、また、なにかの折に、同君を見かけて教えることもあった覚えがあるからであった。

「偉い子ねぇ、鳶が鷹を産んだのねぇ」

賛嘆の言葉としては少々おかしく、また失礼でもあったが、他意なく発した言葉であった。

「これは四年生の時の写真だけど、君がここに写っている、持っておられないかも知れないと思って複写したので進呈します」

わたしは同じ写真をもっていたのだが、

「ありがとう、この四年生まであなたと同じ組だったけれど、五年生のときあなたとは別れて三組に何人か一緒に組変えになった……」

「覚えている、覚えています」

このような経緯から言うなら、五十三年ぶりの再会とした実際はこの組替えの事実から、さらに二年をさかのぼることになるのであった。

かれは写真のほかに、大切に抱えてきた別の紙包みをあけ、一枚の色紙を取り出し、

「これはあなたへささやかなプレゼント、徳田先生の書です、飾ってあげてください」

それは次のような好ましい対句を揮毫されたものだった。わたしは先生の雅号を「翠山」とはじめて知った。

鳶飛
魚躍
翠山

かれの心遣いは嬉しく、ありがたく頂戴した。なによりの贈物であった。

徳田先生は書に堪能で、「習字」の時間には模造紙の全紙大のものを用意され示範の筆をとられた。それも児童が筆順、筆の跳ね、止め、を会得しやすいように掛け具から垂直に下げた紙面に墨したたるのを厭わず大書し、お手本を示されたものである。

「チョン、ツー、チョン」

熱意あふれる授業ぶりであった。先生は晩年書家としてかなりの老齢まで私立高校の書道の講師としてお勤めであった。

さて、わたしは桂太郎君とは四年生を限り、別れを余儀なくされる運命に落ちたことは触れたとおりである。五年生へ進級に際し、別学体制による新男子三組に編入されたのである。

「自学自習」と称し、自分は夜間の大学高等師範部に通っているため、ロクロクまともな授業をせず、教卓上にノートを広げ整理に忙しく、自学自習を命じておいて、ときどき机間巡視のために教壇を降りるという怠惰教師にわたしはぶつかっている。五年、六年の大切な時期であったから、これを天の下した配剤というにはあまりにも口惜しいことであった。

（六年間担任不変であったことは、私たちにとって、今もって幸せであったと思っている。）

とわが桂太郎君は記している。一年生では郡司先生であった誤りは指摘したが、おおむね同君の厚くうけた恩顧の念は了解できる。それに比して往時の少年反乱軍兵士に属したわたしは運がなかった。満洲へ罪なきにかかわらず派遣をうけ死地を与えられた。二・二六事件の真の反乱軍兵士よりはまだましなのかも知れぬ。昭和十年徴集というかつての兵籍に属するわたしたちの仲間でも中学同期の一人がこのケースで戦死している。

戦争も苛烈を加えた昭和十八年十一月二十九日、私が二十二歳の時でした。

とかれの夫人和子さんの手記は語りかける。

はじめての出社のその日、配属された経理課で仮の椅子を与えられたのだが、その椅子こそは休暇で空いていたかれの椅子だった。目に見えない縁の糸の不思議であったろう。もちろん安田銀行でのことなのである。

第二国民兵だったかれは明くる十九年七月には召集を

うけるのだが、三ケ月の教育だけで復員し、銀行に復帰している。

ついでながら、わたしの召集はかれより少し遅れた九月で、三ケ月後、半数が教育期間を終えて召集解除になる一方に、残されたわたしたちはやがて救命綱を持たされ、（かまぼこ要員）として原隊から放り出されるあんばいに転属という籤を引いている。人間万事塞翁が馬とはよくぞ言ったものだ。

戦火の中での四月十三日

（略）

この日も朝から空襲警報が出ておりましたが、家を出る頃には幸い解除されました。三越の式場についた私はモンペ姿から花嫁姿にすっかり変わり、自分ながらとまどっておりました。

（略）

当時、彼は両親の家とは少し離れた所に家を借りており、これが新居となるはずでございました。ところが二月の空襲で焼け出された知人に二間のうちの一間を貸してあったのです。それで夜のみチェンジ、私たちが両親の家で寝む手筈になっておりました。

（略）

恐れていた空襲警報が発令されたのです。午後十時頃だったでしょうか、とりあえず床下の防空壕に入り、様子を見ておりましたが、向こうの家が焼け、両親がこちらへ逃げて参りました。その中、こちらの家も危険になり、荷物を駒込吉祥寺の墓地内へ運び出すこととなりました。

（略）

敵機が去り焼け跡の物干しにすがって、まだ燃えている炎を呆然と見ていた私の姿が今なお思い出されます。

（略）

その夜は墓地内の荷物によりかかり、眠れぬ一夜を明かしました。

なんという初夜であったことか、この夜はもちろん昭和二十年、空襲は三月十日を含める東京五大空襲の一つで、十四日朝にかけて大塚、王子、池袋、淀橋などの城北を中心に大きな災害をもたらしたものであった。

鈴木桂太郎君の義侠心の厚さはここに引用させてもらった夫人の手記中にも明らかな一例を伺える。焼け出された友人に新居を予定、せっかく確保していた家の二間のうち一間を提供する行為にも読み取れる。とうてい余人のよく真似し得ることではない。（それで夜のみチェンジ）と何気ない、ユーモラスな夫人の表現の中にも、やはり人柄を偲ばせるものがある。戦争末期の厳しい状況のさ中に結ばれた夫妻のその後に、幾多迎えられたはずの艱難を思わずにいられない。

夫人の手記はさらに後の章を、

三十年後の四月十三日

として、昭和五十年の同月同日、わが桂太郎君の還暦の祝いと夫妻にとっては真珠婚の祝いをかねて、ささやかな祝宴を催したいきさつが記されている。弟妹、姪、それに、それぞれ社会人に成長している保彦、敏郎、良雄の三子、とくに長男の保彦君にとっては婚約披露の機会ともなり、そのフィアンセも招待され同席するという和気に満ち、賑やかな宴であった。会場は駒込駅に近い「思い川」で、さきの四月十三日とはまさに対照的な、一陽来復の内容にホッとする思いを読むものに与えている。

その後、あの再会の日から二年余を経て、わたしは桂太郎君からはからずも「昭三会例会のご案内」という呼びかけを頂いた。昭和五十九年十月二日付で会員各位あてというものだ。幹事は日向卯七君とかれの連名であった。卒業時の同級ではないわたしなのだが、触れたいきさつのように元同級生には違いない。言わば客員とでも言うべき立場なのだが、母校周辺の散策とあわせて亡き中島章君の墓が会場に近いので墓参をしたいという趣旨が添えられていたことで、わたしは心を動かされ、出席する旨を伝えることにした。駒込吉祥寺の筋向いにある「魚菊」が会場であった。

この当日のことは中島章君も同学の中学校同窓同期の会に「雪友会」があり、そちらの方へ寄稿した文章があるので、写しておきたい。ここにいう中島君はあの副級長辞退を叫んで席を蹴った、当の章君に外ならない。

養昌寺展墓のこと

（略）

養昌寺は樋口一葉の師、半井桃水の墓所でもあり、門前に文京区による表示が立てられている。余事ながら桃水が一葉の師であり、情人であると明らさまに説明されていたように思う。数年前、一葉関連の探訪をしており、私としては思いもかけぬ再訪ということになった。

中島家の墓は本堂の左手の塀ぎわにあった。メンバーの誰かが線香と手桶を用意してくれ、われわれはそれぞれの思いを抱きつつ手を合わせた。

徳運院仁山章居士

と「中島家之墓」とある墓石の側面に戒

名は読める。昭和三十九年二月十日という没年に添えて勲位が刻まれ、四十八歳とある。この没年は東京オリンピックの年にあたることに気づくと、あまりにも早逝という恨みを禁じ得ない。ちなみに並ぶ戒名は大姉とあり、行年から母上のものと明らかに推察される。その没年は四十八年とあるから、これはまさに逆縁なのである。そう思うと、なおさら胸うつ思いにかられる。

その時、ふと気づくものがあって、墓前に一枚の名刺がそっと置かれているのを発見した。

「これは恐らく中島君の軍医時代の衛生兵かなにかに違いない、彼岸に来れなくて、昨日あたり線香を供えに来たものだろう、この花もその人が供えたに違いない」

この推理は当を得たものではなかったかと思われる。私もその名刺をのぞいて見ると、某保健所吏員の肩書きで医師のものではない。なるほどと思ったことだった。故人が部下に慕われていた事実としてこれを思いやると、せめてのこと、なにやら爽やかな気持を覚えた。

故人は医家に生れたために幼少から十字架を背負い、その一生を縛られていたと考えることは間違いであろうか、一高、東大とエリートコースを歩んで医者になることは運命づけられた道であった。

（略）

かれの一高合格の消息を聞いたとき、

「ああ、とうとうやったな」

という思いが走った。小学校で同級の上に、中学では五年生のとき、またクラスを同じくした関係から、かれが人間的にも成長し、しかも大変な勉強家ぶりを間近く見ていたから、なおさらそう思ったものだった。

東大柿沼内科の医局員としては、「血液学」の研究で将来を嘱望され、学位もまたその分野の研究によるものだったと聞いている。海軍の軍医としては随分危険な思いをしているそうで、帰還後は医局に復職してからの研究業績を高く評価され、いまに語り種になっている由に聞いている。

やがて、逓信病院の内科部長に迎えられ、転出後に間もなく病に倒れたものだという、死因は肺癌であった。

かれの長男はあの学園紛争のただ中の東大医学部に日比谷高校から進み、いまは信州大に勤務する医師である由。医家の宿命三代におよぶことを聞いている。

右の「昭三会」の例会は十月二十八日の日曜日であった。集まった十一名の大方は同じ昭和三年の卒業とはいえ、他クラスから出席のわたしにとって、五年生の時の組変えで別れていらい、五十八年ぶりの再会であった。

わたしは桂太郎君の慇懃な紹介をうけた。

（ほう！）といった空気が流れたように思う。

席上配布された名簿は心利いた配慮でわたしの名前を加えて十七名、消息不明十六名、物故十五名というすべての氏名が当日現在として載せられていた。戦争を隔てた半世紀余の今に、しかも小学校同窓の会がこれだけ、よくぞと思われ、かつての級長が健在であり、今も級長である事実に驚かねばならなかった。遺憾ながらわたしの男三組はこれまでただの一度のクラス会も開かれていないのである。一貫して会の世話をつづけてきた桂太郎君の熱意のほどは驚嘆に値する。つい先年、徳田安貞先生が九十五歳の高齢で亡くなられるまで、尊敬をおかずつねに主賓に仰いできた事実もまた美しく羨ましい限りだ。わたしが辛うじて会釈を交わし得たのは中学を同じくした西村正衛君だけであった。

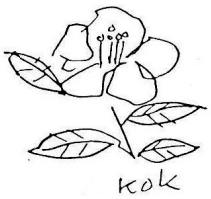
「君は反乱軍だったのか」

と喝破の言葉を吐きかけられたのはこの席である。その広瀬慶薫君はわたしの隣に座を占めていたものだ。名簿に照らし幼なの記憶をたどり、その人と思い出せる面差しは三人ほどであった。このクラスから中学を同じくしたのは欠席の山本健次君、物故者の列にある鈴木武樹君、中島章君の二人と出席で早稲田大学の教授の肩書きをもつ西村正衛君の四名であった。

わたしが出席に向けて心を動かされた中島章君の墓参はまさに実現した。あの四年生の時の一級長選挙事件の怨念は歳月に押し流され、反乱軍の事実もまた風化し果てた。そのことを証すかに墓参を発起し、実行したのは桂太郎君だったが、ついにそのような些事に触れず、端然とした姿勢を保っていた。その半生を顧みれば、さぞや幾多学歴社会のひずみに苦渋をなめられたであろうと想像されるのだが、かれは決して屈せず、すべての混濁を呑み下して超然として生き、靄然（あいぜん）として交友を重んじてきた。かれの偉さの真骨頂をここに見るのである。

平成五年五月十日、鈴木桂太郎君は幽界に旅立った。告別式は駒込の浄土宗天然寺で営まれた。法名は清厳院釋桂徳居士。その生誕、その食住、その死、その葬送のすべて母校周辺を離れることがなかった。わがケイタロウ君のこれからは多分だれ憚らずカツラタロウ君として幽界に生きられるのであろう。

（H六・九・三〇）



幻妖城異聞(三)

三戸岡道夫

(十)

磯貝小十郎が切腹し、寿丸の幽閉が終わると、晃長は、にわかに抑圧が四散して、自分が自由になっていくのを感じた。すると築城への渇望が、急速にふくれあがってきた。

はやく持仏堂を完成させて、つぎの城をどこかに作りたい。また、晃長個人用の能楽堂も作りたい、夢は上げ潮のように、盛りあがってくる。

しかし、笛川の、

「最初のうちは、政務におはげみにならねばなりませぬ。そうでないと、家臣の信頼を失います」

という言葉にしたがって、はじめは自分に課せられた使命に、まじめに取り組んでいた。

だから、しばらくのあいだ、晃長の評判はなかなかのものだった。若くて、背の高い、凛凛しい国主が、深山の国に誕生したのである。昨日までは深山城の奥深く、神秘の帷につつまれていた若君が、はじめて領民の前に姿を見せたのである。

「これほど美しい殿はない」

人々は嘆声を発し、晃長の出現は、新鮮なおどろきであり、希望の星であった。

すらりとのびた身体に、ぴったりの衣服をつけた姿は、立派だった。やや小さめに見える顔の形は、とととのいすぎているほどで、緊張しているためか、やや蒼ざめた色の顔と、鈴をはったような大きな眼との対照は、魅力的だった。

晃長が馬に乗って森や野を駆けるとき、踏みしだかれた野草の花や、け散らされた落椿の花を、近在の娘たちはひそかにひろって、袂に秘めてよろこんでいた。

しかし、いくら晃長が努力したとはいえ、晃長の国主ぶりは、とつぜん、なんの用意もなしに、子供部屋から国主の座にまつり上げられた人間の、ぎこちない演技にすぎなかった。

「いつまで、この状態がつづくものやら」

「早晩、この名声はくずれるにちがいない」

家臣たちのなかには、心配するものもいた。そして、こうした噂をいい幸いと、その危惧に火をつけて歩いている人間がいた。家老定国の妻の、染の井であった。

「もともと、国主の資格などない人が、なんの準備もなしに、国主になったのですもの。いつまでも、つづくはずはありません。きっと、そのうち、化けの皮がはがれますよ」

晃長がまちがって国主の座についたといわんばかりの、言いようであった。

染の井にしてみれば、国主の座を掌中にしようという陰謀が、寿丸の幽閉によって、出鼻をくじかれたのである。その無念さが、染の井をして、ことさら不穏な言動に走らせているのだった。

寿丸にたいする晃長の処置が、思いがけない非情さであったので、定国でさえもが、

(軟弱、夢想家と見えたのは、実は晃長の仮面であって、ほんとうは英邁、非情な国主なのかもしれない)

と、考え直したくらいであった。

(これは油断できない)

寿丸の幽閉という、予期せぬ事態が起きたために、定国の陰謀は、変更を余儀なくされているが、

(とすると、計画をやり直すにも、慎重でなくてはならない。晃長のの正体をじっくりとみきわめた上で、やることだ。軽々して行動はつつしみ、陰謀をさとられてはならない)

と、さすがに定国のほうは、染の井とはちがって、軽々しい行動はとらなかった。

一方、晃長のほうも、表面上そうした名声を得ながらも、内心では苦しんでいた。国主になったからといって、急に性格が変ったわけではない。夢想を愛し、孤独を好む性格は、これまでと同じである。いまは、それを無理やり、押えつけているだけである。

だから、そんな執政ぶりは、数か月とつづかなかった。やがて、晃長のなかで、築城への願望が急速にふくらみ、押えても、押えても、押えきれなくなってきたからである。

すでに、晃長は国主である。やろうと思えば、なんでも、できないことはない。

ある日、晃長の瞳に、とつぜん暗い翳が走った。ついに国の政務が重荷になり、限界に達したのである。ある日、評議の席上で、晃長はやや左に顔をむけ、上眼使いに焦点の定まらない視線を遠くに投げながら、

「そちたちとの話は、まったく無駄だ」

と、とつぜん言い放ったのである。

その声を聞いたとき、家臣たちは、

(殿は狂ったか)

と思った。
だが、そんな家臣の心情など晃長は無視したように、
「城を作る」
と言い放った。晃長の金属的に張りつめた大きな瞳のなかに、いつも深く沈んでいる不可解なものが、いつ動き出すかと心配していたが、それがついに動きだしたという恐怖が、家臣たちを襲った。
ただちに普請奉行がよばれた。晃長は頭ごなしに、
「城作りの準備にすぐかかるように」
と命令した。こうして、新しく国主になって晃長が最初に発した命令が、合戦の命令でもない、軍備の命令でもない、築城の命令だったのである。それも、軍備のための築城ではない、遊びのための築城なのである。だから、普請奉行の相良助之進は、
（えーっ）
と、内心おどろきの声をあげた。
まだ、前国主の喪があけるか、あけぬというのに、なんとしたことか。三年前からの持仏堂がやっと完成したばかりだというのに、もうつぎの城造りとは、いかなる魂胆か、理解できなかった。
しかし、命令にはさからえない。さからえば、磯貝小十郎のように、どんな口実を作られて、切腹させられるか、わかったものではない。
「かしこまりました。さっさくに」
と根良助之進は答えた。
「うむ、手ぬかりなくな」
「で、城は、どこへお造りになされまする」
「天神平じゃ、あそこがいい」
天神平とは、椿館と谷をへだてた対岸にある山頂で、風光明媚の評判の地である。場所の選定からして、すでに晃長の美意識が動いていると読みとれた。
となると、城の建築への注文もまた、きびしいものになろうと予想された。持仏堂の建立のときも、晃長の執拗な注文に助之進は辟易した。はやくもつぎの圧力が、助之進に異様な感じでのしかかってくるのだった。
しかし、そうした晃長と助之進とのやりとりを、家老の定国はその横で、平静に聞いていた。いや、平静というよりも、新しい築城をむしろ歓迎しているような表情が、定国の顔にはうかがえるのだった。
その定国のほうへ、晃長は顔を向けると、
「金はあるな」
と念を押した。
「大丈夫でございます。資金などをご心配なさらず、存分にお造りなさりませ」
勝手方の奉行を兼ねている定国は、落ち着いてそう答えた。だが、その口許に、他人にはわからない微妙な笑みが浮かんでいた。

（十一）
晃長が新しい築城の地を、天神平ときめたのには、理由があった。
天神平は、椿館の山頂と並ぶ峯で、谷は深く、森は密で、深山の国でも風光明媚の評判の地であった。椿館から望むその風景は、以前から晃長を酔わせていた。
椿館の天守から眺めると、見渡すかぎりの樹海のあいだに、天神湖や深い谷が見えかくれし、天神湖の水面には、雪の精のような白鷺がとんできて、静かに羽を休めていた。
北の方角に眼をやれば、壮大な鬼姫の連山が眺望され、あまつさえ、鬼姫連山へかけての森の奥は、平家落人伝説のつたわる秘境であった。だから、源平合戦の世界に耽溺する晃長は、たんなる秘境以上の愛着を、その景色に抱いていた。
晃長は好んでその秘境へ馬を走らせた。鬱蒼とした森の暗がりには、真紅の椿が、かがり火のように咲き、若葉が陽にきらめいて、燃えあがっていた。そのなかへ馬をすすめていくと、とつぜん、鎧兜姿の平家の落武者が、現われてくるような気がするのだった。
晃長はいつしか、この若武者たちが棲む城を、建ててやらねばならぬと、思いはじめていた。
そのためには、椿館の山頂から、西へ、谷をひとつへだてた天神平は、理想の場所だった。
だが、天神平を選んだのには、もうひとつの理由があった。それは、天神平には、晃長の先祖がつくった、中世の砦の廃墟が残っていたからであった。
応仁の乱以後、中央権力の衰えにつれて、地方の大名豪族たちは、きそって兵力の増強をはかり、築城にはげみ、弱肉強食の戦国時代に備えた。晃長の祖父、曾祖父たちも、他におとらぬ戦国の強者であった。城を築き、兵を養い、戦って領土を拡大し、国を富まして、今日の深山の国の基礎を築いたのである。
そうした城のなかのひとつが、天神平にあったのである。城といっても砦ていどのものだったが、峻嶮な岩山の頂に建っていたので、敵軍が来襲しても、深い谷にはばまれ、いずこからともなく霧が湧きでて、城をかくし、道をさえぎる、難攻不落の要塞だったという。
現在、晃長が椿館の天守から眺める天神平も、霧は樹間を縫い、崖をはいのぼって、時として、その森を幻のようにつつんだ。
深山の領内には、このような城や砦の跡が数多くある。昔の姿をそのまま残しているものもあれば、戦火に焼けて廃墟となっているものもあるが、晃長は、その数々を見て廻ったことがある。
そのなかで、とりわけ晃長の心をとらえたのが、天神平の廃墟であった。城は戦火に焼けて、昔の面影はなく、

わずかな建物の残骸と、石垣のあとだけが、散見されるだけであったが、そこにひろがる廃墟の美が、なぜか晃長の心を、妖しくさそったのである。そのなかを歩くと、そこで朽ちた祖先たちに逢えるような気がして、晃長の血がさわぐのだった。

父の頼之も、この廃城の再建を考えていたようであったが、実現されないままに、他界した。その父の意思を、はからずも晃長が継ぐことになったのである。そう思うと、天神平への築城は、水清寺の家霊の指示のような気がするのだった。

築城を思いつくと、ある日、晃長は馬を駆って、再度、天神平に行ってみた。天神平へは、背後の山奥を迂回しなければ、到達できない。晃長は、森のなかを奥へ奥へとすすみ、あわや道に迷ったのではないかと危んだころ、眼の前が急にひらけて、天神平の廃墟があらわれた。

戦火に焼かれ、風雨にさらされ、城の面影はすでにない。本丸の輪郭を示す残骸がかろうじて残り、ぼろぼろに崩れおちた城壁が、異様な形で横たわっていた。石垣は深い雑草におおわれている。

廃墟のまわりを、椿の森が押しつつんでいた。つややかな硬質の葉の照りかえしのなかに、真紅の椿が無数に咲きみだれていた。それは、まるで、この古戦場で散った中世の武者たちの鮮血が、そこによみがえったかのようであり、晃長は、花のひとつひとつに、話しかけてみたい誘惑にかられた。

椿の樹海の下陰は、まっ赤な落椿の海で、落椿の堆積は、廃墟のほうへも流れ出て、廃墟を落椿の血の色で染めていた。それは、あたかも、中世のつわものたちの流した血が、そのまま、生きて流れているかのように見えた。

頭上には、なにものにも邪魔されない青空が、無限にひろがっていた。

晃長はしばらく廃墟に立ちつくしたまま、これから築く白亜の城が、この森にそそりたつ姿を想像してみた。

（十二）

評定のあった翌日。

晃長は、普請奉行の根良助之進と、築城担当の久米武助を呼ぶと、具体的な打合せに入った。築城担当の久米武助は、

「はい、ただちに、調査、設計いたしましょう」

きまじめな表情で、そう答えた。武士ではあるが、武助は築城技術にくわしい男である。

やっと完成に近ずいている持仏堂建立の総支配も、もちろん武助がやった。わがままな晃長の指図を、武助は忍耐づよく実行に移し、もし武助がいなければ、持仏堂は完成しなかったであろう。その意味においても、武助

にたいする晃長の信頼は厚かった。

一ヵ月ほどすると、築城の計画図面が、武助から提出された。短期間にまとめたものであるから、精密なものではない。全体の構想をみるための、基本図案ともいうべきものである。

「天神平の地形も、二度ほど測量いたしました」

「うむ、ご苦労であった」

晃長は、武助の口から、

（殿のお見たてだけあって、測量すればするほど、築城に最適の地形だということがわかりました）

というような、讃美の言葉を言わせたがっているのだが、技術専門のまじめなこの男は、そのような追従をいっさい言わなかった。

「城のよしあしは、地形によって左右されまする。測量いたしました地形にしたがって引きました図面が、これでございます」

晃長は図面を手にとった。晃長の顔に、どんな表情が浮かぶかと、武助は注意ぶかく晃長のほうをうかがったが、武助の期待する反応はあらわれなかった。

「平凡すぎる」

晃長は、ぶつりと、切るように言った。気に入らなかったのである。

「わしがほしいのは、こんな城ではない。もっと特異なもの、美しいものだ。こんな図面に、一ヵ月もの時をついやすとは、むだなことだ」

晃長はいらだたしげに、武助の顔を見た。

（わしのほしいのは、どこにでもある、こんな城ではない。これまで持仏堂をいっしょに作ってきて、わしがほしい城の形がわからぬとは、鈍いやつだ。いちいち具体的に言わなければわからぬのか）

晃長の胸のなかは、煮えくりかえっていた。だが、その思いが武助にはわからないらしく、

「それでは、たとえば、どんな城を」

と質問してくるのだった。晃長は、にわかに感情がたかぶり、声を荒げて、

「安土城じゃ」

と言い放った。

武助はそれを平然とした顔で聞いていたが、驚いたのは普請奉行の根良助之進であった。奉行の立場にある助之進としては、聞き逃すことのできない言葉である。安土城は、織田信長が天下制覇を誇示するために、造営した、いわば天下人の城である。

「あんな大きな城をつくって、どうなされます」

「いや、大きさではない。美術の粋を集めた安土城の、絢爛さがほしいのだ、聞けば、城の外観も、内側も、造形、装飾に工夫をこらし、さながら芸術の殿堂の観を呈しているというのではないか。わしも城を作るのなら、あのような城を作りたい」

助之進はだまって、その言葉を聞いていたが、内心では、

（冗談ではない。あれは天下人の城なのだ。天下に権勢を誇る信長にして、はじめて作ることができた城なのだ。天下人でもない殿が、そんなものを真似て、どうするのか）

そうした言葉が喉まで出かかっているのだか、癇癖のつよい晃長の顔を見れば、まちがっても、そんなことを言うわけにはいかなかった。

いま晃長のなかで沸騰しているのは、城づくりの夢と、あこがれと、願いの、混合、混乱、とでもいうべきものだった。晃長のなかに、まだ、これといった城の形が、はっきりと出来ているわけではない。

（ああいう城を作りたい、こういう城を作りたい）

という、夢と空想がうずまき、ぶっかりあっているだけだった。

当時、戦国時代の築城は、織田信長がまばゆいばかりの天守閣をもった豪華絢爛の安土城を作ってから、にわかに造形的な美の進歩を示してきたといってよかった。だから、安土城は、晃長のあこがれの的であった。

だが、それだけでは晃長は満足していなかった。さらに、宇治の平等院のような優美さも、取り入れてみたいのである。天神平の山頂に、極楽鳥が羽をひろげて止まったような、豪華美麗な城を作りたいのだった。

だから、晃長の夢は、はてしなくひろがっていく。

「よいか、城郭建築に参考になるものなら、なんでも調査、研究するのだ」

と晃長は命令する。

「はい」

「昔の建築物の研究が、必要だ。たとえば、京の金閣寺。もっとさかのぼって、宇治の平等院。それに、安芸の厳島神社はどうだ。水に浮かぶ朱の廻郭の、美しさは格別だ。どうじゃ、平等院と厳島神社とを合体したような、水中城を作るのだ」

「水中城を申されても、殿、天神平は山頂でございます」

「ばか、頭をはたらかせよ。天神湖の水を、城のなかへ引くのだ」

晃長の発想は、自由奔放といおうか、支離滅裂といおうか、技術畑の久米武助には、ついていけなかった。

「海のむこうの中国では、城のことを金殿玉楼というではないか。古文書のなかから、そうした絵をさがすのだ。桃源郷の絵も、いつか見たことがあるが、そのなかの南蛮城の姿も、忘れがたいな。そうしたものを、すべてとり入れるのだ」

武助は、あいた口がふさがらないといった感じで、なめらかに動く晃長の唇のあたりを、見つめているばかりだった。

「わかったか」

「はい、すこしは、なんとなく…」

「要は、美の統一じゃ、結晶だ。安土城と金閣寺、平等院、厳島神社、金殿玉楼、南蛮城、いや、もっと他にも、たくさんあるかもしれない。そうしたものを合一して、美の粋を作るのだ」

「……」

武助は返事をすることも忘れて、晃長の言うことを理解しようと、頭のなかで一生懸命考えている。

（別の言い方をすれば、城と御殿を統一することだな。お手本は、たくさんある。その美の粋を集めて、天神平の頂に統合するのだ）

晃長の言うことを、武助は、言葉としてはなんとか理解できた。しかし、現実にそんなことができるわけがない。だが、主命とあれば、受けざるをえない。

普請奉行の根良助之進と、築城担当の久米武助は、

「殿の志の高きも知らず、われらの精進不足、汗顔の至りでございます。さっそく研究して、図面作りをいたすでございましょう」

這う這うの体で、晃長の前から退出した。

詰めの部屋へもどると、武助は、図面方、普請方の責任者、棟梁などをよび集めると、晃長の要求している内容をよく説明し、手わけして、日本の有名な建築物への調査へ、四散していった。

家臣に、城の工夫を命ずると同時に、晃長は自分でも、城の設計に熱中した。

夜の闇がすっぽり奥御殿をつつむと、晃長は、笛川の古鏡の前にぬかずいて、鏡のなかに城の形があらわれるのを待つのである。

御殿の屋根の上に、

ぽたり

ぽたり

と、椿の花が落ちる音が聞こえてくる。その落花の肉感的な音を耳にしていると、そのなかへ魂が吸いこまれていくような気がして、晃長の心は、この世のものではなくなるような、気持になるのだった。すると、晃長のなかに、奇妙な独創力が生まれ、天外の奇想がわいてくる。

古鏡の奥がぼっとかすんでくると、そこに、夢の城が姿をあらわしてくる。それは、これまでに晃長が見たこともない珍しい城や、高楼の形だった。正面からのものもあれば、側面からの形もあり、俯瞰図もあれば、全体像や部分像もある。

それを見ていると、城の美とは、単独にあるものではなくて、天守閣と櫓、城壁、城門、回廊、石垣と、もろもろの建築物の組み合せの妙のなかに、あることを知った。種類の異なった建物が、さまざまな構成で、重畳的

に、ときには分散して組み合わさるなかに、思いがけない美が展開されてくる。

晃長は筆をとりあげると、古鏡のなかの城の形を、すばやく紙に書きうつした。

その作業は、夜を撤して行われた。

ぼたり、ぼたりと、椿の落花は、一晩中つづいている。

こうして、明け方までに、何十枚という城の素描が、晃長の筆先から生まれた。

（十三）

それから一ヵ月がすぎた。

そろそろ晃長の顔に、いらだちが見えはじめてきた。晃長は物事に激しやすい。思いついたら、すぐ出来てこないと、気がすまない。それなのに、まだ築城担当の久米武助からは、なんの反応もないのだった。

普請奉行の相根助之進や久米武助が、東奔西走し、努力しているのはわかっていた。だが、なんとしても、時間がかかりすぎる。それをかろうじて我慢しているのは、ひとえに、すばらしい構想が出てくるのを、期待しているからであった。

「すっかり準備がととのいました」

ある日、久米武助から報告があった。

「こんどは大丈夫か」

「はい、よく研究、工夫いたしました。ご期待にそえるものと思います」

あいかわらず、武助はまじめ一筋である。

「では、その期待にそえるものを、見せてもらおう」

打合せの評定は、晃長の居間で行われた。おびただしい資料が運びこまれ、根良助之進、久米武助のほかに、今度は、図面方、工事方、それに町方の人間ながら、棟梁も加わっていた。

座の空気は、前回のときよりも緊張している。

まず、久米武助の説明からはじまった。

「城といえば、ただちに天守閣を想像し、天守閣が城郭の本体だと考えがちですが、城郭の真の価値は、天守閣にあるのではございませぬ。城郭の本体は、その縄張りにあります」

縄張りとは、城郭全体の平面計画のことである。たんに建物だけの平面図でなく、城の立つ台地全体の形、濠、石垣、それに建物の形、その数、その組合せ、つながり方、配置などを総称した、城郭全体の総合構想のことである。城造りに縄張りが一番重要なことは、城造りの鉄則であり、武助に説明されるまでもなく、晃長も知っていた。晃長は、とりあえずだまって聞いていた。

「城の本体は、地形を巧みに利用しつつ、塁と濠とをどのような形に配置して、敵との攻防に適した郭に固めるかが、築城の基本でございます。天守閣、桜門、櫓などの建物は、いわばそれに付け加えられました、付加物にすぎませぬ」

「でも、天守閣のない城は、城ではない」

「御意。たしかに、天守閣は城の象徴であり、同時に、物見、指令、貯蔵などの役割をもった重要な建物でありますが、しかし、城郭全体の基本からみれば、たんなる一建築物にすぎませぬ」

城をなんのために作るのかという、機能論からいえば、武助のいうとおりなのである。武助は、やや言いすぎたかなと思ったが、これから説明する内容を理解してもらうためには、この点を最初にはっきりさせておかねばならぬと思い、あえて強調したのだった。

「縄張りには、古来、三つの型があります。輪郭式、梯郭式、連郭式でございます」

輪郭式というのは、本丸を城の中心に置き、二の丸、三の丸をそのまわりに、同心円形に配置したもの、梯郭式というのは、本丸を頂点として、裾のひろがった梯子形に、二の丸、三の丸が並んでいるもの。連郭式というのは、本丸を中心に置き、その左右両側に、二の丸、三の丸を配したものである。

「縄張りは、この三つの形式を基本といたしますが、実際の築城では、地形が千差万別でございますので、それに影響され、城郭の配置は、不規則で、複雑なものができ上るのでございます。要は、そのいくつかの形のなかから、城の使命である防御に、どれがもっとも適しているか、それを選んで、縄張りの図面を引くわけでございます。さいわい、天神平は、山は高く、自然の渓谷で守られた、天然の要塞でございます。その地形を活用して、この縄張りを引きました」

武助は自信たっぷりに、図面をひろげて見せた。

だが、晃長の表情には、それほど活き活きしたものが、あらわれてこないのだった。やはり、なにかが図面に不足している。

こんどの図面には、前回とちがって、晃長の指示が生かされ、研究されている。晃長の指示通り、安土城の一部や、平等院の一部を、そのまま持ってきたようなものもあり、未熟ながら、努力のあとはみせている。

だが、晃長の心は、

（違う、違う、ぜんぜん違う）

と、波のようにいらだち、

「美の複合的な創造がない」

鶏（にわとり）が時をつげるような声で、そう叫ぶのだった。叫ぶ声が、一音階、高くなっている。

だが、むつかしいことを、いきなり言われても、武助たちにはわからない。実際に図面を引いている者には、複合とか、創造とか、抽象的な言い方でなく、はっきり、こういう形だと具体的に言ってくれないと、わからないのである。

「たしかに、前回の案よりは、美しくなった。城の形も、屋根の形も、櫓の形も、そして城郭の縄張りにも、工夫が見られる。しかし、どれも、ばらばらだな」

「具体的にお教えてくださいませ」

「たとえば、この石垣じゃ。この石垣は低すぎる。塁の上に、わずかな石垣があるだけで、これでは、城の姿が見栄えがしない」

「お言葉を返すようでございますが、そこは山の基盤が固うございます。石垣を積むよりも、自然の岩を使い、足らないぶん石を積んだほうが、堅牢でございます」

「いや、必要なのは、堅牢さではない。美だ。いいかな、よく聞け。城がいかなる石垣の上に建っていたら、もっとも美しく見えるか、それを工夫するのだ。石垣が低い城は、ずんぐりとしか見えぬ。高い石垣に、高い天守閣が立つ、その両方が綜合的に調和して、はじめて天にのびる城の高さが生まれるのじゃ。城は、堅牢であればいい、というものではない」

「……」

武助たちには、合点がいかない。

もちろん、城は領国の象徴であり、国主の権威の象徴でもある。安土城がそうであるように、豪華さ、華麗さは、必要である。しかし、それはあくまでも、城が戦闘防御の機能をじゅうぶん備えた上でのことである。

（城の美のために、堅牢さを犠牲にする）

などということは、本末顚倒である。

だが、晃長は、

「この石垣の線もそうじゃ」

と、別の石垣の線も指さし、

「ここは直線だが、もっと勾配がほしい。そうでないと、天守閣の優美さが生きてこない。また、となりの石垣との調和からみても、この石垣には曲線が必要なのだ。この図面には、直線ばかりの石垣が多すぎる。直線と曲線、二つの線が巧みに組み合わさってこそ、石垣の調和の美で出てくる」

「ではございますが、石垣の勾配は、城が乗っているその土地の、地盤と深い関係がございます。地下に堅い地層がない場合には、石垣の裾をひろげて、曲線にし、底辺の面積を大きくすることによって、支える力を強化します。しかし、天神平は地盤は強固で、その必要はあまりございません」

「必要があるかどうかを言っているのではない。必要がなくても、この石垣へは勾配をつけるのじゃ」

武助がただちに返事ができないでいると、今度は、

「おや、これには勾配がついているな」

「はい、天神平にも地盤の弱い地点がありまして、二カ所ほど、勾配をつけなくてはならぬところがあります。これは、その中のひとつでして……」

「いや、この石垣は、直線のほうがいい。もっときつい、直線にしろ。ここは、森をこえて、はるか鬼姫連山を見渡す場所だ。直線に立ちあがった石垣が必要だ。ここは、天神平城のなかでも、もっとも峻厳な美が生まれるところだからな」

「おそれながら、この地点は地盤が弱うございますから、勾配をつけませんと、城郭の重みを支えきれません。もし、どうしても直線にするというおおせならば、天守閣を低くするしか、手がありませんぬ」

「天守閣を低くするんだって…、とんでもない。天守閣は一寸でも高くほしい。それを工夫のが、築城担当者の仕事ではないか。いまは、城の美を検討している段階だ。まだ、決めもしないうちから、あれもだめだ、こもだめだ、だめだ、だめだという弱音ばかり、はくな」

（十四）

晃長と武助の意見のくいちがいは、天守閣についても同じだった。

武助の引いた天神平城の図面は、天守閣の東西に城郭を大きく張り出させ、四隅にそれぞれ隅櫓が配してある、形からすれば連閣式の一種といってよかった。

だが、晃長の眼から見ると、隅櫓を結ぶ対角線上に、同じ高さの櫓が二つ重なるだけで、変化がない。また、天守閣との調和の美もない。

「小天守閣を追加したら、どうかな。そして天守閣と小天守閣とを、橋台で結ぶのだ。そうすれば、天守閣、小天守、隅櫓と、大中小の調和が出てくる」

「いえ、小天守閣は必要ございません。四つの隅櫓があれば十分でございますし、また、そこへ小天守を作ることは、構造的にも無理でございます」

「わしは、小天守が必要だから作れといっているのではない。城の美のために、作れといっているのだ」

晃長はしだいに、武助たちといくら話しても、だめだと思いはじめた。いくら話しても、この石頭の武助には、わからないのだ。晃長と武助のあいだには、美意識の相違がある。この点を、一度はっきり言っておかなくてはならないと、晃長は、

「さきほど、城の基本は縄張りにあり、天守閣はその付加物のひとつにすぎない、と申したな」

「はい、申し上げました」

武助は両手を膝に置き、神妙に答えた。

「わしの考えは、それとはちがう。いいか、よく聞け。城の中心は天守閣なのだ。その他のものが、天守閣の付加物なのじゃ」

「と、申されますと……」

「さきほどから何回も言っておる。美だ。城の美だ。戦いのために、城を作るのではない。美のために、作るのだ。城は美しくあらねばならない。美しくない城は、

城ではない。天守閣がその美の象徴なのだ。天守閣はけっして城郭の付加物ではない。城郭の中心であり、城の美の中心に座っているものなのだ。その天守閣を引きたたせるために、縄張りがあるのだ。縄張りが城の基本ではなく、城の基本は、天守閣の美なのだ。勘違いしてはならぬぞ」

（いえ、それはちがいます）

と、声が喉まで出かかったが、晃長の勢いに圧倒されて、武助は声が出なかった。

「さきほど、天神平の地形をよく調べて、縄張りを引いたと申したな」

「はい」

「なら、その地形をよく活かすことだ。そしたら、こんな図面になるわけがない。わしが天神平をえらんだのは、地盤が堅牢だからではない。風光明媚だからだ。いってみれば、城の美しさが、もっとも発揮できる場所だからだ。だから、その地形を、城の美のために、工夫、利用するのだ」

晃長は、美を観賞するために、城を作るのだという。これでは、城の否定ではないか。

（考え方が、根底からちがうのだ）

と武助は、自分の仕える君主が、城の機能を否定した城を作ろうとしていることに、はじめて気がついて、驚くとともに、恐怖を感じた。

事のよし、悪し、ではなくて、思想のちがいなのである。この違いを直すことなど、できそうになかった。

（だが、殿がやれと命ずるのなら、やらざるをえないであろう）

晃長の城への思い入れは、晃長の源平合戦への思い入れと、同じなのであった。晃長は現実の戦いは大きらいなのに、中世の合戦は好きである。それは、合戦が、戦う合戦ではなくて、観賞する合戦だからである。城も、自分がこもって戦う城がほしいのではなく、観賞用の城がほしいのである。

しかし、武助は口にこそ出さぬが、心の底で、

（果して、こんな命令に従って、本当にいいのか）

という心配が、消えないのであった。

戦国の時代は、終わってはいない。ますます、たけなわの感があり、寸時の油断も許されない。どの国でも、城を築いて戦いに備え、武力をたくわえ、血で血を洗って争う世の中である。

そんな時に、城の機能を放棄した、ひたすら美のための城を作るなんてことは、狂気の沙汰としか、武助には思えなかった。そんなことをして、本当にいいのか。こんなことをしていたら、深山の国は滅びてしまうであろう。

だが、武助一人がそう思っても、どうなるものでもない。

だが、このような場合、まっ先に、君主をいさめて、正道にみちびく立場の家老の定国が、いさめるどころか、築城をむしろ煽るような態度をとるのは、いったい、どうしたわけなのであろうか。

それに、城を作るとなれば、厖大な費用がかかる。たとえ観賞用の城だといっても、箱庭の城を作るわけではない。模型の城を作って、

（はい、これが美の象徴でございます）

といって、すますわけにはいかない。現実に美のための城を、天神平の山頂に建てねばならないのである。

美しい城をということになれば、施工、細工に金がかかる。内部も種々の工芸で、飾りたてねばならぬであろう。普通の城を作るよりも、費用がかさむと覚悟せねばならない。

その費用を、いったい、どこから捻出するのか。そんな金があれば、深山城の狭間を直し、鉄砲を購入し、馬をふやすべきではないか。

すると、そんな費用についての議論がもち上るのを、ぴたりと封ずるかのように、それまでひとことも喋らなかった家老の定国が、口を開いた。

「費用につきましては、この定国にお任せになって、心配なく、ご存分に、城をお作りなされませ」

築城計画の席に、定国が列席しているのは、家老の立場よりも勝手奉行の立場であることを人々に認識させるように、そう言った。

家老の定国が、勝手奉行を兼ねているのには、理由があった。軍力が中心の戦国の世でも、最後にものをいうのは、金の力である。金を握るものが、実権を握る。それを骨のずいまで知っている定国は、勝手奉行の職をはなさないのである。

もっとも、その定国も、

（費用を心配せずに、城を作れ）

とは言ったけれでも、内心では、その費用をあれこれ胸算用しているのだった。

山国である深山の国の財政は、それほど豊かとはいいがたい。持仏堂につづいて、今回の築城であるから、その資金の捻出は、実のところ、容易ではないのである。

だが、定国は隠し財源を握っていた。それは深山灘にうかぶ荒磯島の、金山であった。資源の乏しい山国が今日あるのは、この金の産出がひそかに財政をうるおわせているからであった。

この金山をもっと掘れば、金の産出量をさらにふやすことができると、定国はにらんでいた。そうすれば、城作りの金ぐらい、なんとか捻出できるであろう。

だが、そのためには、金山の開発を、もっと進める必要がある。

「それにつきまして、殿に、ひとつ、お見せしたいものがございます」

定国は慎重な口調で、そう言った。
「なんじゃ」
定国はだまって立ちあがって、部屋を出ていった。晃長もそれにしたがう。二人は天守閣へのぼっていった。
眼下にひろがる樹海のかなたに、おり重なるようにして、山脈が海岸までのびて、その先端が急に海へ落ち、絶壁となっていた。その延長線上の海上に、荒磯島は浮かんでいた。大昔は、深山の国と荒磯島とは、陸つづきだったのにちがいない。
定国はその海上を指さして、
「あれを、ごらん下さりませ」
「荒磯島か」
晃長も、天守にのぼったときは、いつも眺めている島である。
「さようでございます。あの島があるかぎり、築城の費用は大丈夫でございます」
荒磯島で金の採掘がはじまったのは、それほど古いことではなく、晃長の祖父の時代からである。中世のころ金鉱脈が発見され、島民が細々と採っていたものを、祖父が開発に力を入れて、生産量を上げたのである。
荒磯島で金が採れることを、もちろん、晃長も知っている。
だが、毎年、どのくらいの金が産出され、それが財政をどの程度までまかなっているのかは、知りもしなかったし、知ろうともしなかった。定国しか知らない極秘事項だった。定国が勝手奉行の職務を手放さない大きな理由のひとつは、この金山の支配権を手放したくなかったからだった。
「そんなにたくさん金が採れるのか」
と晃長は眼を輝かせた。これまで晃長の眼には、遠くにひろがる景色の一部分としか映っていなかった荒磯島が、にわかに、なまなましい人間の欲望の反映として映ったのである。
「ただいまのところは、それほど規模も大きくありませんので、たいした量ではありませんが、鉱脈は豊富ですから、掘れば産出量はふえましょう。天神平城の費用ぐらい、この定国が責任をもってお作りいたします」
「うむ、頼むぞ。さすが、叔父上じゃ」
「かしこまりました。それではこの機会に、金の増産態勢を推進することといたしましょう」
「うむ、やってくれ」

（十五）

その日、定国は晴れ晴れとした気分で城をさがり、屋敷に帰った。
筆頭家老の地位にあり、水清寺家の血筋を引く定国の屋敷は、三の丸のなかにあった。構えは城主晃長が住む本御殿や奥御殿ほどではないが、かなり立派な屋敷構えである。内部に入ると、どの部屋も贅がつくされ、城主の御殿の内部にひけをとらなかった。
屋敷にもどると、妻の染の井が、猫のように寄ってきた。
「お帰りなさいませ。いかがで、ございましたか」
いかがでございましたか、とは、今日の築城の評議のことであった。
「うむ、うまくいった」
定国は茶を喫しながら、そう返事した。目的を達成する前の、階段を一つ一つ確実にふみしめていく自信のようなものが夫の顔に溢れている。その横顔を頼もしげに見上げながら、
「すると、殿は、金山の開発の拡大に、さんせいされたわけですね」
染の井は猫の目のように、瞳をかがやかせた。
「そうだ、築城の資金を作るために、金の増産をはかりたいといったら、たわいもなく、ただちに『頼むぞ』と言われた」
「それは、ようございました。これで、仕事が、やりやすくなりましたね」
染の井は、袖で口をおおうと、
ほ、ほ、ほ、
と、これも猫のような顔で笑った。
仕事がやりやすくなったというのは、荒磯島の金山から産出する、金の着服であった。
金の産出の差配いは、すべて定国がにぎっている。どのくらいの金が産出され、それがどのように処分され、どのように使われるのか、そのすべてを定国がにぎり、誰も知らない。
だから、その中から、定国がいくら抜き取って横領しようと、思いのままで、これまでに定国が懐に入れている金は、相当の金高にのぼっていた。定国の屋敷がことのほか立派なのも、横領した金があればこそだった。屋敷内での暮しぶりも、城主晃長以上の贅沢さをきわめていた。
しかし、人間の欲には、きりがない。定国は、次第に、それだけでは満足できなくなってきた。もっと、横領の金額をふやしたい。だが、金の産出量がいまのままでは、横領する金額にも限界がある。
横領の金額をふやそうと思えば、金の産出量をふやす必要がある。そのためには、金山の採掘能力を強化しなければならぬ。坑道の拡大、新しい坑道の開発、そのための設備の増強、人夫の投入などである。
前々から定国と染の井は、その機会をねらっていた。すると、その機会を、晃長の築城計画がうまく与えてくれたといっていい。
「この機会を逃がさずに、うまくやることですね、お

金はいくらあっても、ありすぎるということはありません。なにせ、これから、国主の座につこうという、お前さまです。家臣を手なづけるにだって、他国の国主とうまくやっていくにだって、お金がいります。そのためのお金を、いまのうちに、貯めこんでおかねばなりませんからねえ」

「しっ、めったなことを、口にするでない」

定国は、染の井の口をふさいだ。

「女はどうも、口が軽くて、いかん」

「ほ、ほ、ほ…、大丈夫でございますよ。こんなことを言うのは、お前さまの前だけですから…」

そう言いながら、染の井は、国主の妻となった自分の姿を想像して、ちょっと、うっとりした気分になるのだった。

「女は口が軽いなどと言いますけれど、お前さまこそ、じゅうぶん、用心なされませ。よろしいですか。毛ほども、怪まれてはなりません。事が成就するまでは、お前さまは、表面上は、あくまでも忠節ならびない、筆頭家老でなくてはなりません。信用を落としてはなりませぬ。それまでは、忠臣の仮面を、見事にかぶりつづけることです」

「わかっておる」

（十六）

年が明けると、さっそく、めざす城の建設が開始された。

まず、天神平の廃墟が取りのぞかれ、礎石を据える作業がはじまった。

国内から大勢の人夫が集められ、土を堀り、古い石垣がとりくずされた。

すると、思いがけず、土中から、おびただしい人骨が出てきたのであった。

その数が、あまりにおびただしかったので、それは味方の人骨なのか、敵の人骨なのか、区別がつかなかった。おそらく、この城で討ち死した味方の兵だけではなくて、戦場に散らばった敵兵の死骸をも集めて、ここに埋めたのにちがいなかった。

その発掘された人骨を見たとき、築城担当の久米武助は、ここに新築される城の、未来の運命を、そこに見たような気がして、ぞっとした。

このおびただしい人骨を、そのままにしておいて、その上に新しい城を築くわけにはいかなかった。

そこで人骨は、天神平からあまり遠くない、太刀が原という台地へ運ばれ、そこへ埋められた。

だが、奇怪な現象が、つづいて起こった。

天神平の整地作業がすすみ、取りのぞかれた廃墟の残

骸を、どこへ処分しようかという段になった。天神平のまわりは、谷が深い。谷へ棄ててしまえばいいではないか、という意見も出たが、やはり、焼却するのが一番いい、ということになった。火は、ものを浄めるという。火の浄化作用によって、廃墟も、天に還してやったほうがいいのだ。

残骸が山積みにされ、それに火が放たれた。

火は朝から燃えはじめて、ほぼ一日じゅう、燃えさかった。せいぜい、半日もあれば、じゅうぶん燃えつきてしまう残骸の量が、夕方になっても、まだ消えず、白い煙が天神平の頂から、空にむかって、立ちのぼった。

だが、夜になってもまだ消えないで、火はさらに燃えつづけたのである。あたりが闇につつまれると、火は闇に乗ってますますはげしく燃えさかり、炎上は、夜を徹して、朝方までつづいたのであった。

異常なことである。

それは、遠目に、あたかも落城の炎上のように見えた。

築城担当の武助は、ふたたび、いい知れぬ恐怖で、首筋を摑まれたような気がした。

夜中、深山城からそれを遠望した家臣たちが、椿館の炎上とまちがえて、一時、大さわぎになった。

が、深山城の天守閣で、その炎上を見ていた晃長は、眉ひとつ動かさなかった。晃長は、その炎のなかに、紅蓮にゆらぐ新しい城の幻を、見ていたからだった。

晃長にとって炎は、新しい出発の炎であった。

こうしてはじめられた天神平城の建築は、森が茂り、谷が深いので、工事は難航をきわめたが、それでも工事は、徐々に、徐々に、進んでいった。

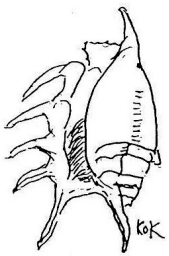
晃長はかならず一日に一回以上、馬を駆って、工事の進捗の督励にでかけた。

工事現場を見ながら、晃長は、とつぜん、図面をなおしたり、また、思うように人夫が動かないと、直接、自分で石垣の石にふれたりするので、武助や棟梁たちは、あわてた。

毎日、深山城から天神平まで駆けつけるのは大変なので、やがて晃長は、椿館へ泊まりこむようになった。椿館からなら、工事現場へ駆けるのも近いし、また、谷ひとつへだてた工事の進行ぐあいが、居ながら見えて便利だった。

こうなってくると、ますます深山城での政務に、晃長はほとんど触れることがなくなり、定国へ任せきりになっていった。深山城からは、必要なときだけ時々、使者が椿館へ馬で駆けてくるだけになった。

（つづく）



近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（四）

第一章　重蔵大空に羽搏く

二、蝦夷地の暗雲

金子正義

（一）

父、右膳守知は、半年程前から聽て長崎から帰る重蔵の為に、本屋の居間と書院を空け、茶室静黙亭知新庵の水屋に接して、茶道具収納と書庫のある隠居所を造った。

「何れ嫁女を迎えねばなるまいもう守重も二十七じゃからのう」

と妻の美濃に正月以来何度か繰り返していた。

美濃も前々から実家の兄の藤田隆達や、弟の三浦義十郎、親戚の福間家などに重蔵の伴侶の斡旋を頼んでいた。

だが長崎から戻った重蔵は、勘定奉行の中川勘三郎忠英、評定所奉行の立花出雲守等の役所関係や旧師の山本北山、本多利明等への帰任挨拶が一通り済むと、書院に籠って日夜調べ物や書き物に余念無く、馬喰町の関東郡代屋敷に通い出すと、近郊の天領地見廻りの事もあって外泊も多く、父母と緩っくり話す暇も無かった。

稀にある非番の日の夕餉の団欒でも、両親の縁談話などには少しも関心を示さなかった。時には父守知が晩酌の量を越して重蔵と酌み交わし乍ら嫁取り話を持ち出すと、忽ち、無用、無用と手を振って、

「今は其の様な私事よりも大事な仕事があります」

と取り合わなかった。

守知は重蔵の幼少の頃よりの少しも変らぬ学問好みや、物事を徹底的に探究する凝り性を頼母しく思っているが、

「今は支配勘定とは言え関東郡代手付、天領の見廻り巡察のこともあろうが、郡代記録の閲読整備ぐらいであろう、謂わば閑職、嫁取りには最も良い時期じゃろうが」

と言うと、

「いや父上、守重は今迄に学んだ学問や評定所与力勤務や長崎奉行所での吟味役等の経験を、自分の為ばかりでなく、世の為人の為に役立たせ度いのです。関東郡代の仕事も然り乍ら、今、最も大事な蝦夷地の問題に取り組み度いのです」

と結婚話は抑え留めるのであった。

だが時には重蔵が長崎の経験談より、激しく変わる異国の動向などに話が移つり、北辺に迫る異国の脅威等に及ぶと、話が弾んで刻の過ぎるのも忘すれるのであった。

守知は時折り洩れ聞く蝦夷地の噂を思い出して、

「北辺の脅威とは、先年根室へ来たオロシヤ船が再び姿を現したことかな」

と関心を示すと、

「いや、其れとは別に前年寛政八年の夏、蝦夷地の噴火湾虻田に異国船が入り、付近の海岸を測量して去りましたが、本年八月再び其の異国船、実は伊祇利須のブロートン号とかが絵鞆に入港し、其処を根拠地として蝦夷地より樺太の間を測量して去ったとの報告が、松前より江戸表に入り、更に露西亜人が南千島の得撫島、択捉島に入り込んでいるとの風説の報告もありましたが、実は、前年択捉島に植民隊が大挙上陸したと、アイヌの急報があり乍ら松前藩は取り上げず、今頃になって報告したので幕閣重臣が睡りを醒まされて大慌てと云うことです」

と重蔵は幕閣の動揺を漏らすと、守知は、

「北辺の治安防備のことは太閤殿下の天下統一以来、蝦夷地の福山城に拠る松前氏に任されていたのじゃなかったかな、オロシア船でラクスマンが通商を求めに来たような、国防や鎖国の大事に関わる時には幕府が直接裁断するじゃろうが。」

隠居の身でも流石に知新庵守知、其れなりの事は知っていると重蔵は意を強くして

「然し父上、松前藩が太閤や家康公より許されたのは、蝦夷地の交易権に漁場や狩場の課税権だけで、全蝦夷地や千島の領有権ではなく、まして現在の松前藩には国防の観念も武力も全く無く、前々から千島を南下して来る露西亜の侵入を知り乍ら握り潰して公にせず、密かに千島アイヌを通して山丹人や露人との闇交易の気配すらあるのです。松前藩は余り北方の国境を意識しないようです。其の上、家臣達に知行としてアイヌとの交易権、徴税権を場所割りして分割して与えました。

然し実際に場所を取り仕切るのは、特別に許された本土の大商人や廻船問屋で、彼等は運上金を納めて場所請負権を与えられ、現地の交易場所、漁場は場所請負商の代理人、現地支配人が本土より流れ込んだ和人を人足頭や番役にして、原住民の蝦夷人（アイヌ）を奴隷の如く働かせたり、安値の交易をしたりして得た海産物や加工品を本土に運び、江戸、大坂等で十倍、百倍の高値に売り捌いて莫大な儲を得た上で、運上金を松前藩や知行所の藩士に渡すので、松前藩は主従共々自から手を汚さず労せずして富み栄え、北辺の寒冷の地であり乍ら松前藩福山城下は物資に溢れて京・大坂と同じ暮し振りとのことです」

重蔵の義憤に燃える話し振りに、守知は、先鉾騎郎御先手与力として先代家治公に仕えていた天明の頃を思い出して、

「そうじゃのう、確か天明五年、六年の頃老中田沼意次殿が幕府財政難の打開の為に、印旛沼、手賀沼等の干拓新田開発と併せて、蝦夷地の開拓、北方異族との交易などを企画して、蝦夷地見分隊を派遣された。

其れには密かに松前藩の特別な場所割制の調査や、山丹人との密貿易の探索も含まれているので、見分隊の活動も半ば秘密裡に進められ、隊の編成も身分の軽い普請役以下の雇いであった。

見分隊は三班に分かれ第一班は東蝦夷地、国後島より南千島迄の探索、第二班は西蝦夷地の海岸線より樺太に渡り、天文、地理、異国への渡り口の確認で、第三班は国後島、蝦夷地の金、銀山産物の調査であった。

だが、将軍家治公の逝去によって老中田沼意次は失脚し、第二次蝦夷地見分は中止され、次の反田沼の老中松平定信によって蝦夷地見分隊は、蝦夷人（アイヌ）の自由な天地を私利私欲の為に開拓し、鎖国の国是を犯して北方異族と貿易せんとするものと断じ、田沼意次は二万石の召し上げ、計画推進者としての勘定奉行松本秀持は罷免、勘定組頭土山宗次郎は斬首、蝦夷地見分隊は解散解雇され、田沼関係者は悉く貶黜された

此の政変は新に老中となった松平定信の前々よりの田沼意次が将軍の小姓より成り上った詔い者との、長年の反感によるものと密かに囁かれた。

儂は此れとは別に定信侯の寛政異学の禁や綱紀粛正の息苦さから、そちに跡目を譲って隠居したので其の後の事は耳を塞いで知らずに過していた」

「そうです、折角苦労して蝦夷地見分隊が筋道をつけた千島や樺太の国境のことや、松前藩の異国との抜荷交易の暴露や、場所請負人と松前藩との癒着によるアイヌの虐待酷使も隠蔽された侭でした。

其の為に寛政元年の国後島のアイヌ一揆がおこりました。

流石の老中松平定信も狼狽して、此れは露西亜人の謀略煽動によるものとして、其の探索を先に田沼の蝦夷地見分隊の事業を抹殺し乍ら、軽い処罪で済んだ隊員の青島俊蔵や最上徳内等の現地に明るい者を起用して、密かに蝦夷地見分隊を派遣したのです。

隊員は身分を隠して俵物商人等に変装して潜行しました。謂わば間者隠密として国後一揆の原因、松前藩の対応を探らせたのです。

其れによって国後一揆は露人の煽動によるものでなく、長年の場所制交易や漁場労務に耐えられなくなっていたところへ、アイヌの婦女を和人の人夫頭が手籠めにして殺害したり、漁場加工場で労役に服さないアイヌを、毒殺して鰯粕と一緒に人粕にすると嚇したりしたので、恐

怖に駆られて暴発したのです。

同じような情況下の他の場所の国後アイヌや、此れに応じた知床半島目梨地方のアイヌ二百人余りが、九ケ所の場所で一揆騒動を起し、松前藩の上乗荷物改目付の竹田勘平初め、下役や通詞、場所請負商飛驒屋の支配人、番人等七、八人と和人三十人程を殺害したのですが、国後や根室の大酋長達は此れを抑えて広範の大蜂起に至らず、出勤した松前藩兵七百余りとの戦いにならずに鎮圧され、叛乱の主謀者八人は首を斬られ、三十九人は捕えられて入牢し後脱走の理由で銃殺されました。

此の一揆によって場所請負商飛驒屋は初代久兵衛以来蝦夷地の松を切って江戸へ送り大儲をし、三代目の久兵衛の時に、松前藩直轄の国後島の場所請負となって毎年二百七拾両の運上金を納めて、アイヌを使って金肥の鰯粕を作り江戸へ送って大儲をしていた。斯うした松前藩と癒着した飛驒屋と、現地支配人飛驒屋佐兵衛の長年の不正交易や、アイヌ酷使が明るみに出た訳でした。

処が、蜂起鎮圧後、松平定信は青島俊蔵の詳細な報告に依って一揆の経過を知り乍ら、却って其の文中に青島俊蔵が現地で松前藩役人より一揆の原因を糺す時に身分を明らかにし、幕府の意図を漏したり、アイヌの酋長達を集めて情報を得ようとした事は、隠密の身を忘れた「返忠」の大罪であるとして捕え、八丈遠島の刑に処しました。

残念にも青島俊蔵は八丈送りの出帆前に揚屋牢で病死しました。

松前藩に対しては国後一揆の責は松前の国家老以下の重役にあるとして「三十日押込」の処分だけでした。

然し、青島俊蔵のような犠牲者を出して松前藩の場所制の苛酷なアイヌ虐使が明らかになったので、幕府は寛政二年四月に「蝦夷地改正令」を出して、松前藩に悲惨なアイヌの救済を促し、主な交易場所で「御救い交易」を実施して、或る程度アイヌとの交易も改善されましたが、蝦夷は広大で依然として各地の場所は場所請負商人の代理人、手代の手に任せられ、形ばかりの松前藩下役の目付役の下に、流れ者の和人の人夫頭や番頭などが、アイヌを酷使し、漁労や海産物の加工に牛馬の如く扱っている実情で、今迄自由だった漁場ですら漁場区となって、割当漁獲量に一定の納入割当金と、労役が課せられ蝦夷人アイヌは本土の大商人や廻船問屋と松前藩に依る二重の苦しみ喘いでいる有様で、大方のアイヌは未だ原始の侭の暮し方なのです。

今や、北辺の国防の大事の時に於て幕府は蝦夷地を幕府の直轄の地にし、アイヌとの交易や漁場の管理、操業等も幕府の直捌にして、アイヌの産物を和人の商品と等価に交易させて、大商人や廻船問屋、両替商などの大儲を許さず、狩猟遊牧のアイヌもコタンに定着している漁労、農耕のアイヌにも、新しい道具や魚網を渡し、海産

物加工の新しい技術を教えてアイヌの生活を向上させなければなりません。

此れは心ある学者達の共通した考えで度々幕府へ上申しております」

守知は黙念として重蔵の話を聞いていたが、

「蝦夷地は元々アイヌの天地で自由に生活していた。海や河川で必要なだけ魚を取り、昆布や貝を拾った、山野で獣を追い、木の実や草根木皮を嚙って、米など作らずとも衣食は足りて、土地などは誰のものでも無く何処でも自由気侭に家族や一族で移り棲んでいた。古老や知慧や力のある者が自ずと弱き者や女子供を扶けて、生活のけじめをつけていた。

冬などにはコタンに聚まり乙名とか酋長とかが一族を纏めていた。其処へ後から和人が勝手に入り込んできて森林を切り倒し、河川で鮭を乱獲し、果ては本土で戦さに敗れた浪人共が渡って来て支配し始めたのじゃ。

松前藩が渡島半島辺りを支配しているだけでも蝦夷人には迷惑しているのじゃないか、其れ以上和人が入殖しない方が蝦夷人の為に一番良いのじゃないかな」

と云った。重蔵は、

「いや、父上のような茶人や、西行、芭蕉のような流離の歌人、俳人、或いは世捨人の聖人などは、支配者や土地に縛り付けられず、自由に渡り歩く生活も良しと致しましょうが、冬は雪に覆われ手足も凍え、指や耳朶も腐り取れ、夏は山野に獰猛な熊や狼犬が出没して生命すら脅され、河川に魚は溢れていても漁具魚網も無く素手で魚を捕え、木の実を拾って食い、木葉や魚皮を身に纏う生活が人間でありましょうか。

田畑を耕し魚網で魚を捕え、余れば乾燥加工して蓄え和人と等価に交易して衣服を整え、諸道具を使って日用品を調え、住居を建てて集落を成し人々と共に文字を学び、音曲などを楽しむ生活こそ、人間の生き方ではないでしょうか」

と穏やかに反論すると守知は

「確かに守重の言う通りじゃ、人間は犬猫猿などとは違う、如何に天地自然の中に原始さながら自由に生きていても、言葉があり、火を焚き、道具を使い、同胞和合して生きるもの、然かも蝦夷人は蝦夷人としての祖先伝来の生き方があり、蝦夷の神や、種族の掟や約束があり自ずと人の道の秩序がある筈じゃ。

元々蝦夷人は原始の頃より我々大和民族より先に、此の地に住んでいたのじゃないか、其れが大陸から渡来した稲作り農耕の大和民族が田畑を拡げていったので、狩猟採集の蝦夷人は次第に東へ東へと移ったのじゃろう、其れも大和朝廷が西国畿内に勢力を張っている時代は、蝦夷人は湖東より東を自由の天地とし、大和民族と東西に棲み別けていた訳じゃよ、蝦夷人も大和人も相互に其の独自の生き方を認め合っていたのじゃなかったか。

処が大和政権の拡大につれて蝦夷人は米作りをしないからと、狩猟採集の狩り場を追い立て追い立て次第に関東より東北の陸奥迄に追いつめ、其の果てには温暖豊饒の本土より和人の言う化外の地、蝦夷地に追い込んだのじゃなかったか、其れでも漸く安住の地として現在に至ったのじゃろう」

と言った。重蔵は

「確かに父上の言われる通り古代では和人も蝦夷人も其の暮し振りによって自然と棲み別けていたのでしょうが、大和王朝の勢力の拡大につれて蝦夷人の狩場や採集の地に和人が入り込んで土地を拓き蝦夷人を追い立てたのでしょう。

然し、蝦夷人とは反目斗争ばかりでなく、和人の農耕生活の暮し振りに同化する蝦夷人もあり、中には乙名が一族ごと帰化して大和王朝の村役になる者もありました。

ところが時を経て大和王朝が一層発展すると、未だ帰順しない蝦夷人に農耕地への定着を度々勧告しましたが、水田耕作を好まぬ蝦夷人は容易に従がわないので、此れを「まつろわぬ者」として武力で屈従させ始めました。

記紀にある景行天皇の四十年の日本武尊の東征を始めとして、斉明天皇の四年より六年の阿倍比羅夫の道奥国(秋田)方面の征代となり、其の後も度々討伐を繰り返しましたが、反乱は次第に大きくなり、遂には宝亀十年(七八〇)陸奥国上治郡の郡司に迄信任された蝦夷の族長伊治公呰麻呂が反乱し、伊治城を襲い陸奥出羽の按察使紀広純を殺す大乱となり、更に多賀城を襲って略奪放火し、其の後の勢いが益々強大となり、桓武天皇の征夷軍を度々破りました。

延暦十三年(七九四)に漸く征東大使大伴弟麿、副将坂上田村麻呂によって平定されましたが、桓武天皇の平安遷都の前後は陸奥国の蝦夷の度々の反乱があって、坂上田村麻呂の征夷討伐が繰返されたのです。

だが大和朝廷は帰順しない蝦夷を悉く討伐し征服して夷囚とした訳ではなく、土地開拓や米作りを教え土地定着を勧めて公民として、主だった乙名には姓を賜り外官の五位迄の位を授ける程でした。

斯うした撫育教化によって後には亡ぼされましたが、安倍、清原、藤原などの豪族も出ましたが、朝廷の熱心な蝦夷人の撫育・教化にも拘らず、度々反乱を繰返し、蝦夷人の多くは和人と接することを嫌い、土地定着を悪として逃亡・逃散して仕舞うのはどうしたことでしょう。朝廷の蝦夷人の処偶が誤っていたのではないでしょうか。」

と語り乍ら、重蔵は、数千年来の大和朝廷の蝦夷人同化の努力の空しさはどうしたことかと疑いを抱き乍ら、重蔵自身も、蝦夷地やアイヌのことは、本多利明の啓蒙や其の書籍によって蝦夷人の苦しみを知り、長崎での松前藩出役人からも蝦夷地での異国交易や、場所請負商人

のアイヌ酷使のことを聞いたりしたが、実際には蝦夷地千島、樺太に住むアイヌの実態を知らないのである。

他日必ず蝦夷地や千島樺太に渡って現地の実情を見極めようと思っているのであったが、

守知は、重蔵の疑問とは別に、

「それは、本来蝦夷人は米作りなど嫌いなんじゃ、遠い何千何万年もの昔から祖先伝来採集狩猟の生活をやってきた蝦夷人アイヌの血肉の中に染み込んでいる生き方感情、言語には受け入れられないのじゃ、大和族が蝦夷人に押し付ける米作りや神仏の信仰や、学芸、教育などは、我々日本人にキリシタン、バテレンの教えを強いるようなものじゃよ」

と言った。

重蔵は父の言葉に鉄槌を下されたような衝撃を受けた。

南蛮紅毛の国々がキリスト教と銃火に依って新大陸や東南アジアの島々を征服して殖民地として来たことや、今、千島より樺太・蝦夷地を狙って南下していると云う露西亜人も、シベリヤよりオホーツクに至る広大な原野の、多くの遊牧狩猟の種族、タッタン族・ヤクート族・グリアート族・ギリャーク族・ツーングース族等の種族を銃火とキリスト教に依って征服し、農耕不適の寒冷の地なので、ヤサーク（毛皮税）を勝手に取り立て、西欧に高価に売れる黒貂を取り尽し、ベーリングよりカムチヤッカに至って、北太平洋岸に達し、黒貂より良質高価な猟虎（ラッコ）を発見すると、此れを追ってカムチッカより千島列島に渡り来った。シベリアで諸々の種族を従属させたように北千鳥のクリル人をキリスト教で心を従え、銃砲で屈服させ乍ら猟虎を取り立て、遂に南千島の得撫島、択捉島に迄入り込み、ラッコの多い得撫島をラッコ島と名付けて殖民団を入殖させていると云う。

だが、此の北方の露西亜人も西欧の英、仏、蘭等も、強力な銃砲の武力とキリスト教や進んだ学術を以って遅れた国々、未開の民族を服従させ、殖民領土と化しているが、其れが世界の大勢であり、弱肉強食の生物の本来の姿、生存競争、文物の工夫、人間の進歩発達の必然の働きであるのかも知れないとも思うのであった。

其して、重蔵の抱く蝦夷地開拓発展も進んだ和人の文物、技能を以って遅れた蝦夷人アイヌを教化撫育すると云う美名を以って、押し付け服従させようとする事では無いか、と一瞬の迷いも浮かぶのであった。

然し、大和朝廷が長い年月をかけて同じ国土に住む蝦夷人アイヌを扶育順化できなかったのは、和人其のものに知識能力が足りず、方法が不適切であったからであろう。

寒冷不毛の地、千島蝦夷地と云えども入殖和人とアイヌが共に扶け教え合って一体となり、和人は蝦夷人アイヌに農耕漁労加工の技術を伝え、文字を習わせて様々の文化を教え、アイヌよりは寒冷の地に適応する生活や、

動植物の繁殖の仕方を学び、共存共栄の国土を実現するのは夢想ではあるまいと思い直すのであった。

（二）

重蔵は胸に蟠る疑念を白山義学塾以来の旧学友に問いかけたが、今は其れぞれの学問の分野で一家を成し、重蔵の質問は学問や人間の進歩に対する重大な懐疑であるとして明言を避けた。

だが佐藤一斎が、

「其れなれば、当代の風流大名と文名の高い平戸藩主松浦壱岐守清侯の説を拝聴したら如何がか、貴公も噂さを耳にするであろうが、身分の高下を問わず風雅の士と清遊し閑談するを怡しむ風月の会を催しておられる。

拙者も林述斎と共に参じているが、それは述斎が美濃岩村藩主松平乗薀の四男坊松平熊蔵と云った頃から松浦家とは縁深く、拙者も述斎との関係から共に出入していた。

貴公は長崎に出向しているので存じていようが、松浦家は戦国末の天文年間より平戸の南蛮貿易で、早くから異国の文物に接し海外事情に通じた家柄で、当代壱岐守清侯は八代目で、外様大名乍ら柳の間詰めの七十八家の上位第二席であるので、江戸詰めの年でも月三日程の登城であるから、余暇は和漢の古典、詩歌に親しんでおられる。若い頃世子になられる前は七代誠信が女中に生ませた子であったので自由気侭に遊蕩されたこともあったが、狂歌川柳洒落本などから次第に和漢の古典などに親しまれ、今や和歌・有職故事にも通じた当代一流の文化人と敬されている。

藩主としては新田開発、椿油を取る椿苗の植付などの殖産興業で藩財政を豊かにして、藩校維新館を設けて文教をも盛んにされた名君である。

前老中の松平定信侯とも親交を深め、五女の蓁姫（しん）様が世子熙（ひろむ）に嫁す程の関係である。元々松浦壱岐守清侯の奥方は現老中松平信明侯の妹君であられる。

従って、松浦清侯の風月の会にも時折り顔を見せられる、亦、松浦侯も貴公のことは林述斎より訊いて知っておられるようじゃ、どうだ、一緒に浅草鳥越の上屋敷へ参上して見ないか」

と勧められたので重蔵は誘いに従って長崎帰任の挨拶を兼ねて伺侯し、風月の会の末席に列したが、身分を忘れての放談とは言い乍ら、初めから北辺の国防や蝦夷地開発などご政道に関わる事は触れることは出来なかった。

松浦侯は初会の重蔵を参会の諸侯に紹介しようとして、長崎帰りの近藤重蔵であると伝えて、オランダ船と今噂さに高い伊祇利須船との見分け方はどうするかと尋ねた。

重蔵は船型の相違よりも航行の異国船は必ず船尾か、中央帆檣に国旗を翻しているので、其の色の組み合せや

図柄で見分けると答えて、オランダの三色旗伊祇利須の十字にX字の組み合せ、露西亜の双頭の鷲の旗などを説明し、長崎で得た知識を纏めた『異国船旗印図考』の一端を述べ、後に其の写しを献上した。

松浦侯は更に重蔵が高名な諸侯の中で固くなっているであろうと案じたのか、

「近藤重蔵は長崎で白牛酪を食べたこともあろうが、享保年間に青木昆陽が、房州嶺岡に放牧した三頭の白牛が近頃は七十頭程に殖えて、乾酪も出来るようになり、余も時に頂戴するが、どうにも口に合わん、如何がかな今日はご一同で試食されては、」

と小皿に盛った乾酪の切身を出させたりした。

重蔵は気を使って呉れる松浦侯の人柄を好ましく思ったが、北辺の問題に就いては期待するものが得られず残念だった。

松浦清侯は後文化三年四十六歳で隠居してから、林述斎の勧めによって、侯が過去、現在に見聞した世の出来ごとを書き始め、天保十二年八十二歳で没する迄に二百七十八巻の随筆『甲子夜話』を書いた。

其の巻八十九に近藤重蔵について多く書いてあるが、初見の頃の重蔵について斯う記している。

「……近藤重蔵、号正斎、始め与力の子にて、白山に義学を興し、善行を以って世に聞へき。寛政の盛時、勘定局に入り、屢々遠役を勤む。予も嘗て当職の際松平信州、市橋総州、福山侯、林子等等と風月に相会せし筵にも、部下雅を以って下風に陪せし者にして、著述は有用の書も多かり。然るに何事か、復び蝦夷地の役に赴し帰後予その宅を訪しに、見違しばかりに人品下りしゆゑ其ことを密かに林子に通ぜしことも有りぬ。是より予も自から久く音問疎かりしが、やがて書物奉行となり、局中編撰の書あり、旧交のゆえ迚、予にもこれを贈り、今に蔵せり。以下略」

重蔵は幕政権威の座にある者に公の場でない風月の会などでは蝦夷地問題、対露外交のこと等は具体的に意見を聴くことは無理と、其の後は表敬的な訪問は止めたのであった。

田沼時代の蝦夷地見分隊派遣の頃とは違って、其の後の国後一揆、漂流民光太夫を送って通商を求めに来たラックスマンや、近年の得撫島、択捉島への露国殖民団の侵入等から北辺の防備、蝦夷地の開拓と経営の改善等の気運が昂ってきており、其の内外の情勢の変化から寛政五・六年より北方問題についての意見や著書も次々と発表されるようになった。

近藤重蔵が白山義学塾を開いた頃、本多利明によって蝦夷地北方問題ちついて目を開かされ、本多利明や最上徳内の著述を読んで一層関心を深め、長崎で見聞した異国貿易の実態や、長崎会所にある松前藩の俵物役出張所の見聞等で得た知識に依って益々蝦夷地の重要性を知っ

たのであるが、重蔵が長崎に出向していた二年間にも、北方問題に関する著書が次々と刊行され、部外秘とされていた光太夫取調の聞き取りの桂川甫周の『北槎聞略』や、蘭書を訳した『魯西亜誌』も板行され、司馬江漢も『和蘭天地球団』なる地理学上の啓蒙書を出し、大原小金吾は『北地危言』を著して北辺の急を警告していた。

重蔵の師の本多利明は天明年代、田沼意次に蝦夷地開拓の意欲を喚起させた『国家豊饒策』の論説を一層発展させ、北方の異国との境の国防の大事を松前藩に任すべきでなく、蝦夷地は幕府直轄の地として奉行を設置し、国防と蝦夷地経営改善を断行すれば、二十年後には蝦夷地は数百万石の領土となるであろう、との論説を幕閣に具申していた。

其の外、攘夷論の学者や水戸藩等の国防上の意見も活発となったが、林子平が『海国兵談』を出し処罰された頃とは違って幕政への容喙とはされなかった。

蝦夷地のアイヌの同化が今に至っても為されず、アイヌの酷使と虐待を難じても、幕府の失政批判とはされず蝦夷人を、まつろわざる者として討伐と辺境への圧迫を繰り返してきた大和朝廷の無能を発くものと解された。

斯うした論議は、水戸藩や薩摩藩などの有力大名や、国学者、国防論者、蝦夷論者だけの気勢ではなく、心ある武士や商人、市井の徒達にも、最上徳内の『蝦夷草紙』の影響が広がって、大資源の埋蔵する蝦夷地を松前藩だけに任せず、本土より入殖者を送るべし等の幕府への上申建白や目安箱への投書等も多くなってきた。

此の時代の気運を背景として、先任老中本多弾正少弼忠籌が、天明期の蝦夷地開発を再検討すべしとの意見を幕閣に提し、老中戸田采女正氏教等が東西蝦夷地見分の策案を立てて検討し、明寛政十年早々に実施と内定し、見分隊の人選、船舶を始めとする用具資材の調達を関連諸役所へ密命した。

続く

佐々木一郎追悼特集

「人と作品について」

青木昭成・井上二三男
入田紹一・大和禎人
金子正義・柴田富佐子
三戸岡道夫・山根三枝子



青木昭成

佐々木さんの、「まんじ」第五十号特集に寄せられた書信を、いま一度読み返してみると、氏の推理小説に対する創作意欲と、それとは裏腹な手術後の、思うにまかせぬ体力回復への焦燥が、あらためて如実に伝わってまいります。

同人歴からすれば、氏は私より三年ほど先輩、しかし、作品歴からすれば氏が三十六号、私が四十一号からの出発、ジャンルは異なりますが、いずれにしても共に、その実績を誇りうるような位置にはいない、と言えましょう。だから氏は書信のなかで、「第五十号には、習作でない、纏まった作品を出すつもりでいたのに」と発病を悔やんでおられました。

それだけに、「まんじ」第五十三号の校正のなかに、佐々木さんの「ついていない男」二十七頁を拝見したとき、私は驚嘆し、かつ、感動しました。いや、それはむしろ安堵の感覚といえるものであったかもしれません。そこまで回復されていること、書くことへの意欲を依然堅持されていること、いずれも同人として、喜ばしいかぎりだ、そう私は受け止めていました。

新しい作品は、たしかに、氏が目指している推理小説の全貌を彷彿させる仕上がりになっていました。洋の東西にまたがる舞台と、細菌兵器をからめた筋立ては、やはり佐々木さんのものでした。ただ、氏の得意とする登場人物の多彩さが、もともと記銘能力の弱い私を、辟易させたことも事実です。こんど合評会でお目にかかる機会もあろうから、その節には「私のような門外漢にも、読みやすいよう、登場人物の数を絞り込むのはいかがなものか」など、気ままにお訊ねしてみようとも思い描いていました。

しかし、それは私のまったく勝手な、合点にすぎませんでした。

「まんじ」第五十三号発送を直前にして、編集の大和さんから、佐々木さんの突然の訃報を受けました。まこと、口惜しいかぎりです。

今更こんなことを託ってみても、致し方のないことながら、私は佐々木さんの来し方をまったく存じあげないままに、氏がすくなくとも近年まで、ご自分の健康には充分な自信をもって生活されてきた方、それゆえに却って、ご自分の回復力を過信されて、本復をおくらせ、残念な結果につながってしまった、と思えてならないので

す。

なぜなら一方の私は、若年の間に、長い療養生活を余儀なくさせられて、以来自身の健康に、じつに臆病になり、身体の微少な変調にも、ついつい、過剰に反応してしまい余計な脅えを持ちつづけてきたからです。それは一種の不幸であったかもしれません。しかし他方で、この消極的な健康への対応が、私の今を保持させているのかも知れません。

詮ないことですが、佐々木さんが病を持たれてから、いや、病を持つ以前から、生身のご自身を眺めなおす機会を得られていたら、もう少し、ご自愛あったろうにと思えるのです。

今、拝察すれば、昨年、あの書信一通を仕上げるのに、術後の体力の衰えから、「なんと、十日間もかかりました。」と、さらっと言ってのけていた氏は、主治医の言葉をまつのももどかしく、年の明けるころには、憑かれたように推理の構想をねりあげておられたにちがいない。充分な健康の回復をまつのには、その心は滾りすぎていたのでしょうか。

それは、もはや誰にも制止することが許されない佐々木さんの、生きることへの表出であった。そうみるほかありません。

それが、「まんじ」第五十三号の誌上に、みごとに結実されました。佐々木さんは満足の笑みをうかべて、天上から、この一篇を眺めておられるにちがいない。

私は、そう信じます。

〈敬白〉

井上二三男

佐々木さんが亡くなられた七月二十三日は、私は油絵の仲間の会合で出ており、妻は所属団体の会議で不在であった。翌二十四日の朝、東京の大和さんからの電話で佐々木さんが亡くなられたと知らされた。電話機を置いてから、なにか間違いであってほしいような気持ちがしていたが、地元の上毛新聞のおくやみ欄に「佐々木一郎氏…（元吉岡・明治小校長）二十三日午前十一時五十七分、病気のため病院で死去。69歳、……。」とあるのを自分の眼で確かめて、本当なのだ、と思った。

昨年秋、腸疾患の手術を受けられてから、極度に体力を落とされていたようで、回復には月日を要するということを聞いていた。ただ、徐々に回復の方向に向かっているということなので、この夏を乗り切れば、またあの

にこやかな佐々木さんにお会いできると信じていた。現に、七月始めの頃、電話での声は、最近になく張りのある声で、私は佐々木さんの身体の調子はいいなと思っていた。そんなこともあって、七月十五日の「上毛新聞」に県文学賞の作品募集の記事があり、佐々木さんに薦めようとその記事を切りぬいておいた。残念ながら、切り抜きは、いまは、私の机の引出しの中にある。

私と佐々木さんの交際は、昭和六十二年四月、私が日本赤十字社群馬県支部に勤務することになり、机を並べたことに始まる。佐々木さんは教職時代から青少年赤十字活動に尽力されていて、日赤群馬県支部では、県下の青少年赤十字の推進の総括責任者と指導者の養成のための職に在られた。

佐々木さんは、荒廃している社会の波を受けて小・中学校でも校内暴力などの事件が多発している環境の中で、こども達にとって社会奉仕・健康・国際親善等を実践する青少年赤十字活動が教育上も望ましいとの信念を以て活躍されていた。壁に大きな群馬県の白地図を張り、メンバー数、加盟学校等を表示して努力目標にされていた。そうした努力が実り、その年、群馬県青少年赤十字のメンバー数は全国七位、加盟率は全国二位になった。

また、日本赤十字社群馬県支部創設百年史の編集主任として編纂に当たられ、資料の収集に県内外を問わず奔走されていた。特に、赤十字本社の膨大な資料の中から群馬支部関係の資料を探索するため夫人同伴で上京、宿泊をしてのご苦労があったと聞いている。そして、随時記事にしておられたが、まだワープロが今日のように普及しておらず、佐々木さんは自宅で夜遅くまでタイプライターを打っておられたようであった。その頃から既に心臓を気遣っておられたが、私も小学生のとき心臓が弱いと言われて、体操を禁じられたことがあるが特に生活上問題もなかったので、佐々木さんのことも同病として気に留めなかった。

佐々木さんは、伊香保中学校教諭時代から「伊香保の歴史」、「伊香保歴史年表」、「伊香保温泉の移り変わり」などを執筆され、またご自分の海外旅行を「木婚旅行は雲に乗って」、「君知るや、南十字星のささやきを」として冊子に纏められている。この旅行記を拝見して、私は、佐々木さんの確かな眼と克明な記録と編集の見事さに驚くと同時に人生に対しての真摯さに打たれた。

「木婚旅行は雲に乗って」の冒頭の言葉に次のような言葉が載せられている。

「私がふたたびハワイに旅行したのは、理由があります。その一つは、六年前に死を決意した私が、かづ子という良き伴侶を得て、無事に五年間生きてこられたことへの感謝の区切りとしたかったこと。これは、長年連れ添った妻に死なれた哀しみを経験した者でないと、ちょっとお分かりになれないかも知れません。同時に、再婚

して互いにいたわり合いながら生きていくことの難しさ、そしてそれを乗り超えて初めて得られる安心感、これも言葉では表現できないものだと思います。そして、生きている、ということのすばらしさを再確認するということも……。二つ目は、近年とみに衰えてきた私の健康への挑戦です。再婚して得た妻の最大の望みは、私が長生きをし、例え細々としたものであっても、ともに悔いのない人生を送りたいということであろうかと思います。……。」

いま、読み返して、佐々木さんのお人柄が偲ばれて、感慨深いものがある。

こうした佐々木さんの文章の才を感じて、私は「まんじ」にお誘いした。

「作家群」の同人になられて、暫らくは書くことがなかったが、私が旅行記を参考にして書かれてはと、お薦めしての第一作が平成二年「まんじ」三十六号の「カストリオーネの夜は更けて」の大作であった。その号の編集子のメモには「佐々木一郎が九十三枚を引っ下げての初登板である。北イタリヤに舞台をおき、大韓航空機撃墜事件も話題に……、その国際的スケールは従来の本誌に例を見ない作品となっている。」と記されている。合評会では全体の纏め方や細部についての先輩同人の意見が出されたが、私は全体を貫く詩情と感動的場面の取り扱い方から佐々木さんの文学的才能のただならないものを感じた。四十号の「三億円強奪事件の犯人を追った男」も九十枚という力作で、佐々木さんの優れた構成力と非凡の着眼に感じ入った。さらに続いて発表された「千三百年目の仇討」、「前橋公園殺人事件」はミステリー作品として、「まんじ」の中では独特の世界を開かれてきた。そして、私はこうした作品を書かれる佐々木さんのソフトな頭脳と精神の高さに驚嘆した。

合評会には、群馬から二人だけの同人なので、私と佐々木さんは高崎駅で落ち合って同道した。

待ち合わす時刻や帰りの電車の時刻を打合せて、私は渋川という地方の市が交通上は甚だ不便なことを知った。往復の所要時間を入れると合評会への所要時間は、かなりの時間になる筈であった。その頃から、既に駅の階段の昇り下りには気を遣い、心臓の負担を避けておられた。帰途座席指定がとれず、グリーン車で帰られたこともあった。そのような労を厭わず出席された合評会では先輩の意見を熱心にメモし、ときにはテープにとり、帰ってからも私に電話で確認されるような熱心さであった。

「小説を書くことが私には長年の夢だったのですよ」と語る佐々木さんはほんとうに楽しそうであった。

私は、「ミステリー大賞　佐々木一郎氏」の実現も夢ではないと考えていた。

亡くなられて一週間後の八月一日発行の「まんじ」五十三号には「ついていない男」を発表されて、この作品

が最後の作品になった。その舞台は東京から前橋、ヨーロッパ・ドイツに至る幅の広いミステリー作品であった。体調の関係で暫らく出席できなかった合評会に今回は出席すると言って楽しみにされていたよしである。

佐々木さんの作品を一貫するもの、それは人間への愛だと思う。「木婚旅行は雲に乗って」の奥さんへの思いやり、「カストリオーネの夜は更けて」の泣く幼児への子守歌、絶筆になった「ついていない男」の長谷川の幸せな結末、佐々木さんのテーマは暖かい愛であったと思う。そして、それは、佐々木さんに相応しいテーマだったと思う。

また、佐々木さんは日本赤十字社を退職されてからは、聴講生として群馬大学の教育学部に通われていた。私が放送大学で学んでいたので、科目選択は自由であるし、どうですと勧めたところから、佐々木さんも放送大学に入られ、国際政治関係を主として学ばれていた。他の大学の卒業論文にあたる専攻特論も既に終えられて、この七月末のテストで若干の単位を習得すれば九月には卒業という段階であった。

佐々木さんは、赤十字県支部、「まんじ」、放送大学と接触面を共通として、現在の私にもっとも親しい友人であった。その上、病気は異なっているが、同じ時期、同じ病院の患者同志でもあった。平成五年三月十八日、前橋赤十字病院に入院中であった私は病室で佐々木さんとお会いしている。私は見苦しい病床の姿を人に曝したくないので、入院のことは誰にも言わず、知れてしまった場合も見舞いは固くお断りしていた。佐々木さんはただ一人の例外で、外来に受診のために来院される際、お会いしましょうと予め電話で連絡をとっていた。その秋、今度は佐々木さんが腸の疾患で入院されたのだった。私は、お見舞いするのもつらいので控えさせていただいた。

佐々木さんと私は同じコースを助け合いながら歩いている仲間であった。口に出さなかったが、お互いの生命の在りようをそれとなく察し、励まし合った仲であった。それだけに、いま、さまざまな感慨が去来する。

五十三号の合評会の模様を報告に佐々木さんのご自宅に伺ったとき、夫人は、「井上さんが最後までのお友達でした。」と言われ、目頭を押さえられた。

私は思った。「ああ、もっと良き友であってあげていれば……」と。

入田紹一

佐々木さんは「まんじ」と言う文学の広場を、推理の光芒を放ちながら駆けぬけて行きました。

最近体調を、崩されていた事は知って居ましたが、「まんじ」五十三号に「ついていない男」を、発表されるとの話で、大分回復されたなと思っていた矢先あなたの訃報を聞いて驚愕もし、また世の無常を、ひしひしと感じました。

渋川に在住するあなたは、前橋の井上二三男さんと連れ立って合評会に見えられ、どちらかと言うと末席に座られて謙虚に発言されて居た姿が印象的でした。「カステリオーネの夜は更けて」の中に、今思えば推理に進出する芽があったのですが次に「錫婚旅行は雲に乗って」と続いたので旅行見聞記を基にしたものと軽く考えていた私は、「三億円強奪事件の犯人を追った男」に始まる「まんじ」には珍しい一連の推理小説には、驚くと同時に、失礼ながら私は心の中で、あなたを評価し直しました。

「まんじ」第五十記念号の、あなたの「同人ご一同様（書信）はまことに壮烈そのものです。合表会の席上で浅い知識を振り廻して発言する私に書信の中で、過分なる言葉を載せて私の心中忸怩たるものがありますが、御自分の病の事に就いて「最後に合評会に出席したときには、随分苦労して東京を往復しました」とあり又「二三行書くともう体がだるくなって」とあるのは衝撃的でした。

其の年の九月私も大腸のポリープを、内視鏡を入れて切除しましたが、開腹手術でない気軽さに甘く見て失敗し、数日も経たぬ内に激しい下血に見舞われ、緊急入院して適切な処置を受け事無きを得ましたものの、其の間僅か二日程でしたが全く気力を無くした経験から、あなたの闘病が私達の想像以上の苦しみを克服して行かねばならなかったでしょうし、其の病苦の中、書信を五〇号に寄せ又、「前橋公園殺人事件」を完成させ、遺作「ついていない男」を発表された。まことに壮烈の一言に盡きます。

井上二三男さんが、故山口健二さんの事を壮絶と讃えていましたが、水泡（みなお）の様に同人誌が興亡する中で「まんじ」が五〇号を越えて行くのも佐々木さんや、山口さんの様な不屈の情熱をもって創作活動を続ける同人が居たからに違いありません。

大和禎人

佐々木さんの亡くなられる二日前、私は偶然ながら電話で氏と会話を交わしています。七月二十一日のことです。その前日、青木昭成さんと飯田橋の印刷所で落ち合い、校正の仕事をしたのですが、五十三号に一挙の掲載を予定される氏の作品「ついていない男」は八十一枚という力作で、病臥中の作者がいよいよ快方に向かわれ、意欲のほどを示されたものという見方をし、氏の復活を喜ぶ話題をもったばかりでした。この折の校正で作者ご本人の思い違いがあり、章節の区切る通し番号に重複があることに気づき訂正を施したという一事から、作者の了解をとるため電話をしたものでありました。

なお今回、氏は手元にコピーを残されており、ゲラを送る際には重い原稿のほうは送るに及ばずとされ、送料経費の軽減まで配慮を伝えられていた事実がありました。

天界に去った佐々木さんの御冥福を、心よりお祈りします。

訃のお報せは二日後、二十三日の夜ですから、がく然とする思いで夫人のお声を聞き、ご遺族に対する弔慰もさることながら真っ先に「まんじ」の大きな損失を考えました。結社の存亡にもかかわる有力な書き手を失ったからです。

佐々木さんの同人への参加は昭和六十二年十一月でした。いきなり同人費としてポンと十万円を払い込まれたことで、なによりまずびっくりしたことでした。並にできることではありません。それだけ「まんじ」に懸けられ、期するものがあったのだと思います。

しかし、登場は慎重でした。処女作というかたちで、「カステリオーネの夜は更けて」という九十三枚もの作品を発表されたのは本誌第三十六号（平成二年五月）でした。満を持してこれまたいきなりでした。たまたま同じ号にはいまは亡き山口健二という同人の令嬢が「父が酒を断ち筆を折りました」という悲痛の文章を載せています。創刊いらい一号も欠かすことなく作品を寄せてくれていた同人でしたから、佐々木さんの登場はありがたく、まことにタイミングよくスライドして重量級の選手を迎え得たという期待を与えられたものでありました。

細やかな氏の心づかいを示すものとして書き添えておきましょう。

渋川市在住の佐々木さんはそれから合評会にも、氏の紹介者である前橋市の井上二三男氏と携えて上京し、出席されるようになりました。ともに遠方から列車に乗っての東上ですから、容易ではありません。熱意のほどに感じ入るばかりでありました。

井上氏とは日赤の群馬県支部の勧めで同職というご縁があって、「まんじ」への誘いに応じられたものでありました。氏は教職、井上氏は県庁勤めという官辺から、ともに日赤を第二の職場とされ、志向の相通じるものがあり、交際を始められたと聞いています。たまたま「日本赤十字社群馬県支部百年史」編纂の事業があり、氏はその主任委員であり、井上氏の場合は事務局長という立場上、委員長として名をつらねています。平成元年三月にその刊行を見るまでの氏の労は大きく、功労を讃えられています。この仕事から生まれたナイチンゲール賞に輝いた「水野ケイの生涯」という小説素材としても面白い小伝的リーフを私は前記の百年史とともに頂きました。

氏は教職を退かれてから、外国旅行を大いに楽しまれているようで、その作品には旅行から得た豊富な知識をちりばめられ、構成の意外性をもって私たち驚かせました。外人部隊のことを書かれたものなぞがその一例でした。初登場作品では観光ガイドの説明なぞ織り込んで巧みな部分がありましたが、録音テープに取材してあったものの活用という楽屋裏の種明しに、なるほどとみながうなずいたことでした。

ミステリー傾向の作品を好んで書かれて「まんじ」に異色の新しい風を吹き込まれました。全七編、うち連載作品は三編、矢継早で息長く、重量感あふれる作品群を提供されました。

生前語られたところによれば、夫人が内田康夫作品の大ファンであられる由で、ひょっとしたらその夫人のためにこの分野の開拓の筆を振るわれたのではないかと思われます。

氏はまた大変能筆で墨痕鮮やかにあて書きをされ、部厚く重い原稿を届けられました。最後の作品の場合も雄渾を失わぬ見事さでした。残念なことに発行が没後になってしまいましたが、第五十三号の「ついていない男」はやはり分野の同じ作品で、一挙の掲載でないとミステリー作品は人物関係の印象が希薄になるからと、かなり無理をされたようです。奥様からのお便りで知りましたが、ご病気の予後という事情から、壮絶な机上の戦いに鏤骨の苦心を払われた氏の姿が浮かびます。

「こんどの合評会はぜひ出たい、ついでに都庁舎をまだ見ていないから、見ておきたい」

という言葉が奥様にあったとお手紙にありました。ひとしお人生朝露のはかなさを覚え、痛恨に堪えないことでありました。

氏の本質は根っからの教職者でありました。会合に臨

まれて、だれ彼いずれに対しても「先生」と呼ばれ、格別ご自分ではそれを異とされぬフシをお持ちでした。氏にとってはきわめて自然なことであったようです。そして、いまは教厚一乗居士、まことに相応しいご戒名に隠れられました。ご冥福を祈り、慎み合掌いたします。

金子正義

佐々木一郎氏の急逝を知ったのは、七月三十日「まんじ」五十三号が送られ包みを開いた時であった。

同人佐々木一郎さん急逝の訃報が入っていた。余りの事に衝撃を受けた、氏の突然の死を悼むは勿論であるが、氏の逝去の日の七月二十三日午前十一時頃、私は予想外の知人の死を予感して漠たる不安を覚えていたので、その驚きと哀悼の念は複雑であった。

聴覚障害の私は時折り不思議な幻聴がある。黙念と妄想に耽っている時とか、庭仕事の後の午睡で夢と現の相半ばする時などに、白昼夢の如く聴覚を失った耳に人の呟きや会話が聞える、それは特に私に問いかけ、話しかける訳でもなく二三人の話し合いが聞えるのである。

内容は定かでないが、なにか繰り返し注意したり、伝え合ったり、訴えたりしている、性別は不明瞭であるが、初老の人の醒めた落ち着いた声である。

七月二十三日の昼前、広縁で寝転んで半ば睡り乍ら本を見ていると、夢心地の中に来客があって玄関で妻が応待している声が聞えてきた。

然し妻との日常会話ですら殆ど筆談であるのに離れている玄関の対話が聞える筈がない。幻聴だな、と脳髄の中の耳を澄ましたが、内容は分らない、だが何にか不吉な予感がした。昼食時に妻に誰か来客があったのかと訊いたが、亦、いつもの惚け症状かと取り合わない。

近頃は明るい薔薇色の便りなど何処からも来ず、空漠たる昼夜の繰り返しで、激しく変貌する世の様も唯凝っと見据えのみ、と世捨人を気取っているが、其の日の幻聴は誰か長途の旅立ちに、今生の別れを告げに来たように思われた。

朦朧とした意識を引き締め集中すると、何んと、昭和二年の七月二十三日は芥川龍之介が、「人生は一行のボオドレエルにも若かない」と死を決して妻と友人に『唯ぼんやりした不安である、何にか僕の将来に対するぼんやりした不安である』と遺書を残して服毒した日であった。

と思い当ったが、そんな昔の芥川など関係ない今日の

幻聴は確かに誰か永遠の旅立ちを告げに来たのだと信じ始め漠たる不安を抱いていた。

そして三十日に同人佐々木一郎氏の長逝を知ったのだった。

直ぐ「まんじ」五十三号巻頭の遺作『ついていない男』を一気に読んだ。

立派な作品であった、氏の作品には平成二年五月、三十六号の『カステリオーネの夜は更けて』以来の諸作に並々ならぬ才能を感じていた。

氏は推理小説を多く発表されたが、単なる娯楽読物でなく、現代社会の重要なトピックを取り入れてモチーフとした独自の作品を書いた。

然かもミステリーシナリオのテクニックを良く心得て、多彩な人物や事件の発端より解決に至る迄の、複雑多様なモメントを劇的に構造化して、推理小説の醍醐味を味あわせて呉れた。

氏は緻密に作品がマンネリ化しないように一篇一作ごとにインベントを態々に工夫している。

例えば第一作は、リアルなイタリア観光の紀行文が次第にフィクションの世界に入り、愛の分析より自閉症治療のカンセリングが、教育手段の真実性と作為の問題、偽善の罪と係わり、愛と裏切り行為のミステリーとした。

或いは『前橋公園殺人事件』では人工受精に因する血統と親族の相剋となり、人間の怨憎と純愛を堀り下げる。

加えて有能明敏な探偵の犯罪捜査に催眠術の応用を試みさせたりしている。

『千三百年目の仇討』では、時の流れ空間の限界を超えて日本の封建の世よりアフリカの外人部隊に迄拡大波及する事件を、シミュレーションゲームの如く展開させる。遺作は、一家蒸発事件の如き現代のミステリーを、CIAと細菌兵器の国際機密に関連するような重大問題に関わらせ、国家や民族を超えるヒューマニズムを問う作品とした。

其の他の諸作を含めて氏の作品は、個性豊かな登場人物の生々とした会話や、活動場面の巧みな表現は、将来必ず一流の文人として世に知られるであろうと期待していたので、其の急逝には絶句するのみであった。

最後の労作は同人参加の第一作と同じく号に跨ることを避けて一篇に纏めて発表したと言う、長く病床にあってのこと、見事な作品となったが命を縮めたようで残念である。

然し遺作となった『ついていない男』は最後に逆転させて、（僕は、ついている）と思った、と完結させた。

正に万釣の重みを持つ辞世の言と受けとめて、心から故人の冥福を祈り度い。

合　掌

柴田富佐子

佐々木さんの出現はユニークであった。

井上さんの紹介で同人への参加が決ると同時に、バサッと十万円が振込まれて来た。まだ顔も合さず、原稿も送られて来ないうちに四年分以上の同人費を振込んで来る人って、どういう人なのだろう、と興味を持った。

井上さんのお話では、今は赤十字関係の仕事で手一杯だが、それが片付き次第原稿を送ってくれるという。かなり書ける人、と井上さんに聞いていたので、どんな原稿が来るか、私は楽しみにしていた。

最初に届いた原稿が36号掲載の「カステリオーネの夜は更けて」で、外国を舞台にしたラヴ・ストーリーは、「まんじ」には珍しいタイプの作品であった。この作品は、実際の見聞を下敷にしているようで、情景の描写は美事だが、話の運びに無理があるように思った。しかし、93枚という長さを纏めあげた佐々木さんの経験の豊かさを証明するには十分であった。

その後に続く「三億円強奪事件の犯人を追った男」「千三百年目の仇討」「前橋公園殺人事件」「ついていない男」――いずれも長篇であり力作であった。「三億円強奪事件の犯人を追った男」を読んだ時、私はサントリーが毎年募集しているミステリー大賞を目指して書かれた作品ではないか、と思った。

この事は、佐々木さんに確かめる機会がなかったが、意表をついた筋立てといい、タイトルといい、私にはとても面白かった。刑事とか警部とか、警察関係の事情によく通じて居られるのに感心した。

もう一つ感心した事は、「三億円――」では旅役者、「千三百年――」では外人部隊、「前橋公園――」ではAID（人工受精手術）「ついていない男」ではHN－コンドロシンというように、全く思いがけないキーワードが跳び出してくる事である。こういうものを、よくぞ考えつき、丹念に調べるものだ、と、いつも舌を巻いていた。今度は何が出てくるか、という期待は、思いがけない佐々木さんの訃報で断ち切られてしまった。

常石さん、山口さん、に続いて佐々木さんという優れた書き手を失って、「まんじ」は又一まわり幹が細くなってしまった。

心細い限りです。

三戸岡道夫

佐々木一郎氏が「まんじ」に登場したのは三十六号（平成二年五月一日号）からであった。

作品は「カステリオーネの夜は更けて」（九十三枚）という大作であった。海外旅行経験の豊富な氏の一種の紀行文に、ロマンスの味つけをした意欲作ではあったが、相互に若干融和しないところがあって、必ずしも成功作とはいえなかった。

しかし、私は氏のこの一作で、

（佐々木さんはロマンの描ける人だな）と思った。

ロマンとは、リアリズムに対するロマンで、必ずしもロマンスという意味ではない。

すでに他に著作もいろいろあるようであったから、文章力は確かであった。それに最初から九十三枚という筆量は、大型新人（まんじにとっての）の出現を思わせた。

次が「錫婚旅行は雲に乗って」が発表されたが、これも二回にわたる連載で、長編作家としての顔が本格的にのぞいてきた作品であった。

次に「ゲートボールの青春」という短編があって、その後は一挙に推理小説へ傾斜していった。

初回が「三億円強奪事件の犯人を追った男」で、そのテーマのユニークさで我々を驚かせ、次に連載もので、「千三百年目の仇討」（五回）、「前橋公園殺人事件」（五回）が発表され、推理小説の本領を遺憾なく発揮した。

佐々木氏の推理小説は、材料が異色で、幻想的で、横溝正史の再来を思わせた。それに、内容が複雑で面白い。ただ、「千三百年」も、「前橋公園」も、盛られている内容が豊富すぎて、五回の連載でも書き足りずに、若干未消化に終ったのは惜しまれる。もう少し時間があれば、それぞれを二倍ぐらいの長さの長編に仕立てて発酵させれば、見事な推理小説が、二、三本、完成したのではないかと思われる。

いよいよ、これからという時に、惜しくもこの世を去られた。

でも、佐々木氏は浄土へ行かれてからも依然として健筆をふるいつづけているような気がしてならない。

山根三枝子

あの記憶に残る程の猛暑でしのぎにくい夏に佐々木一郎様は此の世にお別れなさったのですね。御病気のことは存じておりましたが一寸驚きました。心から御逝去をお悼み申し上げます。

「まんじ」の同人に佐々木氏が加わりましたのはごく最近のことのように思われますが三十六号からお書きになっていらっしゃいますことをあらためて知り、可成りの期間の誌を通してのお交わりであったことを思わされます。

どちらかと言えば純日本的な考え方や表現で特徴づけられていた「まんじ」に何か新しくて若やいだ風を吹き込んで下さいましたのが「カステリオーネの夜は更けて」でありました。山口健二氏が病気のため書くことをおやめになり淋しくなるところ、佐々木氏が加わって下さいましたことは誠に心強く思われることでした。

興味深い骨組を作りそれに肉付けをするように精力的に作品を仕上げていかれる様子は未熟な私にとって参考になることでした。もっと長く生きられて熟成した作品の出来上がることを期待しておりましたが誠に残念なことでした。

暑さ寒さにかかわらず合評会の折には遠方からよくお出かけ下さいましたね。井上氏とお揃いで仲良く並んでおられた様子が思い出されます。

手術後しばらくお見えになりませんでしたが再び氏が出席なさるようになりました日、そしてそれが最後になってしまったのですが、その時の様子などありありと思い出されます。御自分の作品に対する皆の読後感などを希望と期待のいりまじった御気持でお知りになりたかったのではないでしょうか。今はもう此の世からは消えてしまったあのお姿がいたわしく思われます。

私の拙い作品に対しても丁寧に読んで下さり他の方々と同様批評文を戴きほんとうに有難うございました。十分に御礼の気持を伝えることなしにお別れしてしまいましたことは心残りでもあり悲しみを誘われます。

心より御冥福をお祈りいたしますと共に御遺族の皆様に平安が与えられますように祈ります。

編集子のメモ

◆ 秋灯下机の上の幾山河

これは鎌倉長谷高徳院内にある作家吉屋信子の墓所の副碑に刻まれる故人の句だ。大仏裏の奥、道路を隔てた所に墓はある。鏡のように磨かれた黒ミカゲの台石の上に上端円弧の櫛型をなす墓標、石はかすかに桜色を帯び、吉屋信子とのみ刻まれる。手前には六角形の小さな香立てをおく。谷口吉郎氏の設計である。句の境地は文筆の徒の心をはなはだうつものがある。折からまさに晩秋、灯下にわれらもまた机上に幾山河を粛々として越える決意を持ちたい。

◆この号は「佐々木一郎追悼号」として、同人、維持会員による故人の「人と作品」に視点をあてる文章を集め、特集の頁を組んだ。前号に力編を寄せながら発行直前に卒然として逝った故人の霊をいささかなりとも慰めるよすがとして捧げるものだ。

◆二人の新人を迎えて、本号の目次は賑やかになった。鈴木昭三の「きもないさん」は漢字をあてれば「肝無いさん」となり、瓢乎の作風をもって新風もたらし、「流転」の伊沢敏久は女教師の戦争下の恋の遍歴、流転を描いている。

◆「ミニ・カツラタロウ伝」の（お）作品は維持会員として長らく後援を頂き、出版記念会では何度か乾杯の音頭をお願いした方を主人公とするレクイエム的な作品となった。

（お）

「まんじ」　第五十四号

平成六年十一月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区神田駿河台二－九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部

☎〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方

郵便振替口座　〇〇一二〇－四－九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　ミナミ印刷
東京都千代田区飯田橋一－六－四
☎〇三（三二六一）一六一〇